

平成7年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1997年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



塔跡（法金剛院境内）



上・下：大原野で見つかった建物群（南春日町遺跡 30 次調査）

序

京都市内には地上の文化財だけでなく、地中にも歴史を証明する豊富な埋蔵文化財があります。当研究所は、この埋蔵文化財の調査・研究を進め、研究者や市民の方々に還元できる成果をあげるよう努力してまいりました。本年も市民の方々の協力を得て、多くの埋蔵文化財の調査を実施することができました。

この概要報告につきましては、本来調査終了後の次年度で報告すべきことですが、鋭意努力して、本年度で発刊に追いつき、その趣旨をかなえることができました。

本書では、平成7年度に実施しました発掘調査24件、試掘・立会調査25件の概要を報告しております。例年通り、平安京跡が中心ですが、本年度は各方面から注目されております平安宮跡から出土した「内酒殿」と記された木簡などを報告しております。ほかにも、平安京左京域の多量の金箔瓦出土例や本願寺と関係ある庭園の検出例、右京域の地鎮祭祀の検出例、また、法金剛院の塔や池の検出例など、新たな興味ある数々の発見例を報告しております。

これらの調査成果は、京都の歴史と直接関係ある興味ある事項であり、調査を重ねるごとにも京都の埋蔵文化財の奥深さを痛感しております。

本書は、専門的ではありますが、研究者や市民の方々に公表し、歴史都市京都を理解する一助としていただきたいと考えております。また、これらの資料を普及、啓発活動にも利用していきたいと思っております。

おわりにあたって、埋蔵文化財調査を依頼された方々、京都市をはじめ関係諸機関の方々に日頃の御協力にお礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも当研究所の日頃の活動をご理解いただけますようお願い申し上げます。

平成9年2月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成7年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため昨年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表5・6に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系VIによった。ただし座標値は単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500、1/10,000）、市街図（縮尺：1/25,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点および調査対象地である。
- 8 図版1～3の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱは試掘・立会調査を表す。表5・6の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 平成7年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、『京都市内遺跡発掘調査概報』平成7年度および平成8年度に報告している。
- 10 本年度の調査並びに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。
- 11 写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は村井伸也・幸明綾子が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、編集と調整は資料課が行った。

目 次

第1章 発掘調査		20 安祥寺下寺跡 1	86
		21 安祥寺下寺跡 2	88
		22 南春日町遺跡 29・30 次調査	90
I 平成7年度の発掘調査概要	1		
II 平安宮・京跡		第2章 試掘・立会調査	
1 平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡	3	I 平成7年度の試掘・立会調査概要	94
2 平安京左京北辺三坊	12	II 平安宮・京跡	
3 平安京左京七条二坊	19	1 平安京左京三条四坊	95
4 平安京左京八条二坊	23	2 平安京右京三条一坊 1	98
5 平安京右京二条二坊	26	3 平安京右京三条一坊 2	101
6 平安京朱雀大路跡	33	4 平安京右京四条四坊	103
7 平安京右京六条一坊	34	5 平安京右京六条四坊	104
III 白河街区跡		III その他の遺跡	
8 六勝寺跡・岡崎遺跡	38	6 中臣遺跡	105
IV 鳥羽離宮跡		7 上ノ庄田瓦窯跡	108
9 鳥羽離宮跡 140 次調査	45	8 史跡名勝嵐山	110
V 中臣遺跡		第3章 資料整理	
10 中臣遺跡 74 次調査	46	1 遺跡測量	112
11 中臣遺跡 75 次調査	53	2 コンピュータ	112
VI 長岡京跡		3 保存処理	116
12 長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	56	4 復原彩色	118
VII その他の遺跡		第4章 普及啓発事業等報告	
13 植物園北遺跡	59	1 普及啓発および	
14 北白川麩寺	61	2 技術者養成事業	120
15 京都大学構内遺跡	62	2 京都市考古資料館状況報告	122
16 法金剛院境内	70	3 役職員名簿	126
17 上ノ段町遺跡	76		
18 史跡大覚寺御所跡・名勝大沢池附名古曾滝跡	79		
19 日ノ岡堤谷須恵器窯跡	82		

図 版 目 次

図版 1	調査位置図 1	平安京・白河街区調査位置図
図版 2	調査位置図 2	1 洛北地区調査位置図 2 嵯峨・桂地区調査位置図
図版 3	調査位置図 3	1 長岡京・大原野地区調査位置図 2 鳥羽離宮・伏見地区調査位置図 3 山科・醍醐地区調査位置図
図版 4	平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡	1 調査区全景 2 土取穴完掘状況 3 土壌 105 瓦検出状況
図版 5	平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡	1 西端部の平安時代柱穴群・道路敷 2 北西部の平安時代土壌 166 ~ 168
図版 6	平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡	1 井戸 144 2 井戸 144 底部検出状況
図版 7	平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡	井戸 144 出土木簡
図版 8	平安京左京北辺三坊	1 1 区第 1 面全景 2 1 区第 3 面全景
図版 9	平安京左京北辺三坊	1 2 区第 1 面全景 2 2 区第 2 面全景
図版 10	平安京左京北辺三坊	1 1 区第 1 面土壌 27 2 1 区第 3 面土壌 196・197 3 2 区第 1 面土壌 190 4 2 区第 2 面溝 579
図版 11	平安京左京北辺三坊	金箔瓦 軒丸瓦
図版 12	平安京左京北辺三坊	金箔瓦 軒平瓦
図版 13	平安京左京北辺三坊	1 金箔瓦 鯪瓦 2 金箔瓦 棟瓦
図版 14	平安京左京七条二坊	1 庭園遺構全景 2 景石と洲浜
図版 15	平安京左京七条二坊	1 室町時代全景 2 平安・鎌倉時代全景
図版 16	平安京左京八条二坊	1 鎌倉時代全景 2 平安時代後期全景

図版 17	平安京右京二条二坊	1 第2面全景
		2 第3面全景
図版 18	平安京右京二条二坊	1 S X 400
		2 S X 340
		3 S X 296
		4 S X 190
図版 19	平安京朱雀大路跡	1 調査区全景
		2 流路
図版 20	平安京右京六条一坊	1 十四町地区南部全景
		2 十四町地区東部全景
図版 21	平安京右京六条一坊	1 十一町地区全景
		2 S D 150
		3 S E 155
図版 22	六勝寺跡・岡崎遺跡	1 建物5西辺雨落溝
		2 建物5石組雨落溝
		3 建物1
		4 建物3
図版 23	六勝寺跡・岡崎遺跡	1 建物4
		2 建物4基壇断面
		3 建物3(大阪ガス検出部)
		4 二条通北側調査区全景
図版 24	鳥羽離宮跡 140 次調査	1 調査区全景
		2 堀断面
図版 25	中臣遺跡 74 次調査	1 S 3 区全景
		2 N 1 区全景
図版 26	中臣遺跡 74 次調査	1 S 3 区旧石器調査区全景
		2 S 3 区旧石器調査区断面
図版 27	中臣遺跡 74 次調査	1 竪穴 5
		2 竪穴 1
図版 28	中臣遺跡 74 次調査	1 S X - S 0101
		2 S X - N 0202
		3 S X - N 1201
		4 S X - N 1202
図版 29	中臣遺跡 75 次調査	1 調査区全景
		2 土壌群検出状況

図版 30	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1	B区古墳時代全景
		2	B区长岡京期全景
図版 31	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1	補足5トレンチ全景
		2	補足7トレンチ全景
		3	補足9トレンチ全景
		4	補足8トレンチ全景
図版 32	植物園北遺跡	1	調査区北半全景
		2	掘立柱建物1
図版 33	京都大学構内遺跡	1	6次調査弥生時代前期全景
		2	No.17-3地点縄文時代晩期全景
図版 34	京都大学構内遺跡	1	縄文時代後期土器棺墓1
		2	弥生時代前期土器棺墓3
		3	縄文時代晩期土器棺墓2
		4	土器棺墓2深鉢形土器
図版 35	法金剛院境内	1	1区全景
		2	2区全景
		3	3区全景
		4	4区全景
図版 36	法金剛院境内	1	5区塔と園池
		2	塔
図版 37	上ノ段町遺跡	1	調査区全景
		2	建物1
図版 38	史跡大覚寺御所跡・ 名勝大沢池附名古曾滝跡	1	調査区全景
		2	1トレンチ全景
		3	4トレンチ堰状遺構検出状況
図版 39	日ノ岡堤谷須恵器窯跡	1	窯体の全景
		2	燃焼部の天井断ち割り
図版 40	日ノ岡堤谷須恵器窯跡	1	窯体の全景
		2	燃焼部壁面の工具痕跡
		3	燃焼部南壁の補修痕跡
図版 41	安祥寺下寺跡1	1	調査区全景
		2	土器溜3
		3	土器溜3銅銭出土状況
図版 42	南春日町遺跡29・30次調査	1	30次調査1トレンチSB4
		2	30次調査1トレンチSB5

図版 43	南春日町遺跡 29・30 次調査	1 30 次調査 2～4 トレンチ全景
		2 30 次調査 4 トレンチ S B 6
		3 30 次調査 2 トレンチ S E 1
図版 44	平安京左京三条四坊	1 F-No. 14 トレンチ富小路路面・側溝部分断面
		2 F-No. 12 トレンチ断面
図版 45	平安京右京三条一坊 1	1 1 区全景
		2 2 区全景
図版 46	平安京右京三条一坊 2	1 S G 1 A 全景
		2 S G 1 A 洲浜
		3 S G 1 B 全景
		4 S G 1 B 洲浜
図版 47	上ノ庄田瓦窯跡	3 3 トレンチ瓦窯検出状況
		2 7～9 トレンチ全景

目 次

図 1	平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡	調査位置図	3
2	〃	遺構平面図	4
3	〃	井戸 144 実測図	5
4	〃	西端部の柱穴群実測図	6
5	〃	井戸 144 掘形出土木簡実測図・釈文	9
6	平安京左京北辺三坊	調査位置図	12
7	〃	1 区第 1・3 面遺構平面図	13
8	〃	2 区第 1 面遺構平面図	14
9	〃	2 区第 2 面遺構平面図	16
10	〃	2 区土壌 435 出土白磁四耳壺実測図	18
11	平安京左京七条二坊	調査位置図	19
12	〃	江戸時代初頭（庭園遺構）遺構平面図	20
13	〃	室町時代遺構平面図	21
14	〃	平安・鎌倉時代西半部遺構平面図	21
15	〃	池出土土器実測図	22
16	平安京左京八条二坊	調査位置図	23
17	〃	S E 335・336	23
18	〃	遺構平面図	24

図 19	平安京左京八条二坊	S E 336 出土土器実測図	25
20	平安京右京二条二坊	調査位置図	26
21	〃	第 3 面遺構平面図	27
22	〃	祭祀遺構出土遺物実測図	29
23	〃	S D 101 出土遺物実測図	30
24	〃	S D 101 出土土師竈実測図	31
25	〃	出土軒瓦実測図	31
26	平安京朱雀大路跡	調査位置図	33
27	〃	遺構平面図	33
28	平安京右京六条一坊	調査位置図	34
29	〃	遺構平面図	35
30	〃	S E 155 出土石銚実測図	35
31	〃	S E 155 出土土器実測図	36
32	〃	十一町地区東端部	37
33	六勝寺跡・岡崎遺跡	調査位置図	38
34	〃	遺構平面図 1	39
35	〃	遺構平面図 2	41
36	〃	尊勝寺・最勝寺条坊復原図	44
37	鳥羽離宮跡 140 次調査	調査位置図	45
38	〃	出土一石五輪塔	45
39	中臣遺跡 74 次調査	調査位置図	46
40	〃	調査区配置図	47
41	〃	S 3 区西壁断面図	47
42	〃	S 3 区旧石器調査、石器分布状況	48
43	〃	S 区遺構平面図	49
44	〃	N 区遺構平面図	50
45	〃	S 3 区竪穴 2 出土ナイフ形石器	51
46	〃	土壙墓 S X-N 0202 出土鞍金具実測図・復原図	52
47	中臣遺跡 75 次調査	調査位置図	53
48	〃	調査区南壁断面図	53
49	〃	遺構平面図	54
50	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	調査位置図	56
51	〃	B 区遺構配置図	57
52	〃	補足調査区遺構配置図	58
53	植物園北遺跡	調査位置図	59

図 54	植物園北遺跡	遺構平面図	60
55	北白川廃寺	調査位置図	61
56	〃	D区全景	61
57	京都大学構内遺跡	調査位置図	62
58	〃	調査地点位置図および基本層位図	63
59	〃	No. 17 - 1 地点出土土器実測図	64
60	〃	No. 17 - 2 地点出土土器実測図	64
61	〃	No. 17 - 3 地点出土土器実測図	65
62	〃	各地点出土土器実測図	66
63	〃	No. 17 - 3 地点出土石器実測図	67
64	〃	各地点出土石器実測図	68
65	法金剛院境内	調査位置図	70
66	〃	遺構平面図	71
67	〃	5区北壁断面図	73
68	〃	4区落込12出土瓦経	73
69	〃	出土軒瓦実測図	74
70	〃	立会調査根固め石検出状況	75
71	上ノ段町遺跡	調査位置図	76
72	〃	第1面遺構平面図	77
73	〃	ピット1・39実測図	77
74	史跡大覚寺御所跡・ 名勝大沢池附名古曾滝跡	調査位置図	79
75	〃	トレンチ配置図	79
76	〃	庭湖石実測図	80
77	〃	菊の島断面図	80
78	日ノ岡堤谷須恵器窯跡	調査位置図	82
79	〃	窯体実測図	83
80	〃	出土須恵器実測図	84
81	安祥寺下寺跡1	調査位置図	86
82	〃	遺構平面図	86
83	〃	土器溜3実測図	87
84	〃	土器溜3出土土師器	87
85	安祥寺下寺跡2	調査位置図	88
86	〃	遺構平面図	88
87	〃	調査区全景	89

図 88	南春日町遺跡 29・30 次調査	調査位置図	90
89	〃	No. 44 - 1 グリッド出土土器実測図	90
90	〃	遺構平面図	92
91	〃	出土土器実測図	93
92	〃	3 トレンチ出土須恵器蓋	93
93	平安京左京三条四坊	調査位置図	95
94	〃	〃 F - No. 14 富小路部分断面図	96
95	平安京右京三条一坊 1	調査位置図	98
96	〃	遺構平面図	98
97	〃	1 区鎌倉時代整地層出土鬼瓦	99
98	平安京右京三条一坊 2	調査位置図	101
99	〃	遺構実測図	102
100	平安京右京四条四坊	調査位置図	103
101	平安京右京六条四坊	調査位置図	104
102	〃	2 トレンチ全景	104
103	中臣遺跡	調査位置図	105
104	〃	遺構分布模式図	106
105	〃	出土土器実測図	107
106	上ノ庄田瓦窯跡	調査位置図	108
107	〃	1 ~ 6 トレンチ配置図	108
108	〃	出土軒瓦実測図	109
109	史跡名勝嵐山	調査位置図	110
110	復原彩色	大路の北側宅地のようす	119
111	〃	大路の南側宅地のようす	119

表 目 次

表 1	建物一覧表（南春日町遺跡 29・30 次調査）	91
2	平成 7 年度処理済木製品出土現場一覧表（保存処理）	116
3	平成 7 年度の復原彩色件数一覧表（復原彩色）	118
4	平成 7 年度月別入館者一覧表（京都市考古資料館状況）	125
5	発掘調査一覧表	128
6	試掘・立会調査一覧表	130
7	その他契約一覧表	132

第1章 発掘調査

I 平成7年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査の委託契約件数は28件で、昨年度の委託契約件数27件より1件増加している。内訳は、平安宮跡2件、平安京跡8件（左京域6件、右京域2件）、白河街区跡3件、鳥羽離宮跡1件、中臣遺跡2件、長岡京跡1件、その他の遺跡11件である。平安京左京七条二坊・本圀寺跡（西本願寺）、北野遺跡（衣笠小学校）の各1件については、すでに『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』で報告している。また、平安宮豊楽殿跡、平安京左京八条三坊の2件は、年度がまたがる継続調査であり、次年度に報告する。昨年度からの継続である平安京左京八条二坊、京都大学構内遺跡の各1件、および六勝寺跡・岡崎遺跡2件については本概要で扱う。ただし、報告するにあたって、右京域の1件は平安京右京六条一坊、平安京朱雀大路跡の2項に分けて扱い、六勝寺跡・岡崎遺跡については3件を1項として扱う。今回報告する発掘調査の項目数は22項目である。

平安宮跡 内酒殿・釜所・侍従所跡（1）では、平安宮跡で初めて大規模な井戸を検出し、井戸の掘形から「内酒殿」と墨書された木簡が出土した。この木簡には、紀年、役所名、物品内容、差出人などが記されており、平安宮内の役所配置や変遷などを知る貴重な手がかりである。井戸の構造も明らかになり、井戸内からは多量の土器類が出土した。これらは平安宮研究にとって欠かすことのできない資料である。ほかにもこの調査では、土取穴の規則性が明らかになり、江戸時代の国産の陶磁器とともにベトナムの施釉陶器などが出土している。

平安京跡 左京北辺三坊（2）では、洛中の上京の南辺を画すると考えられる溝を検出しており、この調査では多量の金箔瓦も出土している。金箔瓦には、軒瓦、鬼瓦、鯪瓦、棟瓦、熨斗瓦などがあり、豊臣秀吉に近い上位の大名屋敷に飾られた瓦と推定される。左京七条二坊（3）では、本願寺分派の過程で教如が隠居、屋敷に造作した庭園に伴う池を検出している。左京八条二坊（4）では、井戸内から出土した銅鏡の破片、鋳型片、鞆羽口片が注目される。調査地は鋳型片が集中して出土した東寺の八条院町から西に少し外れるが、八条院町との繋がりで考えるべきであろう。右京二条二坊（5）では、二条大路北側溝、宅地を限る溝、建物、井戸、祭祀遺構など9世紀から10世紀の遺構を検出している。なかで注目されるのは祭祀遺構である。11箇所ですべて6種類の祭祀遺構を検出しており、平安京で行われた祭祀の実態を知る好資料である。朱雀大路跡（6）では、平安時代前期の朱雀大路は検出できなかったが、平安時代末期以降、大路が自然の流路あるいは湿地に転じることが判明した。右京六条一坊（7）の調査は11次を数え、今回も数時期にわたる建物、川、井戸などを検出している。

白河街区跡 六勝寺跡・岡崎遺跡（8）では、調査面積は限られていたが、築地の基底部、建物の雨落溝、寺院を画する溝など六勝寺の地割りや伽藍復原に関連する諸遺構を検出した。これ

らの調査成果は、白河街区の街区割りや六勝寺の伽藍配置を復原する上で定点になる成果である。

鳥羽離宮跡 白河天皇陵の堀を調査した鳥羽離宮跡 140 次調査（9）では、南北方向の堀を検出した。この堀はすでに 4 回調査され、堀の規模が復原されている。堀は復原位置で検出され、内側には既調査と同様、石垣が造作されていた。天文八年の金漆銘のある一石五輪塔が出土した。

中臣遺跡 山科の複合遺跡である中臣遺跡 74 次調査（10）で、旧石器を含む遺物包含層を検出しており、ナイフ形石器が出土した。原位置で石器が検出されたことは、京都市内で初めてのことであり、注目される調査となった。また飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物、土壇墓なども検出され、飛鳥時代の居住域は台地の頂部から東側斜面に広がるとみられている。中臣遺跡 75 次調査（11）でも、旧石器時代のサヌカイト片を含む遺物包含層を検出している。

長岡京跡 平成 2 年度から継続して調査してきた京都市清掃局水垂埋立処分地拡張工事に伴う遺跡調査は、本年度の長岡京左京六条三坊・水垂遺跡（12）で終了した。本年度も古墳時代の川、竪穴住居、掘立柱建物などを検出しており、長岡京期では、掘立柱建物、井戸などを検出している。平安時代は条里制に伴う河川や溝、畦などの検出をみた。本年度に限らず、継続して調査してきた 6 年間にわたる調査成果は、長岡京や水垂遺跡を理解する上で欠かすことのできないものであり、今後これらの成果を整理して、正報告書として刊行する予定である。

その他の遺跡 植物園北遺跡（13）では、掘立柱建物を検出している。北白川廃寺（14）では、塔基壇を調査し、基壇の規模、改修を受けている状況を明らかにすることができた。京都大学構内遺跡（15）では、縄文時代後・晩期、弥生時代前期の土器棺墓、縄文時代から弥生時代の遺物包含層などを検出した。吉田山北西麓の集落の様相や地形環境を復原する重要な手がかりである。法金剛院境内（16）では、塔や園池などを検出している。法金剛院の建物配置の復原に一歩近づく成果である。下層からも礎石建物が発見されている。上ノ段町遺跡（17）では、掘立柱建物、平安時代中期から鎌倉時代まで続く南北方向の溝、室町時代末の東西方向の溝などを検出している。これらの遺構は、東接する広隆寺との関連で注目しておく必要がある。史跡大覚寺御所跡・名勝大沢池附名古曾滝跡（18）では、大沢池の北東部に位置する菊の島、庭湖石の調査を行った。菊の島が現在の形に整えられたのは、調査結果からすると室町時代と考えられる。日ノ岡堤谷須恵器窯跡（19）は 7 世紀中葉の窯跡である。保存状態は良く、天井、煙出し、焼成部、燃焼部、前庭部が完存していた。灰原から線刻文字をもつ陶片が出土した。安祥寺下寺跡 1（20）では、平安時代中期から鎌倉時代初期の掘立柱建物、溝、土壇などを検出しており、安祥寺下寺跡 2（21）では、縄文時代の土器片を土壇内から検出している。平成 5 年度から開始した山科駅前地区再開発事業に伴う安祥寺下寺跡の発掘調査は本年度で終了した。安祥寺下寺の中心伽藍は検出できなかったが、平安時代を核に、縄文時代から鎌倉時代までの複合した遺構を検出している。南春日町遺跡 29 次・30 次調査（22）では、奈良時代の建物 14 棟と井戸 1 基を検出した。南春日町遺跡では、このような多数の奈良時代の建物を検出した例はなく、古代の大原野地域を解明するにあたって、重要なポイントになる調査結果であった。（永田信一）

II 平安宮・京跡

1 平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡（図版1・4～7）

経過 調査地点は平安宮跡の中央東寄りに位置し、内裏に東接する官衙跡に該当する。この官衙区画には『宮城図』や文献史料などから、東半には、内酒殿・釜所・侍従所、西半には外記・南所・御書所などが占地したとされ、天皇の家政機関が配されるなど内裏と深く係わった官衙区画であり、外記では外記政が行われた。

今回の調査区は、内酒殿・釜所・侍従所跡に該当する。当該区画全体は、東西幅40丈、南北幅は南接する西雅院と勘解由小路延長路を取

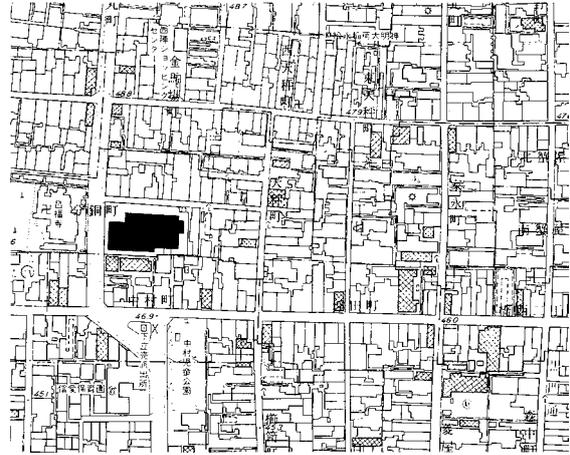


図1 調査位置図（1:5,000）

り込み、42丈と考えられる。桃山時代には、豊臣秀吉により天正十四年（1586）に聚楽第が造営され、周辺には大名屋敷などが展開した。調査地点の西側、昌福寺や松林寺の境内には一段低い地形が東西に連続して遺存しており、これが聚楽第（内城）の南堀跡とされてきた。調査地点はその東延長にあたり、堀の検出が期待できた。また、当該地の南に「中村町」の地名が残っており、中村式部少輔の屋敷があったとされる。聚楽第も文禄四年（1595）には破却され、跡地には次第に町屋が建てられるようになる。『洛中絵図』（1642年頃作成）をみると、智恵光院通は、昌福寺以南へは開かれていないが、調査地点北側の東西道路は昌福寺に通じており、この道路に面して町屋が形成されていたようすがうかがわれる。江戸時代も中頃を過ぎると、智恵光院通も南に通じ、町屋の数も増加し、今日みられる市街地になった。

調査区内では、聚楽第に伴う堀が想定できたため、機械力による排土作業は慎重に進めた。掘削中、調査区北端と中央部でわずかに地山を検出し、調査区全体が堀である可能性は否定できたが、現地表下3～4mまで汚れた土層が全面に堆積し、土層の上面で井戸・土壇などが検出された。大半は18世紀代の遺構である。次いで、汚れた土層の掘り下げにかかり、これが地山（聚楽土）を対象とした土取穴であることが判明した。その後、平安時代遺構の検出にかかった。調査区西、北端、北東部で、井戸・土壇など平安時代の遺構が遺存していることが判明し、調査を進めた。

平安時代の井戸（井戸144）は平安宮跡で初めて検出した井戸で、予想外の規模のため1箇月半ほどの時間を費やした。3月29日に調査を開始、検出面から2.5mまで掘り下げたが底には達しない。その後、東半を拡張する。4月8日、検出面から2.2m付近で多量の遺物が出土した。25日に検出面から4m付近のグライ化した掘形埋土から、「内酒殿」木簡が出土した。5月1日、井戸側の痕跡を検出。9日に、ようやく井戸底面に達し、隅柱・井籠組み部材を検出、記録作業に入った。翌10日、井戸部材の実測、取り上げを行った後、掘形内の土層を掘り上げ、直ちに

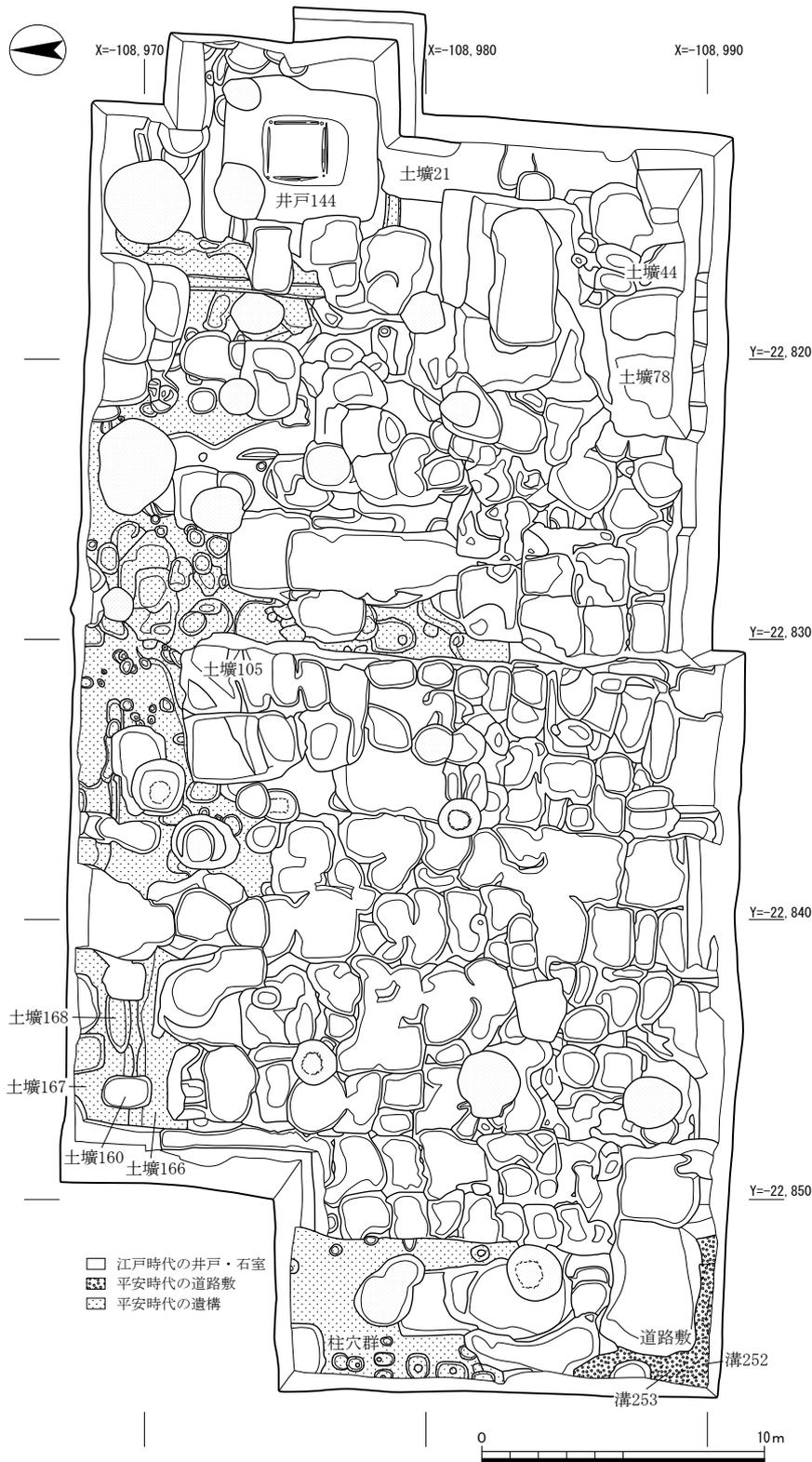


図2 遺構平面図 (1:250)

埋め戻して調査を終了した。

遺構 調査区中央北壁の基本層序は、現地表面から積土層（厚さ 10～30 cm）、近世の整地層（厚さ 30～40 cm）、平安時代の遺物包含層（厚さ 5～20 cm）である。平安時代の遺物包含層は、調査区の西端と北端に部分的にみられる程度であるが、西端の「平安時代整地層」は、厚さ 50 cm におよび、前期の土器を多量に包含する。地山は、上から暗黄褐色砂泥層（砂礫混）、褐色砂泥層、黄褐色砂礫層、にぶい黄橙色砂泥層、明褐色砂礫層や灰オリーブ色砂礫層などが堆積する。砂泥層がいわゆる聚楽土で、砂礫層を挟んで上下2層に分かれる。深い箇所は、現地表下 3 m に達する。

聚楽土は、調査区内に広範囲に分布するため、土取りされた範囲の平安時代の遺構は完全に消滅している。

検出した遺構には、平安時代に属するものと、江戸時代に属するものがある。

平安時代の遺構は、調査区の北・西端および東端に遺存していた。遺構の遺存する範囲は、江

戸時代の町屋に該当し、土取り場から除外されたためである。

井戸 144 調査区東端で検出した井戸で、平安宮跡では初例となる。検出位置は、この官衙区画の南東部にあたり、東面築地想定線から約 14 m、北面築地想定線から約 48 mに位置する。

検出面での井戸掘形の規模は、東西約 5.3 m、南北約 5.6 m、底面までの深さは検出面から 6.9 m、現地表面から 8.0 mある。本井戸は、平安時代の遺構としては最も深いものである。掘形の壁はほぼ垂直に底面近くにいたり、底面から約 0.7 m上ですぼまり、段を付けて底面に達する。段肩口の幅は約 2.4 mある。砂礫層は標高 44.5 m以下に堆積するが、現状では 41.0 m付近に湧水帯があり、この水脈に達することで良好な水を安定的に得ようと意図したと思われる。ただし、掘形埋土の 42～43 m付近にはグライ化した土層の箇所が北西から南にかけてみられ、「内酒殿」木簡がこの土層から出土しているので、井戸が掘られた頃には、さらに上部の砂礫にも湧水があったとみてよいだろう。

井戸底面の標高は 39.7 mである。底面は平坦で特別な施設はない。木枠施設は、井籠組み側板と四隅に立てられた隅柱、隅柱に組み合う横板を検出、最下段のみ 2重の木枠をもつ特異な構造が判明した。四隅の隅柱は、先端を杭状に尖らせ底面に打ち込む。遺存状態の良好なもので長さは 57 cmある。隅柱の内側 2面には、柄穴が彫り込まれる。柄穴は現状で長さ 40 cm以上、幅 6 cm、深さ 5 cmある。この柄穴に横板が固定され内側の木枠となるが、腐食のため接合方法は観察できていない。内側木枠の規模は一辺 1.8～1.9 mある。底面から約 0.4 m上部で、外側の井籠組み側板を検出した。板材は、良好なもので長さ 197 cm、幅 30 cm、厚さ 5 cmある。上部で検出された木枠の痕跡から、本来は一辺 210 cm（約 7 尺）であったことがわかる。木枠の木質が遺存する側板は、下段から 2 枚目

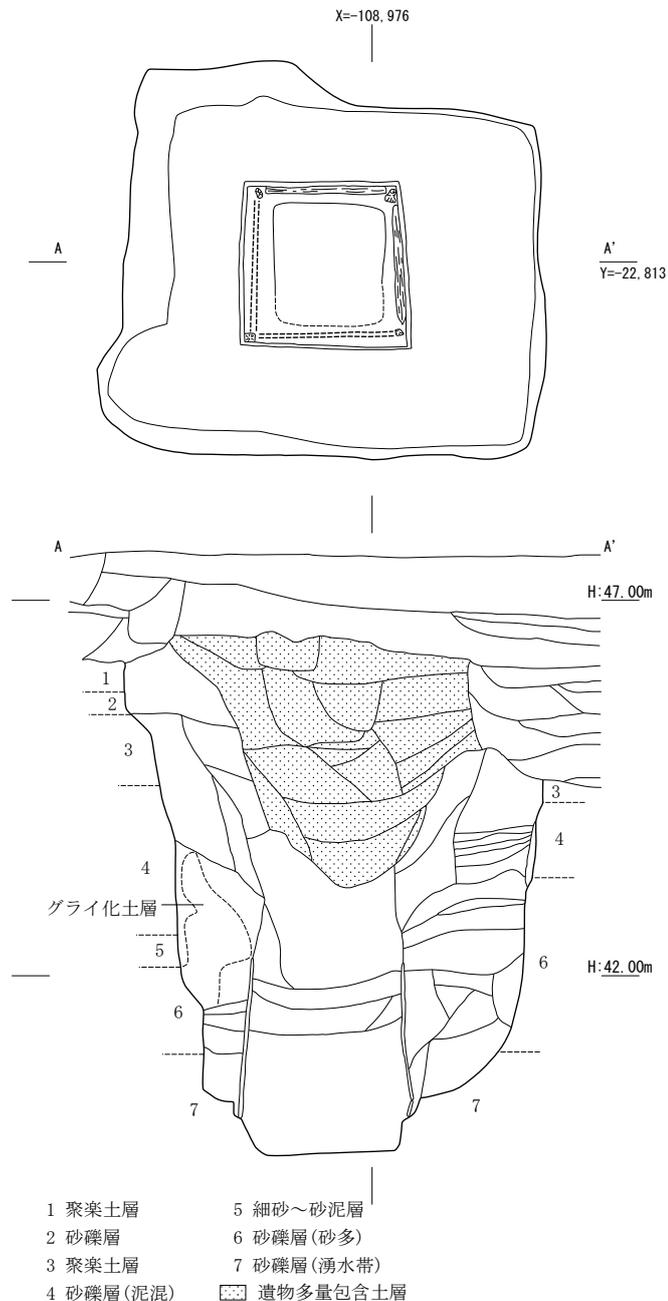


図3 井戸144実測図 (1:100)

(一部3段目)までであった。木枠の痕跡は、標高 42.0 m 付近から下へ 2.2 m 分は木質が腐植粘土化した状態でみられた。井戸側の腐食痕跡が確認できた標高 42.0 m 付近より上部でも、土層の堆積からわずかに木枠の存在が観察でき、木枠を取り外されずに放棄された結果、上部の木枠が腐食、掘形埋土が内部に崩落し、埋没していったと想定できる。その結果、井戸側内では下半の遺物出土数は極めて少ない。井戸底面で側部材が重なった状態で検出しているが、井戸が廃棄された段階で上部の側材が崩落したためであろう。このように、井戸側下半が埋まり、その後、上半部が窪んだ状態で塵芥投棄穴として利用された。その時期は、多量に出土した土器（整理箱で約 80 箱）から、9 世紀後半～10 世紀前半（平安京Ⅱ期中～新）であったことがわかる。一方、掘形内から出土した土器は大半が細片であるが、木簡の紀年「弘仁元年」（810）と矛盾するものではないと考えている。

なお、この井戸に伴う覆屋などの建物遺構は検出していない。ただし、井戸の西と南には、溝状の遺構が井戸掘形に平行して掘られているが、その関連性は明らかでない。

西端部の柱穴群 調査区西端において大型の柱穴を 7 基以上検出した。柱穴上面には、9 世紀前半（平安京Ⅰ期新）の土器を多量に含む「平安時代整地層」が覆うため、これに先行して掘られたことは明白で、柱穴群は、出土遺物から 9 世紀前半（平安京Ⅰ期中）に属する。柱穴の検出面での規模は、最大の P 214 で掘形一辺 0.85 m、最小の P 259 で 0.55 m、深さは P 214 で 1.1 m、平均では 0.8 m 程ある。柱穴の中心に柱痕跡が観察でき、それによると、柱の直径は 0.2 m 前後とみられる。P 239 は小礫を敷いた路面状の面を掘り込んで造られている。この路面状の箇所は、南 6 m に広がる礫敷き路面とは層位が異なり、連続する路面とみることはできず、建物周囲の整地痕跡などの可能性も考慮すべきと考える。「現地説明会資料」では、南側の路面と同じものと考え、官衙内の南北道路の可能性を記したが、ここで訂正する。検出状況から、柱穴は南北方向に展開し、建て替えがあったことは確かであるが、東部は土取り穴で削平され、柱穴相互の関係は不明である。現状で示せば P 214 - 2.5 m - P 258 - 2.5 m - P 260 や、P 239 - 2.25 m - P 215 - 2.25 m - P 216 の組み合わせが提示できるが、柱穴間の数値上の組み合わせを指

摘したものに過ぎない。なお、検出した柱穴を柵とみるには規模が大きく、東西位置は、官衙区画全体の中心線から東へ約 3 m に位置し、南北中心からやや北に位置することからも、初期段階に存在した官衙の中心建物が想定できよう。

北西部の遺構 土壇や溝状遺構を重複して検出した。土壇 167 は、平安時代前期の軒瓦を多く包含する。土壇 168 と 166 は、溝状を呈

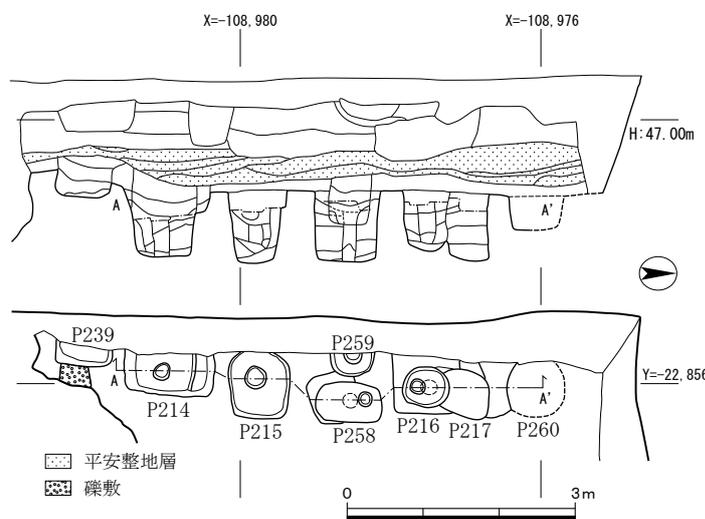


図4 西端部の柱穴群実測図 (1:100)

するが、東へは延長しない。土壙 166 からは、前期の土器が多量に出土した。土壙 165 からも前期の土器が出土している。

道路敷 調査区の南西隅で検出した。小礫を敷きつめた路面で、平安京跡内で大路・小路の道路敷として検出されるものと変わらない。調査区内では、東西 3.0 m、南北 4.5 m ほど遺存していた。構成する土層は厚いところで 0.35 m あり、最低 3 面以上ある。南壁では、路面 3 下に路面 4 が認識できる。路面端にあたる東側が高いが、側溝・築地の施設は検出していない。路面は砂層で覆われる。路面が低かったため、流水が出た場合ここに堆積したのであろう。この砂層は、豪雨などで溢れた土砂が道路部分に堆積したものとみられる。

礫敷の路面構成層下面で、北西から南東方向を示す溝 252・253 を検出した。溝幅 0.5～0.6 m、深さ 0.2 m あり、ともに砂層が堆積する。流水があったことは明白で、路面上を砂層が覆うことも関係があろう。両者は重複し、溝 252 が新しい。溝 253 から 11 世紀後半の土器が出土した。さらに溝 252 が埋まってから路面が形成されることから、路面の形成時期は平安時代末期以降であり、現地説明会の段階では路面を前期と想定していたが、ここで訂正する。

その他の遺構 調査区中央の北側では、土壙を多数検出した。土壙の規模や形状は様々である。また柱穴状の遺構もあるが、建物としてのまとまりはみられない。

調査区西端では、平安時代の遺物を多量に包含する「平安時代整地層」が堆積していた。前述の大型柱穴を覆い、厚さ 0.5 m ほどある。地山の砂礫層上面まで掘られているため、平安時代の土取穴の可能性も考えられる。この土層からは、緑釉軒丸瓦も出土している。

江戸時代 江戸時代の遺構には、井戸・礫敷面・塵芥投棄土壙・土取穴などがある。

井戸は 20 基検出した。掘形はすべて円形で、石材を組んだものと、石材が抜かれたものがある。井戸の分布を概観すると、検出位置は、調査区北半および調査区西半に集中する傾向がある。前者は調査区北側の東西通りに面した民家に付属する井戸、後者は西側の智恵光院通に面した民家に伴う井戸であろう。井戸と土取穴との関係を見ると、井戸は土取穴の分布範囲をはずれて、その北側と西側に集中する傾向がみられる。これは、先述した井戸が民家に伴う施設として掘られたためであるが、一部、土取穴と重複する位置に掘られた井戸もある。この場合、井戸が新しく掘られており、土取穴が完全に埋め戻された後に井戸が掘られたことがわかる。

検出した井戸の中には、検出面より 2 m 付近で底に達するものがある。底は砂礫の堆積の始まるレベルに一致しており、この深さで当時は湧水帯があったとみられる。また、上部のみ石組みを施し、下部には石がない井戸もある。周囲の壁面が聚楽土で安定していたためであろう。

礫敷面は、調査区中央北端で検出した。検出範囲は、Y=-22,818～828、南は X=-108,973 付近におよび、小礫を敷き詰め堅固である。土間か、民家間の路地などに施された整地痕跡とみられる。

土壙には、塵芥を投棄した穴と火災時の焼け瓦などを投棄した瓦溜がある。大半は 18 世紀以降の土壙である。特徴的なものをあげると、調査区北西部で検出した土壙 160 は、17 世紀に属する数少ない土壙の一つで、茶陶類が出土した。土壙 21 からは、18 世紀代の土器類を主体とする遺物が多量に出土した。土壙 44・78 は土取り穴であるが、ほかに比べ相対的に深いため木製

品が遺存しており、両土壌から木簡が3点出土した。瓦溜は、主に調査区中央および北端に集中していた。

土取穴は、調査区の北端と西端を除くほぼ全域で検出した。深さは検出面から約2mに達する。調査区東半のものは、平面形や深さはまちまちで個別的であるのに対し、西半のものは、規則性がある。今回は広面積の調査であったため、分布状態、平面形態、土取り・埋め戻しの順序が把握できた。それによると、中央東寄りの地点では、狭いながら地山が南北に連続して残る箇所があり、これを境に東西で異なる状況が指摘できる。まず、中央の地山高まりの西側では、この境界から約6m、約5m、約6m、約4mごとに地山の高まりが南北方向に連続してみられた。これを大区画とする。大区画内でも中央を境に地山の高まりが連続してみられ、内部が東西に2分されて土取りされたようすがわかる。この2分する区画を中区画とする。さらに、中区画内では、主として東西に細長い地山の高まりがあり、これが土取りの最小単位を示すと考え、小区画とする。小区画の規模はばらつきはあるものの、平均で長さ2.0m、幅1.5m前後で、規則的に東西・南北に並ぶように観察できる。ただし、間隔が約6mの大区画では、中区画の段階で2分されず、3ないし4等分される箇所もみられる。小区画の設定に配慮があったためとみられる。

次に、土取穴の埋没の層序は、いずれも南下りを示しており、北側から埋められたようすがある。また北側の穴を埋めたのちに南側の穴が掘られ、順次埋められたようである。このほか、壁面の観察などでは、小区画の穴が先に埋められ、順次上方を埋めていく工程がみられた。埋め戻しに利用された土層の中には、砂礫層や汚れた褐色の土層がある。この土層は、平安時代前期の遺物包含層であるが、土取りには不必要であったためそのまま埋め戻しに用いられたのである。

土取穴からは、平安時代前期から江戸時代にいたる各時代の遺物が出土した。特に軒瓦については、藤原宮式・平城宮式・長岡宮式などの旧都で使用された軒瓦や、平安時代前期から後期に属する軒瓦が出土し、個体数は百数十個体を越える。桃山時代の金箔瓦は三十数個体出土した。

遺物 遺物総数は遺物整理箱で842箱にのぼる。これまでに判明した遺物内容を下記に示す。

平安時代の遺物には、土器類・瓦類・銭貨・木製品・木簡などがある。

土器類では、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器、墨書土器などがある。土師器には、皿・杯・椀・蓋・高杯・壺・盤・甕など、須恵器には、皿・杯・蓋・壺・鉢・甕・円面硯など、黒色土器には、皿・椀・甕など、緑釉陶器には、皿・椀・托・段皿・水注・壺・火舎など、灰釉陶器には、皿・椀・壺など、輸入陶磁器には、越州窯青磁椀がある。越州窯青磁椀は、例をみない大型の優品で、井戸144から出土した。墨書土器は、数点確認しており、井戸144出土の墨書土器では、大型灰釉陶器椀の底部外面に「南曹」と墨書される。調査地点西側には「南所」が置かれていたが、「南所」を「南曹」と呼んだかは不明である。また、緑釉陶器椀底部外面に「東曹司」と墨書したものが1点ある。上記の「南曹」と同じく、ある中心施設からの方向を表記したもので、2例みつかった意義は大きい。

なお、井戸144の廃棄後投棄された土器類の型式は、平安京Ⅱ期中～新と考えており、その土器構成の比率を示す。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入陶磁器

の総破片数は23,738片あり、土師器93.7%、須恵器3.3%、黒色土器1.4%、緑釉陶器1.1%、灰釉陶器0.5%、白色土器0.1%となる。機能別の比率は、供膳形態94.3%、貯蔵形態3.0%、煮沸形態2.7%となり、供膳形態が大半を占める。土師器を除いた食器類の構成は、須恵器10.5%、黒色土器37.3%、緑釉陶器35.2%、灰釉陶器14.3%、白色土器2.5%、輸入陶磁器0.1%となり、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器が食器類の中で主体を占めることがわかる。

瓦類 軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、緑釉軒丸瓦、緑釉丸瓦、文字瓦、ヘラ記号瓦などがある。軒瓦の出土点数は310点を越える。軒瓦は、平安時代前期から後期のものが主体であるが、藤原宮式・難波宮式・平城宮式・長岡宮式など旧都からの搬入瓦も比較的多い。文字や記号を付した瓦には「伊」・「木工」・「左」・「□松瓦屋」・「栗」・「+」などがある。

銭貨 富寿神寶（初鑄818年）がある。井戸144の井戸側内下方から出土した。

石製品 凝灰岩がある。中には面取りの明瞭なものもあるが、概して小破片である。

木製品 井戸144から出土した。曲物（側板がほぼ完形1、底板内面に黒漆1）、箸（完形1、長さ24cm、先端細）、組み合わせ部材、薪、加工を施した板・棒、加工木片（手斧などで削ったチップ）、井戸部材（隅柱、井籠組み横板）、用途不明品などがある。

木簡 井戸144の掘形から出土した。4片で出土したが、すべて接合できる。長さ18.3cm、幅3.0cm、厚さ0.5cmある。積文は（図5）に示した。大舎人の下は、大舎人の名前であろうか。

桃山・江戸時代の遺物には、土器類・瓦類・銭貨・木製品・木簡などがある。

土器類 土師器や陶磁器などがある。土取穴を中心に塵芥投棄穴、井戸などから出土した。土壙160からは、江戸時代前期の唐津、志野、織部、染付などいわゆる茶陶類が出土した。また、土取穴からベトナム産の施釉陶器が出土している。

瓦類 金箔瓦は30点ほど出土し、軒丸・軒平瓦、熨斗瓦、鬼瓦がある。聚楽第に南接する中村邸で使用された可能性がある。このほか、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、鬼瓦、熨斗瓦、棧瓦がある。

木製品 土壙44・78などでは小型円盤、折敷、漆器椀、曲物、脚台、箸、および木簡がある。木簡は土壙44から2点、土壙78から1点出土しているが、積文は不明である。

その他 土製品としては、伏見人形などの玩具、泥面子、塩壺、鑄造関係では埴塙、石製品では硯や軽石などがある。

小結 平安宮跡では、過去、小面積の調査を数多く実施してきた。しかし、今回の調査面積は1,060㎡を有し、一度に設定した調査区としては最大規模といってよい。このため、従来の小規

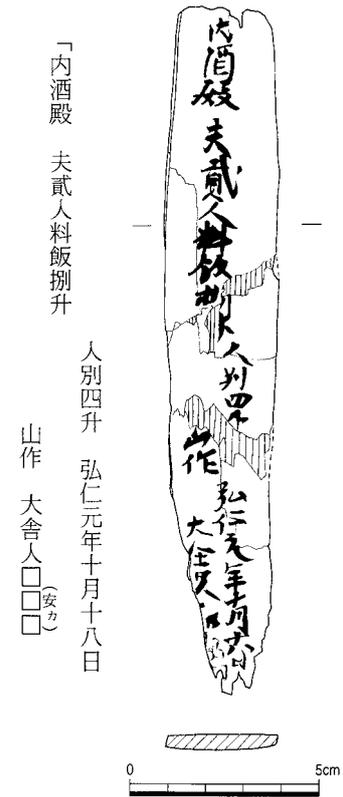


図5 井戸144掘形出土木簡
実測図・積文(1:2)

模調査では不明であった様々な点を調査成果として新たに加えることができた。以下、概述する。

平安宮内で初めて井戸（井戸 144）を検出したことがまず特記できる。井戸 144 は掘形・深さともに卓越した規模をもち、検出面から深さ 6.9 m という遺構は、平安時代としては最も深い遺構である。台地上に立地するという平安宮特有の制約により、深くまで掘り下げ、より良好な水を得ようとしたのであろう。こうした遺構を発見できたことも、広面積の調査であったことによる。

井戸掘形から出土した木簡には、紀年、役所名、物品内容、差出人などが備わっており、役所の配置や変遷など、平安宮研究の上からも欠くことのできない資料となった。また、廃棄後の井戸 144 からは、多量の土器が出土しており、平安時代の土器資料として貴重なものとなる。

調査区西端で大型の柱穴を 7 基以上検出した。周辺が破壊されていたため建物として復原できなかったが、区画の中心部に位置することから、官衙の初期段階に存在した建物の一部とみることもできる。これら柱穴は、平安時代前期の遺物を包含する土層で埋められ整地される。この要因としては、官衙再編を想定したい。東端で検出した井戸 144 の開削もこれら一連の動向によるとみられ、この段階で『宮城図』にみられる細分化された官衙配置にいたったのではなかろうか。

調査区で検出した平安時代遺構は、ほとんどが前期に属するものである。井戸 144 も前期段階には廃棄されており、当官衙は比較的早い段階で機能が終息したように思われる。一方、江戸時代の土取穴からは、平安時代前期・中期・後期の軒瓦が出土している。これらは調査地点周辺で使用されたものが、埋め戻しの際にここに運ばれてきたと推定できる。

南西隅で検出した小礫敷の遺構は、北側で検出した小礫敷き箇所存在から、南北方向に延長すると想定した。しかし、その後の調査で、礫敷きが平安時代後期の遺構の上に造られていることが判明し、北側の柱穴・整地層上面では未検出であることから、南北道路の可能性は否定的となった。次に、路面上や路面下の溝には砂層が堆積する点も留意される。この箇所が絶えず流水にさらされる状況下にあったことを示す所見である。当初、排水目的で溝（溝 252・253）が掘られ、機能しなくなった段階で礫を入れて整地した。その後も排水があるため礫を入れて整地した。その結果、道路遺構と見誤る程の礫敷面が形成されたと考えることも可能であろう。

井戸 144 出土木簡について述べると、まず、木簡が井戸掘形から出土したことから、井戸の造作年代は弘仁元年（810）10 月 18 日以降であることを示している。木簡は、山作に係わった夫の労賃の請求木簡であると考えている。ただし、内酒殿から某役所へ夫 2 名の飯を請求したのか、内酒殿宛てであるのかはわからない。当時、夫の労賃は一人一日 2 升である。請求は 8 升と記されるので、夫 1 人につき 2 日分の料であることがわかる。「山作」は、職務内容と考えられるがよくわからない。一般には、山陵造営などが想定されるが、この年 11 月に大嘗祭を控えた状況を考えれば、大嘗祭には欠かせない「標山」との関連も想定できる。標山は、大嘗祭の折、悠紀・主基国両国の行列の先頭を示し、大嘗祭の挙行時には不可欠のものである。標山製作は、北野の斎場で行われた。大嘗祭までに 2～3 箇月程度の製作期間しかないため、ほかの役所に所属する夫も駆り出された可能性はあろう。この場合は、山作に何らかの形で係わった大舎人が、

内酒殿に対して山作に駆り出された夫2人の飯料の請求を行ったと考えるのが妥当であろう。嵯峨天皇は、前年の大同四年（809）4月1日に内裏で踐祚、4月13日即位する。翌大同五年（810）3月には蔵人所を新設、9月薬子の乱を鎮圧し、9月19日年号が「弘仁」に改元される。大嘗祭は、この年の霜月卯日、11月19日に朝堂院で執り行われた。木簡が記されたのは、嵯峨天皇即位後1年半が経過し、大嘗祭を間近に控えた時期である。嵯峨天皇による蔵人所の新設や官衙の配置換えという新策によって、当該官衙は細分化され、東半には「内酒殿」が新たに配置された。役所の目的は、醸造用の水を得るため、そのために巨大な井戸が掘られたのである。

以上、平安時代の調査成果から想定できる当該地の状況を要約すると、桓武・平城天皇の時期には、この官衙区画は方40丈を占地し、中心北側に正庁と考えられる建物があり、建て替えが行われた。その後、嵯峨天皇による官衙の再編が断行され、この官衙区画に天皇の家政機関的官衙が集約された。その一つが内酒殿であった。複数の官衙の造営に聚楽土は欠かせず、相前後して、近隣適所で土取りが行われた。しかし、内酒殿の存続期間は短く、文献史料に登場する元慶五年（881）には、すでにこの井戸は機能を失っていたのである。

次に、江戸時代の遺構の概要を述べると、前述した昌福寺・松林寺境内は、聚楽第内城の堀と推定され、それが東へ延長すると考えられてきたが、調査の結果、大規模な堀の形跡は認められず、聚楽第内城の堀は、調査区には及ばないことが判明した。『洛中絵図』をみると、調査地点の西側に東西の堀状地割りがあがるが、東側は町屋の地割りが描かれている。今回の調査成果から考えると、堀は調査区の西側で北に折れるか、あるいは終息していたとみるのが妥当であろう。

一方、調査区一帯は、聚楽土が広範囲に堆積し、その採取を目的とした土取穴が多数掘られていた。調査では、それらをすべて調査することによって、土取穴分布の規則性、個々の規模、埋没状況などを知ることができた。これらの調査成果は、土取りの組織的採取および採取工程など、それまでほとんど実態のわからなかった領域の研究における基礎資料となりうるものである。さらに、平安宮域における再開発や町屋の形成など、近世京都の実態を示す遺構として評価できる。

土取穴の規則性として指摘した、幅4～6mの単位は、北側の東西通りに面した町家の間口幅に対応したものと考えられる。また、単位の方向性が南北であることは、間口幅が南に延長されたことを示すものであろう。従って、平安時代の遺構がわずかに残る調査区北端の範囲が町家の建つ範囲であり、その背後の空閑地が土取りや塵芥投棄の場として利用されたようすが復原できる。

調査区西半では、土取穴の重複する位置で井戸が掘られていた。これらは、智恵光院通に間口を設けた町家に伴う井戸とみられる。土取穴が埋没して以降、町家が建ち並び、それに伴い掘られた井戸である。また、調査区西端では、平安時代の礫敷き路面や整地層が残されていた。これはY=-22,852付近に何らかの境界があり、土取穴が及ばなかったと考えられる。智恵光院通が通じ、西に面した町屋が建てられて以降、この範囲は家屋の下で遺構が保存され、今日にいたったのである。

なお、木簡の釈文は、井上満郎氏、西山良平氏に御願した。

(辻 裕司・丸川義広・大立目 一)

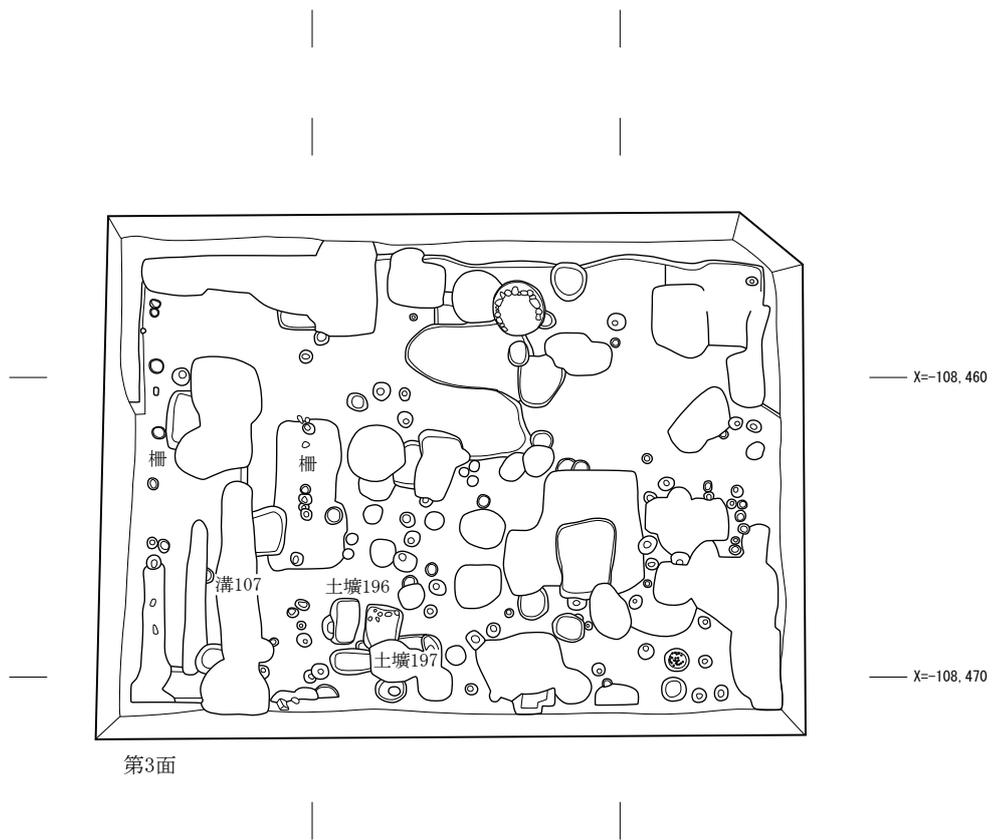
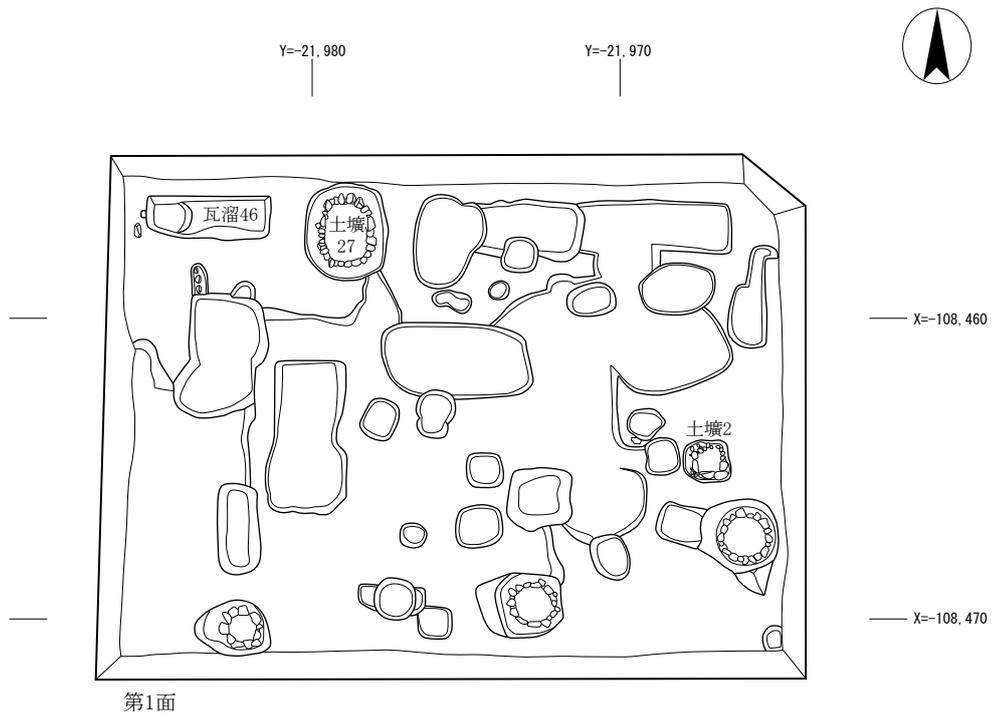


図7 1区第1・3面遺構平面図 (1:250)

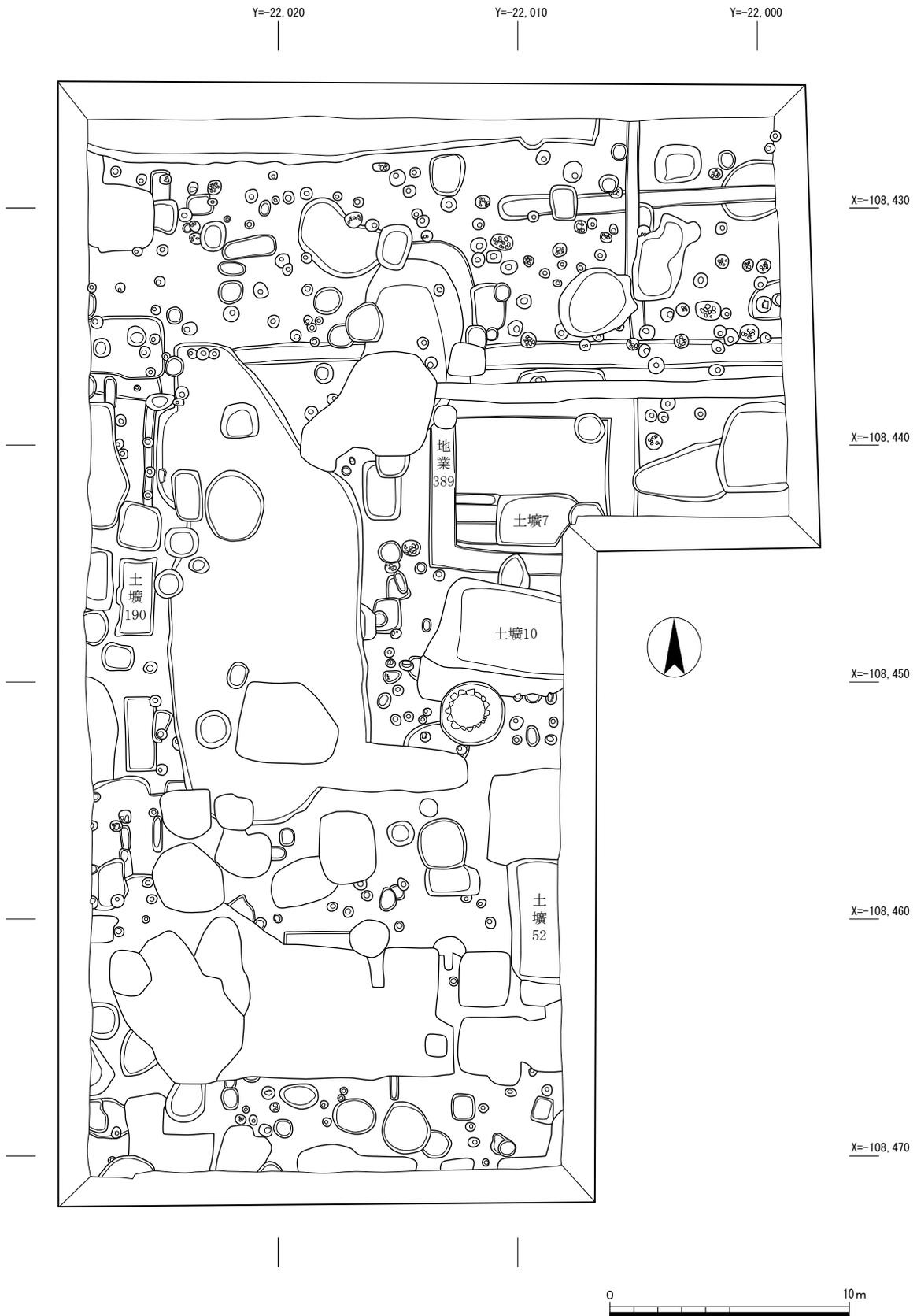


図8 2区第1面遺構平面図 (1:250)

2区この時期の遺構に、地下室状をなす土壇10・52がある。土壇10は東西約5.1m、南北約3.8mの長方形の掘形で、砂礫層を垂直に掘り下げており深さ約1.9mを測る。西側の壁面のみ石組みで約0.9mの高さで残っていた。底面を平らにならし、東壁直下に3基の礎石、北・南壁下では中央に1基ずつの礎石が据えられる。焼土、焼け瓦・砂礫が混入した土などを東側から投げ込み埋めていった状況がうかがえる。土壇52は南北5.3m、東西2m以上で東側が調査区外に延び、平面形は方形から長方形をなすものと思われる。深さは約1.5mを測る。西壁直下で5基の礎石を検出した。埋土の大部分が焼土で占められている。両遺構とも、火災の後始末に使われたものであろう。土蔵の基礎と思われる地業389は、幅1.0～1.2m、深さ0.6～0.8mの溝が、東西約8.8m、南北約7.6mの長方形の区画を巡る遺構である。溝内には叩き締めた土層と、小石から拳大までの礫を敷き詰めた層の互層を3～4枚認めた。地業と一連の遺構と考えられる土壇7は、東西約3.5m、南北約2.1mの掘形中央に漆喰で造った約1.35×0.9m、深さ約0.5mの長方形の室をもつ。底部に、0.3×0.3×0.35mの立方体の石材を深さ0.3mほどに割り抜いた箱状の容器を埋めこんでいる。この容器は蓋があり、蓋は門がかけられるようになっていた。土壇7は地業389の中央よりも南に寄る。石組み遺構の土壇190は東西約1.8m、南北約3.3mの長方形で、西側と東側の壁面に川原石を積み上げ約0.5mの高さまで遺存していた。中央部の方形の土壇を挟む形で、南側と北側が階段状になっている。土壇は約1.2mの深さで、拳大までの礫を多量に詰め込んでいる。何らかの作業場であろうか。

桃山時代から江戸時代前期の遺構（第2面）井戸、溝、土壇、柱穴、瓦溜、石室、柵列、庭園状遺構などがある。

1区この時期の遺構のうち、溝107は、幅1.2～1.5m、長さ約8m、断面U字形の深さ0.8～1.0mの南北溝で、底部には浅い窪みが並んでいる。北は調査区の中途でとまっているが、南側は中立売通まで延びているものと考えられる。また、調査区西側に2列、南北方向に不等間隔で石が並んでいるが、これらは室町時代から踏襲される柵もしくは塀の跡である。

2区この時期の遺構に大規模な土壇がある。土壇228は東西約5.5m、南北約21m、最深部は約2mを測る。土壇800は東西6.5m以上、南北約28m、深さ約2.6mを測る。両者とも巨大な廃棄物処理穴と考えられる。壇内から多量の金箔瓦が出土した。溝579は幅1.0～1.2m、深さ0.8～1.1mの南北溝で検出長約34mを測る。溝の西肩にほぼ1.2mの間隔で直線上に並ぶ15基の柱穴を北半部でのみ検出した。また、溝の北端部は東へ折れ曲がり溝720に連結する。東西溝720は幅約2.6m、深さ約1.2mで検出長は16mを測る。東西溝582は幅約1.5m、深さ約0.6mで検出長約14mを測る、溝内から多量の土師器の皿が出土した。土壇519は基底部分のみが残ったものと考えられる園池状の遺構である。調査区外に広がるが東西長11m以上、南北長11m以上を検出した。20～30cmほど掘り窪め、直径5～30cmまでの川原石を、粗密に高低差を付けて敷いている。

室町時代の遺構（1区第3面、2区第2面）柵列、溝、土壇、柱穴、土器溜などがある。

1区ではこの時期の遺構数が最も多い。調査区西側に2列、南北方向の柵を検出した。多くの

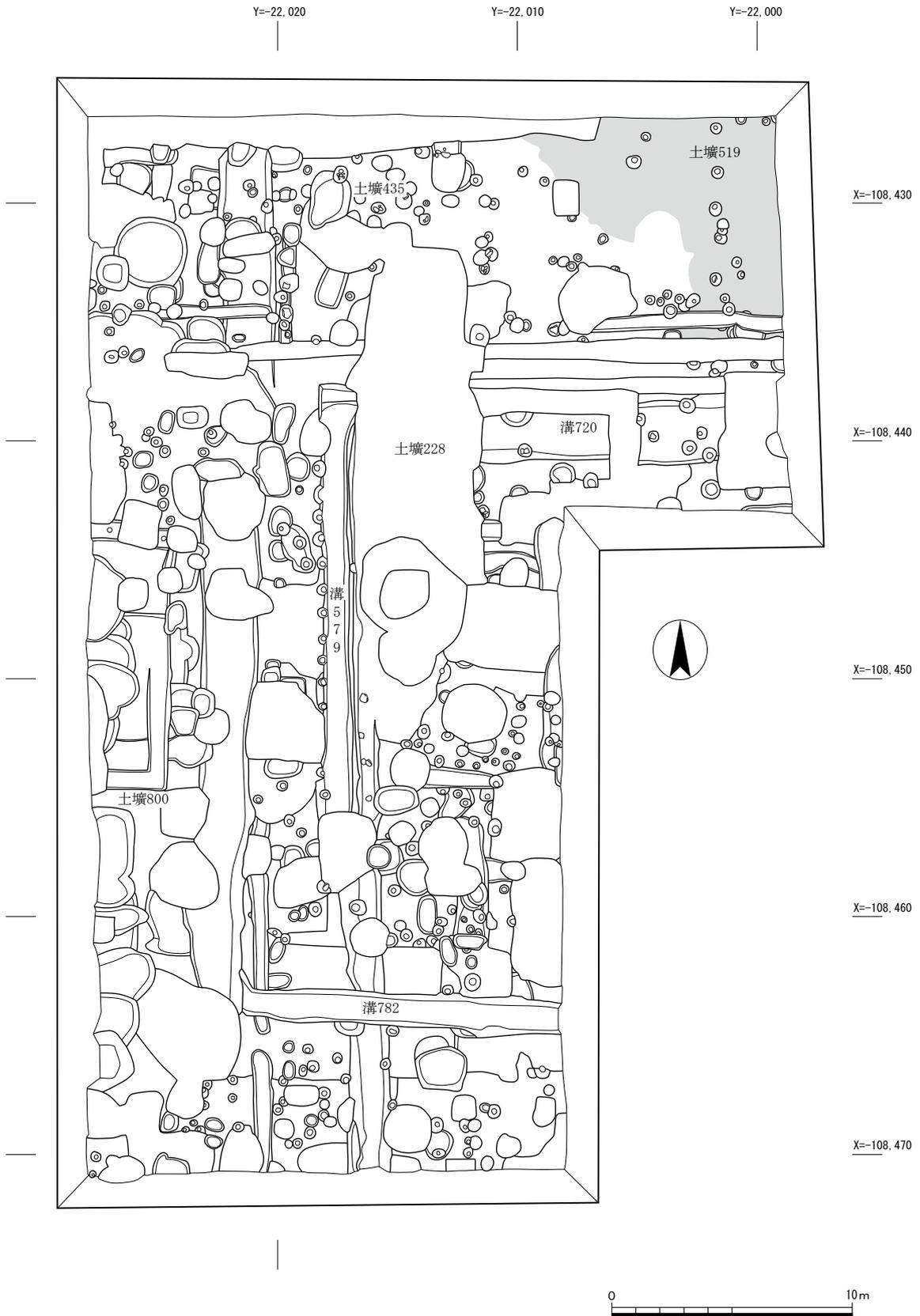


图9 2区第2面遺構平面図 (1:250)

柱穴では人頭大の礎石を据えている。また、柱穴は切り合っており、何度も同じ場所に造り直されたことがわかる。東側の柵では全体を溝状に掘り窪めていたことから築地塀の可能性もある。土壙 196・197 はともに長さ約 1.5 m、幅約 1.0 m の長方形の土壙である。前者からは多量の土師器の皿と鉄釘、後者からは土師器の皿のほか焼締陶器の壺、三枚重ねの山茶碗、中国製の白磁鉢、刀子などが出土した。土壙墓の可能性が考えられる。また、土壙 220 は拳大の石が詰まった礫敷遺構である。中には礎石状の平たい石もあり、何らかの建物の地業と考えられる。

2区この時期の遺構は北半部に集中する。L字形に屈曲する深い溝や多数の土壙がある。土壙の形状は円形から長方形まで様々である。いずれも一辺 1.0 m 以上であるが最大長は 1.8 m を超すものはなく、深さも 10～30 cm にとどまる。中には多量の土師器皿が出土したのもあった。

平安時代から鎌倉時代の遺構（1区第4面、2区第3面） 1区、2区の両区ともにこの時期の遺構は数基の土壙・柱穴を検出したのみである。全体として平安時代から鎌倉時代の遺構は非常に少なく、遺存状況も悪い。

遺物 今回の調査では遺物整理箱にして 660 箱が出土した。

桃山時代から江戸時代の遺物は土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、銭貨、石製品、土製品などがある。この時期の出土遺物は大半が瓦類であり、中でも金箔瓦が多量に出土したことは注目に値する。大部分が2区第2面の土壙 228・800 からの出土であるが、2区の南半部の遺構からも出土している。また1区でも数点が出土した。金箔瓦（図版 11～13）は軒丸瓦（図版 11）、軒平瓦（図版 12）、鯨瓦（図版 13-1）、鬼瓦、棟瓦（図版 13-2）、熨斗瓦、面戸瓦など各種あり、総数 650 点を確認している。軒丸瓦の文様は巴文（6～8）が大部分を占める。次に多い文様は「山」字を表現したもの（1・2）である。非常に丁寧な造りで、窪んだ部分には黒色の彩色を行い、文字の部分と周縁部に張った金箔を際立たせている。ほかに桐文（3）、三つ葉葵文（4）、宝輪文（5）があるが、いずれも数は少ない。なお、菊の文様をあしらったもの（9）は棟に使用された小型の瓦である。軒平瓦の文様には違い鷹羽文と唐草文があり、後者が大部分を占める。違い鷹羽文（10）はほかに類例がない文様で、製作技法が「山」字の軒丸瓦と一致している。唐草文（11～15）の中には中心に桐を飾るもの（11・12）、青海波文と組み合わせるもの（13）もある。鯨瓦には頭部、胴部、尾部などの破片があり、4 個体を確認した。いくつかの部品に分けて製作し、積み重ねる方法をとっている。棟瓦には円形・正方形・長方形のものがあり、いずれも華麗な文様が丁寧に描かれている。棟の側面を飾っていたものであろう。

鎌倉時代から室町時代の遺物には土師器、瓦器、須恵器系陶器、焼締陶器、施釉陶器類、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品などがある。

一例として土器溜であり、また墓跡とも考えられる1区の土壙 196 をあげる。土壙内から 7,146 点の遺物が出土しており、そのうちの 96.2% を土師器が占める。次いで瓦器が 2% あり、残りが須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、金属製品などで、少量ながら各器種が揃っている。土師器はすべてが皿類といってよい。遺存状況は良好で多くの土師器皿が完形

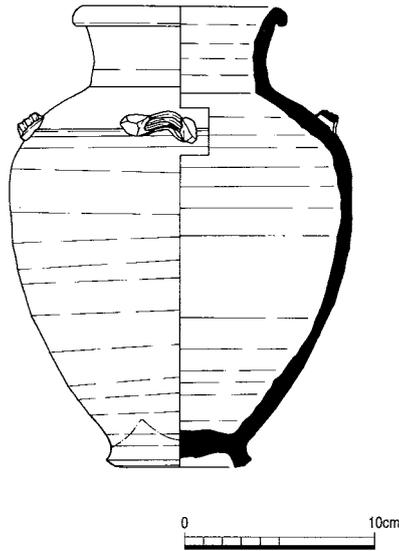


図 10 2区土壌 435 出土白磁四耳壺実測図
(1:4)

で出土している。皿には2系統あり、赤色系の皿が、白色系の皿の3倍以上と多数を占める。また西日本系と考えられる糸切り底の土師器の皿・碗や、東日本系と思われる灰釉陶器系の碗も数点であるが出土している。もう1基の土壌197は、約3,000点の遺物が出土しているが、出土状況はほぼ同様の傾向を示している。時期は14世紀中頃と考えている。このほか2区の土壌435から宋代の白磁の四耳壺(図10)が完形で出土した。

平安時代の遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類などがある。量も少なく細片である。また砂礫層から古墳時代の土師器と弥生土器が数片出土した。

小結 調査地は平安京左京北辺三坊一町にあ

たり、諸司厨町の一つである正親町、藤原齊敏邸などが推定されたが、結果として平安時代の遺構はほとんど認めることができなかった。

室町時代では、1区が町尻小路と正親町小路の交差点の北西に位置することから、道に面して様々な遺構を検出した。町尻小路に対しては建物の地業の可能性のある土壌220があり、正親町小路に対しても調査区西側で検出した南北の柵が区画に係わる施設であったと考えられる。また、土壌暮らしき遺構も検出しており、複雑な土地利用が行われたことを想像させる。なお、南北の柵は桃山時代まで同じ位置で造り替えが続けられる。第2面で検出した溝107は、この区画の柵の機能を受け継いだものかも知れない。また2区でも、区画に関連すると考えられるL字形の溝を検出した。調査地が「上京」の南端にあたることから、これらの遺構は「上京」を構成する施設の一部であったと推定している。

桃山時代の中立売通が秀吉の聚楽第と内裏を結ぶ重要な道路であったことから、中立売通沿いには大名屋敷が建ち並んでいたものと推定されている。金箔瓦を葺き、かつ鯨瓦を載せるというような屋敷は、豊臣家に縁のある人物であるか大名の中でもかなり上位にある人物の屋敷であると考えられる。また、屋敷地の区画の溝に関してはその規模もさることながら、いずれも真南北・東西に通っていることなど一連の計画のもとに造られたものであろう。

江戸時代中期以降は、1区および2区南半における井戸や土壌の配置からこの部分には中立売通に面して小規模の町家が建ち並んでいた景観を想定できよう。また2区の中ほどは土蔵や蔵同様の使われ方をしたと思われる地下室、作業場に類した遺構などが集まっており、大きな商家や工房があったと推定できる。

(鈴木廣司、山本雅和)

3 平安京左京七条二坊 (図版1・14・15)

経過 本調査は、西本願寺白洲境内地間法総合施設の建設に伴い実施したものである。調査地点は西本願寺境内北東隅、太鼓楼の西隣に位置し、調査の直前まで本願寺中央幼稚園の旧校舎があった。この幼稚園舎が明治40年に建設された木造校舎であったため、いわゆる近現代の攪乱は少なく、遺構の残存状態は良好であることが予想された。当地は、平安京左京七条二坊七・八・九・十町および堀川小路と左女牛小路の交差点にあたり、このうち七町は東市外町に該当する。また、室町時代には本願寺の寺域東端にあたる。

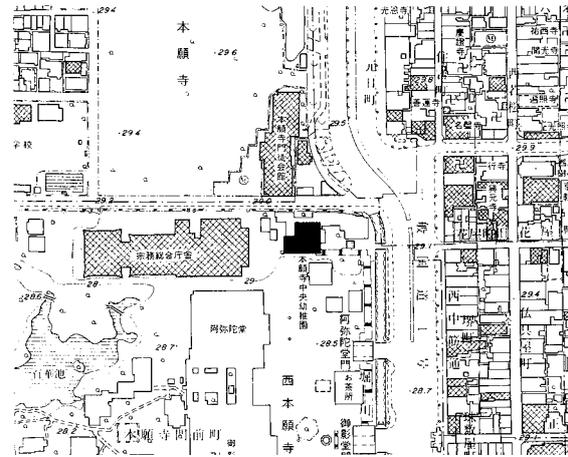


図11 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査地点は現地表面から50～80cmが近現代の盛土層および整地層があり、これを除くと江戸時代の遺構面となる。基本層序は江戸時代後期から末期整地層(第1層)、江戸時代前期整地層(第2層)、室町時代後半整地層(第3層)、室町時代前半整地層(第4層)、鎌倉時代整地層(第5層)で現地表面から約2.4mで地山の砂礫層に達する。このうち第3層は調査区の全面で確認しており本願寺移転直前、16世紀後半代の整地層と考えている。また、平安時代の遺構は地山の砂礫層上面で検出した。

調査区の北東部、第3層上面で東西約20m、南北約11mの庭園に伴う池を検出した。南および西側の汀は拳大の礫を敷きつめた洲浜を形成し、西端のややくびれた部分に景石を配する。北東部には周囲を径30～50cmの石で囲み、盛土をした張り出し部を形成する。東肩口は調査区外となり不明だが、調査区東端付近では南の洲浜と張り出し部を結び、石を積み上げて堰としている。池に水を引き入れ、数十cmの段差をもって水が流れ落ちるように工夫された「瀬」にあたる施設と考えている。全体的には同じ時期の武家屋敷や城郭、あるいは禅宗寺院の庭園に伴う池と比較すると穏やかで優雅な印象を受け、平安時代の浄土式庭園の流れを感じさせる。

検出面から底部までの深さは約70cmだが、実際に水を張った場合の水位は20～30cmと浅く、洲浜の裾の石が見え隠れする程度であったと推定できる。池の水は東を流れる堀川から引き入れられ、すぐ北を流れていた堀川の支流に排水していたようである。

また、池底および汀部分は造り替えを行っている。造営時の底部は小石を敷きつめて造られるが、後に漏水を防ぐため厚さ10～20cmの粘土を貼る修復を行っている。汀部分も当初は径20～60cmの石を点々と配置したのみで、洲浜の礫と景石は造り替えの時点で加えられたようである。造営時から使用されていたと考えられる石には焼けた痕跡のあるものも多く、付近の建物の火災が池修復の契機になった可能性もある。

出土遺物から16世紀末頃に造られたと考えられるが、新旧それぞれの池の出土遺物では、時

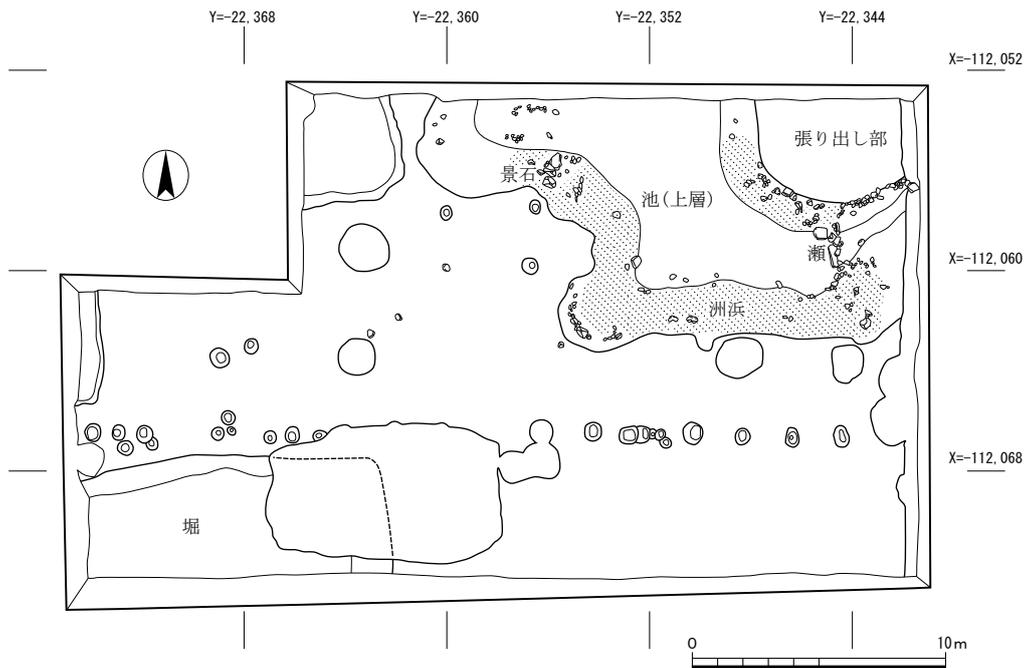


図12 江戸時代初頭（庭園遺構）遺構平面図（1:300）

期差は認められない。江戸時代初頭（17世紀前半）には砂礫を用いて人為的に埋められている。

この庭園遺構と同時期の遺構には、堀、柱穴、土壌がある。調査区南西部で検出した東西方向の堀は検出面で幅約5m、深さ1.6mで、東端は調査区中央付近で途切れ、西側は調査区外へ延長する。埋土の最下層からは16世紀代の遺物が出土したが、最上層には天明の大火によるものと考えられる焼土層が堆積しており、長期にわたって機能していたことがわかる。柱穴は多数検出したが、建物の復原はできなかった。ただし池の南肩口と平行して等間隔で並ぶ柱穴は、なんらかの境界を示す施設である可能性がある。

室町時代の遺構には池状遺構、流路、土壌、柱穴などがある。

池状遺構は調査区東半部、庭園遺構（池）の下層で検出した。調査区北東隅から南西方向の導水路を伴い、これより南側に湿地状の堆積が広がる。南側は調査区外へ延長し、西側は流路により削平されるため規模は不明である。底部には、根固めとして拳大の礫を敷いた上に径40～90cmの石が据えられていた。このうち一つの石の下で、焼締陶器の甕底部を検出している。このほか池に付随する施設として南北80cm、東西60cmで方形の木枠の痕跡や杭も検出した。導水路は、15世紀前半と15世紀末頃の新旧2時期がある。新導水路は検出面での幅180cm、深さ約50cmで杭と板による護岸を施す。一部護岸の板が残存していたが遺存状況は不良で、杭はいずれも痕跡のみを確認した。旧導水路は検出面での幅120cm、深さ40～50cmで南端は流路に削平される。

調査区のほぼ中央では幅約18mの南北方向の流路を検出した。上述したように池状遺構より新しい時期の流路である。砂礫の埋土からは、16世紀前半に属する磨滅の著しい瓦や陶磁器類などが出土した。平安京の条坊ではほぼ堀川の位置と一致するが、室町時代の池状遺構の水が北東方向から引き入れられていることから、この時すでに堀川は現在と同様、調査区より東側を流れていたと推定できる。このことから、この流路は堀川そのものの氾濫によるものではなく、洪

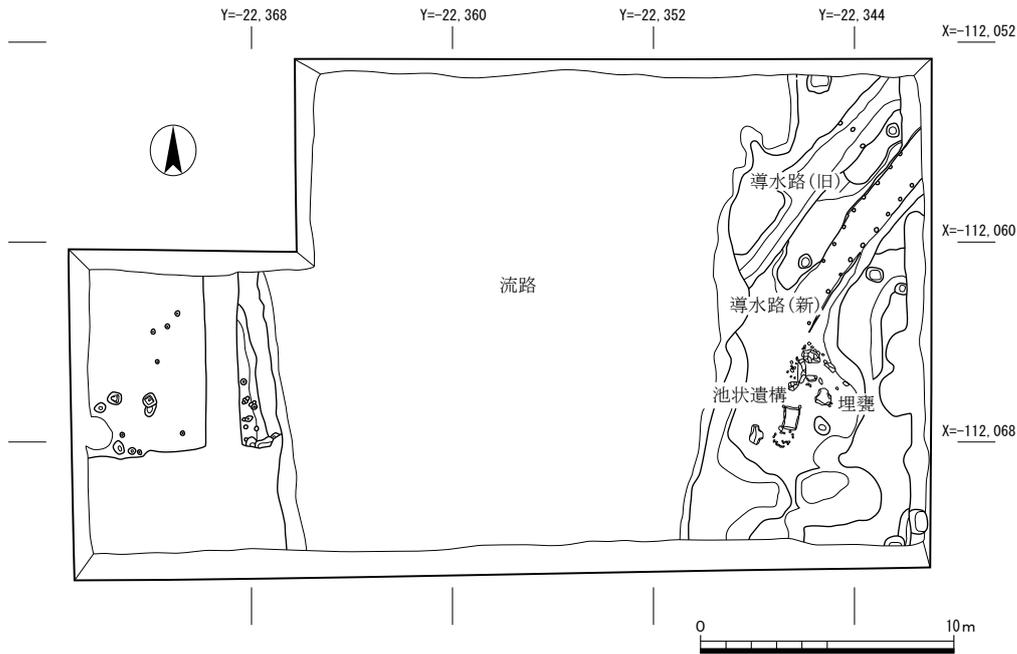


図13 室町時代遺構平面図 (1:300)

水時に一時的できた流れの痕跡であると考えている。

流路の西側は室町時代の整地層が堆積し、この上面で柱穴、土壇などを検出した。建物の復原にはいたらず、これらの遺構が本圀寺と関係のあるものかは断定できない。

平安時代から鎌倉時代の遺構は、すべて地山(砂礫層)の上面で検出した。井戸、柱穴、溝がある。井戸は方形縦板組みで木枠が残存し、土師器をはじめ13世紀前半の遺物が多く出土した。南北方向の溝は検出面で幅180cm、深さ25～30cmある。12世紀代の遺物が出土しており、堀川小路西側溝と考えている。

また調査区の北西隅で古墳時代(庄内・布留式並行期)

の遺物包含層を確認した。砂礫層に多くの土器片を含むが遺構は確認できなかった。

遺物 遺物は整理箱にして、313箱出土した。

古墳時代の土師器は、調査区北西隅の砂礫層から出土した。完形に近い遺物もあり比較的大きな破片が多く出土している。

平安時代の遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類がある。遺構に伴うものでは、堀川小路西側溝から出土した末期の一括遺物がある。軒瓦には、唐草文・剣頭文軒平瓦、蓮華文・巴文軒丸瓦がある。また遺構に伴うものではないが土馬の破片も出土した。

鎌倉時代の遺物には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、滑石鍋、瓦類がある。

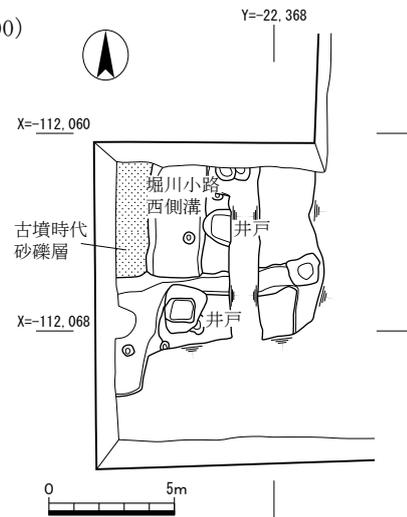


図14 平安・鎌倉時代西半部遺構平面図 (1:300)

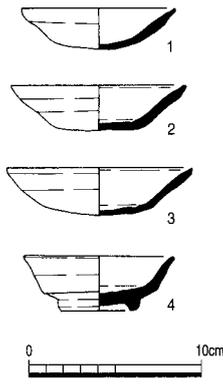


図15 池出土土器実測図
(1:4)

室町時代の遺物には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産施釉陶器、瓦類などがある。これらの大部分は、池状遺構や流路からの出土である。また、流路からは頭蓋骨とみられる人骨も出土した。

安土桃山時代から江戸時代初頭の遺物は、池出土のものについて述べる。池からは土器・瓦類のほか、底部の粘土層からも若干の木製品が出土した。箸、木篋、漆器椀などがある。土器類（図15）は土師器（1～3）、須恵器、施釉陶器（4）、焼締陶器などがあるが、量的には少ない。瓦類では片面に山型の凹凸のある15×25cm程度の熨斗瓦が、多く出土した。また、池に使用した石の中には石臼や

石仏を転用したものもある。なお、石材には花崗岩、頁岩、砂岩、チャートなどがあるが、いずれも近郊で採集できるものである。

このほか江戸時代の遺物は、堀の埋土から陶磁器類、瓦類などが多量に出土した。瓦の中には「大仏南門前町瓦師森田平兵衛」「文化七 午年御修復御用瓦師森田平兵衛」などの銘が入った西本願寺の堂舎修復に関係する瓦もある。

小結 今回検出した庭園に伴う池は16世紀末頃に属し、本願寺が当地に移転してきた時期のものである。現存する本願寺について描かれた最古の絵図である寛永八年（1631）の『本願寺寺内町絵図』によると寺域北部には本願寺家臣の屋敷が並び、その南側には伽藍を配する境内と屋敷地を区画する築地塀と道路が敷設されている。そして寛文元年（1661）に太鼓楼が移築された後の絵図では、いずれも境内北限築地の北側は太鼓楼と藪が描かれている（『版本本願寺絵図』1760年、『都名所絵図』1780年）。幕末から明治時代にかけても、調査地付近はあまり活発な利用状況はなく、このため池を大変良好な状態で検出することができたといえる。ところで上述の絵図には、調査地点に池の存在は認められない。本願寺は絵図に描かれる以前、天正十九年（1591）に顕如により京都七条堀川の地が選定され大坂天満より移転してきた。文禄元年（1592）顕如の没後、一旦は嫡男教如が宗主を継ぐが、翌年には豊臣秀吉の命により弟准如にその職を譲り、教如自身は本山北東隅、本堂の北に隠居していた（『大谷本願寺通紀』）。慶長八年（1603）、教如は徳川家康より寄進された烏丸六条から七条を寺地とし堂舎を建築、これが現在の東本願寺である。

以上、本願寺分派の過程の中で教如の隠居した屋敷が調査区付近にあたることから、今回検出した池は教如の屋敷に造られた庭園に伴う池であると考えられる。ほぼ完全な形で池を検出したとどまらず、文献史料と照合できる貴重な遺構といえる。

室町時代の池は、調査区外に延長し流路に削平されるため規模などの全容は不明だが、幅1m以上もある護岸を施した導水路が付属することから、大規模な池であったと推定できる。

平安時代末期から鎌倉時代では、堀川小路西側溝を検出できた。また、東市に直接関係する遺構は検出はできなかったものの、多量の平安時代遺物の出土は、市と関係する当地の活発な土地利用を示すものといえよう。

(近藤知子)

4 平安京左京八条二坊 (図版1・16)

経過 京都駅構内とその周辺部では、十数回の調査が行われているが、京都市による京都駅区画整理事業に伴う試掘調査、駅ビル建設・立体駐車場建設に伴う発掘調査などが隣接した調査である。調査地点は平安京左京八条二坊十四町にあたり、東部には西洞院大路が推定されたが、平安時代前・中期の遺構は少なく、後期から鎌倉時代の遺構が中心である。しかし、室町時代になると遺構は減少し、その後半になると耕作用の溝が少数検出されることから、この頃宅地から耕作地に変化したことがうかがえる。近世になると、耕作土を客土して本格的な畑作を開始したことが、多数の溝や耕作土層から判断される。

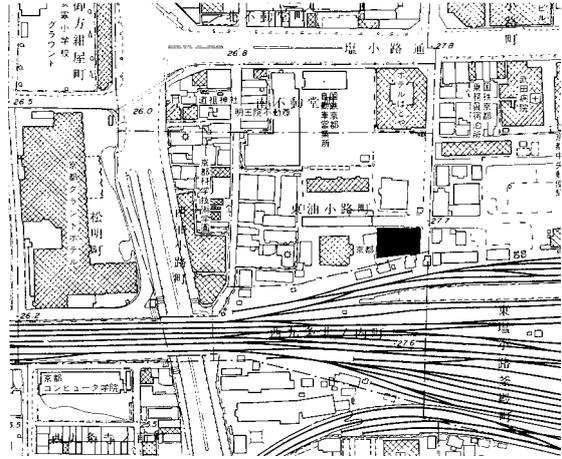


図16 調査位置図 (1:5,000)

遺構 近世から平安時代まで合計5面の遺構を確認し、その数は606基になる。以下、時代別に主要な遺構を概説する。

第1面 (江戸時代前期) 近世の畑作に伴う溝、桶を設置した土壇 (SK 3・46)、井戸 (SE 4) などを検出した。溝は大半が東西方向で、幅0.1～0.3 m、深さは0.1 m前後である。埋土は10RY1/2ないし10YR2/3の茶灰色泥砂層で、炭、白色砂層が堆積したものが多く、自然に埋没した状況を示す。溝のベースになる暗茶灰色泥砂層は、小石を含まず均質で、客土された土層である。

第2面 (室町時代後期) 第1面と同じく耕作に伴う溝を検出した。第1面に比べ数が少なく間隔もまばらで、ベースの土層も小石を含むなど上層の耕作土とは異なる。小規模な柱穴がある。

第3面 (鎌倉時代後半から室町時代前期) 柱穴・井戸・土壇などがある。井戸 (SE 320・324・335・336・345・350・415・428) は敷地の中央から東側に集中し、西側には少ない。井戸側など木材の構造物の遺存状態は良くなかったが縦板が確認できるもの (SE 336・345) は少なく、底部に方形に枠を組んだ簡易な構造のもの (SE 320・415) が多数である。柱穴は井戸の周辺で多く確認した。



図17 SE 335・336 (北東から)

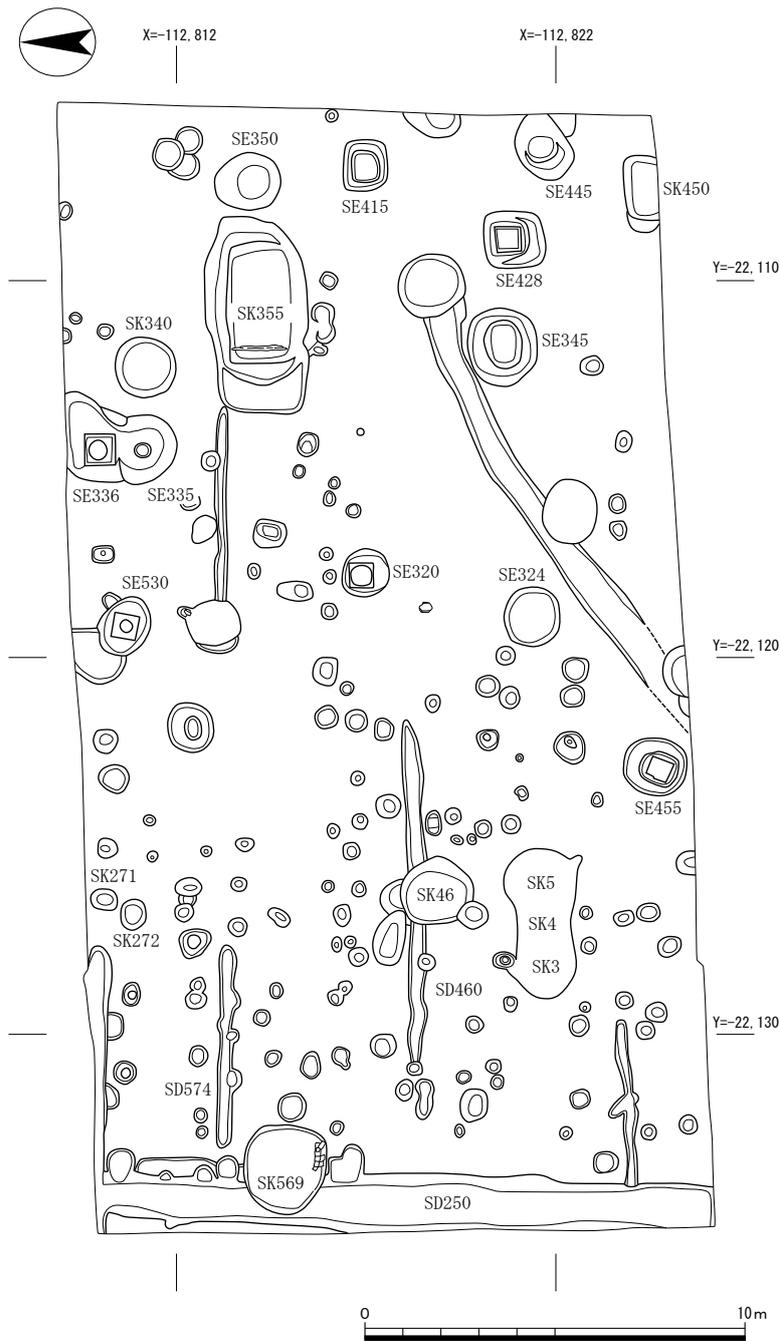


図18 遺構平面図 (1:200)

第4面（平安時代後期から鎌倉時代中期）柱穴・井戸・土壇など、多数の遺構を検出した。S E 445 は方形に井戸枠を組むが、木材の残りは悪い。S K 355 は南北方向 2.7 m、東西方向 5.8 m の規模の大きな土壇で上層には焼土・焼け石などが多数廃棄されていた。土壇西側の一段低い部分の底には角材が南北方向に据えてあったが、用途は不明である。溝は、敷地の西端で確認した南北溝（S D 250）で、四行八門制の西三行にあたる。この溝に切られて一辺 2 m の土壇を検出した。S K 569 は南壁の一部に瓢状の長方形の焼成物を積み、壁を造っていた部分があり、ほかの面には板材などが推定されるが、遺存はしていない。瓢状の焼成物は割れたものも使われ、二次的な使用であった。

第5面（平安時代）柱穴・土壇などを少数確認した。S K 450 からは平安時代前期の

遺物が少量出土した。

遺物 弥生時代から近世までの遺物が合計 140 箱出土した。その中心は、鎌倉時代から室町時代前期の遺物である。

弥生時代・古墳時代の遺物は、平安時代前期の遺構面を形成する砂礫層の窪みに堆積した灰緑色砂泥層に少量含まれ、また中世の遺物に混入していた。

平安時代前期の遺物は、S K 450 から土師器の皿が少量出土した。平安時代後期の遺物は、S K 340、S E 530 などから土師器、須恵器などが出土したが、量は少ない。

鎌倉時代の遺物は土師器、瓦器椀・杯、須恵器、中国陶磁器（青磁椀・皿、白磁椀・皿）、常

滑焼甕、神出・魚住窯甕・鉢、鏡鑄型、銅鏡破片、鞆などがS E 324・335・336などからまとまって出土した。S E 336からは土師器皿(1～6)・杯(7～9)、瓦器杯(10)・羽釜(12)・鍋、魚住窯須恵器鉢(11)などが出土した。S K 271は常滑焼の甕を埋めた土壌で、甕の底部が残る。S E 428からは、銅鏡の小破片、鑄型など鑄造に関する遺物が出土した。

近世の遺物は、S K 3・5・46、S E 4などから出土し、耕作溝からも少量出土した。

小結 調査地点は左京八条二坊十四町にあたり、西洞院大路に西面する地点である。八条二坊十四町の東部には、東寺の八条院町が広範囲に展開し、院町に含まれる京都駅構内の発掘調査では鑄造関連遺構を中心に多様な遺構・遺物が検出された。

院町には居住者名のわかる文献があるが、十四町に関する文献は不明であり、発掘調査の成果が土地の変遷を解明する手がかりになる。各時期の遺構の変遷を簡単に述べ、まとめとする。

左京八条二坊十四町の東部地点の地山は砂礫層で、窪地には灰緑色の泥砂層が堆積し、古墳時代後期の遺物を少量出土する。平安時代前期には土壌があり、自然流路に挟まれた安定的な地域には遺構が形成されている。平安時代後期になると、井戸・土壇・柱穴など各種の遺構が存在し、その密度が前代に比べ高まる。この傾向は鎌倉時代にも継続するが、室町時代後半になると遺構が激減し、耕作用の溝が検出されるようになる。近世になると、耕作土を客土し畑作を本格化させ、都市近郊の農産物の需要を賄った状況がうかがえる。

遺物では、S E 428などから出土した銅鏡の破片、鑄型、フイゴ羽口など鑄造に関係した遺物が注目される。鏡の破片は、2×2cmの小破片であるが、表裏に真土が付着し、鑄造過程で割れたものである。前述の鑄造関係の遺物は小破片で、調査地点内で大規模な鑄造施設を推定することはできないが、小規模な施設の存在は考えられる。あるいは、S K 355から出土した焼けた花崗岩や炭は、鑄造施設の廃棄物ともとれ、この土壌を鑄造に係わる廃棄物を処理した土壌と考えることもできる。

(百瀬正恒)

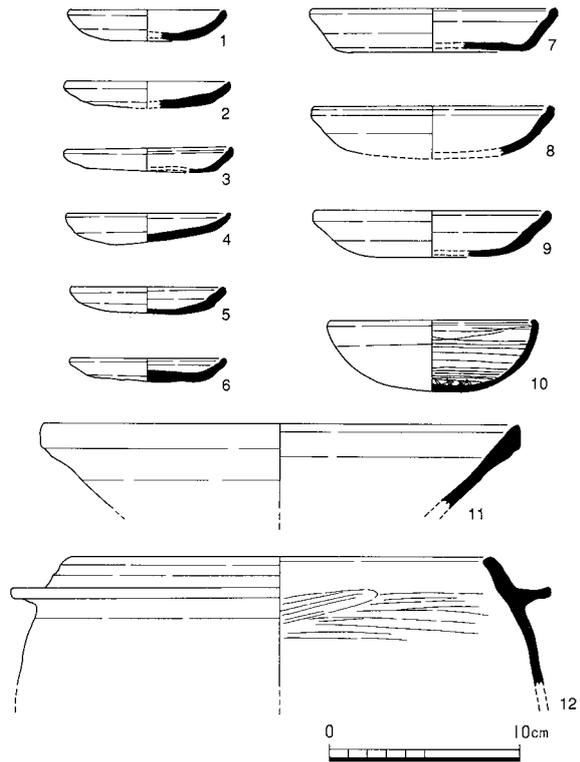


図19 S E 336出土土器実測図(1:4)

5 平安京右京二条二坊 (図版1・17・18)

経過 京都市立朱雀第四小学校体育館建て替えに際し試掘調査を行ったところ、保存状態のよい平安時代前期の包含層を検出したので発掘調査を実施することになった。調査地は平安京右京二条二坊五町の南東隅に相当する。右京における平安京条坊制の変遷過程の解明に主眼をおいて調査を進めた。

五町内の発掘調査例は、小学校の北側で財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが行っており、12世紀末までの遺物が多量に出土している。今回の調査では11世紀の小さな円形土壙と湿気抜溝・水路が検出され、11世紀から小学校が造られるまで耕地であったことが確認された。平安時代前期から中期の遺構は、二条大路路面や掘立柱建物・井戸などを検出している。

遺構 基本層は現地表から約1m下までグラウンドの盛土層で、その下に近世以降の耕作土層が堆積している。調査では3面の遺構面を検出しており、第1面は中世、第2面は11世紀の耕作土層、そして第3面が今回の調査の主体となる平安時代前期から中期の遺構面である。この遺構面は自然流路と湿地によって30cmほど堆積した黒褐色泥土の無遺物層上に成立する。地山は礫層と粘土層である。

第1面は、耕作に伴う湿気抜溝を調査区全域で確認したにとどまる。

第2面も、11世紀の耕作土面であり湿気抜溝と東西と南北に走る用水路2条を検出した。この用水路は後に述べる10世紀の水路を踏襲している。また、直径1m、深さ1mの曲物を積み上げたと考えられる円形土壙を検出したが、それが井戸であるかは不明である。

第3面では、9～10世紀の遺構を数多く検出した。調査区南端で二条大路北側溝を検出している。この側溝は、まず平安京条坊プランの二条大路北側溝推定部分に9世紀代の側溝が掘削される。その後10世紀代に少なくとも3回以上、南に移動しながら掘り替えられており、9世紀代の側溝幅は南肩がそれらによって切られているため不明である。10世紀の側溝の最大幅は、調査区南側への断ち割り調査で約5m、深さ60cmであることが判明した。この側溝も10世紀後半以降に二条大路路面として埋め立てられ、上層は淡黄褐色砂が30cmほど突き固められていた。

二条大路に面した築地の存在は宅地内の二条大路内溝SD 210(幅1.5m、深さ0.3m)が築地推定部を流れるために確認できないが、築地心推定ラインの北60cmで東西方向の10世紀初めの柱列(7尺等間)が検出できた。また二条大路側溝および南肩部から10世紀の東西方向の柱列を2列検出した。しかも、これらの柵列は棟門を二条大路に開いていたと推測でき、柱根が残る門の幅は心々で3.5mであった。

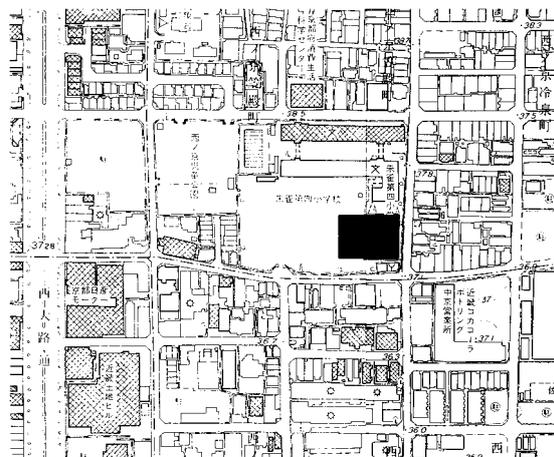


図20 調査位置図 (1:5,000)

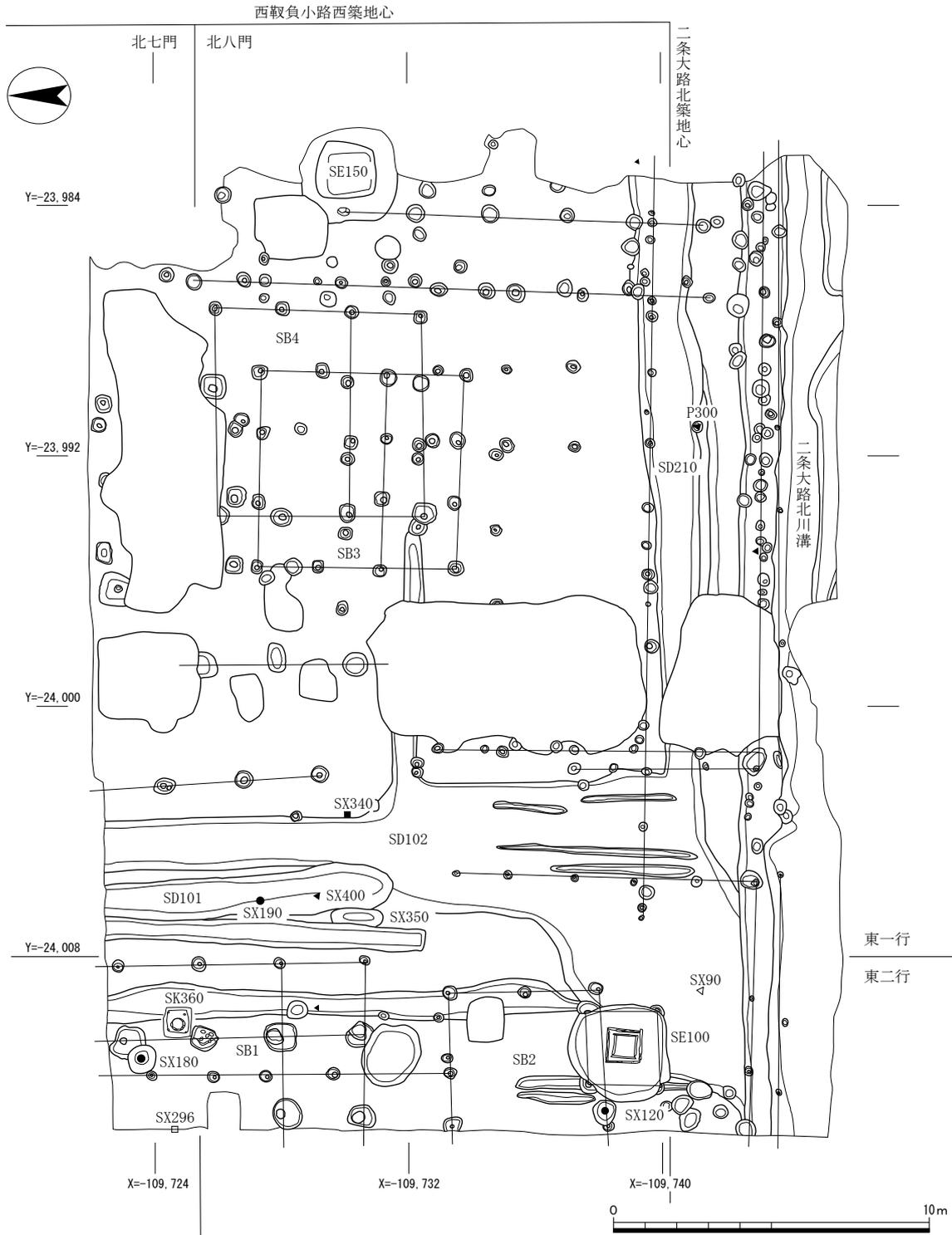


図21 第3面遺構平面図 (1:200)

宅地内では東一行の西端に沿って南北溝SD102（調査区北半部分で幅2m、深さ0.3m。南にいくほど幅は広がる）がある。また二条大路北柵列に内溝を穿ち排水を宅地内処理している。この溝SD210は調査区東端を南に流れる西靱負小路西築地内溝から西に曲がって東西溝とし、調査区南西隅で南北溝と合流させ、二条大路を切って南に流す方法をとっている。西靱負小路西築地は、推定ライン上で15cmほど掘り込んだ地業風の遺構を2箇所断ち割り調査で確認した。

建物遺構は、調査区北西で9世紀の大型掘立柱建物S B 1を検出した。柱間は8.5尺等間で南と東に庇が付く。母屋と南庇の柱掘形は一辺約1mを測り、2基の柱穴から直径30cmの柱根を検出した。東庇柱掘形は50cmで母屋・南庇に比べ小さいが、その東肩が東一・二行境ラインに、南から3列目柱穴が北七・八門境ラインに正確に割り付けられている。その東2m先に幅1.0m、深さ0.4m、南庇延長線上で途切れる溝S D 101を検出した。10世紀の建物は大型建物の南で1棟、S B 2と、調査区東半部で東西棟の小型掘立柱建物を2棟、S B 3・4を重複した状態で検出している。S B 2は東西建物の東側を検出しており、桁行7尺、梁間8尺等間と考えられる。S B 3・4は、南庇をもつ、ほぼ同規模の建物で、柱間に乱れがあるが、母屋は、ほぼ6～7尺を基本としている。南庇出は8尺である。

井戸は掘形直径2.5m、深さ1.6mの同一規模の2基S E 100・150を検出したが、いずれも10世紀末で破棄されている。S E 100は東二行北八門南東隅に位置し二条大路北築地心推定ライン上にある。木枠縦板組み井戸で底に井形を組む。井戸屋と考えられる四隅柱の掘立柱穴を検出している。S E 150は東一行北八門北東隅に位置するが部材抜き取りのためか残存しない。また、9世紀の大型建物の東底下から同時期の方形土壌S K 360を検出した。この土壌は直径1.0m、深さ1.2mで木枠組みの下に曲げ物を入れ、さらにその下に20cmほど砂利をつめたものである。しかし、湧水層に達せず周囲は粘土層で囲まれている。この遺構の性格は不明である。

祭祀遺構は11箇所から6種類の異なった遺構を検出した。それらの内訳は、

① 直径約50cmの穴に拳大の石を入れ、その上に特殊小型土師器壺と土師器皿1枚を置き、その上から拳大の石で埋めるもの3箇所(S X 120・180・190、図21-●印)。その内の1つ(S X 190)は特殊小型土師器壺に土師器皿で蓋をする。

② 土師器甕に富寿神寶(818年初鑄)を3枚埋納したものが1箇所(S X 296、図21-□印)。

③ 土師器皿に土師器皿で蓋をしたもの1箇所(S X 340、図21-■印)。

④ 須恵器瓶子を埋納したもの3箇所(図21-▲印)。

⑤ 須恵器瓶子の中に約5cmの磨いた白石を25粒入れたものを、S D 101埋土上に1箇所(S X 400、図21-▲印)。須恵器瓶子に12粒の赤いチャート(赤い土)を1cm程に割ったものを入れたもの1箇所(P 300、図21-▲印)。この2つの瓶子は同一器形で焼成が甘く、裏に同じへら記号をもつ。

⑥ 頭部と脚部を欠いた土師製裸馬を伴う土器群1箇所(S X 90、図21-△印)。

それらは流路S D 102沿いと、東西内溝S D 210沿いで検出され、合流付近で検出した9世紀半ばのS X 90を除き、すべて9世紀末から10世紀初めのものである。

遺物 出土した遺物は瓦類・土器類が遺物整理箱113箱、木器類14箱を数える。中でも9世紀末から10世紀代の遺物が大部分を占める。緑釉陶器・灰釉陶器の出土比率が高く、地鎮祭祀関係の遺物が注目できる(図22)。

その他、一括遺物で重要なのはS D 101から出土した9世紀半ばの土器群である(図23・24)。この土器群は一時期に破棄された状態で出土し、当時の主要な土器セットがほぼ揃っている。

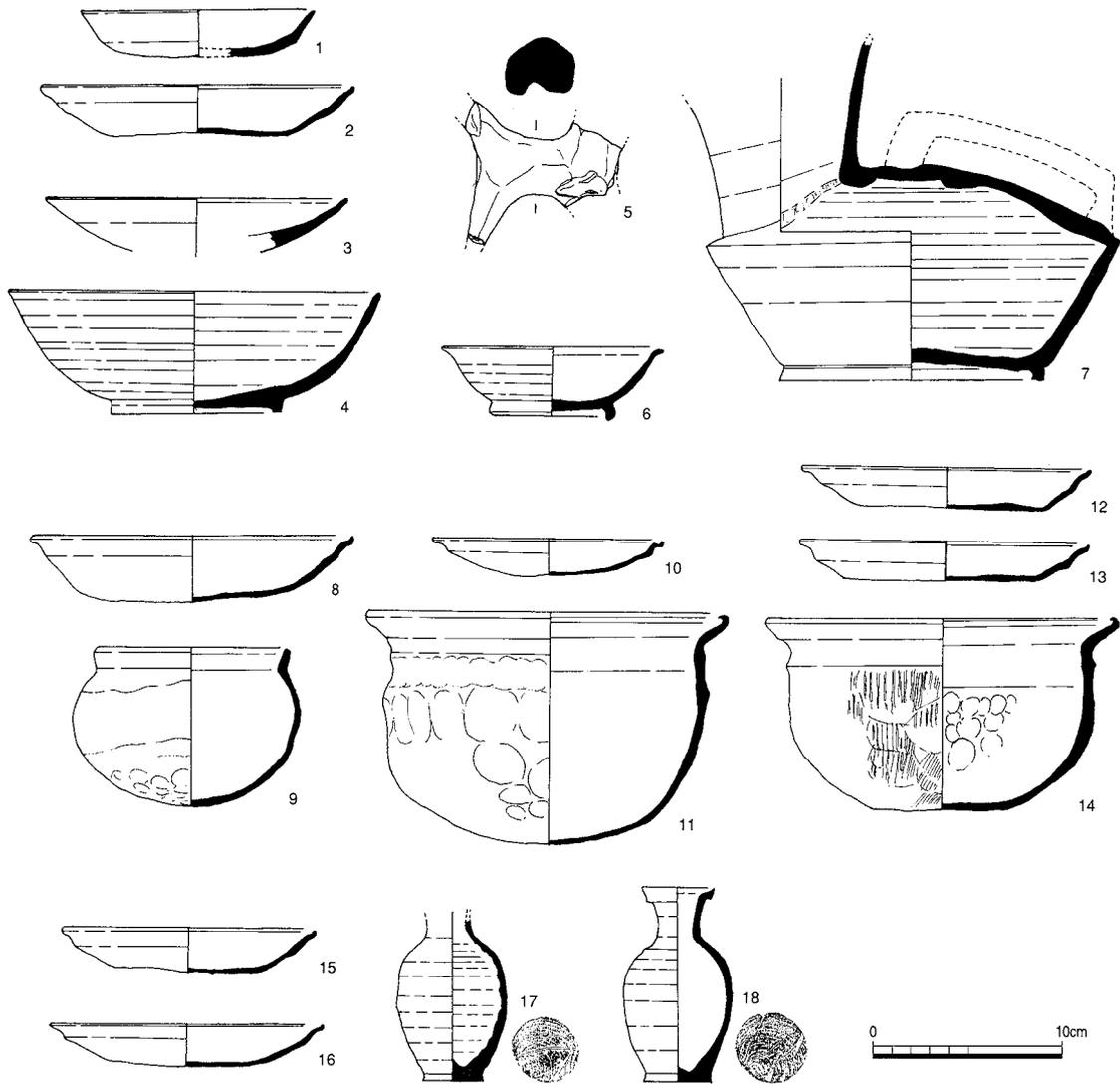


図22 祭祀遺構出土遺物実測図 (S X 90:1・2 土師器 3・4 緑釉陶器 5 土馬 6 灰釉陶器
7 須恵器 S X 120:8・9 土師器 S X 180:10・11 土師器 S X 190:12～14 土師器
S X 340:15・16 土師器 S X 400:17 須恵器 P 300:18 須恵器) (1:4)

その中には移動式土師器竈 (図24)、風字硯、緑釉陶器の焼成に使用されたトチン (図23-10) などもある。当時の貴族生活を反映させる良好な資料となるう。

その他に、S X 350 から出土した二彩の多嘴壺の小片がある。官窯で焼かれたとされるが、平安京内で出土することは非常に稀である。

瓦類は平安時代前期から中期の瓦が調査区全域から出土しており、比率的には二条大路側溝を含めた溝内からの出土が目立つ。しかし、小破片がほとんどで、瓦類の使用箇所については明らかではない。

また緑釉瓦や加工痕の残る凝灰岩なども調査区から出土しているが、なぜここで出土するのか不明である。

小結 大型建物は調査区外の北と西に延びるが、西向きの南北棟の可能性が高く、東西建物の正殿がグランド中央北側に位置すると想定できる。該当地は平安宮に直線距離にして 150 mほど

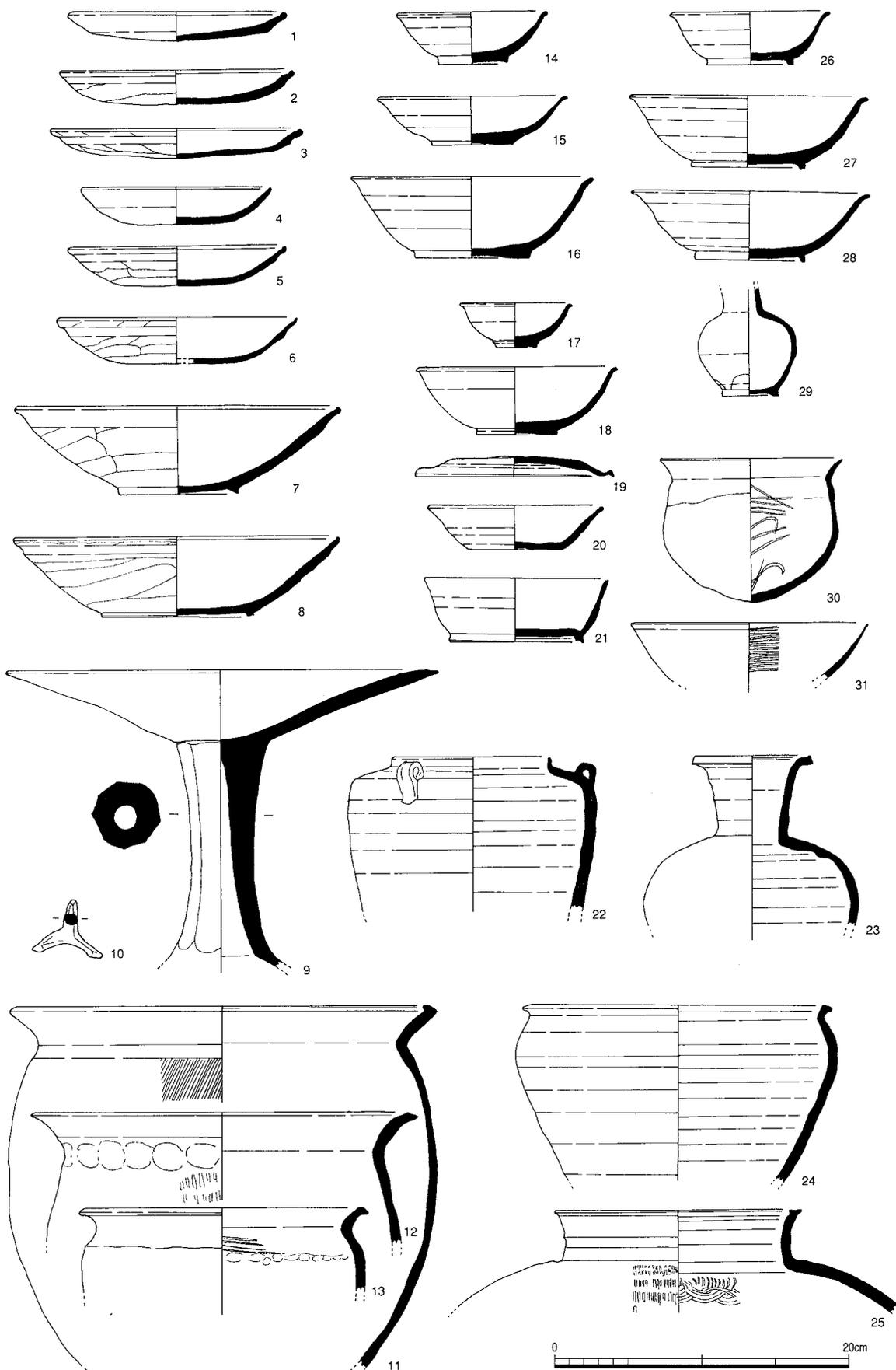


図 23 SD 101 出土遺物実測図 (1～9・11～13: 土師器 10: トチン 14～16: 緑釉陶器 17～25: 須恵器 26～29: 灰釉陶器 30・31: 黒色土器) (1:4)

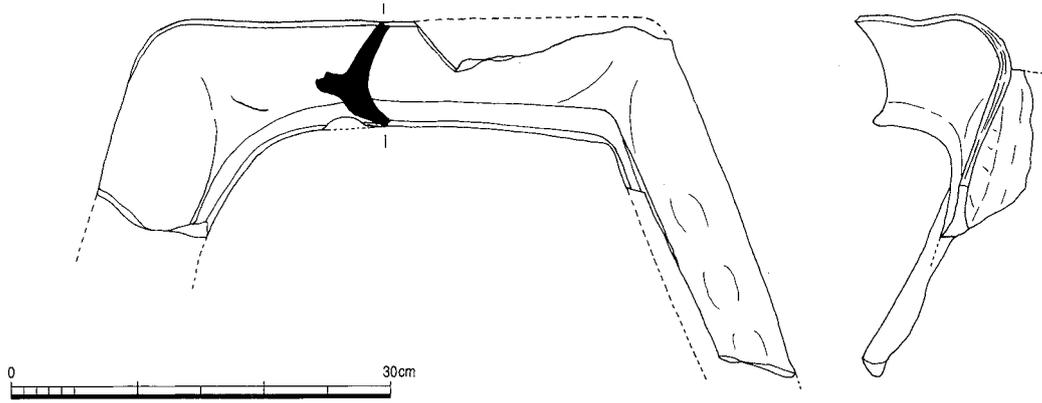


図24 S D101出土土師竈実測図 (1:6)

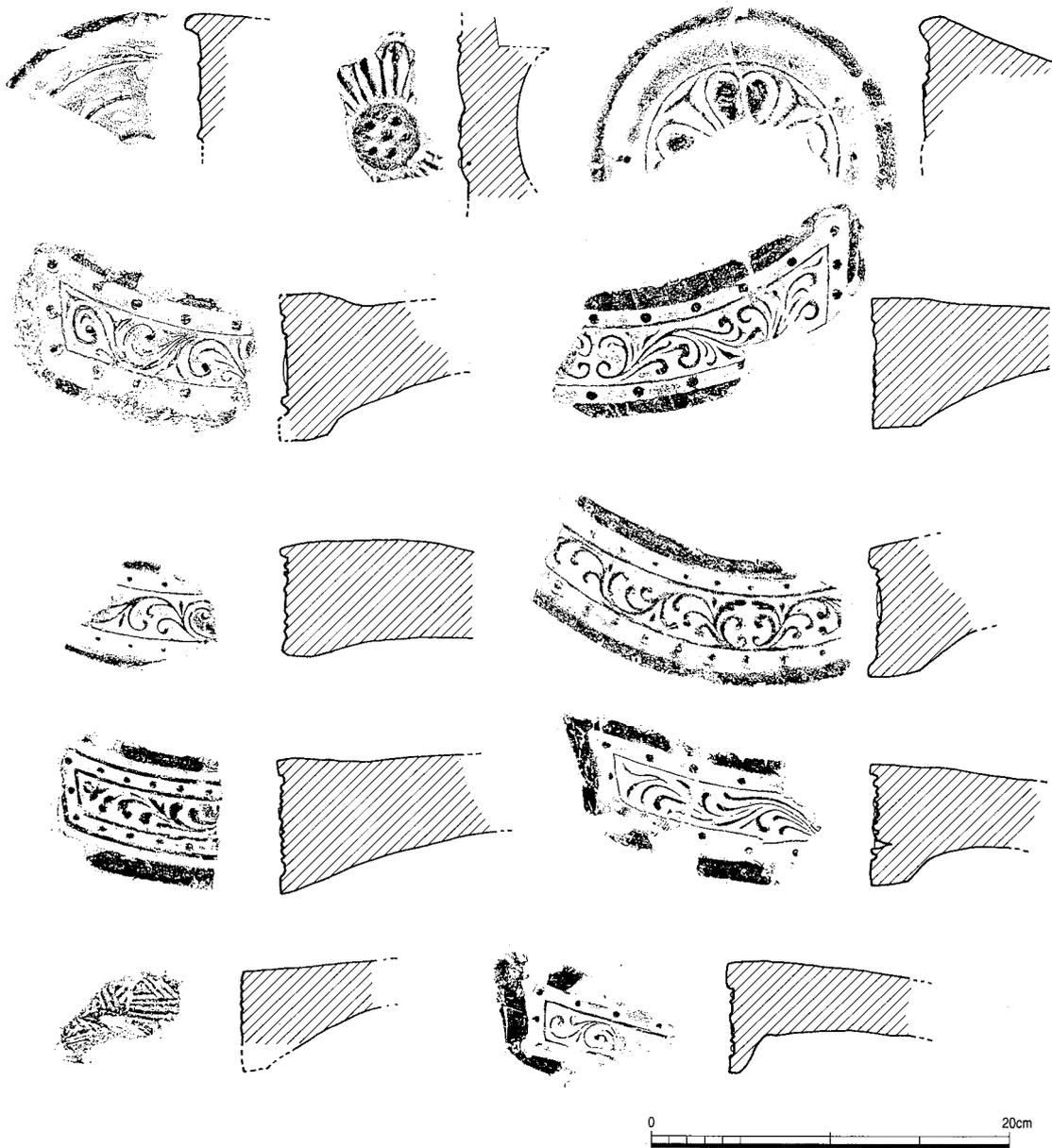


図25 出土軒瓦実測図 (1:4)

であり、二条大路に面していることから当初は方一町（120 m四方）を宅地班給された三位以上の貴族の邸宅であった可能性が高い。

しかしその後、二条大路に本来禁止されていた門が東一行東端に開き、溝で宅地を区画し、井戸が1基ずつ掘られる状況は五町が分割されていく過程を示していると考えられる。二条大路北築地ラインの柵列の存在は10世紀初期までは京程が生きていたが、その後築地推定ラインを超えて柵列を巡らせ門を作ったり、そこに井戸が掘られることなどを考え併せると、条坊基準が守られなくなったといえるだろう。この過程で側溝を埋め立てて公有地（京程にある側溝4尺・犬行5尺・垣半3尺・合計3.6 m）を私有化していった様相などがよくわかる。

また、東一行西端の南北溝は流路が変わり、改修を繰り返したようすがうかがえる。右京が衰退していくのもこれらの排水処理がうまくいかなかったことも理由の一つであろう。平安時代前期の遺構成立面の多くが黒褐色泥土の堆積する流路や湿地からなり、地盤は非常に不安定である。約5 m幅の二条大路側溝や二条大路の10世紀以降の改修を実施せざるをえなかったのも、土地条件と気象の変化の結果とみられよう。

10世紀から呪術の様相も一変するが、ここで出土した祭祀遺構も単に結界の意味だけでなく水害などの苦悩の反映と捉えるべきであろう。平安京内の発掘でこれだけたくさんの呪術関係の遺構が一度に検出された例は少なく、呪術に縛られて生活していた当時の人々の精神世界の一端を示すものであろう。これらの頻繁に行われた地鎮祭祀は、右京に住んだ人々が住みやすい土地になるように祈った跡と解釈したい。

なお、祭祀関係遺構に関しては、金子裕之・森郁夫両氏に御教示いただいた。ここに感謝の意を表したい。

（東 洋一・網 伸也・真喜志悦子）

註 松井忠春・水谷寿克「平安京右京二条二坊五町跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
1980 - 3 京都府教育委員会 1980

6 平安京朱雀大路跡 (図版1・19)

経過 この調査は、JR丹波口駅周辺の再開発に伴うもので、そのうち左京側、旧専売公社跡地周辺のものとしては7次調査になる。本年度の調査対象地は、丹波口駅北側の千本通五条北東角で、朱雀大路六条坊門付近に該当する地点である。周辺での朱雀大路関係の調査では今回の調査区北西部で5次・6次の発掘および試掘調査を実施し、大路東側溝などを確認している。今回の調査では、調査区が路面のほぼ中央ということもあって、平安時代の顕著な遺構はなかったが、平安時代末期から鎌倉時代の遺物を含む湿地状の堆積、近世の土取り跡とみられる土壌などを検出した。

遺構・遺物 調査区北部は近世の土取りなどで削平されていたが、南部で平安時代末期から鎌倉時代の流路あるいは湿地状の堆積を確認している。流路の方向は、わずかに北西から南東への流れをもち、自然流路とみられる。その後、湿地になっていたようで、粘質の強いシルト質の堆積がみられた。遺物は平安時代末期から鎌倉時代の土師器、白磁などが出土したが、量はわずかであり図化できるものはない。

小結 今回の調査では、調査区が大路のほぼ中央部であったこともあって、平安時代前期の遺構はまったく検出していない。しかし、検出した流路あるいは湿地状の堆積は、平安時代末期から鎌倉時代に属し、この付近に平安時代末期以降の自然流路が確認できた。これは、今回の調査区の北方の5次・6次調査、あるいは南方の中央卸売市場関連の調査成果とも一致する。この付近の朱雀大路は、平安時代末期以降の自然流路による浸食を受け、平安京の中心街路としての機能を喪失していたことを示すものである。

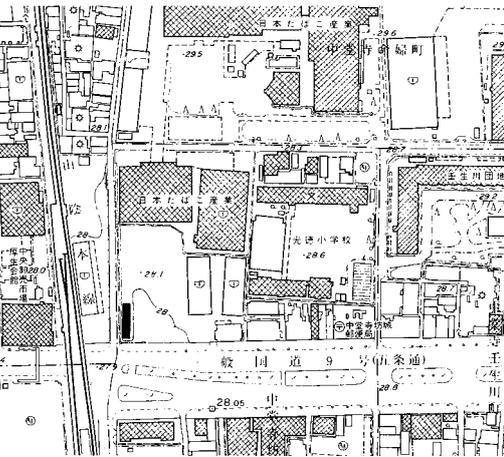


図26 調査位置図 (1:5,000)

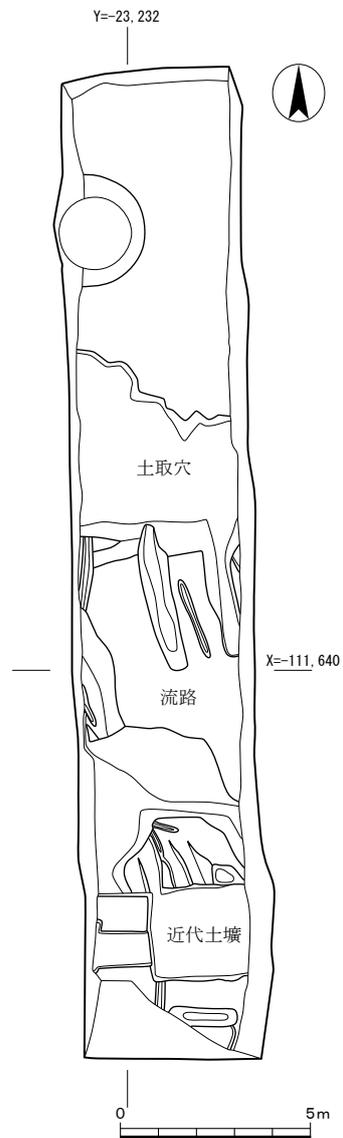


図27 遺構平面図 (1:200)

7 平安京右京六条一坊 (図版1・20・21)

経過 この調査は、J R丹波口駅周辺の再開発に伴い実施したもので、大阪ガス京都工場跡地周辺の調査としては11次調査になる。本年度は現五条通拡幅予定地の東西約205 m、南北30 m、右京六条一坊十一町・十四町の北半中央部に該当する地域が対象となった。

周辺での既往の調査では、5次調査で十一町の南半を、7次調査3区で十四町南東部、9次調査で十四町中央部西側の一部、10次調査で十四町南西部および北西の一部を対象とした発掘調査を実施しているが、これらの調査によって平安時代前期の遺構、遺物を多数検出している。

今回の対象地には、大阪ガス京都工場当時の建物など工場施設の基礎が多数残っていたため、旧施設の配置図などを参考に、十一町側は基礎跡や現状で通路として使用されている部分を除き1～4区に、十四町側では調査前に行われた旧基礎の撤去工事の後、地下施設のあった体育館基礎を除く予定地のほぼ全域を5区として調査区を設定した。その結果、十一町では掘立柱建物や柵の一部とみられる柱穴、井戸、土壇、溝、川、十四町では掘立柱建物、川など平安時代の遺構を、また下層には少量ではあるが縄文時代、古墳時代の遺物を含む川を検出した。

遺構 平安時代以前の遺構は、少量の縄文土器を含む規模の大きな川(川2)および古墳時代の小規模な川S D 151である。両者とも5・6次あるいは7次調査で確認していた北東から南西方向へ流れる川の上流にあたるものである。平安時代の川は、調査区西端付近でその東肩を検出した、7次調査の流路1～3の上流部にあたる川1と、調査区東端で検出した川3がある。川3は最終的に流路から湿地になっており、その後、上部に整地されたようで、平安時代前期の遺物が多数出土している。この状況は五町北西部の湿地と共通し、これらが一連のものである可能性が高い。そのほか平安時代の遺構としては、十四町地区の掘立柱建物や柵、十一町では井戸、土壇、小規模な掘立柱建物などがある。掘立柱建物は十四町のS B 1、S B 2を除いて比較的規模の小さなもので、まとまりもない。7次調査ではS B 1、S B 2およびS B 3の南方に掘立柱建物群を検出しているが、やや距離を隔てており関連は不明である。

S E 155は十一町の東西中央西寄りに検出した方形井籠組みの井戸である。木枠そのものは腐食し、ほとんど残存していなかったが、周囲の壁に痕跡が残っており、構造が復原できた。底部には径15 cmほどの川原石を敷き詰めてあり、井戸内からは土器類が良好な状態で、また底部石敷の下から白色の丸軋が出土した。S E 156はS E 155南部に検出した木枠組井戸であるが、部材はほとんど原形をとどめず、構造は不明である。上層部に木炭や炭化物を多く含む土層が堆積し、平安時代前期の土器類が多数出土した。S E 157は十一町東端付近に検出した井戸で、最下

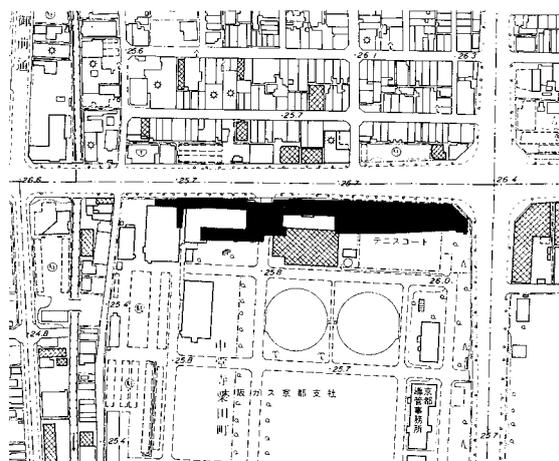


図28 調査位置図 (1:5,000)

段の方形木枠が残存していた。河跡3が完全に埋められた後に造られており、南東部の建物SB12と関連するものとみられる。

SD150は十四町の東限に検出した南北溝で、その位置から西櫛筒小路東側溝とも考えられるが、出土土器類からみて鎌倉時代の前半に比定できる。この溝は5次調査でも検出している。

遺物 遺物は整理箱にして82箱出土した。その大半は土器類で、ほかに少量の瓦、石製品、土製品、木製品などがある。時期は平安時代前期のものが多数を占め、以前あるいは鎌倉時代以降のものは少ない。

平安時代の遺物としては井戸、特にSE155・156の2基からまとまった資料が出土したほか、十一町東部の包含層（川および整地層）から土器類が多数出土している。

そのうちSE156の土器類は、9世紀前半（平安京I期中）で、総破片数6,138片の内訳は土師器95.1%、黒色土器2.2%、須恵器2.0%、その他（製塩土器）0.7%となる。機能別にみると供膳形態90.7%、貯蔵形態1.0%、煮沸形態7.1%、小型の食器類では土師器96.9%、黒色土器2.4%、須恵器0.8%と、黒色土器の比率がやや高い。

SE155からは、9世紀後半（平安京II期中）の土器類や軒瓦を含む瓦類が出土した。土器類は完形やそれに近いものが多く、総破片数827と少ないが良好な資料である。全体での比率は土師器67.0%、黒色土器3.7%、須恵器11.7%、緑釉陶器6.3%、灰釉陶器11.1%、輸入陶磁器0.1%で、機能別では供膳形態84.2%、貯蔵形態7.5%、煮沸形態1.9%となる。食器類では土師器73.9%、黒色土器4.2%、須恵器2.4%、緑釉陶器7.3%、灰釉陶器12.2%、土師器を除いた比率を示すと、黒色土器15.9%、須恵器9.3%、緑釉陶器28.0%、灰釉陶器46.7%と、灰釉陶器が最も多く、この時期のこれまでのデータ

と比較すればやや特異である。また、この井戸から白色半透明の石鈔（丸）が出土している。

小結 右京六条一坊地区の調査は今回で11次を数え、大阪ガス京都工場跡地北部では十四町中央南側の一部を残し、

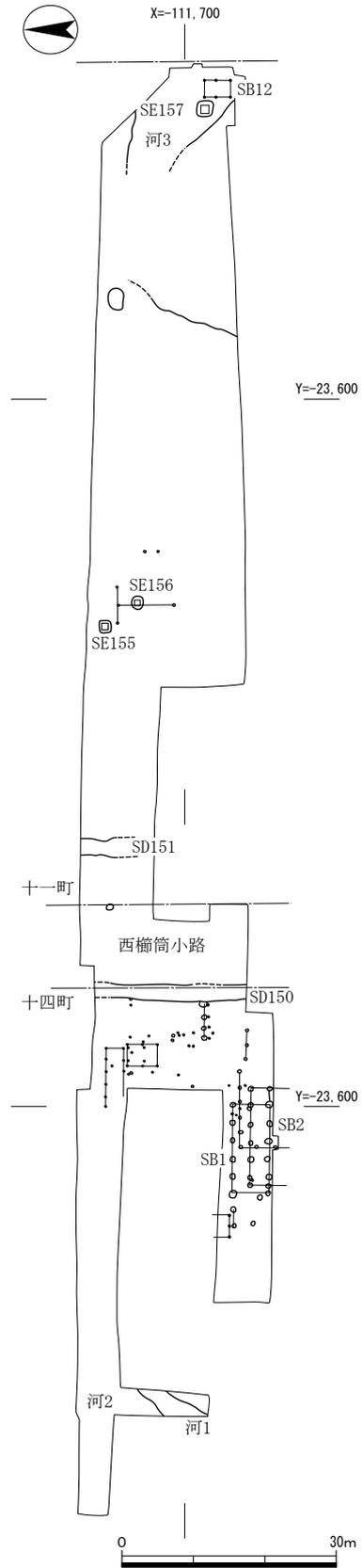


図29 遺構平面図 (1:1000)

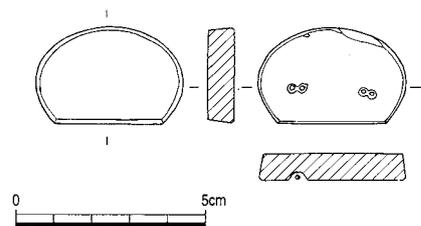


図30 SE155出土石鈔実測図 (1:2)

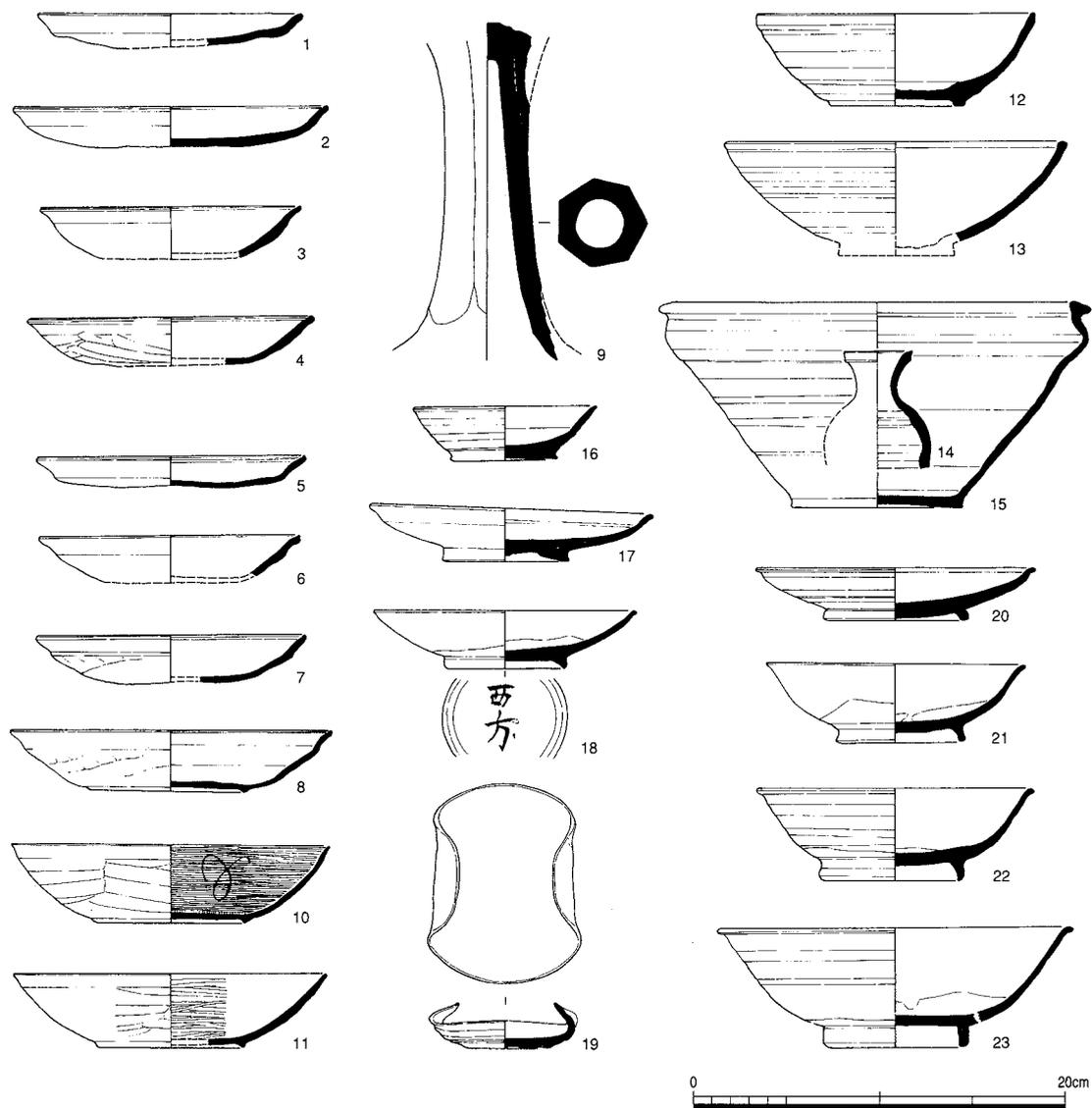


図32 SE 155 出土土器実測図 1～4: 土師器(掘形出土) 5～9: 土師器 10・11: 黒色土器
12～15: 須恵器 16・17: 緑釉陶器 18～23: 灰釉陶器(1:4)

ほぼ対象地全域の調査が終了した。これまでに発掘調査を実施した区域は五町・六町・十一町・十二町・十三町・十四町と6町の範囲にわたっているが、このうち五町では1町全域を占地する邸宅を検出し、建物配置など平安時代前期の貴重な資料を得ている。また皇嘉門大路を隔てる西側の十一町・十二町・十三町・十四町は五町ほどの規模はもたず、溝や小径、柵で区画された、同じく平安時代前期のやや規模の小さな邸宅が並ぶ地域であることが判明し、右京六条一坊のようすが徐々に明らかになってきた。今回の調査では、この皇嘉門大路西側の十一町・十二町の北半中央の東西帯状の地帯が対象になった。大阪ガス関連の既存施設のため、かなりの部分がすでに破壊されていたが、それでも遺構面の残存しているところでは、上述したように平安時代の遺構を多数検出した。十四町北東部にあたる調査区西半では、数時期にわたる建物を検出したが、10次調査の遺構の在りかたと合わせ、十四町では川が町内を流下していたこと、その川の影響で敷地の利用が変則的であり、町東半に建物などの遺構が集中していたことが明らかになった。

十一町では既存施設による攪乱がひどく、遺構面を連続して検出できなかったが、平安時代の井戸3基、建物、下層の川などを検出した。また、井戸周辺には断片的でまとまりを捕えることができなかったが、井戸と関連する小規模な建物の一部とみられる柱穴も検出した。対象範囲の面積に対する井戸の数や5次調査の成果からみると、やはり十一町も1町全域の占地ではなく、いくつかの宅地に分割されていたようである。 (平尾政幸)



図 32 十一町地区東端部（北西から）

Ⅲ 白河街区跡

8 六勝寺跡・岡崎遺跡（図版1・22・23）

経過 調査地は、左京区岡崎最勝寺町・西天王町地内に所在する冷泉通南側歩道部と二条通北歩道部にあたる。当地は、法勝寺西辺車道と二条大路末が交差する地点と、二条大路末路面および冷泉小路末に北接した最勝寺の北端部にあたる。また二条大路末に南接し、六勝寺で2番目の規模を誇る二町四方の占地を有する尊勝寺の中央東部を東西に横断する部分に相当する。

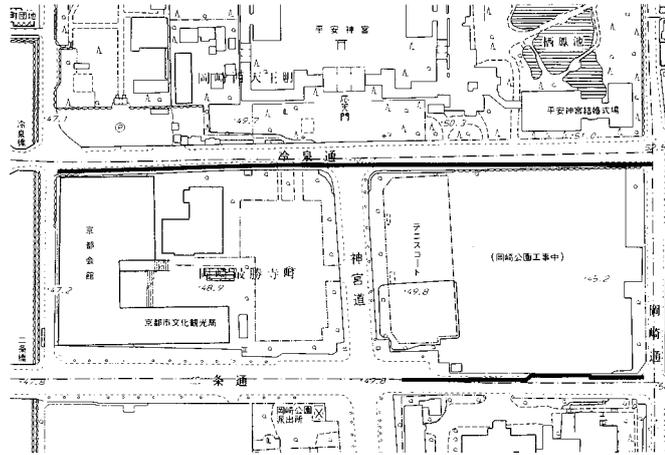


図33 調査位置図（1:5,000）

調査区周辺の白河は、白河天皇が承暦元年（1077）に造営を開始した法勝寺をはじめとし、康和四年（1102）堀河天皇が尊勝寺、元永元年（1118）鳥羽天皇が最勝寺、大治三年（1128）待賢門院が円勝寺、保延五年（1139）崇徳天皇が成勝寺、久安二年（1146）近衛天皇が延勝寺を最後に、各々御願して「六勝寺」と呼ばれる寺々を建立している。

この六勝寺の配置に関しては、近年の発掘調査成果で法勝寺と尊勝寺の位置に関しては確定しているが、二条大路末の位置をはじめ、街区割りやその他の寺院配置、寺域内の伽藍配置など不明な点も多い。調査では、尊勝寺に関連する遺構遺物の検出が予想された。さらに当地周辺では弥生時代から古墳時代の集落跡である岡崎遺跡の範囲内でもあることから、関連する遺構の検出も予想された。調査は、関西電力埋設管布設に伴う立会調査^註、および大阪ガス既存埋設管の撤去に伴う立会調査で明らかにされた成果をもとに遺構の配置を想定し、埋設管の設置に従い順次調査を進行していった。

遺構 総数 178 基で、古墳時代、平安時代中期、平安時代後期、江戸時代、時期不明に分けることができる。調査区の基本層序は、地点により異なるが、平安神宮結婚式場より西は現地地表下 30 cm までが道路舗装の際の整地土層、次ぐ 20 cm が明治の内国博覧会の整地層、さらに江戸時代の耕作土層、平安時代から江戸時代の遺構群を形成する面があり、特に最勝寺西辺築地部分では道路整地の直下で基底層が検出される。それより西では江戸時代の整地土層が厚く、現地地表下から 0.8 ～ 1.2 m で平安時代の面が確認される。なお尊勝寺寺域内建物 1 の基壇下層では古墳時代の流路を、建物 4 の基壇下層では平安時代中期の遺物包含層を確認した。また岡崎グランド南では古墳時代と江戸時代の流路が認められた。現在の冷泉通は、西側に緩やかに傾斜しながら下がっているが、調査の結果検出した遺構面はほぼ平坦面を有し、岡崎道から疎水間では 2 箇所の大きな段差があり、さらに尊勝寺寺域内でも小規模な段差が 2 箇所以上あることが判明した。大きな

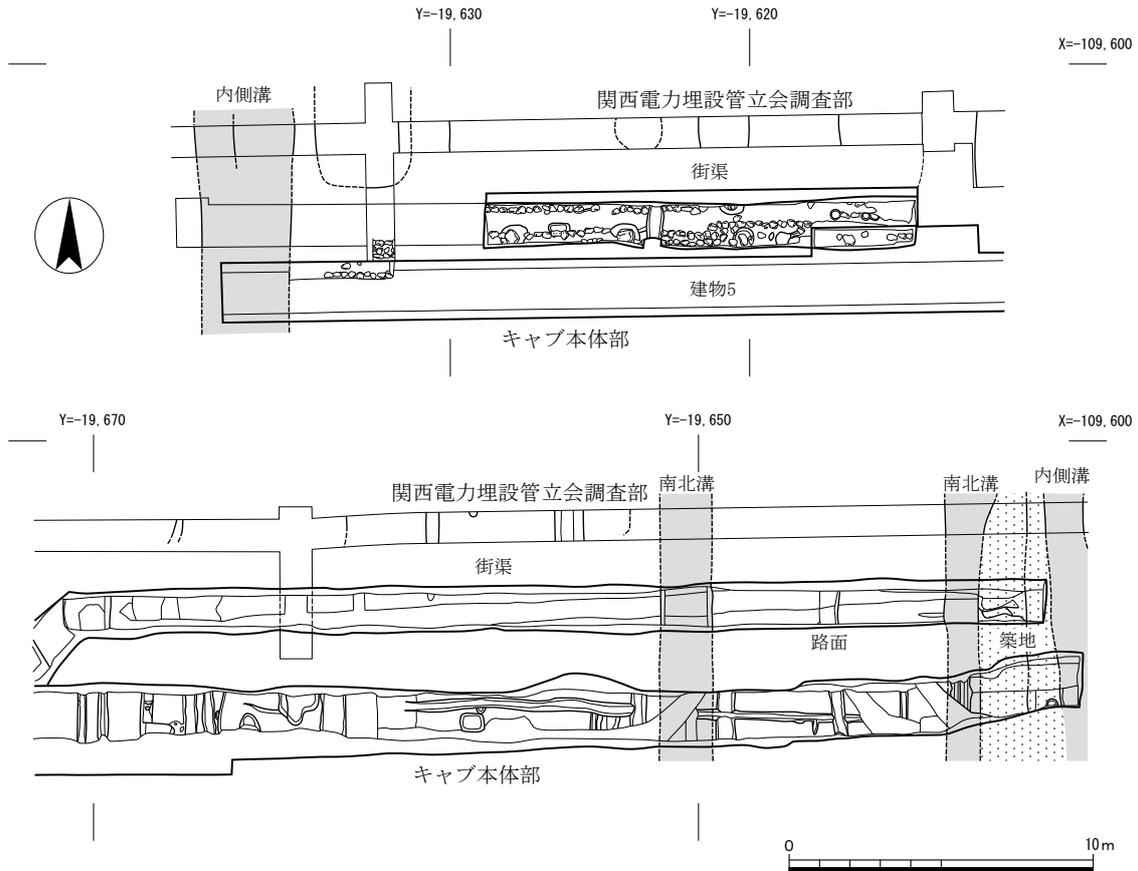


図34 遺構平面図1 (1:250)

段差のうち、尊勝寺・最勝寺間の路面と最勝寺西限遺構面には、0.9 mの落差のあることが明らかになった。段の設置時期は、その最も古い整地層が平安時代末期に属し、そこまでさかのぼることが予想される。

古墳時代の遺構は、集落跡や墳墓跡を示すようなものではなく、流路を3条ほど検出した。最初は尊勝寺建物1の下層で東肩部のみが認められたもので、規模不明、深さ60 cm以上の植物遺体を含む腐植土層の堆積がある。次いで冷泉通神宮道交差点から東にかけて南北に大きく流れる流路の痕跡が認められた。その堆積層の中で、現地表下1.5 mほど、厚さ20 cm前後の有機質を多量に含む黒色泥土層が確認される。層中からわずかに遺物が出土するだけで、具体的な時期は判然としなかった。岡崎グランド南の流路は、グランド内の調査成果とその北側で確認できなかったことから、幅10 m以上、深さ0.7 m以上のもので、流路ではなく大規模な湿地と考えられる。

平安時代中期には、疎水に近い建物4の一带でこの時期の包含層を確認した。

平安時代後期には、法勝寺車道の西側溝、最勝寺東限に係わる溝、最勝寺内建物5と雨落溝、最勝寺西限築地と内側溝、最勝寺と尊勝寺間の道路の路面・側溝、尊勝寺内建物1～4の基壇と雨落溝、瓦溜、整地層、土壌などがある。

現岡崎道と冷泉通交差点の南西側歩道部分の立会調査で南北溝を4条確認した。その内東端1条が幅0.25 m以上、深さ0.25 m以上を測る。法勝寺西辺車道の西側溝に想定できる。冷泉通と神宮道交差点東で南北溝2条を確認した。幅は1.45 m、深さ0.3 mで、同位置に重複してもう

1条確認した。これは岡崎グランド調査区西端で確認した南北溝の延長上に位置することから同一の溝と考えられ、最勝寺の東限に想定できる。溝の東5m付近で幅1.5m、深さ0.2mの浅い土壌を1基確認している。

冷泉通神宮道交差点南西部で建物5に伴う石組雨落溝を東西20mにわたって確認した。南側の石組み脇には花崗岩の礎石が4石認められ、東1間が3.6m（12尺）で、それより西2間は3.9m（13尺）等間である。各礎石の下には柱穴があり、当初掘立柱建物であったことが想定でき、ある時期、礎石建物に造り替えられたと考えられる。石列の両端は後世の遺構や瓦溜のため確認できず、東西規模は不明である。石列は直線ではなく食い違いが一部みられ、縁の張り出しが異なると考えられる。調査範囲内では基壇の整地土があるだけで、掘り込み地業は認められなかった。

この建物のすぐ西で幅2.0m、深さ1.2mの南北溝が1条あり、西限築地内溝に想定される。最勝寺西限とその西の道路面とは、比高差0.9mの段が認められる。段のすぐ東には築地の基底部が幅1.6m、高さ0.4mほど残存し、その整地土は砂と砂泥の互層となる。路面の東側溝は幅80cm、深さ40cmの逆台形を呈する。路面部は厚さ5cm前後の整地土が4層確認でき、いずれも礫混じりの非常に締まった層であった。西溝は、幅75cm、深さ60cmの断面U字形を呈する。

京都会館別館北側中央で建物1の基壇と考えられる地業を東西20mにわたって確認した。両端には幅1.5mの石組雨落溝があり、その溝と基壇の高低差は0.5mほどある。基壇内には径1.5mの円形を呈する礎石据え付け痕跡4箇所と礎石1箇所を確認したことから、身舎梁行7.8m（26尺）で、東西の側柱までが3.9m（13尺）の建物である。なお礎石据え付け痕跡の上面には、各々根石より一回り小さな河原石が密集して認められることから、補修された可能性もある。

京都会館北側の中央より西で建物3の基壇と考えられる地業を12mほど確認した。東端では一辺55cmを測る花崗岩とチャートが南北に並び、建物の東端を画する施設と考えられる。それより西方は径10cmほどの河原石が散在し、一部で集石状を呈し径35cmを測るチャートも含まれる。また建物範囲内で東西方向に一辺1m以上の方形掘形の礎石据え付け痕跡を3箇所確認した。それらは3.0m（10尺）等間の東西2間規模となる。なお西端に関しては近現代の攪乱により確認することはできなかった。この攪乱の西で小規模な瓦溜を1基確認している。

建物4に関しては、今回の調査では確認できなかったが、その南に広範囲にわたる建物4で確認した整地土が認められ、多くの遺物が出土した。

江戸時代には、建物1上面で東西の柵列・石組井戸・漆喰井戸、その西で方形土壇・南北小溝・東西小溝・東西方向の河原石列と瓦列・瓦溜があり、その周辺にも土壇、柱穴、整地層、岡崎道西端歩道部で平安時代後期の南北溝より1.4m西で南北溝1基などを確認した。溝は幅0.42m以上、深さ0.36mで、西肩は現代攪乱により破壊されているが、断面逆台形を呈する。この西15mでは幅2.0m、深さ0.6mの江戸時代後期の土壇を1基、さらに西方で幅2.5m、深さ0.3mの江戸時代後半の土壇を1基確認した。神宮道より西側では、幅0.8m、深さ0.35mの土壇を1基、それより西で各々1基ずつ平安時代の瓦が混入する瓦溜を確認した。

時期が確定できないものの中で、岡崎道西側歩道部での南北溝がある。このうち中央の幅0.62

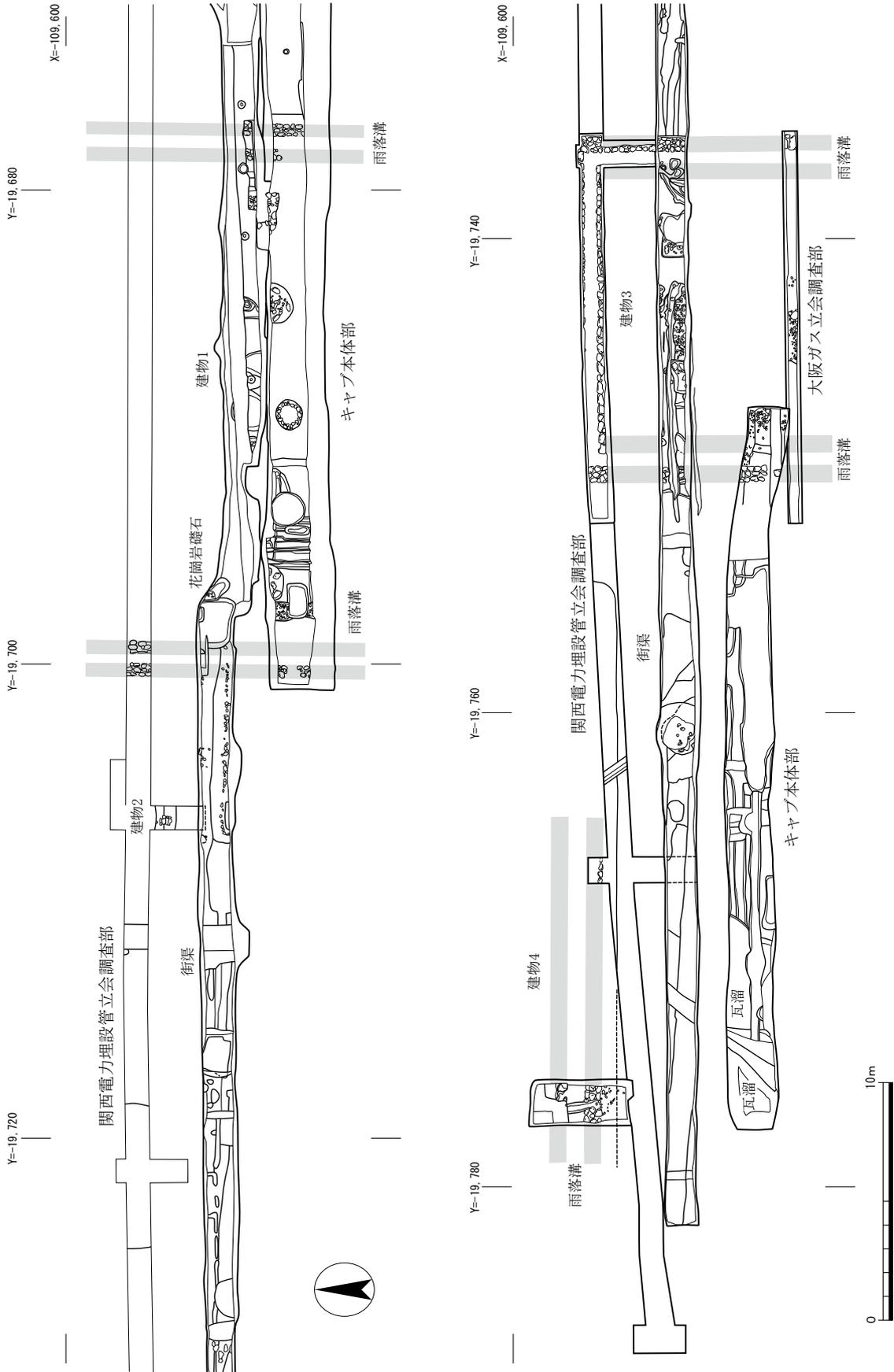


図35 遺構平面図2 (1:250)

m、深さ 0.36 m で断面逆台形を呈するものは、ごく小片であるが焼締陶器や南北朝期の土師器小片を含み、江戸時代の遺物が認められないことから中世までさかのぼる可能性がある。疎水東脇でも 3 基の重複する土壌群を確認したが、遺物の出土はほとんどなく不明である。また 4 箇所検出した段の直上には、平安時代末期の遺物包含層があることから、六勝寺造営期までさかのぼる可能性がある。

遺物 今回出土した遺物は、整理箱で 438 箱で、その圧倒的多数を瓦類が占める。今回弥生時代前期に属する石鏃 1 点が建物 1 の基壇整地層下から出土し、近辺に遺跡の存在が予想でき、注目される。土器類のうち古墳時代のものは、岡崎グランド南の流路内から土師器甕・壺・高杯などが、建物 4 の南で高杯などが出土した。これまでに岡崎遺跡から出土した庄内式併行期の土器群と同様な特徴を示すが、グランドの調査成果に比べて遺物量が少ない。

平安時代の遺物には、グランド北で平安時代中期の土師器杯・皿が、建物 4 一帯でみられる整地土から黒色土器碗が出土する。

平安時代後期の遺物には、南北溝、瓦溜、基壇、建物基壇整地層、寺城内整地層から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、緑釉土塔、土師器、白磁、須恵器、鉄釘などがある。特に尊勝寺建物 1 東側の整地土、建物 4 の南側、最勝寺建物 5 石組雨落溝近隣から瓦溜、落込などから多量の平安時代後期の瓦が出土し、全出土量の半数以上を占める。これらの瓦類の中には、軒丸瓦 48 点以上、軒平瓦 58 点以上が含まれ、ヘラ記号のある瓦類 26 点以上も認められる。土器類に関しては今回の調査では建物 4 を含めた一帯の整地土や最勝寺建物石組雨落溝内土壌から土師器皿を中心にまとまって出土した。これらは良好な資料で、建物創建に関連するものと考えられる。なお建物 4 南の瓦溜から緑釉土塔が 1 点出土した。

室町時代の遺物は、主に江戸時代の包含層と遺構から、ごくわずかに出土するほか、尊勝寺建物 4 付近の土壌や南北溝から土師器、青磁が、冷泉通岡崎道西で土師器、白磁、焼締陶器が出土した。

江戸時代の遺物は、尊勝寺建物 1 の基壇上面から切り込んだ後期の石組井戸や方形土壌、瓦溜、土壌、井戸、南北溝などから瓦、土師器皿、肥前磁器、京・信楽系陶器、泥面子、人形、銅製品、骨製品など日常食器を中心にまとまって出土した。ほかには耕作に関連する溝から少量が出土している。また疎水東脇には江戸時代の瓦溜があり、この時期、越前藩の藩屋敷があったことが知られることから、関連する可能性がある。また岡崎グランド南の流路から江戸時代末の肥前磁器、茶碗・土鍋・急須・徳利・七輪・さや鉢などの京・信楽系陶器が出土する。

小結 調査の結果、主に古墳時代の流路、平安時代後期の寺院伽藍に関する遺構群を検出した。特に寺院に関連するものとして、法勝寺西辺車道関連施設、最勝寺の西限を画する築地の基底部分と内外側溝、最勝寺と尊勝寺を画する南北道の路面整地層、尊勝寺の東限を画する南北溝、尊勝寺寺域内の建物基壇に関連する石組雨落溝 3 条、それらに付属する瓦溜など、六勝寺の地割り復原や最勝寺の伽藍配置、尊勝寺金堂と講堂間の中央東部の建物配置に関する新たな知見と重要な成果を得ることができた。

まず法勝寺西辺の車道の西側溝を確認したことで、道幅を確定することができた。従前の動物園北西部で確認した南北溝を東側溝とすると、道幅は24 m（8丈）を測り、車道は大路規模であった可能性がある。また冷泉通神宮道交差点東での南北溝は、岡崎グランド内調査で確認した南北溝の延長に位置することから、最勝寺東限の可能性が強まった。ただ溝の東に明瞭な道路の整地痕跡や東側溝が確認されていないことから、ここに道が付設されたかどうかは、さらに検討を要する。冷泉通神宮道交差点南西より西で確認した南北溝2条とその間の築地が最勝寺の西限とすると、この溝の東端まで約116.5 mで40丈より狭く、最勝寺の東西幅が平安京の1町規模とはならず、それより狭いと考えられる。

最勝寺伽藍想定域の北西隅で建物5に伴う石組雨落溝が確認された。しかも石組み溝脇に礎石があったことから、縁を巡らした床貼りの建物と考えられる。建物5は、従来の研究から五大堂に比定されているが、それに該当するかどうかは今後の課題となる。最勝寺と尊勝寺の間の南北道は4層程の整地が認められることから、何回か補修が行われていた可能性がある。また路面の東西幅は約10 m程確認され、その西端に南北溝が1条確認できた。これを西側溝とすると、道の東西幅は4丈となり、平安京の小路幅と同一の可能性はある。なおこの溝の西側には築地の明瞭な痕跡は認められなかった。

尊勝寺寺域内で確認した建物遺構は、杉山信三氏尊勝寺伽藍復原案によると、建物1が准胝堂に、建物2は法華堂、建物3は経蔵、建物4は講堂に想定できる。ただ建物1については杉山案に比べ北に位置し、清水擴案ではほかの御堂に比定していることから、今後の調査成果を待って検討を重ねる。この建物は礎石据え付け痕跡を確認したことから身舎梁行が7.8 m（26尺）、東西庇の側柱までの出が3.9 m（13尺）となり、梁行4間の建物と考えられ、身舎の梁間と庇の出が同規模である。また建物3では東西に柱据え付け痕跡を3箇所確認し、柱間間隔が3.0 m（10尺）等間の東西2間の建物である。そして東西と北側の側柱から雨落溝間での距離が3.6 m（12尺）となり、柱間間隔より広く軒の出が深い建物が想定される。

今回の調査により神宮道から疎水間で2箇所の段差が確認されている。その中で最勝寺西限と道路面までが比高差0.9 m以上を測る高いもので、かなり意識されて造られた可能性がある。尊勝寺内でも建物2と建物3の間で30 cmほどの段差が認められることから、一つの寺域内でも段を有して造営されていたと想定できる。この段が造成される時期については平安時代までさかのぼる可能性があり、六勝寺造営時に造成されたことも予想される。このことから白河東部では、段のあるテラスを造りだして寺院が造営されたと考えられ、当該期の造営手法が知られる重要な事例といえよう。

（堀内明博）

註 上村和直・堀内明博・吉村正親「尊勝寺跡・最勝寺跡・岡崎遺跡（95 K S 62）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度 京都市文化市民局 1996

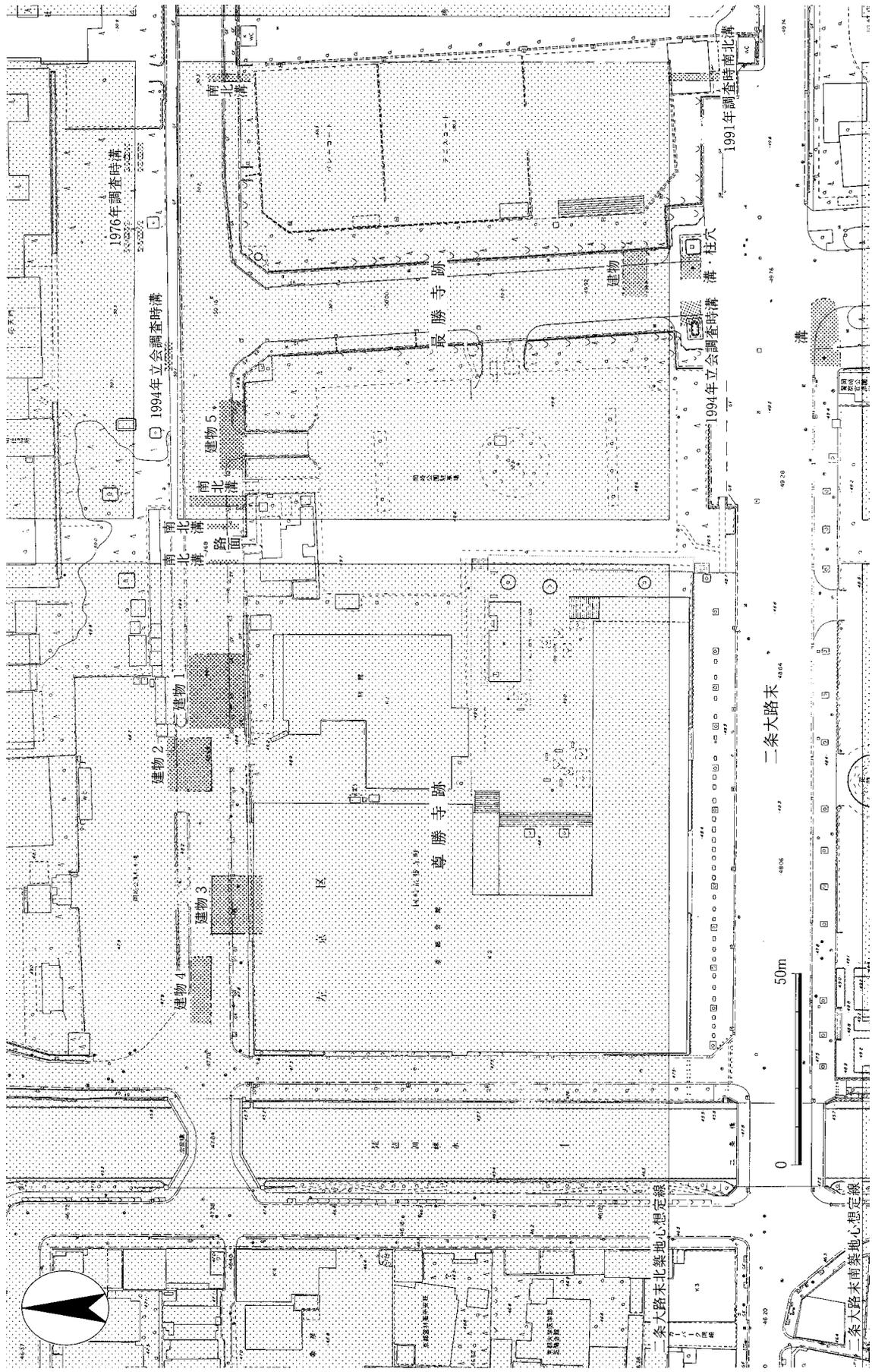


図 36 尊勝寺・最勝寺条坊復原図 (1:1500)

IV 鳥羽離宮跡

9 鳥羽離宮跡 140 次調査 (図版 3-2・24)

経過 今調査は、倉庫の建て替えに伴って実施したもので、調査地は白河天皇陵の西側に位置している。91次・96次・121次・122次の調査において、白河天皇陵を画する堀と、それに伴う石垣が検出されている。過去数次の調査の結果によって堀の規模が復原されている。それによると、今調査区内で南北方向に堀を検出できると予想されたため、東西幅に少し余裕をもたせてトレンチ設定を行い調査を開始した。

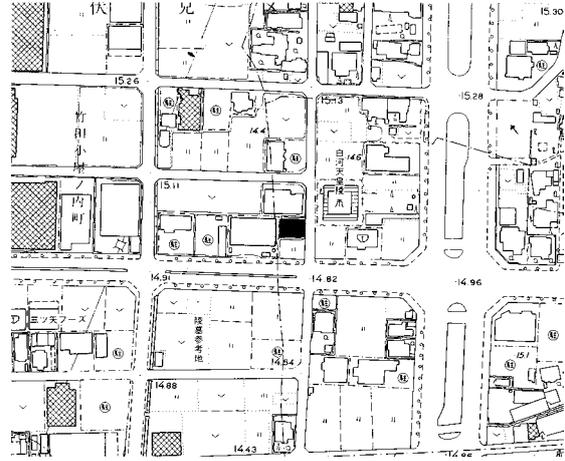


図 37 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 調査区の基本層序は、現代盛土層・

耕作土層があり、その下に中・近世の流路の堆積、これに上部を削平された堀の堆積となる。トレンチ東側では、石垣の抜取溝と石垣の裏込めを確認した。

遺物は、整理箱で12箱出土した。中・近世の流路、堀、抜取溝のいずれからも段瓦が出土している。ほかに、堀の堆積層から平安時代の土師器と植物遺体が出土した。

石垣は、前回数次の調査同様に堀の内側のみで検出した。ここでは、一段目の石列と倒れ込んでいた二段目の2石を検出しただけで本来の姿を確認することはできなかった。コーナー部に近いためか一段目の石列に高低差があり、122次調査の最下段の高さ、標高約12.0mに合わせたものと考えられる。

一段目の石列直上で検出した一石五輪塔には金漆銘があり「天文八年□祐禅門 二月□二日」の文字が判読できた。

小結 堀の規模は、幅約6m、深さ約1.5mであった。石垣の石材は砂岩が最も多く、ほかは、チャート・流紋岩質(溶結)凝灰岩・花崗岩の順である。一石五輪塔もいわゆる広島山陽型と呼ばれる花崗岩製であった。抜取溝は、天文八年(1539)以降のものであり、過去の調査と同様に、伏見城築城に伴うものであると考えられる。

堀の西肩を崩して流れていた中世の流路には、ほとんど遺物が含まれていなかったことや、これより西側には遺構らしきものが検出できなかったことから、このあたりが中世の竹田村の西限であったと考えられる。

(桜井みどり・清藤玲子)

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成8年度 1997年報告



図 38 出土一石五輪塔

V 中臣遺跡

10 中臣遺跡 74 次調査 (図版 3-3・25～28)

経過 この調査は、京都市勸修寺第一市営住宅団地の建て替えに伴うもので、中臣遺跡の 74 次調査である。調査地は、N 区と S 区の 2 つの地区に分かれる。N 区は、栗栖野台地上の最も高位にあたる 73 次調査区から西に緩やかに下る斜面上に位置し、標高は東端で最も高く約 41.5 m、南西端で最も低く約 39.0 m である。S 区は 73 次調査区から南に延びる台地の尾根上に位置し、標高は北端で最も高く約 41.5 m、南端で最も低く約 40.0 m である。

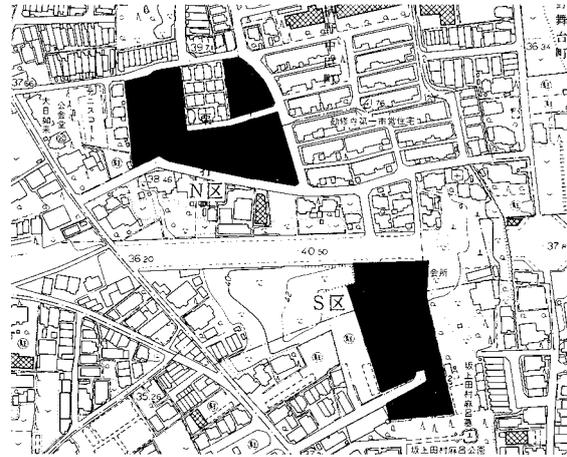


図 39 調査位置図 (1:5,000)

73 次調査区では、縄文時代晩期の遺構群や飛鳥時代の竪穴住居および掘立柱建物を検出しており、これらと一連の遺構の検出を予想した。また、S 区の南端は伝坂上田村麻呂墓に隣接し、現存する墳丘の性格を明らかにすることを目的の一つとした。

調査は、1995 年 5 月 30・31 日に行った S 区の建物解体工事に伴う立会調査の成果を受け、同 6 月 12 日に S 区の重機掘削を開始した。S 区は、既存道路の拡幅・付け替え工事の日程および残土置き場確保を考慮しつつ、可能な部分から順次調査を進めた。その結果、S 1～S 9 区の 9 箇所の調査区に分かれた。N 区は、旧市営住宅建物解体工事に伴う立会調査を S 区の調査と並行して行い、発掘調査は 7 月 25 日に開始した。N 区もまた、既存道路の拡幅・付け替え工事の日程と土置き場確保を考慮しつつ、並行して行われた建物解体工事の後を追う形で調査区を設定していった。その結果、N 1～N 12 区の 12 箇所の調査区を調査することになった。S 3 区では、竪穴住居の床面下からナイフ形石器が出土したため、いわゆる「地山」層を掘り下げて旧石器時代の調査を行った。旧石器調査に際しては、ナイフ形石器出土地点を中心に調査区を設定し、その中を国土座標系にもとづいた 1 m グリッドで区画した。旧石器調査は、これを基本的な記載事項とし、原位置で検出された石器については、平面的な位置とレベルを記載した。排土はグリッドごとに標高にもとづいて厚さ 5 cm 単位で採り置き、剥片・碎片を採取するための水洗選別を行った。同様の調査は、調査期間の許す範囲内で、N 6 区・S 4 区・S 5 区・S 6 区でも実施した。N 区は 1996 年 1 月 18 日に、S 区は同 31 日に調査区を埋め戻したが、排土中の石器抽出作業は継続して行い、2 月 29 日にすべての現場作業を終了した。

なお、遺構平面図はすべて手描きで作成した。また、旧石器出土層に含まれる広域火山灰の分析を、(株) 京都フィッション・トラックに依頼した。

遺構 旧石器時代、縄文時代晩期、飛鳥時代、平安時代末期から鎌倉時代、室町時代、桃山時

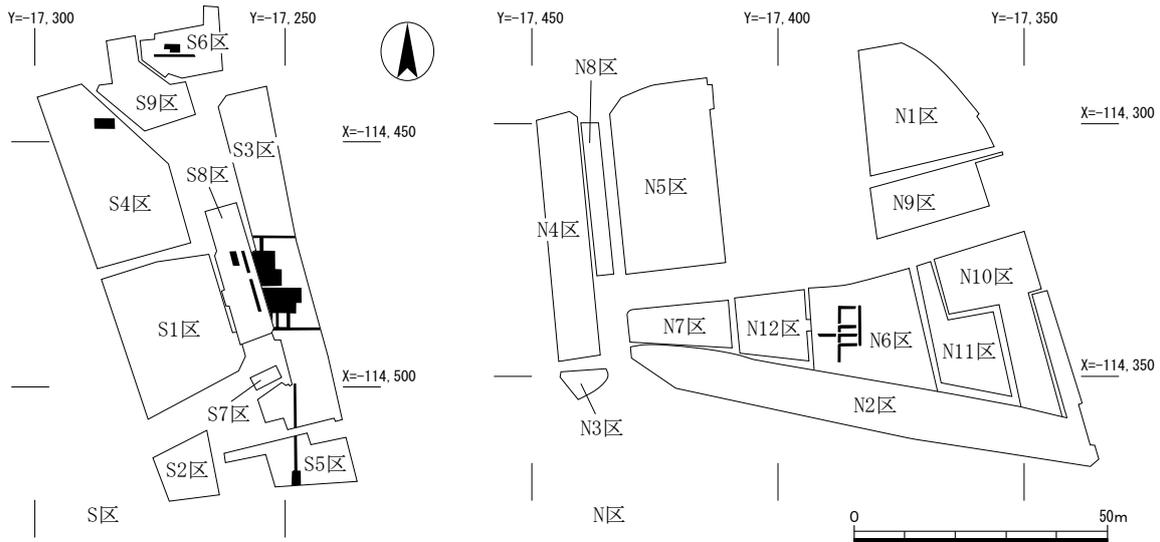


図40 調査区配置図（黒塗りは旧石器調査区）（1:1500）

代の各時代の遺構を検出した。まず基本層序を記し、次いで、各時代の遺構を概説する。

基本層序は、盛土層・現代耕作土層以下、次のⅠ～Ⅴ層を認める。

Ⅰ層は黒色シルト層である。S3区南半からS5区にかけての範囲にのみ認める。層厚は全体的に5～10cmある。S3区南壁断面では層厚 ≤ 25 cmを認めるが、上部は後世の攪拌を受けている可能性がある。本層最下部に、アカホヤ火山灰（K-Ah）の火山ガラスの含有率のピークを認める。飛鳥時代の遺構は本層上面から切り込まれる。Ⅱ層は暗褐色シルト層である。S区の全域とN区の西半で認める。層厚 ≤ 40 cmある。始良Tn火山灰（AT）の火山ガラスを高率に包含するが、含有率は本層の上部から下部まで一様である。本層上面で縄文時代早期の土器細片が出土し、本層下部に石器を包含する。Ⅲ層は褐色シルト層である。層厚 ≤ 15 cmある。Ⅰ層、Ⅱ層に比して小から中礫を多く含む。上部にATの火山ガラスを高率に包含するが上層からの汚染を考慮すると、AT降灰以前の層準の可能性も否定できない。Ⅳ層との層理は明瞭ではなく、一連の地層の可能性もある。Ⅳ層は黄褐色シルト層である。層厚 ≤ 50 cmあり、小から中礫をさらに多く含む。AT降灰以前の層準である。Ⅴ層は砂礫から礫層である。山科盆地の扇状地を形成する堆積物である。

Ⅱ層以下は、いわゆる「地山」で、層理は自然の営力による擾乱を受け上下の凹凸が激しい。S区のほぼ全域とN区の西半は、盛土層・現代耕作土層に保護されて、Ⅱ層以下の地層がよく残る。これらの地区では、Ⅱ層上面が縄文晩期以降の遺構面を形成している。N区の東半は、近世から近代の削平が著しくⅡ層は残存しない。ここでは、Ⅲ・Ⅳ層が縄文晩期以降の遺構面を形成す

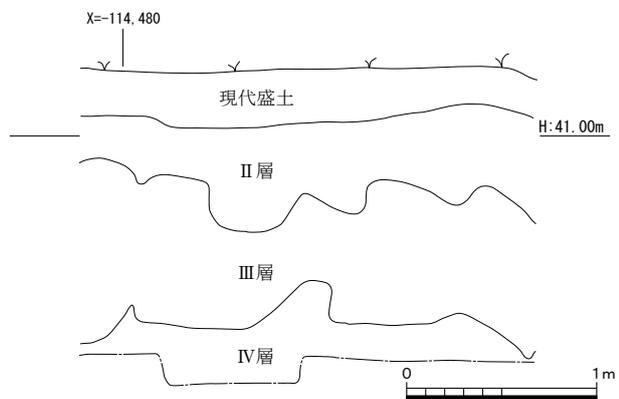


図41 S3区西壁断面図（1:40）

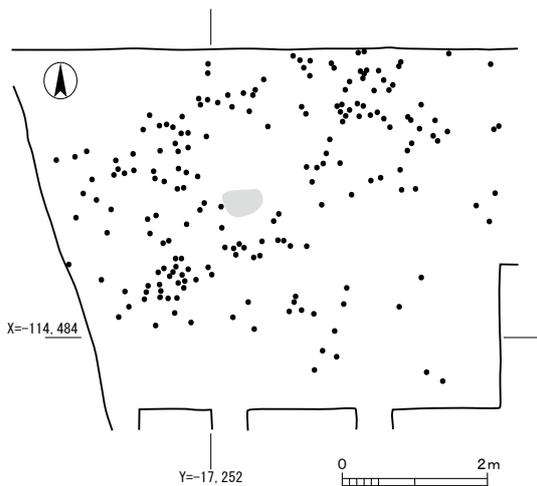


図42 S3区旧石器調査、石器分布状況（アミは礫群）
（1:100）

る。

旧石器時代の遺構としてはS3区の旧石器調査区で検出した石器集中部と礫群がある。出土石器の分布が集中する数箇所を認め、これを石器集中部とした。個々の範囲を石器製作地点と認めたいが、出土石器は10～50mmのサヌカイト剥片が主体で、製品や大型の剥片、明確な石核を欠いているため現状では判断できない。石器集中部の近くに礫群1箇所を検出した。拳大以下の自然礫、砥石破片など13個が、およそ70×50cmの範囲内に集中する。

縄文時代晩期の遺構としては、S6区で検出したSK-S0607がある。東西長3.0m、残存深0.5mあり、北半は攪乱坑によって失われ南北幅1.0mのみ残る。

飛鳥時代の遺構は、建物跡として竪穴住居7棟、掘立柱建物1棟、柱穴数基がある。その他に、土壙墓11基、柱穴、溝、土壙などがある。いずれも7世紀代の遺構である。

竪穴住居はS区のみで検出した。平面形はいずれも方形か長方形である。竪穴5は一辺6.6mで4箇所の支柱穴がある。ほかは一辺3～4mと小型で、支柱穴がない。建物方位は個々で異なる。竪穴2は新旧2時期がある。竪穴7を除くすべてに竈痕跡がある。竈位置は北から北東の壁際に限られる。また、竪穴3は竈痕跡のみ検出している。出土遺物からみた時期は竪穴4・5が7世紀前半、それ以外は7世紀中頃以降である。掘立柱建物はS9区で検出した建物1がある。L字型に曲がる柱列で、北で西に約45度振る。北西から南東方向に4間以上、南西から北東方向に1間以上ある。柱穴掘形は直径0.4～0.6mあり、柱間は2.2m前後ある。S6区で検出したP-S0611とP-S0612は、掘形の直径1.0m、柱痕の直径0.6～0.8cmある大型の柱穴である。調査区隅で検出したため、平面的な広がり是不明だが、建物跡とすれば「楼」風の建物が想定できる。

土壙墓は、N区で7基（SX-N0101・N0201・N0202・N0507・N0508・N1201・N1202）、S区で4基（SX-S0101・S0302・S0315・S0403）検出した。平面形は長方形もしくは長楕円形で、長さ1.6～2.6m、幅0.7～1.4mある。長軸の方向は、SX-S0403が北で西に振るほかは、すべて北で東に振る。被葬者の頭位は北側にあると考える。墓壙内から、須恵器、土師器の土器類のほか、馬具、鏃、刀子、釘などの鉄器が出土している。埋土の堆積状況と鉄釘の出土から、木棺直葬に小封土を伴う形式と考えるが、木棺痕跡は確認できていない。埋葬頭位近くで出土する須恵器・土師器の壺瓶類は墓壙内に納められた副葬品と解するが、ほかの出土遺物の多くは、墓壙の底面より上位で検出され、棺上もしくは封土上より墓壙内に落ち込んだ可能性が高い。これらの土壙墓の時期は、すべて7世紀前半である。

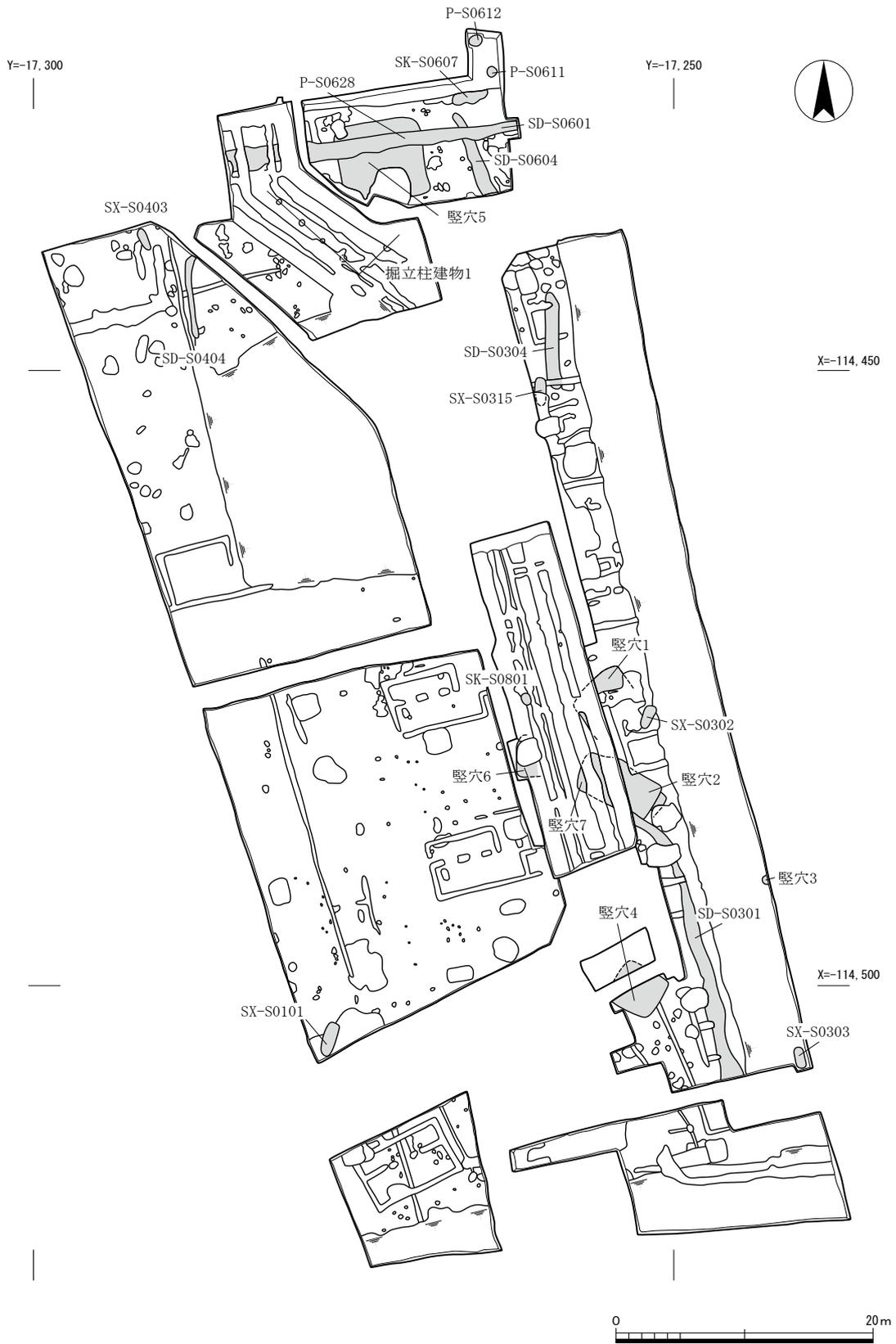


図43 S区遺構平面図 (1:500)



図44 N区遺構平面図 (1:500)

溝はS区で3条検出した。SD-S 0604とSD-S 0301は北で西に振り、SD-S 0304は座標北にのる。SD-S 0304の溝底で、土師器甕2個体分の破片納める土壌を検出している。

平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構に、S3区で検出したSX-S 0303がある。平面形は南北に長い長方形で、長さ1.75m、幅0.9mある。方位は北で西に振る。長さ1.4m、幅0.6mの木棺痕跡が明瞭に残る。棺内の北西隅に土師皿3枚を納める。また、棺に用いた鉄釘も出土している。被葬者の頭位は北と考える。

室町時代の遺構は、S6区で土壙1基、N1区で土壙1基(SK-N 0102)などがある。

桃山時代の遺構は、S 4区で南北方向の溝（SD-S 0404）、S 6区からS 9区にかけて検出した東西方向の溝1基（SD-S 0601）などがある。

遺物 旧石器時代の遺物は、表面採集や水洗選別で得た剥片・碎片を含めて約1,400点ある。製品は、ナイフ形石器2点、錐1点、石刃1点がある。剥片は長さ10～50mmの不定形のもので大半を占め、剥離に際しての明瞭な意図を認めがたい。明確な石核も出土していない。また、砥石が数点出土している。これ以外に搬入礫と思われる自然礫がある。

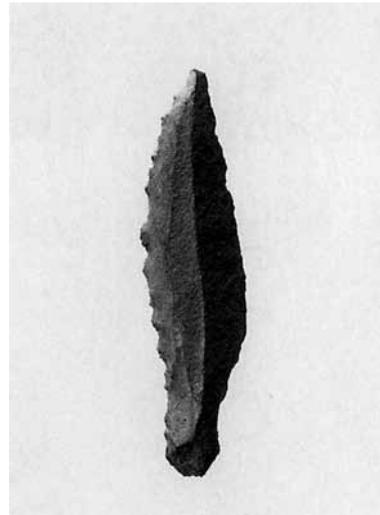


図45 S 3区堅穴2出土
ナイフ形石器

縄文時代早期の押型文土器は、山形押型文を施した細片である。S 5区のII層直上で検出した。I・II層の火山灰分析結果とも整合し、重要な資料となった。縄文時代後期の土器は、SK-S 0607で出土した波状口縁の深鉢片1点のみである。縄文時代晩期の土器はS区の全域で出土しているが、大半は飛鳥時代以降の遺構埋土からの出土である。文様部・口縁部の破片は少量で、滋賀里IV式の甕1点以外はすべて滋賀里III式である。石器は、堅穴5と土壌墓SX-S 0403から出土した石鏃2点がある。堅穴5出土のものは、縄文時代のものである。土壌墓SX-S 0403出土のものは、大型の突基有茎式で、弥生時代の石鏃の可能性がある。

弥生土器は、前期の壺と甕がS 3区の後世の遺構と排土中から出土している。いずれも小片である。

飛鳥時代の土器類は、堅穴1～7と土壌墓などを中心にほかの多くの遺構から出土しており、今回の調査で得られた土器類の大半を占める。飛鳥IV式にまで下るものが少量あるほかは、すべて飛鳥I～III式に含まれる。土師器の器形は、各堅穴住居から煮沸甕と杯Cが出土する。甕類は種類が多様で量的にも大半を占める。また、土壌墓のSX-N 0202からは完形の壺が、SX-S 0403からは完形の小型甕が出土している。須恵器の器形は、堅穴住居からは蓋杯・甕を主体とし、短頸壺・平瓶がこれに続く。土壌墓からは上記の器形に加えて、長頸壺・提瓶・長脚二段透かし高杯などがある。石製品には、以下のものがある。堅穴2と4から良く研磨された礫が出土しているが、用途は不明である。堅穴2からは、鉄製農具に用いたと思われる砥石が出土している。また、堅穴5の竈に使用されていた支柱石を取り上げている。鉄製品は、主に土壌墓から出土している。刀子は、SX-N 0101・S 0101から出土している。SX-N 0101出土のものは、かなりの使用を経たもので刀身が細く磨ぎ込まれている。SX-S 0101出土のものには柄の金具が残る。鉄鏃は、SX-N 1202から2点出土している。平根系の鏃で、長三角式と方頭式が1点ずつである。2点とも茎に木質が残る。SX-N 0202からは、?とその座金具および鉸具1点が出土している。釘は、SX-S 0315から4点、SX-N 0101から1点出土している。木質が残り、出土位置から木棺に用いられていたことは明らかである。なお、SX-N 0202の埋土から多量の木炭が出土し、遺物整理箱に1箱取り上げている。また、S 6区の土壌から馬か牛

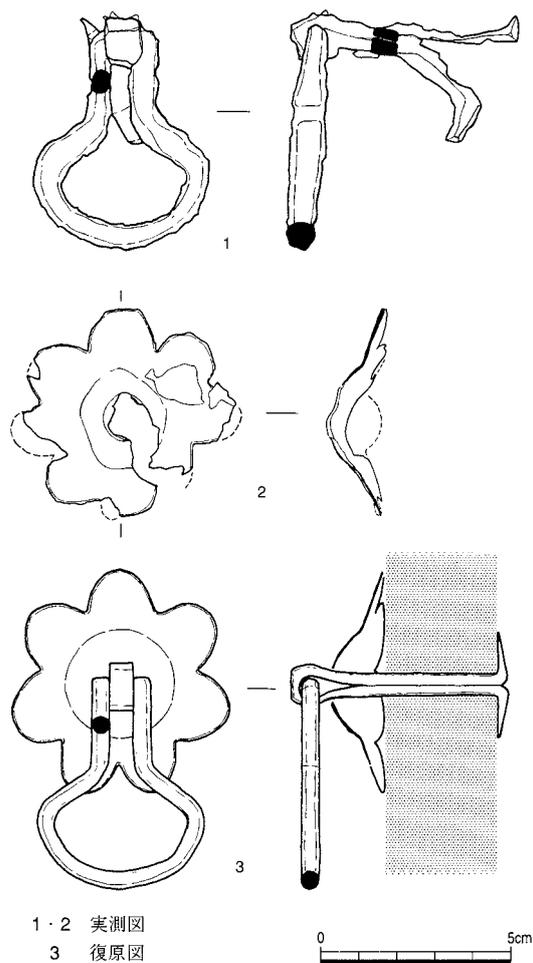


図 46 土壙墓 S X - N 0202 出土
鞍金具実測図・復原図 (1:2)

のものと思われる歯と骨が出土している。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、S 3 区・S 5 区・S 6 区・N 5 区・N 7 区から出土しているが断片的な小片が少量出土しているのみである。遺構に明確に伴うものとしては、木棺墓 S X - S 0303 出土のものがある。木棺内から 12 世紀末から 13 世紀初めの土師皿が 3 個体出土している。なお、木質が残る鉄釘が出土している。木棺に用いられていたものとする。

室町時代から桃山時代の遺物は、S 6 区・N 1 区・N 5 区・N 7 区から出土している。これも小片が少量出土しているのみである。S K - N 0102 からは、15 世紀後半の瀬戸灰釉などとともに染付・青磁などの輸入陶磁器が出土している。江戸時代の遺物は 18 世紀以降のものが、各地区で少量ずつ出土している。

小結 中臣遺跡の低位段丘層相当層が石器を包含することを確認し、A T 降灰前後から、縄文時代早期までのある時期に、当地で人が生活したことを明らかにした。京都市内では、原位で石器を検出した初例となった。今後、出土した

石器群の分析を進め、石器集中部の性格を明確にする必要がある。また、今後の周辺の調査では、石器包含層である II 層の残存状態に留意し、旧石器遺跡の調査を継続的に進めていく必要がある。

N 区に隣接する 73 次調査で数多く検出した縄文時代晩期の遺構は、ほとんど検出できなかった。S 区では散発的に当該期の遺物が出土しており、縄文時代晩期の生活空間の広がりを見ることができたが、N 区では遺物も出土せず、台地西側斜面に当該期の居住域が存在しなかったことは明らかである。

飛鳥時代の建物群は、N 区では皆無で、すべて S 区の東半で検出した。飛鳥時代の居住域が台地頂部から東側斜面を中心に広がることが明らかになった。また、11 基検出した土壙墓は、S 区で一部が居住域と重なるものの、おおむね台地の西側斜面の空地に散在することを明らかにした。馬具や鉄鏃を有すること、密集した墓域を形成していないことから、土壙墓の被葬者は村落の一般成員ではなく、世帯共同体の長、もしくはそれより上位の階層の墓と考える。

伝坂上田村麻呂墓の墳丘の性格を知る上での有力な情報は得られなかった。

(内田好昭・高橋 潔)

11 中臣遺跡 75 次調査 (図版 3-3・29)

経過 この調査は、中臣遺跡の 75 次調査である。調査地は中臣遺跡内の北西部で、栗栖野台地の南北に延びる尾根筋上に位置する。調査地から東と西に斜面が下り、眺望が開ける。調査地の北側と東側で行った 73 次調査では、縄文時代の土器棺墓、土壇群、柱穴や、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居などを数多く検出している。特に調査地の東側に隣接する 73 次調査 5 区では、飛鳥時代の竪穴住居を 1 棟検出しており、一連の遺構の検出を予想した。また、調査地南側で行った 74 次調査 S 区では、低位段丘層相当層から石器が出土しており、これにも留意する必要がある。

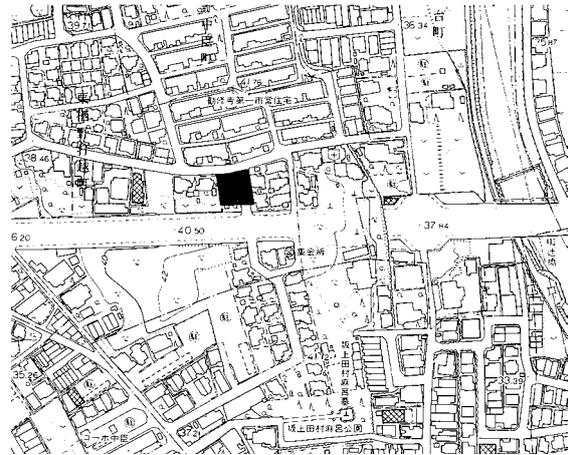


図 47 調査位置図 (1:5,000)

1996 年 1 月 25 日に重機掘削を開始した。まず、調査区前面に近世以降の耕作関連の溝群を検出し、これを掘り切った状態で 1 回目の全景写真撮影と平面実測を行った。溝群の下に土壌が多数切り合って検出されたため、これを調査し 2 回目の全景撮影と平面実測を行った。さらに、調査区の南端に 74 次調査で確認した旧石器包含層に相当する地層が存在したため、この地層を掘り下げ石器を探した。その際、細片の石器も採取するため、排土を 4 cm メッシュの篩に通し石片の採取に努めた。石器調査は 3 月 1 日に終了し、3 月 7 日の埋め戻し完了をもってすべての現場作業を終了した。なお、図面はすべて手描きで作成した。

遺構 基本層序は、上から現代盛土層、暗褐色シルト層、褐色シルト層、黄褐色シルト層、扇状地を形成する厚い砂礫層である。現地表下から層厚 30 ~ 50 cm の盛土層を介して、暗褐色シルト層の上面にいたる。暗褐色シルト層はいわゆる「地山」で、層中に始良 T n 火山灰の火山ガラスとサヌカイトの小剥片を含み、調査区の南端部にのみ残る。層厚は最も厚いところで約 20 cm ある。それ以下は無遺物層である。遺構はすべて暗褐色シルト層の上面で検出されるが、調査区中央部から北半は褐色シルト層もしくは黄褐色シルト層が遺構面を形成している。

江戸時代から現代にかけての遺構として、検出幅約 90 cm、残存深約 20 cm の耕作溝を約 50 基検出した。東西方向の群と南

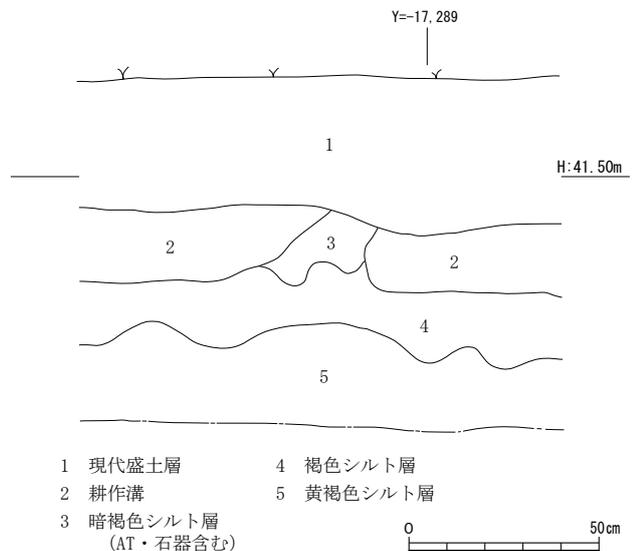


図 48 調査区南壁断面図 (1:20)

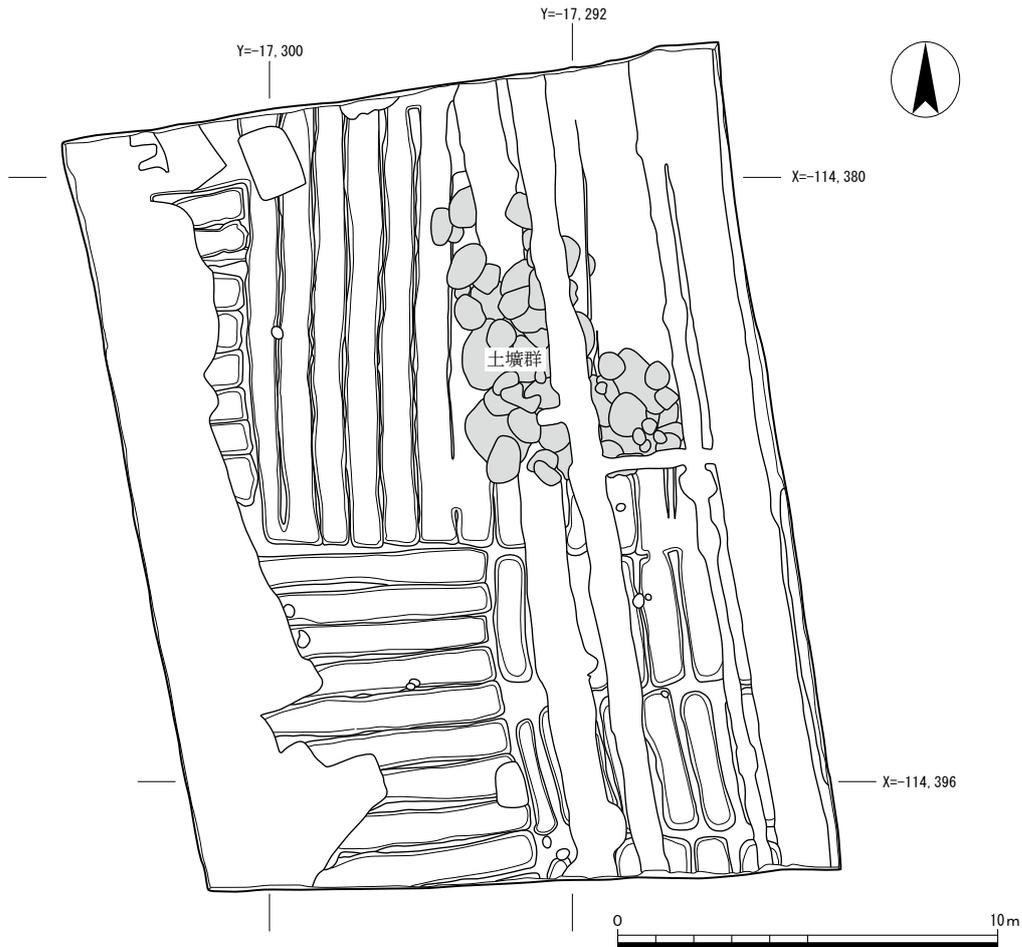


図49 遺構平面図 (1:200)

北方向の群とがある。黒色土、褐色土、黄褐色土などのブロック土が、未攪拌のまま溝内を埋める。堆積状況から人為的に短期間で埋め戻されたことは明らかである。農作物などの栽培に先立って、固い地山土を攪拌するために穿たれたものと理解する。個々の溝はその作業単位と考える。埋土から出土する最も新しい遺物は18～19世紀の染付椀で、これより以降の遺構である。

調査区北東部の約10×7mの範囲に60基の土壇を密集して検出した。個々の土壇は、小さいもので長径約30cm、残存深約20cm、大きいもので長径約180cm、残存深約50cmある。それぞれの土壇は大きく切り合って掘り込まれている。堆積はレンズ状を呈することなく、層離面は一定方向に傾斜する。未攪拌のブロック土を多く含み、人為的に土砂を埋め戻している様相を示す。遺物は、縄文時代晩期のものから飛鳥奈良時代のものを含み、奈良時代かそれ以降の時代の遺構である。土取穴、もしくは墓壇の可能性を考え調査を進めた。しかし、①土取穴としては切り合い過ぎている、②また地山の土が良質ではない、ことから土取穴説は否定される。さらに、③土壇内部に空間が存在したような堆積状況を示さず、④副葬品と呼べるものも出土していない、ことから墓壇説も支持できない。性格は不明である。

なお、旧石器調査で遺構は検出していない。

遺物 遺物は、主として耕作溝と土壇群の埋土から出土している。小片が多く、実測可能な個体は少ない。また、一括性の高い遺物群もない。

旧石器は約1cm角のサヌカイト片3点で、型式や技法上の特徴は不明である。すべて暗褐色シルト層土の4mmメッシュ篩掛けで検出した。縄文土器は、晩期土器の細片と思われるものが少量出土している。口縁部や底部、文様部などの破片はなく、細かな時期は不明である。また、土壌群からは、磨石や叩石と思われる礫が出土している。弥生土器は、重機掘削中に弥生時代前期の壺口縁部が出土している。口縁部直下に小孔が穿たれる。近接する73次調査D区では、太形蛤刃石斧が出土しており関連に注目する。土師器・須恵器は古墳時代後期から飛鳥時代のものが主体である。土師器は甕類の破片が多く、須恵器は甕体部と蓋杯類が多い。蓋杯は、受部とたちあがり有し、天井部もしくは底部を回転ヘラケズリする型式である。奈良時代から中世にかけての各時期の遺物も少量ずつ出土している。江戸時代の遺物は、耕作溝から出土した染付椀1点のみである。

小結 少量であったが、暗褐色シルト層内から石器片を検出できたことは重要な成果であった。これによって、暗褐色シルト層に、かなりの確率で石器が包含されていることが明らかになり、今後周辺部での調査に十分留意する必要性が生じてきた。同時に、立会調査などでの地層の断面観察を通じて、この層準の分布を確認しておくことも重要である。

今回の調査では、古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居などの遺構は検出しなかった。調査地は台地の尾根筋にあたり、遺構面が削平されていることも考慮しなければならない。しかし、旧石器包含層が残存していたことからみても、遺構が完全に消失してしまうような大規模な削平は考えにくい。この時期の遺構が、もともと存在しなかったものと理解する。これまでの周辺部の調査では、この時期の遺構は台地の東側斜面に濃密に分布しており、尾根筋から西側斜面には土壌墓が点在するのみであることが判明している。今回の調査成果はこうした成果と矛盾せず、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての居住域が台地東側斜面が中心であったという理解を追認した。縄文時代の遺構に関しても同様である。

奈良時代以降の土壌群については、現状では性格不明であり時期も明確ではないため、今後の検討課題としたい。

(内田好昭)

VI 長岡京跡

12 長岡京左京六条三坊・水垂遺跡 (図版3-1・30・31)

経過 この調査は平成2年度から継続して実施している京都市清掃局水垂埋立処分地拡張工事に伴うものである。今年度の調査はB区の長岡京期・古墳時代の遺構を対象として実施した。

さらに、平安時代の条里遺構を調査するために補足調査区を4箇所(5・7～9トレンチ)調査した。

なお、当事業に伴う水垂地区の調査は本年度をもってすべて終了した。

遺構 遺構は大別して古墳時代・長岡京期・平安時代のものがある。

古墳時代 遺構はB区と西側に接する補足調査8トレンチで検出した。B区の中央部には北西から南東方向に流れる幅3～5m、深さ約1mの溝が刻まれ、これと同規模の溝が北部から大きく西方へ回り込んで南流し、調査区の中央部で合流している。さらに、調査区の南端にはD・

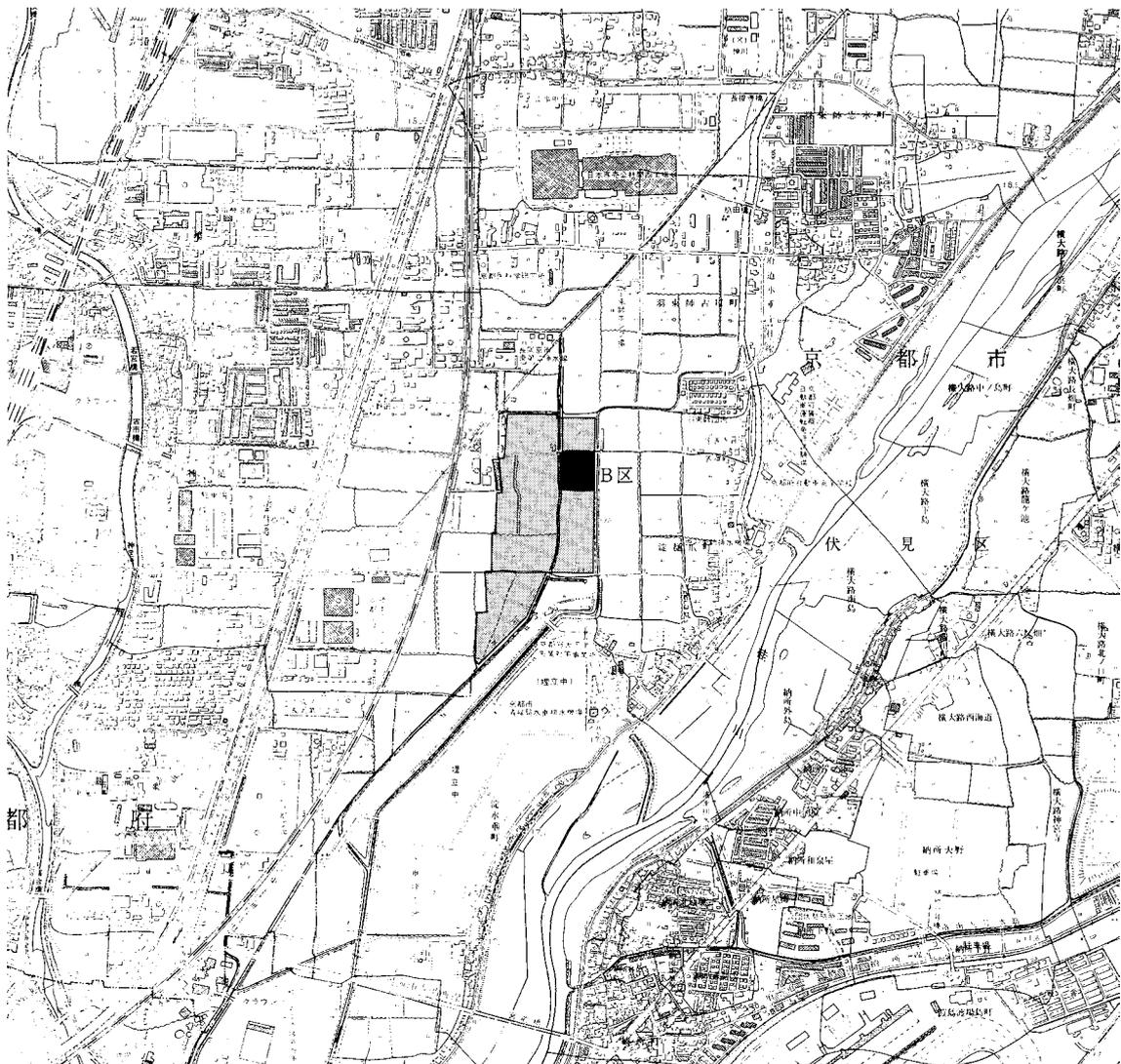


図50 調査位置図 (1:20,000)

E1区から流れてくる河川が幅約25 m、深さ3 mの規模となり南東流している。これらは調査区の南東部で合流し、C区で検出した河川へと繋がる。

南側の河川と中央の溝に挟まれた部分で竪穴住居3棟および掘立柱建物1棟、溝の北東側で竪穴住居1棟を検出している。竪穴住居は、いずれも方形で、一辺7 mを越える大型のものと、一辺5 mのものがある。これらはいずれも主

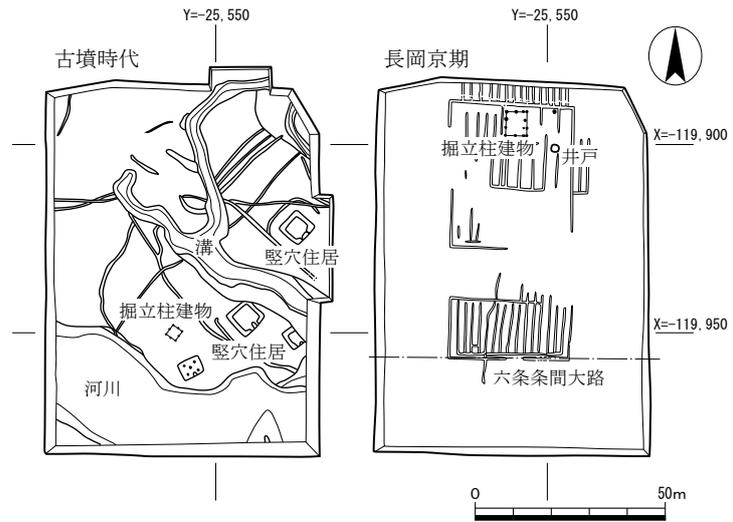


図51 B区遺構配置図 (1:2000)

柱穴は4本で、中央に地床炉、南東部に貯蔵穴をもっており、周囲にベット状遺構をもつものが多い。溝の北東側で検出した住居の周辺には西側を半円形に幅50 cm、深さ約15 cmの溝が巡っている。掘立柱建物は、竪穴住居の西側で検出しており、2間×2間の小型のものである。

このほかに、調査区の西部ではE区から続く、耕作に関連すると考えられる小穴群がわずかに認められ、小溝も数条ある。

長岡京期 長岡京期の遺構はB区で検出した。この時期B区の地形は北部が微高地状に高くなっており、南側へ緩やかに傾斜している。その微高地状に高い部分で掘立柱建物を1棟検出している。建物の北西には土壇、南東には素掘りの井戸が配置されており、一定の居住空間が設けられている。建物は2間×3間の南北棟で、東と南の柱列には建て替えが認められる。

建物が廃絶した後は、北側のA区から続く小溝群が調査区の北部から中央部までの範囲に掘られている。これらは幅30～50 cm、深さ10～30 cmで南北方向に2～3 m間隔に並んでおり、10～15 m間隔で掘られた東西方向の溝によって区画されている。建物の廃絶時期と溝の構築時期はごく近接していると考えられ、建物の柱掘形と溝とは重複しているが、井戸の部分は溝が避けて造られている。また、小溝群の最も南側の東西溝は六条条間大路の北側溝の位置と一致している。

平安時代 補足調査区5・7・8・9トレンチで、条里制に伴う河川や溝、畦などを検出した。

8・9トレンチでは現在の五間堀川の下層で、幅約10 m、深さ1.5 mの河川を検出した。この河川は8トレンチから、ほぼ南北方向に延び、9トレンチ内で東へ直角に曲がっており、おそらく約50 mでさらに南へ方向を変え、C区で検出した河川に繋がるものと考えられる。流れの一部は、幅約1 m、深さ0.5 mの溝に縮小され、9トレンチからさらに南流しており、5・7トレンチでこの延長を確認している。この溝の両岸には、幅約50 cm、高さ10 cmの畦が認められ、左右には水田が広がっていたものと考えられる。また、7トレンチでは東西方向の溝や畦との交差点も確認している。これらの遺構は、平安時代中期の砂礫層によって埋没している。

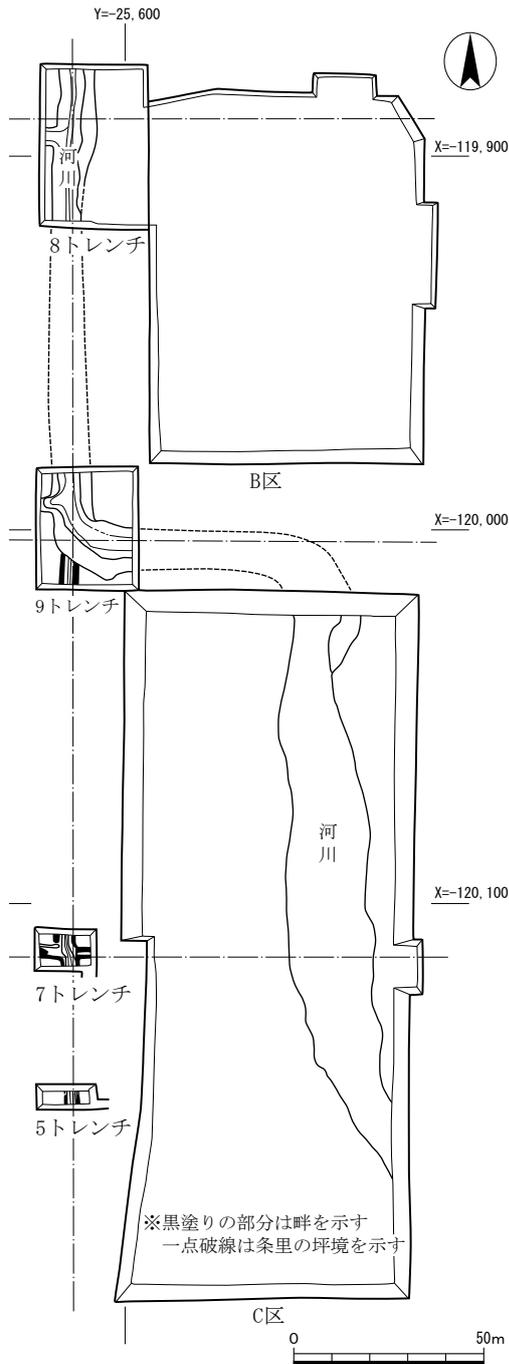


図52 補足調査区遺構配置図 (1:2000)

遺物 調査で出土した遺物は主に古墳時代・長岡京期・平安時代のものがある。

古墳時代 B区の河川や溝から庄内式併行期・布留式併行期の土師器のほか、土師器・須恵器などの土器類が多く出土している。また、建築部材などの木製品もみつまっている。

竪穴住居からは庄内式併行期の土師器などが出土している。

長岡京期 掘立柱建物およびこの南側に広がる遺物包含層から土師器・須恵器・製塩土器などの土器類が出土しているが、中でも製塩土器の占める割合は大きい。

平安時代 補足調査区の河川や溝から土師器・須恵器・緑釉陶器など中期の土器類が出土しており、瓦類もわずかに認められる。

そのほか中・近世の土師器・瓦器・焼締陶器・磁器・銭貨などが出土している。

小結 今回は古墳時代・長岡京期・平安時代の遺構の調査に大きな成果があった。その点を時代別にまとめる。

古墳時代の集落はこれまでの調査で、D区を中心に営まれており、北西部には広がるものの、南東部へは広がらないと考えていた。しかし、今回、B区で同一時期の住居を検出し、しかも、この間に空白地帯が存在することを確認した。集落はさらに東側へも広がる可能性があり、この地区の集落構成を再考する必要が出てきた。

長岡京期の遺構については、これまでの調査で東三坊第一小路より東側については条坊関係の遺構は検出できなかった。しかし今回、建物はわずか1棟であるが、井戸・土壇などを整然と配置した遺構が確認できた。これは利用できる土地は無駄にしないことを示したものと考えられ、長岡京内の宅地利用を探る上で興味深い事実である。

平安時代に遺構としては、条里に伴う河川・溝・畦などを検出した。これらはいずれも現在の河川や溝の下層から検出されており、現在の条里地割りが平安時代中期にはすでに形作られたことを示すものとして注目できる。

(吉崎 伸・上村和直・木下保明・加納敬二)

VII その他の遺跡

13 植物園北遺跡 (図版2-1・32)

経過 調査に先立って遺構の有無を確認するため、試掘調査を実施することになった。調査対象の敷地はL字形を呈しており、その形状に従って幅2mの試掘トレンチを設定した。調査の結果、古墳時代の遺物が出土し、遺構に伴う堆積土層を確認したため、発掘調査に切り換えて、より詳しい調査を実施する運びとなった。

発掘調査に際しては、遺構面まで重機によって掘り下げ、以後は人力によって掘り下げることとした。途中、掘立柱建物が検出されたため、その広がりを確認するために一部拡張した。

遺構・遺物 調査地の現況は畑地であるが、基本土層は、現代盛土層—旧耕作土層—床土層—(遺物包含層)—暗赤褐色土層(礫を主体とした砂泥層)となっている。暗赤褐色土層は地山で、各種の遺構が成立している。

検出した主な遺構は、掘立柱建物2棟がある。掘立柱建物1は南北5間、東西3間以上あり、さらに東隣の敷地へ延びている。柱穴の掘形は一辺50cmの隅丸方形を呈しており、2.1~2.3mの間隔で検出した。遺物の出土がないため、精細な時期の決定はできないが、掘形の形状では奈良時代から平安時代前期のものと思われる。検出された柱穴のうちの1基の柱穴の柱あたりには、拳大の石が据えられていることを確認した。建物は真北に対して西へ約8°の振れを示している。掘立柱建物2は正方向から右回りで約23°の振れを示している。この建物も柱穴から遺物が出土しなかったため詳細な時期を決定することができなかったが、建物としてまとまるもの認識を得ている。

出土遺物は、混入として古墳時代前期の土器が若干量出土しているほか、小土壌などから平安時代の土器片が出土している。

小結 当調査地では竪穴住居などの検出はなかったものの、近辺に存在を推定させる遺物の出土はあり、今後の調査によっては検出される可能性がある。また掘立柱建物の広がる範囲は、当調査地からさらに東方へ広がることが予想される。

今回の調査は、遺跡地図に指定された範囲より若干離れた地点での調査であったが、当地でも遺跡の存在を確認することができた。周辺での各種の調査から、調査地の西には北東から南西への谷状地形が確認されている。調査結果を踏まえれば、今回の調査地を含めた一帯は「植物園北遺跡」とは切り離し、新しい遺跡として認定すべきであろう。(久世康博)

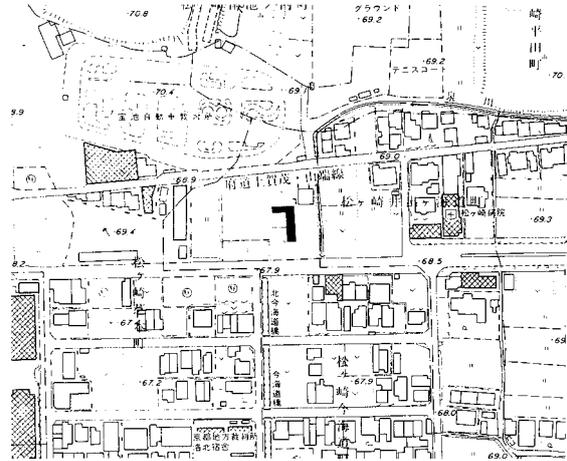


図53 調査位置図 (1:5,000)

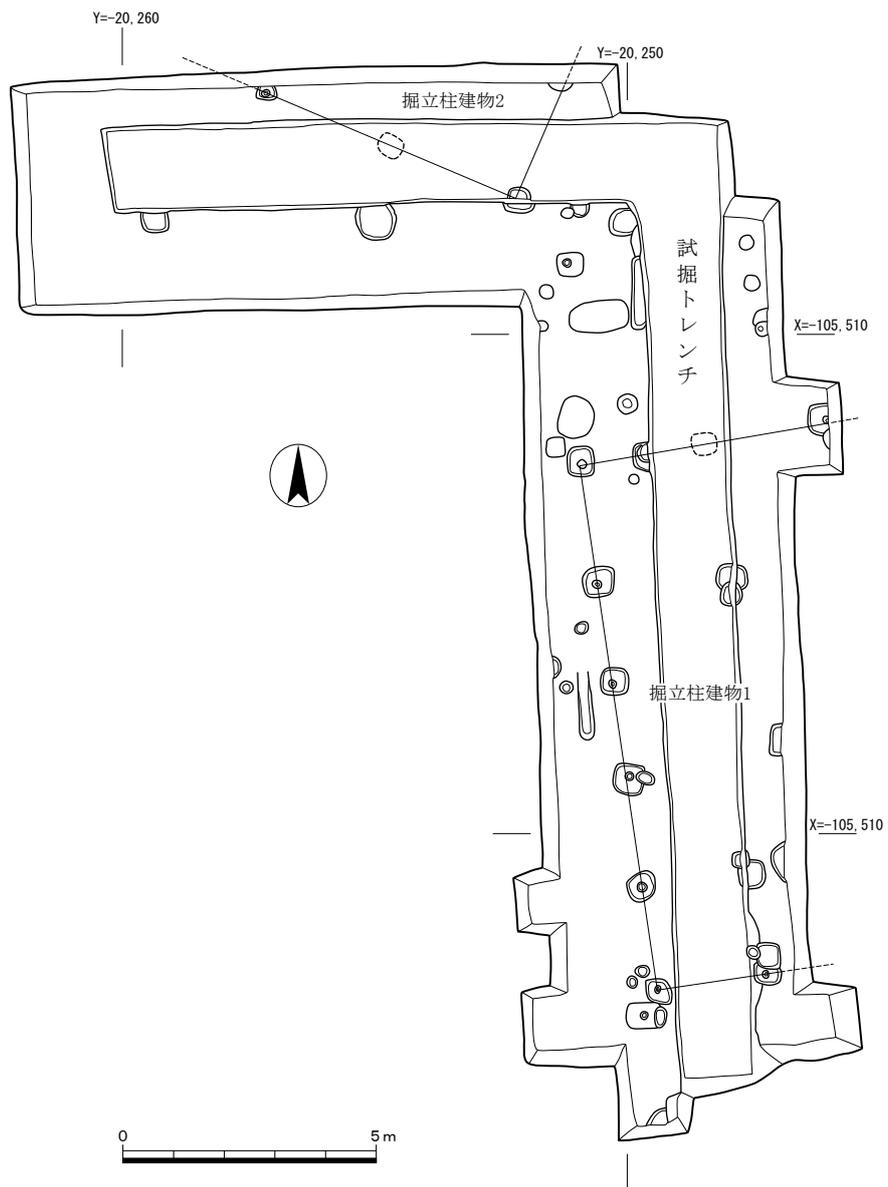


図54 遺構平面図 (1:150)

14 北白川廃寺（図版1）

経過 遺構は、京都市左京区北白川東瀬之内町50-1番地にあつて、過去の調査で塔基壇があることが確認されていた。土地の所有者が建物の建築と駐車場の整備を行う計画を提出し、京都市埋蔵文化財調査センターが保存を目的とした国庫補助発掘調査の指導を行い、当研究所が受託して調査を実施した。

遺構・遺物 調査区は、塔基壇を中心とし、西側に2箇所（A・B区）、北側に1箇所（C区）、基壇はD区とし4箇所を設定した。A区では瓦類を含む土壌2基と東西方向の溝を確認した。B区は東西方向の溝2条、C区は整地層と南北方向の溝1条を、D区では白鳳期の瓦積基壇と平安時代前期の石積基壇を発見し、改修のあったことを確認した。

小結 創建は白鳳期で、一边は13.8m、心礎は地上式とみられる。改修期は平安時代前期で石積みをして、南北階段を付加、一边14mとしている。 (吉村正親)

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成7年度 1996年報告



図55 調査位置図 (1:5,000)



図56 D区全景（北から）

15 京都大学構内遺跡 (図版1・33・34)

経過 平成2年度、今出川通に暗渠構造の分水路を通して白川を分流させる計画が京都市建設局によって立てられ、本遺跡の状態を事前に確認する目的でボーリング調査(1次調査、計15箇所)が実施された。その結果、吉田山麓北西域の3箇所(No.7・8・15地点)で縄文時代晩期の遺物包含層が確認され、その他の地点でも平安時代や室町時代の遺物包含層などが認められた。^{註1}以後、継続して立会調査を実施しており、多くの成果を残している。^{註2}

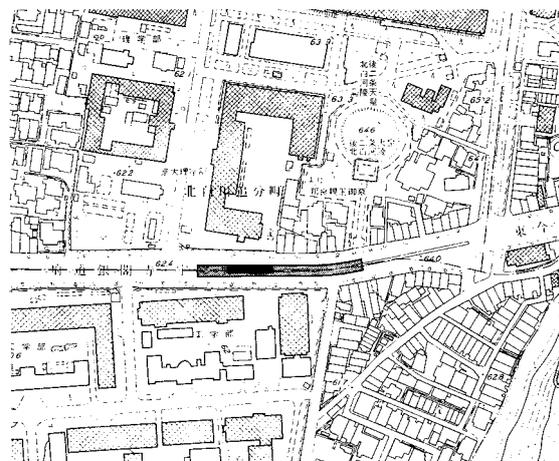


図57 調査位置図(1:5,000)

今回の5・6次調査では縄文時代から弥生時代の遺物包含層や本遺跡の集落跡に関連した遺構の検出などの成果を得たが、各々重複する内容をもつことから本稿にまとめた。

5次調査 土留めの布掘りおよび河道の本掘削工事に伴う立会調査であり、No.1～16、17-1～3、18～19地点の計21箇所で行った。工事区は今出川通内の中央部で京都大学北部構内の理学部入口の東側から後二条天皇北白河陵入口までの東西約110m間、掘削幅は南北約7mである。

6次調査 5次の調査期間中に当工区内で行った試掘・発掘調査である。調査区は1次調査No.7地点の西側に東西30m、南北5mの規模で設定した。

遺構 縄文時代から室町時代までの遺構32基を検出した。

まず、縄文時代の旧地形に少し触れておく。標高62.0m(地表下約1.8m)以下に縄文時代前期の地表を構成する白色砂層が堆積していたが、調査区域中央で落差2.6m以上の西向きの崖になっており、これを境にして東西の堆積状況が大きく分かれていた。東側ではこの地形の影響を受けて標高59.8～62.4m(現地表下1.4～3.2m)に縄文時代後期から弥生時代前期の遺物包含層(黒色泥砂層I・II、厚さ約0.4m)が比高2.2mの微高地を形成している。その規模は東西約50m以上にわたり調査区域外東方へも広がる状況で、縄文および弥生時代の遺構はこの微高地上で検出した。崖の西側では弥生時代前期の遺物包含層(褐色粘質土層、厚さ約0.2m)が標高59.8m(地表下約3.2m)でほぼ水平に堆積しており、崖の部分が堆積したのちにできた湿地の埋積と推測される。

縄文時代の遺構は13基を数え、主なものに縄文時代前期の土壇1基(No.17-3地点、SK17)、縄文時代後期の土器棺墓1基(No.11地点、土器棺墓1)、土壇4基(No.17-3地点、SK7・14・18・19)、縄文時代晩期の土器棺墓1基(No.17-3地点、土器棺墓2)などがある。

土器棺墓1 微高地上の黒色泥砂層IIで検出した遺構(標高61.9m、地表下約1.8m)であり、深鉢形土器が直立した状態で埋設されていた。土器の口縁付近は壊れていたが、下半部の遺存状

態は良好であった。人骨の出土はなかったが、土器の底部中央に直径約2cmの穿孔があり、埋葬容器であったことを示す加工痕と考えられる。検出した掘形は径約0.5m、深さ0.3mで、土器の据え付けに使われたとみられる10～20cm大の河原石数個も検出した。

土器棺墓2 土器棺墓1の西側約13mの黒色泥砂層Iで検出した遺構（標高62.0m・地表下約1.6m）であり、深鉢形土器が横置き状態で埋設されていた。深鉢は土圧で潰れていたが、口縁から底部まで完存しており、口縁は南東に向けて据えられていた。検出した掘形は径0.6～0.7m、深さ0.2mである。人骨は出土しなかったが、類似の遺構例から埋葬施設と考えられる。

弥生時代の遺構は9基あり、主なものに弥生時代前期の土器棺墓1基（No.16地点、土器棺墓3）、土壇1基（No.17-1地点、土壇1）などがある。

土器棺墓3 微高地の西側裾部付近の黒色泥砂層Iで検出した遺構（標高60.9m・地表下約2.5m）であり、甕形土器が横置き状態で埋設されていた。土器棺墓2と同様、甕は土圧で潰れていたが、口縁から底部まで完存しており、口縁は南東に向けて据えられていた。検出した掘形は径0.7～0.8m、深さ0.2mである。人骨の出土はなかったが、甕底部の側面に直径約3cmほどの穿孔があり、埋葬に係わる加工痕と考えられる。甕の内面に食物などの炭化物、外面に煤が付着しており、煮沸用器が埋葬容器に転用されたことを示している。

土壇1 黒色泥砂層Iで検出した遺構（標高62.1m・地表下約1.5m）であり、半截されたと考えられる約半個体分の口縁から底部までの甕形土器が横にして伏せられたような状況を検出した。甕の口縁は東に向けられており、周囲の遺構状況からみて埋葬に係わる遺構の可能性が有る。

弥生時代以降では古墳時代の土壇1基（No.17-3地点、SX2）、室町時代の土壇1基（No.

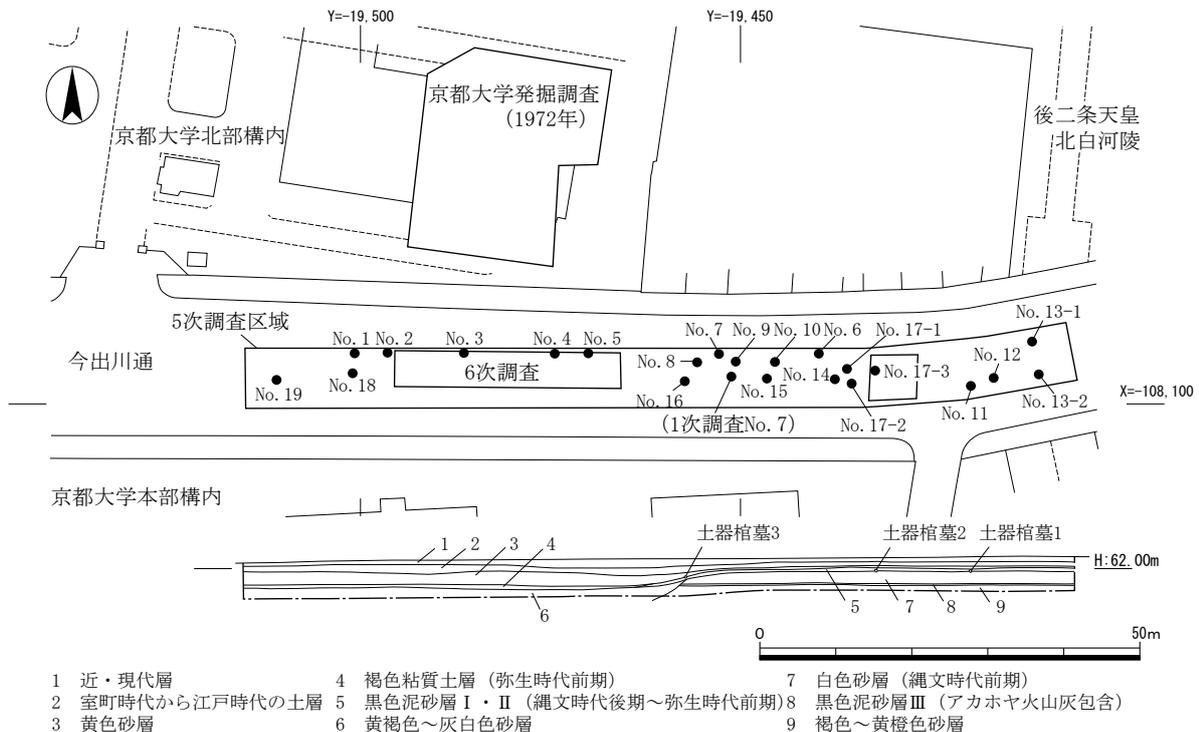


図58 調査地点位置図および基本層位図（1:1000）

17-1 地点) などを検出した。

ほかには、地質に関する成果があげられる。まず、本遺跡内では初めて縄文時代早期と前期の指標とされるアカホヤ火山灰を検出した。約 6,300 年前の鬼界アカホヤ (K-Ah) 広域降下火山灰は標高 60.1 m (地表下約 3.5 m) の位置でほぼ水平に堆積した黒色泥砂層Ⅲ (厚さ約 0.1 m) に小さなブロック状になって含まれていた。次に、地震により液状化して噴出した噴砂痕跡を微高地の裾斜面で検出した。幅 6~7 cm、深さ 3~4 cm の小さな規模であるが、黄灰色微砂が枝状になって斜面に沿うように横走りした状態のもの数条で、長いものでは 2 m 以上を測る。また、黄灰色微砂が 60~70 cm 大で深さ 7 cm 前後の不定形の浅い土壙状になって堆積した状態のもの 2 基を検出した。いずれも噴砂の末端部分の可能性はあるが、下層に繋がる根の部分が未確認であることから断定は難しく、ほかの類例との比較検討が必要である。

遺物 土器・石器類が整理箱にして 18 箱出土した。その内訳のほとんどは縄文時代前期から弥生時代前期の遺物であり、過去の本遺跡内の調査例からみても、これほど多くの遺物が出土した例は稀であり、貴重な成果を得たといえる。縄文時代晩期と弥生時代前期の遺物は大半が黒色泥砂層Ⅰに包含されていたが、各層の区分けは難しく、混在した状態での出土が多かった。

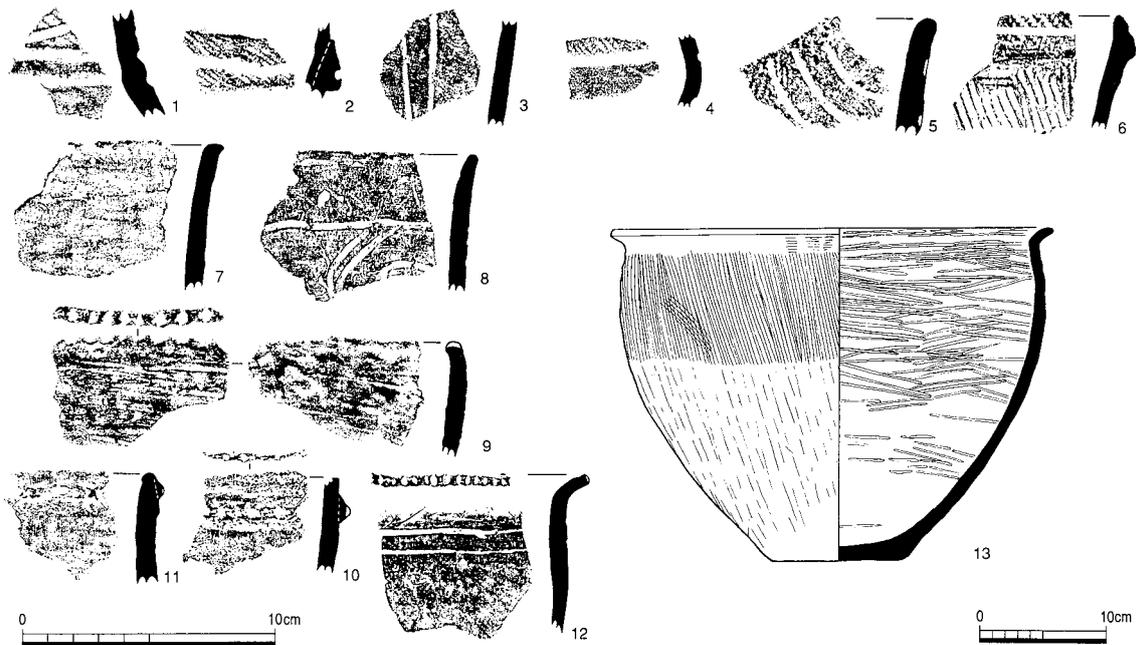


図59 No.17-1 地点出土土器実測図 (1:3) (1:6)

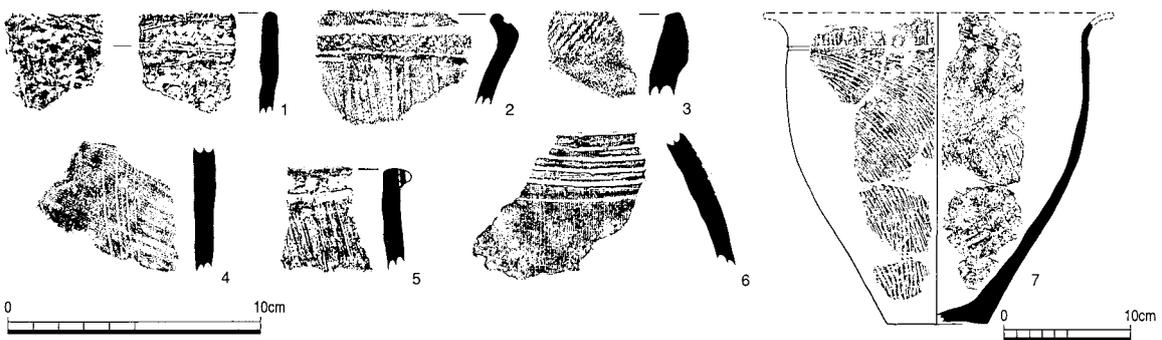


図 60 No. 17-2 地点出土土器実測図 (1:3) (1:6)

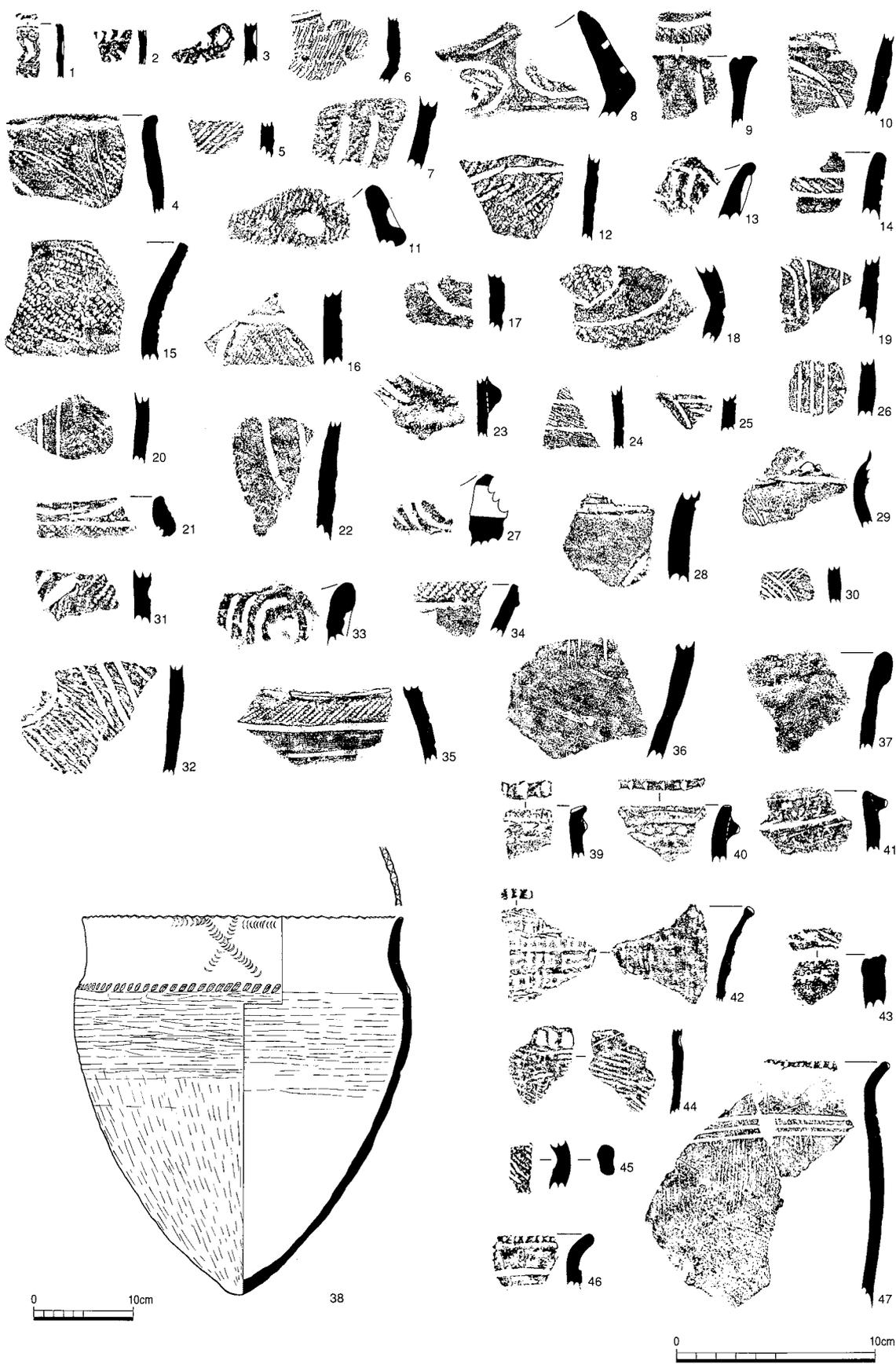


図 61 No. 17-3 地点出土土器実測図 (1:3) (1:6)

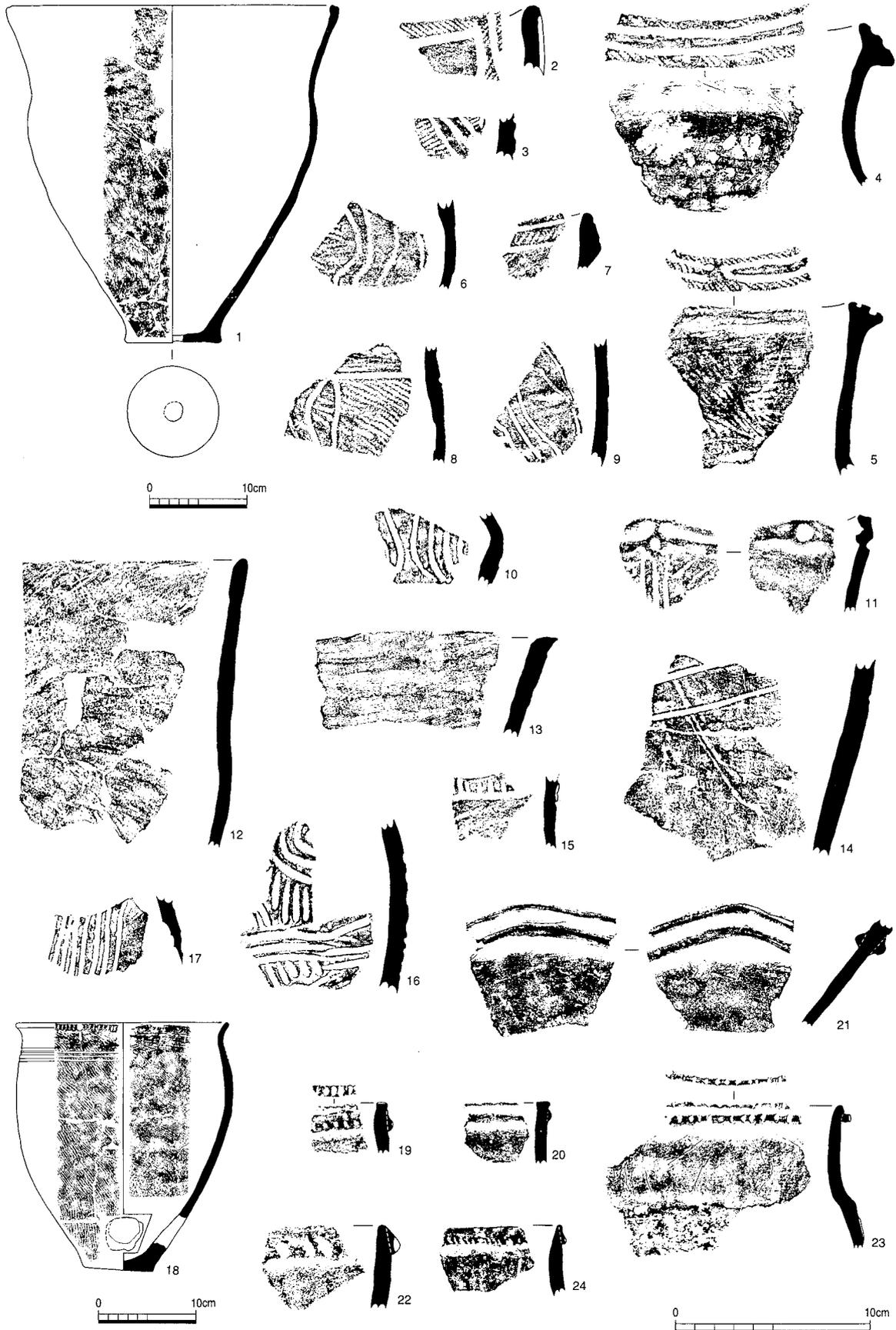


图 62 各地点出土土器实测图 (1~3: No. 11 地点 4~15: No. 13 地点 16·17: No. 14 地点
18: No. 16 地点 19: No. 8 地点 20~24: 6 次調査) (1:3) (1:6)

縄文時代前期の土器 微高地上で検出した土壌 (No. 17 - 3 地点、S K 17・20) および周辺の黒色泥砂層から数点が出土した。爪形文が施された器壁の薄い前期の土器 (北白川下層 I 式) で、いずれも小片ながら遺存状態は良好であり、口縁端部に刻みを加えたものもみられる。(図 61 - 1 ~ 3)

縄文時代中期の土器 中期中葉から後葉の土器 (船元式、北白川 C 式) が認められるが、遺物量や出土状況などから堆積層や遺構に伴うものでなく、混入したものであろうと推測される。(図 59 - 1・2、図 61 - 4 ~ 9、図 62 - 4 ~ 7・16)

また、中期から後期の土器もみられる。(図 61 - 10 ~ 15・23)

縄文時代後期の土器 土器棺墓 1 の深鉢形土器は器高 34.0 cm、巻貝条痕による器面調整だけで装飾的文様を施さない後期前葉の無文深鉢 (北白川上層式 1 期) である。また遺構ベースの黒色泥砂層 II や調査区域東側の黒色泥砂層からは遺存状態の良好な大型片が多量に出土した。その中には器形や文様の特徴から土器型式を特定できるものも多く含まれている。(図 59 - 3 ~ 8、図 60 - 1 ~ 4、図 61 - 16 ~ 37、図 62 - 1 ~ 3・8 ~ 14・17・20)

縄文時代晩期の土器 土器棺墓 2 の深鉢形土器は器高 39.0 cm、体部径 34.3 cm、口縁端部に刻みを施し、頸部と胴部の境を刻目文帯で飾る晩期中葉の深鉢 (滋賀里 III b 式) である。このほか、黒色泥砂層 I からは口縁端部の刻みと刻目突帯文の付く晩期後葉の深鉢 (滋賀里 IV 式) など、各型式の特徴を明瞭に残す大型片も多く出土した。(図 59 - 10・11、図 60 - 5、図 61 - 38 ~ 41、図 62 - 15・19・21 ~ 24)

弥生時代前期の土器 土器棺墓 3 の甕形土器はゆるく外反した口縁の端部に刻目を施し、頸部に多条のヘラガキ沈線文を巡らした弥生時代前期に典型的にみられる甕 (第 I 様式中 ~ 新) であ

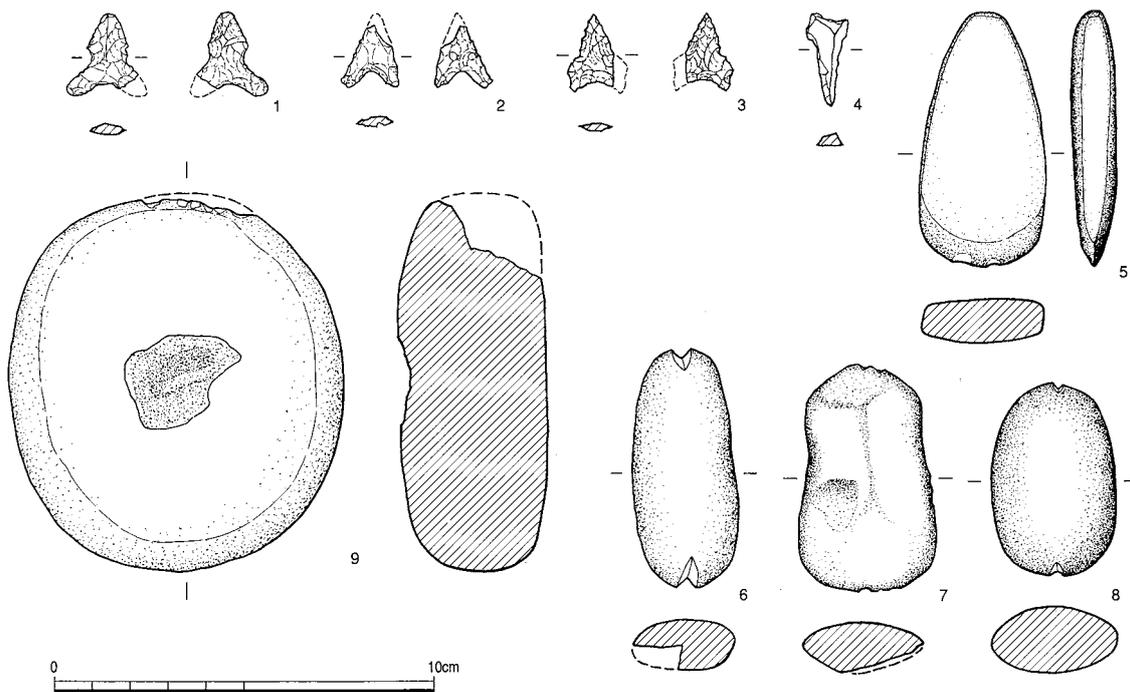


図 63 No. 17-3 地点出土土器実測図 (1:2)

る。ほかに、黒色泥砂層 I からは同じ器形の甕や、突起状把手をもつ甕、瘤状把手を付けた鉢、頸部に刻目突帯文や多条沈線文で装飾した壺、胴部に幅の広い斜格子文帯を施した壺、中央に孔を穿ったつまみをもつ壺蓋など、前期に特徴的な各種の土器が出土した。(図 59 - 12・13、図 60 - 6・7、図 61 - 46・47、図 62 - 18)

石器 石鏃 21 点、石錐 2 点、磨製石斧 2 点、切目石錘 6 点、凹石 1 点が出土した。石鏃は三角形、五角形、わたくり形、柳葉形などの無茎石鏃であり、完形品が 7 点ある。材質はチャート製の 1 点を除き、すべてサヌカイト製である。サヌカイト剥片は 350 片以上が出土した。磨製石斧 1 点、切目石錘 2 点、凹石 1 点はそれぞれ完形品である。

小結 今回の注目すべき成果として、縄文時代後・晩期、弥生時代前期の土器棺墓および微高地に堆積した縄文時代から弥生時代の遺物包含層を検出し、当時の吉田山北西麓の環境や集落の様相を復原する上で重要な手がかりを得たこと、この地域では数少ない縄文時代前期の遺構・遺物の検出、さらにはアカホヤ火山灰や噴砂の痕跡の検出などがあげられるが、ここでは土器棺墓と旧地形に関してまとめておく。

縄文時代後期の土器棺墓はすでに京都大学北部構内では縄文時代後期の墓地がみつかっており、これとの関連を検討しておく必要がある。今回の調査地点から約 240 m 北東の京都大学の発

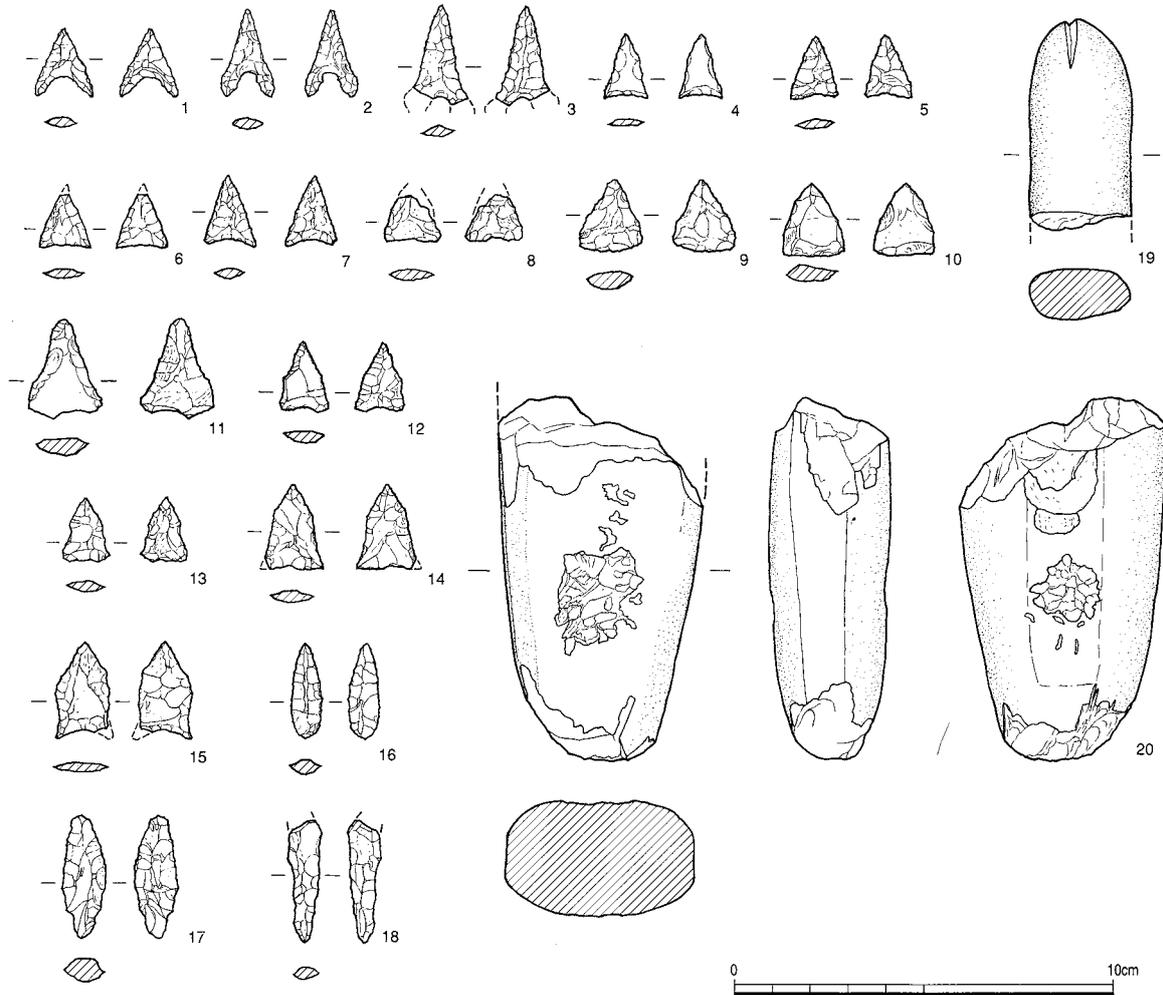


図 64 各地点出土石器実測図 (1 ~ 16・18 ~ 20:6 次調査 17: No. 16 地点) (1:2)

掘調査^{註3}で縄文時代後期前葉の土器棺墓7基と配石墓9基が集合して墓域を構成していた状態が検出され、現在も理学部植物園内に移築保存されている。今回の微高地上で検出した土器棺墓とは同時期の遺構であるが、北部構内の土器棺墓は自然流路の後背低地部で検出されており、その立地環境が異なる。起伏に富む扇状地末端の地形や距離的な問題を考慮すれば、直接的に関連づけることは難しく、むしろ隣接した別の集落の存在を想定して、今回の土器棺墓のまわりにも同様の墓地を構成する遺構が数多く残されていると考えた方が妥当であろう。このことおよび周辺部の遺物出土量などから、この地点は集落の中心域の一部であると考えられ、今回の土器棺墓はこの地域に縄文時代後期の集落が展開した状況をより具体的に示す資料となった。

縄文時代晩期および弥生時代前期の土器棺墓に関して、北部構内では縄文時代後期の墓地のほか、今回の調査地点から北北東約250mで縄文時代晩期の集石墓、同じく北西約210mで弥生時代中期前葉の方形周溝墓が検出されているが、南側の京都大学本部構内では埋葬遺構はみられず、この地域においてこれらの時期の土器棺墓は今回が最初の検出例である。また、本部構内ではこれまでの調査にもとづいて構内北東辺に縄文時代から弥生時代の集落が存在すると想定されており、今回の土器棺墓は縄文時代後期から晩期を経て弥生時代前期から中期にいたる埋葬の変遷を一定の集落域の中でたどれる資料として貴重なものである。

旧地形に関して、調査地点から約12m北側に位置する北部構内南東の京都大学の発掘調査^{註4}によると、落差2.5m以上の西向きの崖を確認し、微高地の西側斜面で縄文時代後・晩期の遺物が混在する弥生時代前期の遺物包含層（標高60.2～62.0m、比高1.8m）を検出したとある。位置的にみても今回の調査状況と直接対応すると考えられ、旧地形がより広範囲で確認されたことになる。加えて、弥生時代の遺物包含層が水平に堆積した微高地西方の低湿地の状況や、集落中心域の一面と想定される縄文時代の微高地上のようすをうかがい知ることができ、当時の地形や集落の環境を復原する上で欠かすことのできない様々な成果を得た。

なお、調査中には、京都大学の清水芳裕氏、千葉 豊氏、伊藤淳史氏、竹村恵二氏、岡田篤正氏より数々の御教示をいただいた。末筆ながら、御礼申し上げます。

(長戸満男・竜子正彦・尾藤徳行)

註1 平方幸雄「京都大学構内遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994

註2 尾藤徳行・竜子正彦・本 弥八郎・吉村正親「京都大学構内遺跡」
『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996

註3 中村徹也『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』1974

註4 石田志朗・中村徹也・中村友博『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』1972

16 法金剛院境内 (図版2-2・35・36)

経過 本調査は花園停車場広隆寺線建設工事に伴うもので、調査地は右京区花園内畑町地内のJR山陰線花園駅南側で、線路に沿った幅約9m、東西長200m区間である。当地は大治四年(1129)九月、鳥羽上皇の中宮待賢門院によって発願され、建立された法金剛院境内に比定される。また、平安時代前期には右大臣清原夏野の山荘が置かれ、のち法金剛院の前身である天安寺が造営されたところでもある。

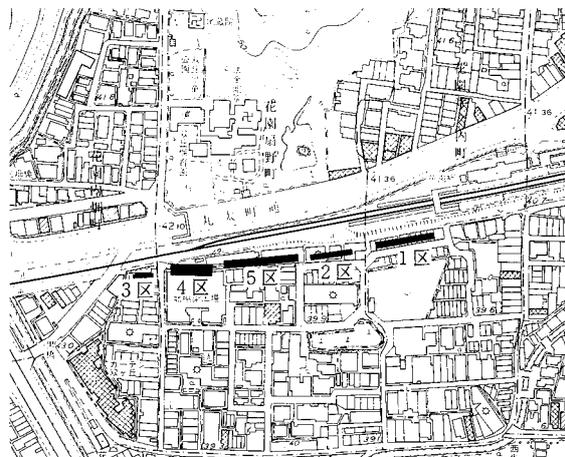


図 65 調査位置図 (1:5,000)

法金剛院における調査は、特に、昭和43年・44年に実施された丸太町通の拡幅工事に伴う発掘調査^{註1}では園池、建物2棟、築地が発見されている。今回の調査地は、その調査区とJR山陰線を挟んだすぐ南側にあたり、関連する遺構の検出が期待された。

調査はJR山陰線立体交差工事区と接するため、工事工程と競合しないように調査区を5地区に設定して、1995年5月8日から11月4日まで順次実施した。

遺構 1区の層序は盛土層、耕作土層、床土層が60cm、その下層にオリブ黒色泥土層の湿地状堆積があり、以下は灰白色粘土層の地山となる。

南北方向のSD3は幅9m、深さ0.2～0.4mを測る。溝内からの出土遺物がなく、時期の確定ができないが、堆積状況から平安時代以前の自然流路と考えられる。地業は調査区西端に検出した。湿地堆積土層の上面に3cm前後の礫と瓦などを敷きつめている。範囲確認のため西と南側に拡張した結果、東西5.0m以上、南北3.0m以上の広がりを確認した。出土遺物から平安時代後期と考えられる。

2区の層序は、1区と同じ堆積状況を示す。南北方向のSD5は幅1.2m、深さ0.3mを測る。溝内から、小片であるが平安時代後期の土師器、瓦が出土している。また、標高39.0m(地表下1.2m)で始良Tn火山灰と思われる土層の堆積を検出した。

3区は法金剛院の西限の西に位置する。層序は盛土層、耕作土層が70cm、以下はにぶい黄橙色砂泥層の地山となる。南北方向の浅い溝状のSD4は幅3.0m以上、深さ0.15mを測る。鎌倉時代前期の土師器、瓦が出土した。地山面で柱穴を11基検出した。その中には径が約0.3～0.4mを測るものが6基ある。南北の柱間隔は約1.5mの建物が想定できるが、調査範囲が狭いため全体の規模は不明ではある。平安時代後期の土師器が出土した。

4区の地形は北側がJR山陰線の軌道敷きに向かって高く、調査区の南側が段状に低くなり平坦となっている。北側の層序は盛土層30cm、江戸時代・室町時代の整地層が50cm、平安時代の整地層が40cmの順に堆積し、以下は明黄褐色砂泥層の地山となる。南側は盛土層が30cmで、以



図66 遺構平面図 (1:250)

下にぶい黄褐色泥砂の地山となる。室町時代の遺構は南北方向の溝2条 (SD 8・16) と落込12がある。SD 8は幅0.9 m、深さ0.4 mを測る。SD 16は幅0.9 m、深さ0.5 mを測る。落込12は北壁から南へ落ち込む溝状遺構で幅1.6 m以上、深さ0.8 mを測る。埋土には平安時代から室町時代の瓦が投棄された状態で多量に出土し、その中に瓦経が1片含まれていた。

平安時代の遺構は柱穴と土取跡がある。柱穴は、いずれも径 0.3 m 前後で根石が据えられている。土取跡は、径 1.0～2.0 m、深さは検出面から 0.5 m 前後で不整円を呈する。出土遺物が少なく、小片であるため平安時代の詳細な時期は確定できない。

5 区の地形は西側が高く、東へ向かって下がる。層序は東と西で異なり、東側は 2 区と同じ状況である。西側は盛土層、江戸・室町時代の整地層が約 40～70 cm、平安時代の基壇土と整地層 2 層が 1 m で堆積し、以下は灰黄褐色砂泥層の地山となる。

検出した遺構は法金剛院に属する礎石建物、園池と、平安時代の礎石建物、柱穴、流路、土取土壇、時期不明の溝がある。

礎石建物（S B 1）は基壇を有する礎石建物である。検出したのは建物の南部分と考えられる。基壇の規模は東西 5.3 m、南北 3.5 m 以上である。この基壇上面には礎石 2 基と礎石据付穴 4 基が遺存しており、南北 2 間、東西 2 間分である。柱間寸法は、南北が南から 1.5 m と 1.8 m、東西が西から 1.8 m と 1.5 m に推定できる。礎石 1 は長径約 0.9 m、高さ 0.3 m を測る。南側面には半裁された柱座が認められ、転用されたものと判明した。礎石 2 は長径 0.7 m、高さ 0.7 m を測る。材質は両礎石とも花崗岩である。礎石据付穴は直径約 1.0 m、深さ 0.5 m を測る。いずれの掘形内にも径 0.1～0.3 m 大の根固め石が認められた。基壇の版築土の高さは約 0.5 m で、厚さ 5～10 cm の単位で堅く締まった小礫混じりの土層から形成されている。

園池は S B 1 のすぐ東側に位置する。検出した範囲は南北 6 m、東西 26 m で西岸部である。汀線は北東から南西へ延びる。白砂を敷き洲浜を造り、30～60 cm 大の景石を配している。また、洲浜部に直径 1.0 m、深さ 0.4 m の景石の抜取穴とみられるものが 1 箇所認められた。石材は主にチャートで、ほかに花崗岩、緑色片岩が認められた。汀線部の堆積層は池の基盤土層上に平安時代末期から鎌倉時代の土師器を多量に含むにぶい黄褐色砂層があり、この上部には鎌倉時代後半の焼土層を含む暗灰黄色砂泥層が堆積しており、この層からは平安時代後期から鎌倉時代の瓦が多量に出土した。さらに、その上層には室町時代の整地層が堆積する。これより上部は旧建造物の基礎などで攪乱されている。池の東側は、後世に水田化したことにより池の埋土（堆積土）は認められなかった。

礎石建物（S B 2）で礎石 1 基と礎石据付穴 8 基を検出した。そのうち 3 基は S B 1 下層で検出した。礎石 3 は直径 0.6 m、高さ 0.3 m を測る。円形の低い柱座の造り出しをもつ。材質は花崗岩である。礎石据付穴は径 0.8～1.0 m、深さ 0.1～0.3 m を測る。規模は東西 4 間以上、南北 1 間以上で、さらに北と東に延びると考えられる。柱間隔は南北約 3.8 m、東西の東 3 間が 2.4 m の等間で西 1 間が 3.8 m である。

柱穴（P 21・23）は円形石組み井戸状の形態で、規模は直径約 1 m、深さ 1 m を測る。柱穴の内面には 10～20 cm 大の河原石を円形に積み上げ、底部には上面が平坦な径 40 cm の根石が据えられる。東西方向に 4.2 m の間隔で並ぶ。

土取土坑は調査区のほぼ全域で検出した。規模は径 2～3 m の不整円を呈し、深さ 0.5 m 前後である。

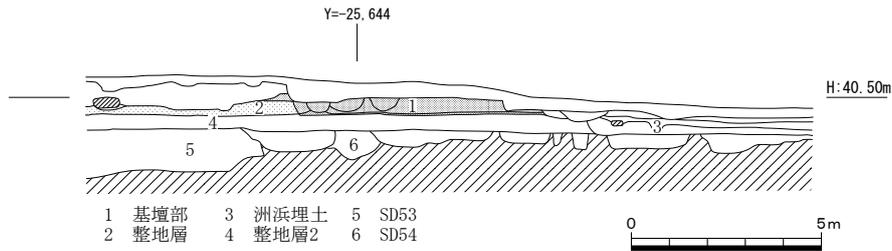


図67 5区北壁断面図 (1:200)

SD 53 は幅は約 11 m、深さ 1 m 以上を測り、北西から南東方向の流路である。

SD 54 は調査区北西から S 字に蛇行して南東方向へ延びる溝である。幅 1.2～1.4 m、深さ 0.6 m を測り、断面の形状は U 字状を呈す。出土遺物はなく時期は確定できないが、人為的に掘り込まれた溝と考えられる。

立会調査 4 区と 5 区間の北側で東西方向に並ぶ、根固め石を伴う礎石据付穴を 2 基検出した。残存径約 0.4～1.2 m を測る。

遺物 調査区全体で出土した遺物は整理箱にして 285 箱である。遺物の 9 割が瓦類で、土器類は 1 割程度である。

瓦類の中で軒瓦は小片を含めて約 600 点確認できた。その内容は平安時代後期が中心で、次いで鎌倉時代、室町時代のものが多いが、少量ではあるが平安時代前期、中期のものも含まれる。生産地は播磨産、京都産で、ほかに東海産、大和産が一部入ると思われる。(図 69) は礎石建物 1 の周辺および下層より出土した軒瓦の一部である。(1) は平安時代前期の洛北産である。(2・3・11・12) は平安時代後期、(16・17) は鎌倉時代で京都産である。(4～7・13～15) は平安時代後期で播磨産である。(8) は平安時代後期で東海産である。(9) は内区に「建□□年東□□□坊」の銘がある。鎌倉時代で大和産と考えられる。(10) は法金剛院の寺号が入る。鎌倉時代で産地は不明である。

土器類は 5 区で弥生土器、古墳時代の須恵器、奈良時代の土師器が SD 53、平安時代前期の土師器、須恵器、緑釉陶器などが整地層 2、平安時代中期の土師器、灰釉陶器が整地層 1 から少量出土した。洲浜部から平安時代末期から鎌倉時代の土師器がにぶい黄褐色砂層より出土した。

ほかに 4 区落込 12 出土の室町時代後半の瓦経の一部 (図 68) がある。大きさは縦 5.1 cm、横 5.8 cm、厚さ 1.3～1.5 cm を測り、経典の内容は法華経の序論に相当する『無量義経』の徳行品第一の第 39～42、48～51 行の下端部分にあたる場所である。

小結 今回の一連の調査成果は、法金剛院の主要遺構と下層遺構の礎石建物を発見したことである。

我等八萬之等衆	因是自高我慢除	能令衆生歡喜禮	無相之相有相身	而實無相非相色	如是等相三十二	表裏映徹淨無垢	踈疎不現陰馬藏	細筋鎖骨鹿膊腸	淨水莫染不受塵	八十種好似可見	一切有相眼對絕	衆生身相相亦然	虔心表敬感慇懃	成就如是妙色軀	俱共稽首咸歸命	慈悲十力無畏起	示爲丈六紫金障	毫相月旋頂日光	淨眼明照上下胸	唇舌赤好若丹粟	額廣鼻脣面門開	手足柔軟具千幅	臂脣肘長指直纖	腋掌合綬内外握	皮膚細軟毛右旋	胸表卍字師子臚	白齒四十猶珂雪	眉睫紺罽方口頰	旋髮紺青頂肉髻	方整照曜甚明徹	衆生善業因緣出
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

「無量義経」

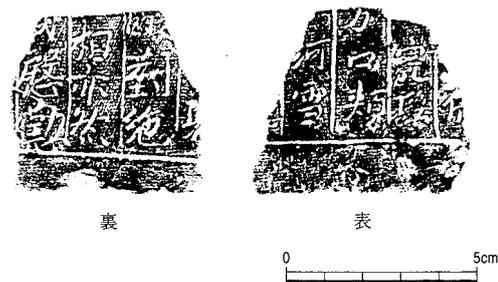


図 68 4 区落込 12 出土瓦経 (1:2)

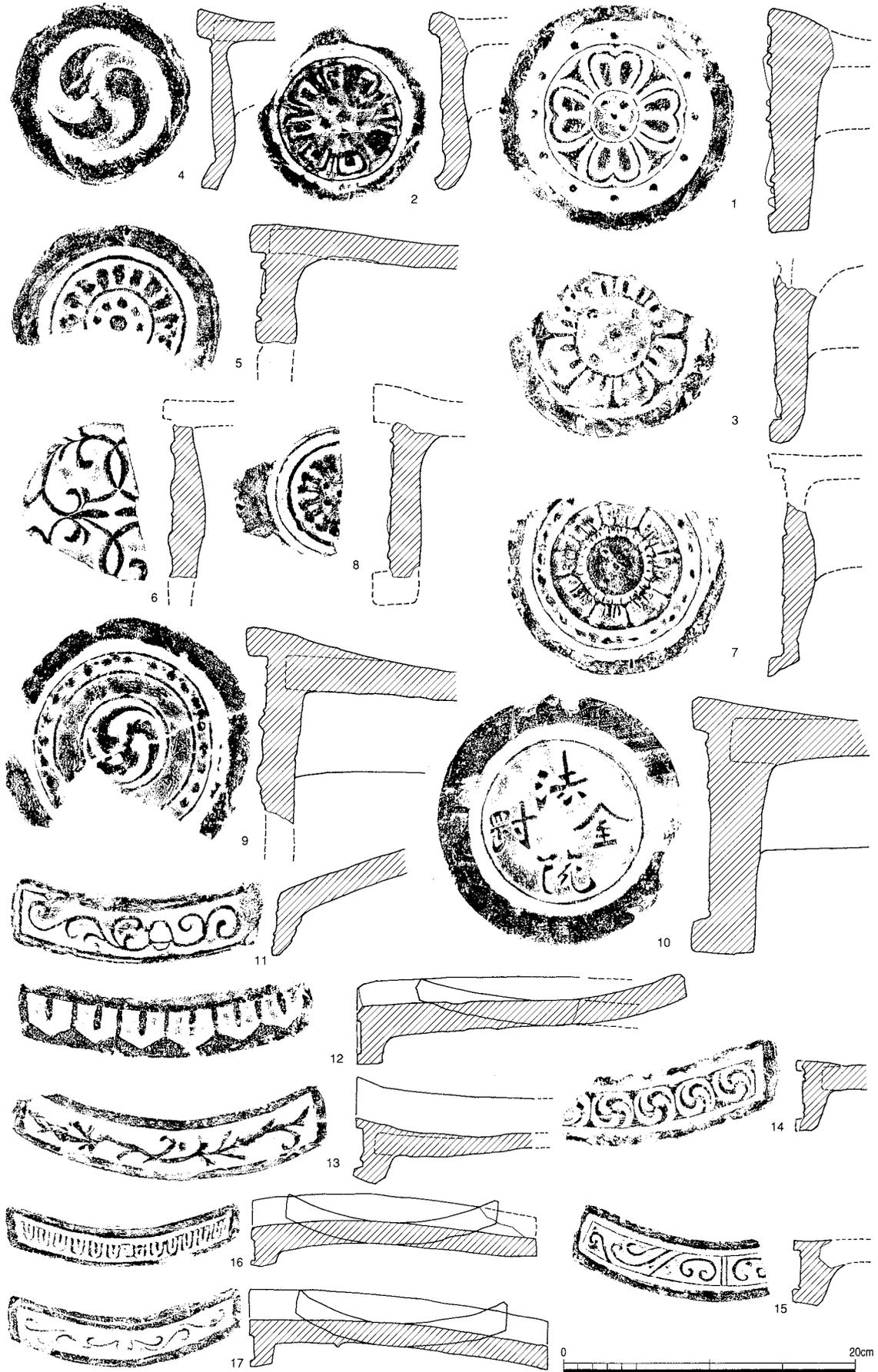


图 69 出土軒瓦实测图 (1:4)

版築基壇を伴う礎石建物（S B 1）は一辺 4.8 m で心礎をもたない形式で、柱間寸法から、兵庫県の一乗寺の「三重塔^{註2}」と、ほぼ同一規模の塔と考えられる。塔を検出した位置は池西岸際で、平安京の中御門大路の正面にあたる。この位置は『法金剛院古伽藍之図^{註3}』に描かれている塔の位置と従来の推定地^{註4}より北側に塔が位置していることも判明した。今調査の西汀線は北側へ北東方向に延びて J R 山陰線付近で北へ上がり、丸太町通で検出された西汀線と繋がることが確認された。これは、法金剛院周辺の明治期の「地籍図」に記載されている水田との地目界と一致しており、このことから記載の水田全体が旧園池の痕跡であることが確認された。さらに、旧水田は現地形からうかがうことができ、池全体の推定復原がほぼ可能である。基壇下層の礎石建物（S B 2）については、調査区北側の範囲外に延びているため建物規模など詳細は不明であるが、前調査で天安寺に比定されている建築遺構Ⅱの柱間距離と柱筋は同じであり、関連する遺構と考えられる。

今回調査は幅の狭い調査区ではあったが、旧境内を東西に横断したことで建物と園池遺構を明らかにすることができたが、法金剛院の 6 町に及ぶ寺域の一部に過ぎず、今後もこの周辺での調査を重ねる必要がある。（小松武彦・吉村正親）

註1 杉山信三「法金剛院発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』（1969）京都府教育委員会 1969

註2 承安元年（1171）造。

註3 法金剛院所蔵で寺伝によると、江戸時代初期の作。

註4 森 蘊「法金剛院の庭園について」『建築史』第1巻第1・2号 1939



図70 立会調査根固め石検出状況（東から）

17 上ノ段町遺跡 (図版2-2・37)

経過 本調査は京都市立蜂ヶ岡中学校の柔剣道場新築工事に伴う発掘調査である。調査地点が属している上ノ段町遺跡は古墳時代後期から飛鳥時代の集落跡として知られる遺跡である。

同校内で実施された過去2回の発掘調査では竪穴住居10棟、掘立柱建物5棟のほか、溝、土壇などが数多く検出されており、下層では縄文時代の遺構・遺物が検出されている。

遺構 遺構は121基を検出した。第1面で平安時代から室町時代の建物1棟、溝5条、土壇

10基、ピット64基などを検出した。第2面では古墳時代から飛鳥時代の遺構・遺物は認められなかった。縄文時代の遺構・遺物についても未確認である。

平安時代の遺構 建物1は、東西2間(柱間約2.0m)×南北3間(柱間約2.0m)以上の規模をもつ掘立柱建物である。柱穴の深さは0.1m前後と浅いが、明瞭な柱あたりが認められた。建物の中軸線が約5.5m離れた下記の溝2の中心線と完全に一致することから、溝と関連した建物と推測される。遺物は土師器と瓦器の細片少量が出土した。

溝2は、2次調査^{註1}で検出されたSD1に繋がる直線的な南北方向の溝である。この溝は造り替えが行われており3時期に分かれる。最も古い時期の溝2-3は、幅約0.8m、深さ約0.8m、鋭いV字形の断面を示す。出土遺物が少量で時期判断が難しいが、2次調査の例から平安時代中頃の溝と推定される。溝2-2は、溝2-3の埋没時の一時期に機能していたと考えられる溝で、中央東寄りの位置で幅約0.4m、深さ0.2mと細くなっていた。この溝では平安時代末から鎌倉時代後半の土師器や瓦器などが一括投棄された状態で出土した。ほかに、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、平瓦、粘板岩の石材なども出土した。溝2-1は、幅約1.5m、深さ約0.2mと幅広く浅くなる。なお、溝2-3と室町時代の溝1-2(後述)を除けば、ほかの溝・土壇・ピットなどは全般的に遺構の底部が浅く、室町時代末以降にこの付近は広範囲に削平を受けた可能性が高い。溝2-1も上部が削り取られたと考えられ、その構造や規模から敷地の境界などを示すために造られた区画溝と推測される。

溝3・4は、2条が北西から南東に並行して延びており、それぞれ幅1.0~1.5m、深さ0.2~0.3mである。底部には鉄分の酸化物が斑紋状の薄い被膜のようになって一面に検出され、ほかの溝にはみられない状態であった。土師器皿・碗などが出土しており、平安時代中期の遺構である。

ピット1・39は、ともに径0.3m前後、深さ0.1~0.2mの小規模な遺構であるが、土師器皿・甕、須恵器甕片のほか、10~15cm大の自然石の割石などを重ね、密につめた状態で検出された。ピット1とピット39は約2.0m離れているが、それぞれの土師器皿・甕が同一個体であること



図71 調査位置図 (1:5,000)

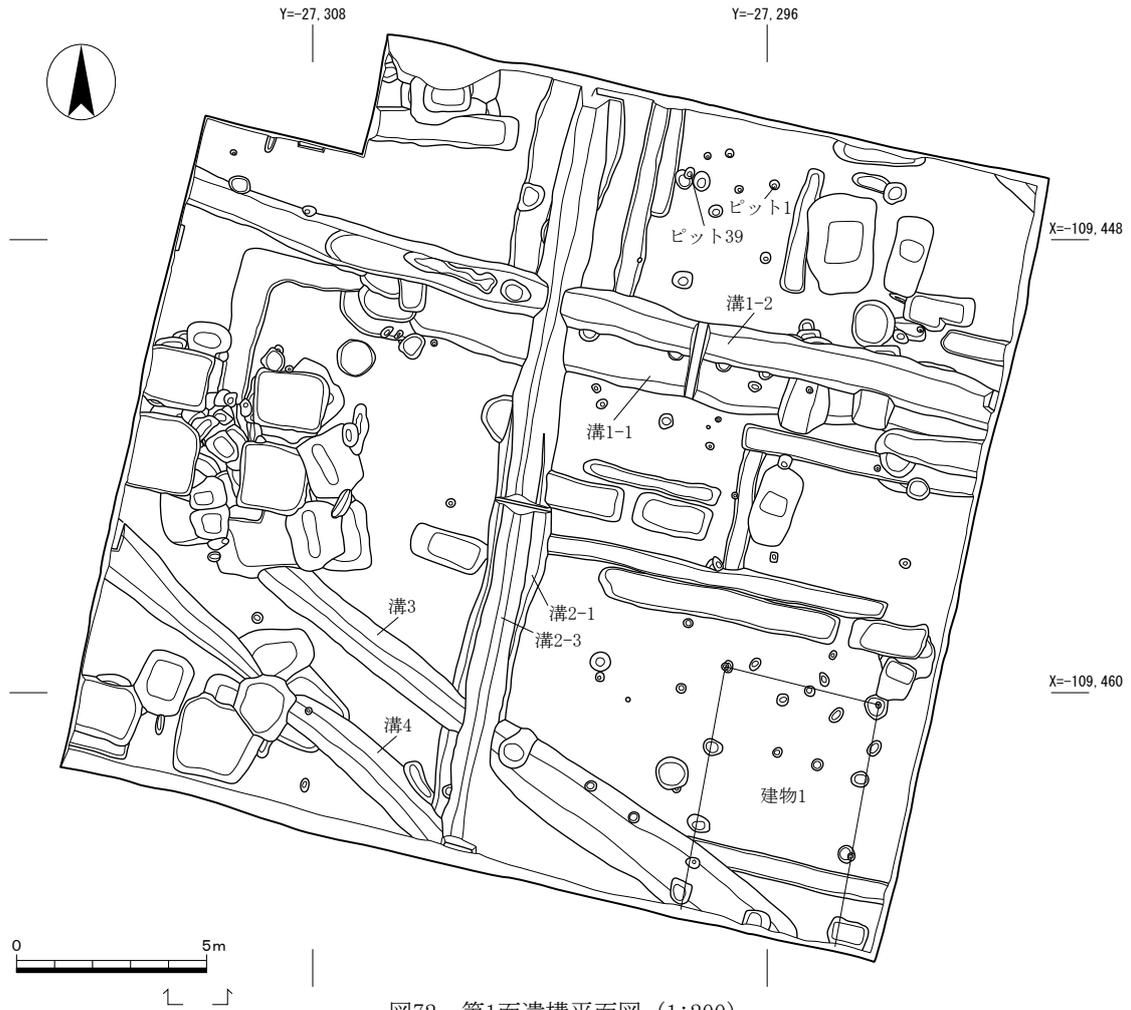


図72 第1面遺構平面図 (1:200)

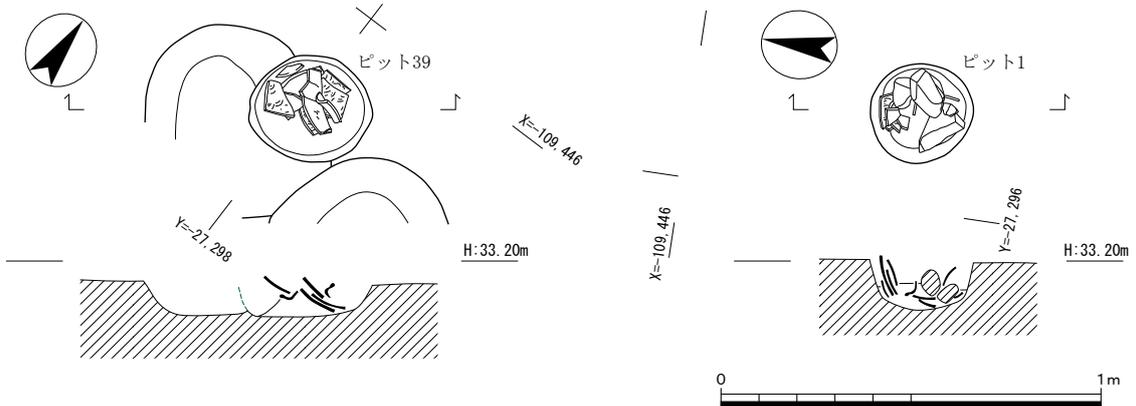


図73 ピット1・39実測図 (1:20)

から関連する遺構ともみられる。平安時代前期の遺構である。

室町時代の遺構 溝1は、東西方向にほぼ直線的に延びるが、西端では少し北に振れていた。溝は短期間に造り替えが行われており、溝1-2は幅約0.9m、深さ約0.8m、方形の断面形状を示し、溝1-1は幅約2.0m、深さ約0.2mで、幅の割合からすれば非常に浅い。この溝は溝1-2の北肩ラインの位置を踏襲して南に拡幅した状態で造り直されており、西側では浅くなって途切れていた。溝2-1と同様、幅に見合った深さをもって機能していたものと推測され、何

らかの区画に供された溝であろう。室町時代末頃の遺構である。

遺物 整理箱にして13箱あるが、内7箱は溝2から出土したものである。古墳時代後期から飛鳥時代の遺物は少量が混入品として出土した。

溝2-2から一括投棄の状態出土した平安時代末から鎌倉時代後半の土師器皿・高杯・甕、瓦器椀・皿・鍋・羽釜は当時の標準的な器種構成を示し、平安京域内では通常みられる出土状況とされるが、この付近の出土例としては数少ない好資料といえる。

注目される遺物として、まず、緑釉陶器の唾壺（溝2-2出土）があげられる。口縁部下半から頸部上端までの破片（約4～6cm大）で、0.6～0.8cmの厚さがある。平安時代前期の遺物と考えられる。緑釉陶器の唾壺は平安時代前期から中期の間だけ生産されたものであり、その出土例は極めて少ない。京都府内でも平安京跡で5例、長岡京跡で2例の報告を数えるに過ぎず、貴重な資料である。次に、輸入陶磁器の白磁水注（溝2-1出土）があげられる。直立した口頸部の破片（約4～5cm大）で、口径約6cm、厚さ0.4～0.5cm。器形の特徴は口縁部端面が施釉を削った露胎で、頸部上辺に3条のヘラガキ凹線を巡らし、その部分に幅約1.4cm、厚さ0.6cmの把手の上端を接合するというもので、中国産の陶磁器である。類似した器形の白磁水注が平安京左京六条三坊十三・十四町^{註2}の調査における平安時代後期の整地層で出土していることから、ほぼ同時期の遺物と考えられる。

小結 古墳時代後期から飛鳥時代の集落関連の遺構が未確認であったことについては、今回の調査地点が当時の集落の中心から少し離れた位置で、集落南西側の空閑地などにあたると想定される。むしろ今回の調査では平安時代以降の集落の全体像を復原する上で以下のような成果を得た。

(1) 2次調査で検出した平安時代中期の南北溝は今回の調査区でも検出され、さらに南方へ延びていくこと、鎌倉時代後半頃まで機能していたことなどが判明した。

(2) この南北溝では平安時代末から鎌倉時代後半の一括土器のほか、緑釉陶器唾壺や輸入陶磁器白磁水注などが出土しており、瓦の出土とも合わせ、東接する広隆寺との関連などについて、遺跡の理解を深める上で貴重な資料を得た。

(3) この南北溝に関連する掘立柱建物跡を検出したことから、付近には平安時代中期から鎌倉時代後半頃まで存続する集落あるいは邸宅などが存在していた可能性が高まった。

(4) 室町時代末頃の東西溝の検出は、集落の存続期間や空間構成などについて、さらに再考を促すものとなった。

(5) 平安時代前期の土器や割石を埋設したピット2基は、何らかの祭祀に係わる遺構とも考えられるが、ほかに報告例もなく、いまのところ断定は差し控えたい。 (長戸満男)

註1 平田 泰・小檜山一良「上ノ段町遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993

註2 大矢義明・小森俊寛ほか「No.61 (平安京左京六条三坊十三・十四町)」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ-1976年度-』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980

18 史跡大覚寺御所跡・名勝大沢池附名古曾滝跡（図版2-2・38）

経過 今回の調査は、史跡大覚寺御所跡・名勝大沢池附名古曾滝跡の整備事業に伴って実施されたものである。整備事業に伴う発掘調査は1984年より奈良国立文化財研究所・京都府教育庁教育委員会・京都市文化財保護課によって行われており、今回は、池北東部に位置する菊の島、庭湖石などの築造時期や当初の形態などを確認するために行われた。

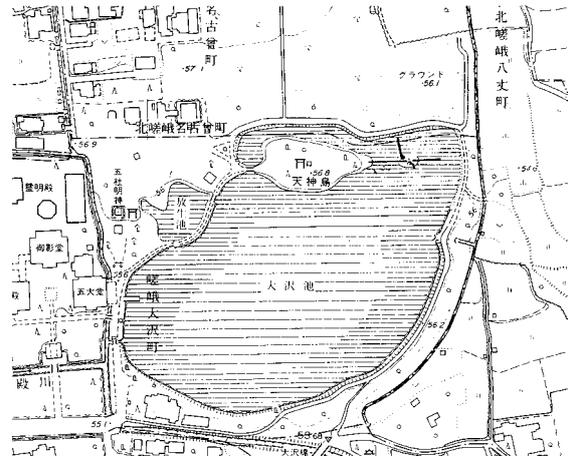


図74 調査位置図 (1:5,000)

遺構 各調査区ごとに概略を述べる。

1 トレンチ 池北岸の池底から菊の島の北西部に南北に設定した。池底では現代のヘドロ層以外検出されなかった。地山の検出面の標高は、トレンチ中央で54.0 m、北岸近くで54.3 mである。

島部では、近世から近代の0.3～0.8 mの盛土層の下から黄白色の粘土面を検出した。ここでは10～20 cm大の礫がまとまって検出されており、島築造時の洲浜と考えられる。ここに使用された礫は、丸い河原石ではなく角のある山石である。洲浜面の標高は、最高部で54.9 mである。地山は、灰黄色砂礫層であり、標高は54.2 mである。

2 トレンチ 天神島東端の池底から菊の島西半部に東西方向に設定した。池底では現代のヘドロ層以外検出されなかった。

島部では、1 トレンチのような粘土と礫による整地面はなく、代わりに黄褐色の精良な土をもって整地されていた。整地面より下層の島を構築する盛土は、細かい単位で粘質土と礫混じりの

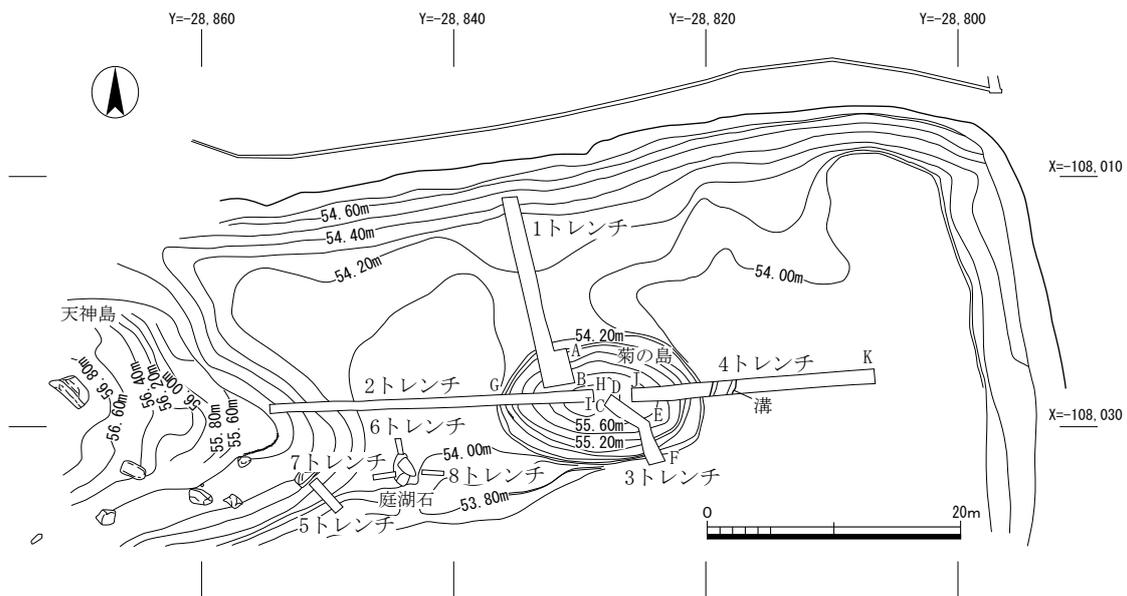


図75 トレンチ配置図 (1:600)

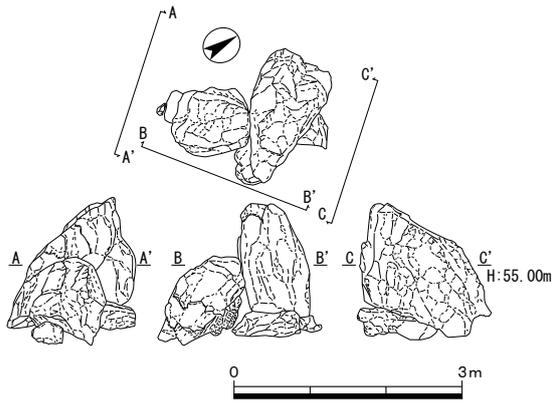


図76 庭湖石実測図 (1:100)

も高く標高 55.1 m、島構築時の積土は厚く各調査区の中で最大の 1.3 m を測る。特徴的なのは、積土の最下層に礫混じりの灰白色の粘土を約 0.4 m 積むことである。

島の構築土と地山の間には、鎌倉時代から室町時代の遺物を包含する厚さ 0.1 m ほどの腐植土層がある。腐植土検出面の標高は 53.8 m。地山面は北から南へ下がり、最低部が島の南側の 53.6 m である。

4 トレンチ 菊の島東半部から池に向かって東西方向に設定した。

島の状況は 3 トレンチとほぼ同様である。整地面の最高部の標高は 54.9 m。地山と島の構築土の間には、3 トレンチ同様、鎌倉時代から室町時代の遺物を包含する腐植土層がある。腐植土の検出面の標高は、最高部で 53.8 m、最低部で 53.6 m。

池部では、現代の島より東へ約 1 m の地点で、先に述べた鎌倉時代から室町時代の遺物を包含する腐植土の下層において、南北方向の溝、堰状遺構を検出した。溝の幅は約 4 m、深さ 0.5 m 以上を測る。堰状遺構は、溝中央部に、東西方向の石列とそれに並んで横に寝かした杭状の木製

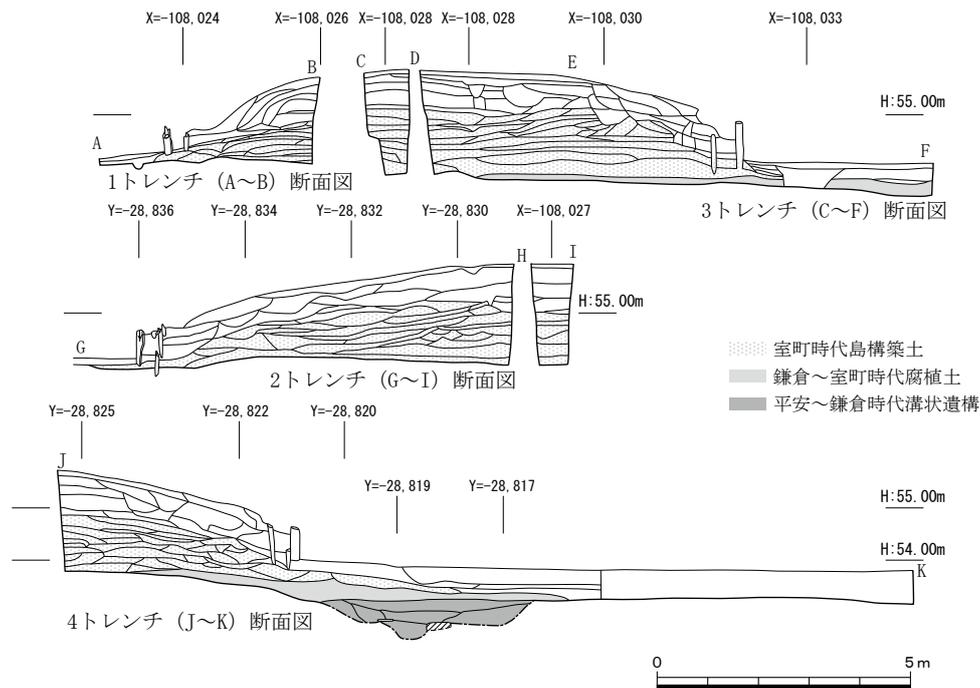


図77 菊の島断面図 (1:150)

土を互層に積み上げている。その構築順序は、裾部に土を土手状に積み、この後に島中央部に向かって土を入れ、これを繰り返すことによって高く盛り上げている。地山の標高は 54.1 m。

3 トレンチ 菊の島南東部から池に向かって「く」の字形に設定した。

島部では、現地表下約 1 m で島築造時の整地面を確認した。整地面は粘土ではなく黄褐色の土である。整地面はトレンチ中央部が最

品で構築されていた。石の検出面の標高はほぼ水平で 53.0 m で揃う。溝は堰状遺構保存のため、完掘していないが、堰状遺構は溝がある程度埋没した段階で構築されているようである。池底の地山面の標高は、トレンチ西部の最高部で 53.8 m、最低部は溝状遺構の肩部で 53.2 m。

5 トレンチ 庭湖石から西へ約 7 m にあるチャートの庭石南側に設定した。ここでは地表下 0.1 m で地山の灰褐色の砂礫層を検出した。この上には砂層が堆積しており、庭石は現在の表土であるこの砂層の上に直接置かれている。

6～8 トレンチ 庭湖石の東西と北側に 3 箇所設定した。現在のヘドロ層を除去するとすぐに地山層である。庭湖石は据え付けのための掘形をほとんどもたず、地山の上に直接置かれている。

庭湖石の周辺では礫を山に貼り付けて洲浜を形成している。庭湖石の南側では直径 1.4 m の範囲で礫は存在せず、約 0.3 m の石が根石風に存在し、庭石が据えられていたと考えられる。

遺物 遺物の出土量は、各調査区ともに少ない。土器は細片が多く、厳密な時期の確定が難しいものが多い。

島の構築土から出土する土器は細片が多いが、室町時代でまとまる。瓦は、平安時代のものはほとんどなく鎌倉時代後期の巴文軒丸瓦、剣頭文軒平瓦がその大半を占める。島構築土下層の腐植土層からも室町時代の土師器が出土している。4 トレンチの溝状遺構からは、9 世紀の緑釉陶器・灰釉陶器とともに 13 世紀前半の土師器がみられる。

小結 今回の調査の結果を菊の島、池部、庭湖石と大きく 3 つに分けてまとめておきたい。

菊の島 菊の島が現在の形に整えられたのは室町時代であることが判明した。築造当初の菊の島は、北側に洲浜をもち、高さは島中央部で現在よりも 0.8 m 低かったようである。

今回の調査で検出した菊の島の最高部の標高は 55.2 m、1 トレンチで検出された島北側の洲浜状遺構の検出面は 54.3～54.7 m である。

池部 3・4 トレンチの島築造以前の腐植土層は、検出面が標高 53.8 m であった。この標高が菊の島築造直前の池の水位を示すものと考えられる。4 トレンチで検出した 13 世紀前半の溝状遺構は、その位置と土の堆積状況から過去の調査で確認されている遣水遺構の延長である可能性が高い。

庭湖石 庭湖石は地山に直接置かれているような状態であり、現在の状態に据えられたのがいつであったのか、調査では明らかにすることはできなかった。菊の島築造時の池の推定水位は、洲浜の検出面からすると標高 54.3～54.5 m、庭湖石が室町時代に今の姿であったならば、その下部が水に浸るくらいとなる。

菊の島を中心とした大沢の池北岸の現在の景観は、今回の調査で平安時代の池の堆積土を検出していないこと、4 トレンチの溝が遣水の延長と考えられることなどから、菊の島が築造された室町時代以降のものであろう。

(南 孝雄・桜井みどり・前田義明・清藤玲子)

経過 窯跡は、天智天皇陵の真西の丘陵部に位置する。開発に先立ち京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施し、灰原の一部が確認されたため発掘調査の運びとなった。現地は竹藪であったが、表土が薄いことや急斜面であることから重機が使えず、人力で掘り下げを行った。試掘で検出した灰原が丘陵斜面に広がることを確認し、順次上方に調査区を広げた結果、丘陵の頂上付近で窯体を確認した。



図78 調査位置図 (1:5,000)

窯体内と灰原の掘り下げを行い、内容が判明した9月9日に現地見学会を開催したところ、400名以上の参加者があった。その後、写真撮影、窯体の実測、断ち割り、壁面の採拓・採集などを行った。また、周辺に別の窯の存在が想定されたため、北側は手掘りで8mほど調査区を延長し、南側は重機を用いて試掘を行った。さらに、露出する崖面を清掃し断面観察を行ったが、いずれも窯体や炭層は確認できなかった。

遺構 飛鳥時代の須恵器窯を1基検出した。窯体は天井が遺存し、保存状態は良好である。窯体は岩盤を削り抜いて築造した窖窯で、窯体の全長は6.8m、幅は燃焼部で0.85m、焼成部で1.15m、高さは焼成部で最高0.85mある。窯体は傾斜角度約27°の丘陵斜面頂上部に築かれている。焚口付近の標高は78.50mで、下方の道路との比高差は約12mほどある。

燃焼部は奥壁より4.5m付近の傾斜変換点から6.5m付近までの範囲である。床面は赤褐色を呈する焼土を含む堅い面が最後の操業面である。この面下に最低2面あり、図79のアミで示したものが最初の操業面である。その範囲は奥壁より4.5～5.2mである。このように、燃焼部の重なりは非常に少ない。燃焼部のほぼ中央、奥壁から5.5m付近で排水溝状の施設を検出した。長さ約4.0m、幅0.3m、深さ0.15mあり、前庭部にかけて掘られる。溝内には炭の混じった泥土が堆積し、須恵器も含まれる。

焼成部床面は岩盤をそのまま用いる。傾斜は23°前後ある。床面に補修の形跡はなく、須恵器も残されていない。壁面も岩盤をそのまま用いるが、各所で剥落がみられる。奥壁より3.5m付近の南壁ではスサ入り粘土の補修痕跡がみられた。明確な補修痕跡はこの箇所のみである。しかしスサ入り粘土の窯壁片は灰原から多数出土しているため、本来はさらに補修されていたものとみられる。天井は奥壁から4.0mまで残存する。最も厚い部分で0.7mある。壁面は熱を受け固く変質している。奥壁より3.5mから手前の天井は、落下した状態であった。

煙り出しは直径約0.9m、床面からの立ち上がりは約0.5mある。天井からの立ち上がりが遺存しないため、上半部は相当削平されたとみられる。煙り出しの壁面は大半が剥落し、この分直径が大きくなっている。煙り出しにとり付く溝状の遺構は検出していない。

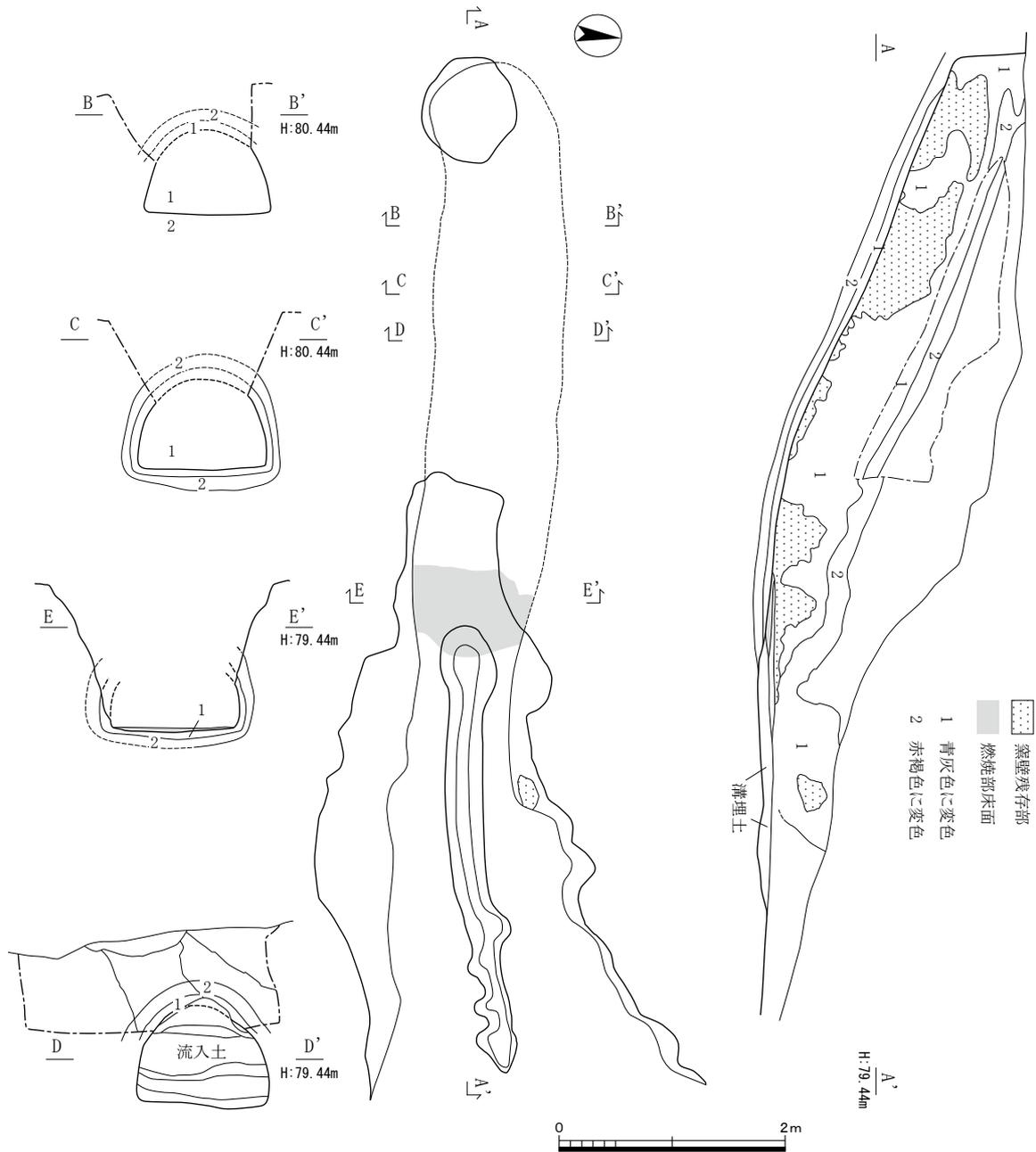


図79 窯体実測図 (1:60)

灰原は窯の下方に広がり、長さ 14.5 m、幅 11.0 m の規模をもつ。炭層の厚さは平均 0.2 m、最も厚い箇所では約 0.4 m ある。灰原内には須恵器を多量に含む。須恵器は、主に上層部から出土した。灰原下で小規模な焼土層を 4 箇所検出した。厚さ 0.1 m あり、すべて地山直上に堆積する。焼土中には須恵器は含まない。

遺物 遺物整理箱 29 箱の遺物が出土した。須恵器は 22 箱ある。各器形を含む。

杯は古墳時代に通有の杯（以下、杯H）と律令時代になって盛行する杯（以下、杯G）がある。杯Hが圧倒的に多い。杯H（図 80 - 1 ~ 5）の口径は 10 cm 前後で、立ち上がりは低い。底部の調整は大半がヘラケズリしない。杯G（11 ~ 15）は底部をヘラケズリするものが多い。杯H蓋（6 ~ 10）は杯Hと同量あるが、杯G蓋（16 ~ 20）は極めて少ない。杯H蓋の天井部はヘラケズリ

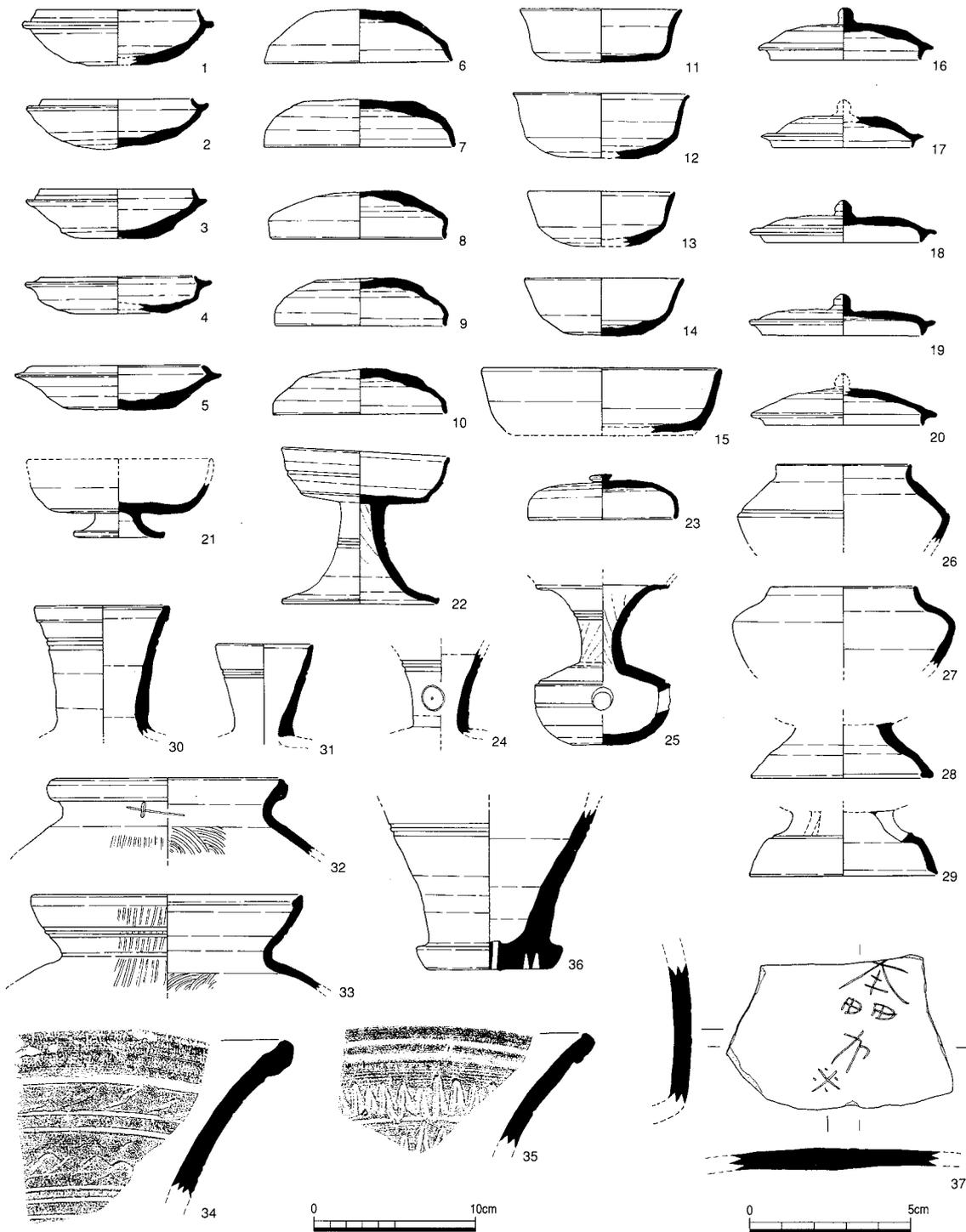


図80 出土須恵器実測図 (1:4) (1:2)

しないが、杯G蓋はヘラケズリし、中央に乳頭状のつまみを付ける。つまみは5例確認できる。

高杯には、有蓋高杯と無蓋高杯がある。無蓋高杯では長脚の脚部をもつものが10個体ほど確認できる。全容が判明するのは(22)のみである。杯H蓋を逆さまにし、これに低脚を付けた高杯(21)もある。短頸壺(26・27)は口縁部から肩部にかけての破片が数個体あり、これに組み合う蓋もある。脚付長頸壺は口縁部(30・31)・胴部・脚部(28・29)があるが全容は判明していない。蓋(23)が数個体あり、天井に扁平なつまみをもつ。甕は大型と中型がある。口縁部は

20 個体ほど確認できる。大型甕 (34・35) の口縁部は凹線文で区画した中に粗雑な波状文を施す。中型甕 (32・33) の口縁部に文様はない。平瓶はゆるい稜線の肩部をもつ。つまみは半環状が 1 例、浮文を 2 個貼り付けたものもある。天井を塞ぐ円板内面には指紋が残る。提瓶は全容は不明であるが、カキメを施す破片が数個体ある。甕 (25) は小さな体部に大きく開く口縁部をもつ。甌は把手が 1 対ある。挿鉢は十数個体あり、(36) は底部外面に鋭い刃先で半貫通の孔を多数あけたものである。底部に孔をあけたものはこの個体のみである。装飾器台は浅い鉢部にミニチュアの長頸壺や無蓋高杯を配置するもので、この器形としては最も後出の形態を有する。

このほか、注目すべき遺物として、頸部にコンパス文を施す個体 (24) と、線刻文字をもつ個体 (37) がある。前者は甕か壺とみられる。後者は平瓶の肩部外面に 4 文字以上の漢字を刻み、「奉 田田 加 米」と判読できる。後の 2 文字を「カメ」と読み、器名を記したと想定する。

ヘラ記号は杯 H・杯 G・杯 H 蓋・杯 G 蓋・甕 (中型)・平瓶について「×」印を確認できる。鉄器が 4 点ある。内容は刀子 1 点、工具の柄部 1 点、容器の口縁部 2 点である。

また、工具痕跡が明瞭に観察できる壁面を採集している。

小結 飛鳥時代の須恵器窯 1 基を調査した。遺存状態は良好で天井・煙り出し・焼成部・燃焼部・前庭部が完存する。灰原から須恵器が多数出土し、当該時期の様相を知る好資料を得た。

窯体は斜面の上方に築かれていたが、これは窯を築く際の地質条件が上方にあったためと考える。窯体床面は重複しない。壁面の補修痕跡も極めて少ない。燃焼部の床面においても最低 2 面以上の重なりを確認した。灰原は小規模で炭層も比較的薄い。以上から、本窯が比較的短期間の操業であったことが想定できる。

次に出土した須恵器は、大阪陶邑古窯址群の TK 217 型式に属する。また最近の飛鳥地方の土器編年では 7 世紀中葉に近い年代が想定される。本窯跡と同時期の窯跡として山科では大峰窯跡・朝日稻荷窯跡が、岩倉では幡枝元稻荷窯跡、深泥池東岸窯跡がある。器形の構成は今回の出土品と同じであるが、大峰・朝日稻荷両窯跡のものは本窯より古い様相がみられる。また幡枝元稻荷窯跡出土のものは細部の特徴が異なる。

本窯跡の位置する日ノ岡は、山科条理の「陶田里」に包括される。「陶」の地名は陶器生産との関連が考えられ、また中臣 (藤原) 鎌足の居宅である「陶原家」(『帝王編年記』) との関連性も指摘できる。遺跡を中心にみると、山科盆地北端の丘陵部には須恵器窯跡とともに製鉄遺跡が多い。これらは谷間ごとに立地し、鉄滓やファイゴ羽口が採集されている。須恵器など窯業遺跡と製鉄・鑄造遺跡は集中して立地する傾向にあるため、当該地が手工業生産の拠点的な位置を占めていた可能性がある。飛鳥時代の山背の動向を考える上で重要な遺跡群として、今後とも注視する必要がある。

(丸川義広・内田好昭・平方幸雄)

20 安祥寺下寺跡 1 (図版3-3・41)

経過 調査地は嘉祥元年(848)に創建された安祥寺下寺の推定地である。調査は山科駅前再開発事業に伴う3次調査にあたる。調査地は平成5年度に実施した1次調査地の南側、旧三条通(旧東海道)に面した地点である。調査の結果、調査地の南半は大きく攪乱を受け、遺構の残りはよくなかったが、平安時代中期から鎌倉時代初期の遺構群を確認することができた。

遺構 基本層序は、北壁で上から現代盛土層約10cm、旧耕作土層10~20cmで、地山にいたるが、部分的に平安時代の包含層(5~20cm)が旧耕作土の下にみられる。検出した遺構は平安時代中期から鎌倉時代初期のもので、掘立柱建物・南北溝・土器溜・集石遺構・土壇などがある。

掘立柱建物は溝1の東側で重複した状態で検出している。ただし南側が大きく攪乱されており、また密集して多くの柱穴が検出されたため、個々の建物としてのまとまりは把握できていない。

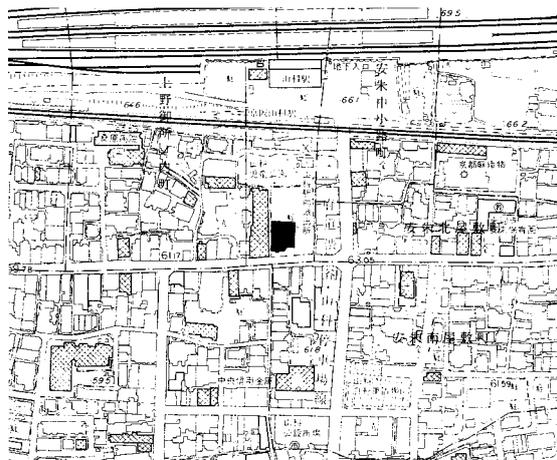


図81 調査位置図 (1:5,000)



図82 遺構平面図 (1:200)

平安時代中期から鎌倉時代初期にかけて、数次にわたる建て替えが行われたようである。中には柱穴に土師器を置くもの(P170・P171)があり、P170は10世紀後半、P171は11世紀中葉の土器を出土している。

土器溜3は東側が攪乱によって壊されており、現状は南北長1.23m、東西残存長0.35m、深さ0.1mある。ここからは土師器皿と銅銭などが多数出土した。

溝1は1次・2次調査で検出したもの同一の南北溝である。規模は最

大幅約 2.3 m、深さ 1.4 m を測り、これまで検出した総延長は 64 m になる。方向は、北で約 4 度西に振る。ここからは飛鳥時代から平安時代の土器が出土しているが、最も新しいものは 12 世紀末から 13 世紀初めの土器であり、溝の廃絶時期もこの頃と考えられる。

遺物 整理箱 21 箱分の遺物を出土している。遺物は飛鳥時代や奈良時代の須恵器もあるが、ほとんどは平安時代中期から鎌倉時代初期のものである。土器類には須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、陶器、輸入陶磁器がある。そのほか転用硯、平瓦、埴埦、銅銭、刀子、釘、鋳滓、鉛片、砥石、炭化米などが出土している。

土器溜 3 から出土した土師器皿は、22 個体以上あり、口径 10.2 ～ 10.8 cm、器高 1.1 ～ 1.5 cm のほぼ同型のもので、11 世紀前半に編年される。このうち内面に広く煤と紐の痕跡が付着したものが 5 個体あり、煤の飛沫が付着したのも多数ある。一部は灯明皿として使用されていたとみられる。銅銭は遺存状態がよくないが、少なくとも 19 枚が確認できる。すべて 958 年初鑄の「乾元大寶」である。銅銭は 6 枚分と 9 枚分が接続して出土したが、これは藁紐によって束ねられていた。銅銭は腐食が著しく土ごと取り上げたが、その際の土中から炭化米を確認している。炭化米の存在は現場では気付いておらず、今後この種の遺構の調査では注意すべきだろう。

このほか遺物として注目されるものに鋳滓・鉛片そして埴埦と考えられる小片などがある。鉛片が出土した P 358 からは 11 世紀中葉に編年される土師器皿が出土している。

小結 本調査では平安時代中期から鎌倉時代初期の遺構を確認した。調査区東側で柱穴群が集中して検出されており、平安時代中期以降、継続して建物が造営されたと考えられる。また一連の調査で検出されていた南北溝（溝 1）が、旧東海道まで続いていることを確認した。土器溜 3 では、灯明皿として使用されていた痕跡のある土師器皿・乾元大寶・炭化米が出土しており、その内容から何らかの祭祀に伴う遺構と考えられる。ほかに鋳滓・鉛そして埴埦など鑄造に関連すると考えられる遺物が出土している。当地の建物の性格を考える上で一つの資料となるだろう。（高 正龍・津々池惣一）

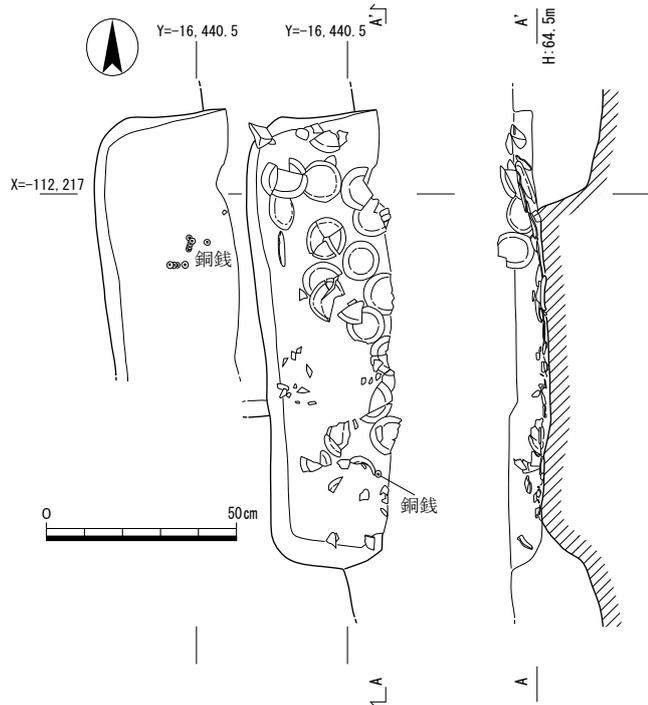


図23 土器溜3実測図 (1:20)



図84 土器溜3出土土師器

21 安祥寺下寺跡 2 (図版3-3)

経過 本件は、山科駅前の再開発事業に伴う発掘調査である。調査対象地は、京阪山科駅舎の東側にあたり、京阪京津線の線路南側に沿っている。

調査地は、平安時代の寺院「安祥寺下寺跡」の推定地にあたる。平成5年度に本調査区の南東において地下鉄東西線工事に伴う発掘調査を実施し、平安時代前期の木炭木槨墓などを検出する成果をおさめた。今回は昨年度に引き続きそれらの遺構の広がりを確認するとともに、史料に見える安祥寺下寺の遺構の確認を目的に実施した。

遺構 基本層序は、上から、現代盛土層（厚さ40～50cm）、旧耕作土層と床土層（厚さ約30～55cm）であり、床土層直下はマンガンが凝固し固い面をなす。場所により高低差はあるが、この下10cmほどまで整地層と考えられ、その下が黒褐色の混礫砂泥層の地山となる。遺構は整地層の上面および地山に切り込んだ状態で認めた。ただし整地層では遺構の検出が困難であったため、-10cm、-20cmと順次掘り下げを進めて検出した。現地表から地山面までの深さは、北側で約105cm、南側で約75cmである。調査区は基本的に北から南に、特に南西方向に対して低くなっている。

検出遺構は、縄文時代の土器の小破片を含む土壙2基、落込み状の土壙3基、多数の柱穴がある。遺構登録数は116基を数える。

土壙2は調査区東寄りに位置するもので、北東から南西方向に長い不定形な土壙である。長径270cm、短径127cm、深さ60cmを測る。土壙50は調査区中央部にあり、土壙110と重複する。長径164cm、短径126cmで、深さ45cmを測る。柱穴群は根石をもつものがいくつかある。検出

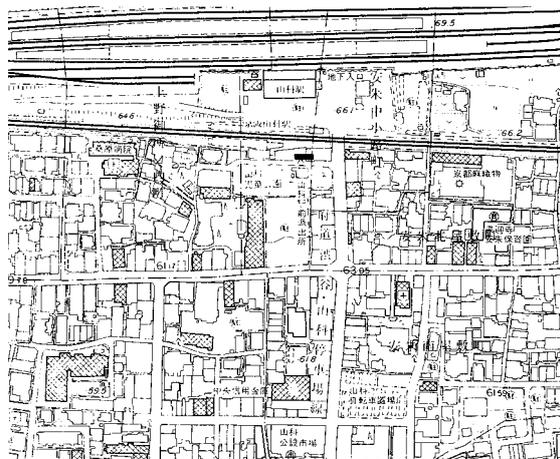


図85 調査位置図 (1:5,000)

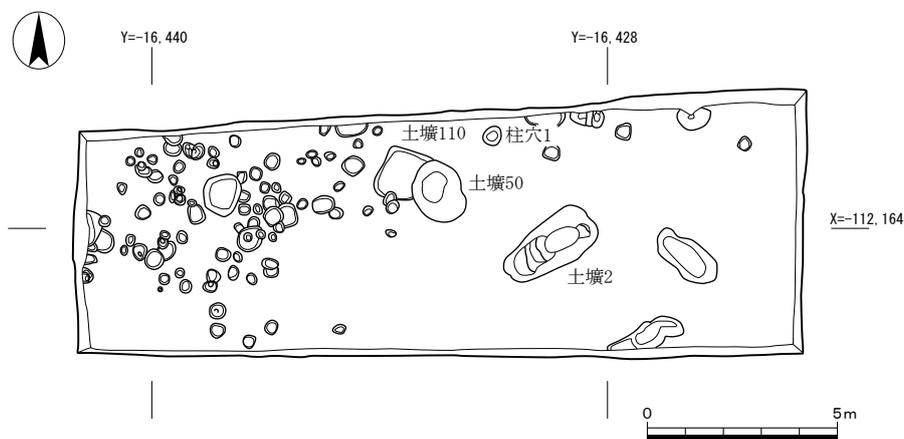


図86 遺構平面図 (1:200)

したものはいずれも径 30 cm以内のものであり、建物としてのまとまりでは把握できなかった。

遺物 土壌 50 からは縄文時代の土器片が出土した。突帯文土器の小片で、縄文時代晩期の土器に類似する。柱穴 1 からは灰釉陶器の小片が 1 点出土しているのみで、平安時代のものはこれだけである。主な遺物は以上である。遺物整理箱で 1 箱であった。

小結 調査の結果、平安時代前期の墳墓や安祥寺下寺に関する遺構は検出できなかった。また、平安時代とおぼしき柱穴群を検出したが、建物として特定することはできなかった。縄文時代の土器を伴う楕円形に近い土壌を 2 基検出した。性格は不明であるが、平成 6 年度調査 (94 R T - F S 2) の 2 区での縄文時代晩期の埋甕の検出もあり、この地域に縄文時代晩期の生活痕をみいだしたといえる。

今回の調査をもって、山科駅前再開発事業に伴う一連の埋蔵文化財調査 (1993 年 5 月開始) を一応終了した。調査の主目的であった平安時代、嘉祥元年 (848) に創建という推定安祥寺下寺跡の中心伽藍は検出し得なかった。しかし、一連の調査で縄文時代晩期の竪穴住居と埋甕遺構、飛鳥時代の竪穴住居や土壌墓、奈良時代の掘立柱建物、平安時代前期の木炭木槨墓や掘立柱建物、さらに平安時代から鎌倉時代に属する柵列・建物・井戸・石組遺構・南北溝などを検出できた。さらには江戸時代に属する柱穴や土壌群も多く検出されており、この地域が古く縄文時代から連綿と生活史を刻んできたことを物語っている。 (津々池惣一・高 正龍・能芝妙子)



図 87 調査区全景 (東から)

22 南春日町遺跡 29・30次調査 (図版3-1・42・43)

29次調査

経過 今年度の調査は、京都市西京区大原野南春日地区および灰方地区で実施される平成7～10年度土地基盤整備事業に伴う試掘・立会調査である。調査対象面積は28㎡、調査は、1996年1月5日から3月31日まで実施した。

遺構 平成7年度ほ場整備事業区域は、1981年の塔の調査、および1985年の建物、流路の調査地の東側部分にあたり、6箇所のグリッドを設定し実施した。結果は、出土遺物も少量で明確な遺構は確認できなかった。平成8年度ほ

場整備事業区域は、25箇所を設定し試掘調査を実施した。平成9年度ほ場整備事業区域は、28箇所を設定し試掘調査を実施した。その結果、平成9年度ほ場整備事業区域で奈良時代前期から中期の建物とみられる明確な柱穴や土壌状遺構が確認できた。これに伴う土器類なども数点出土した。その後、この成果を踏まえ30次発掘調査を実施した。平成10年度ほ場整備事業区域は、20箇所を設定し試掘調査を実施した。

遺物 出土した遺物は、整理箱10箱で大半が土器類である。各遺物の出土状況は、遺構から出土したものは少なく、大半が包含層からの出土である。遺物の内容は奈良時代の土師器、須恵器、平安時代の土師器、須恵器、輸入陶磁器、緑釉陶器、中世の陶磁器、瓦器などである。

小結 今回の大原野地区試掘調査は79箇所のグリッドを設定し、その内20箇所のグリッドで遺構、遺物を確認した。平成9年度ほ場整備事業区域では灰方地区を南東に流れる蛭川と椎ノ木川の間位置する台地に、奈良時代の集落遺構を確認した。

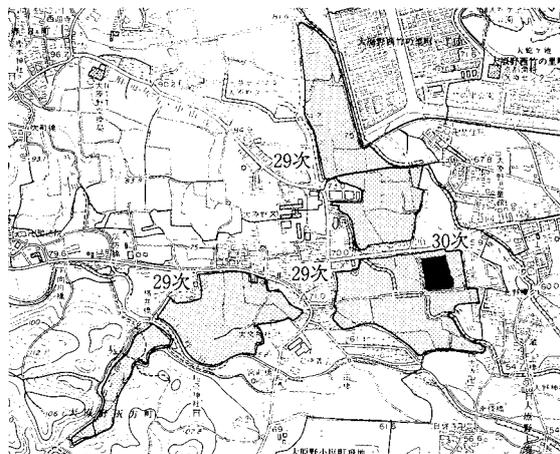


図88 調査位置図 (1:20,000)

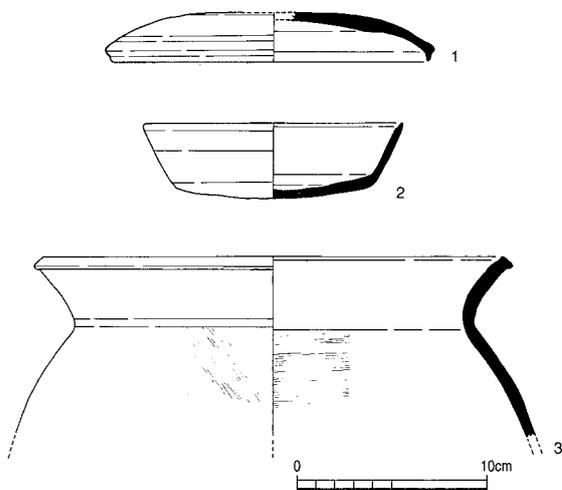


図89 No.44-1 グリッド出土土器実測図
(1・2須恵器 3土師器) (1:4)

30次調査

経過 今回の調査は、29次試掘調査で奈良時代の集落遺跡と思われる遺構が数基確認された試掘地点を中心に、発掘対象面積6,000㎡に対し調査面積2,500㎡のトレンチを設定、発掘調査を実施するに至った。調査は1996年4月1日から5月31日まで実施した。調査地は灰方地区を南東に流れる蛭川と椎ノ木川の間位置する台地である。トレンチ

は北から1・2・3・4と設定し、3・4トレンチは西側にも設定した。1トレンチから4トレンチまでの高低差は1mほどでわずかに南西に傾斜している。

遺構 奈良時代の建物14棟と縦板組井戸1基、土壌数基を確認した。検出された遺構は便宜上、建物番号は全トレンチを通して記し、それ以外の遺構は各トレンチごとに通し番号とした。

1トレンチ西側部分からは、2間×4間東西棟SB4（東西庇）を検出、SB4は内部に甕を据えたと思われる土壌を6箇所確認した。東側部分からは、2間×3間総柱建物SB10、2間×3間東西棟SB11を検出した。また、2トレンチにまたがる3間×9間南北棟SB5を検出したが、この建物は柱穴の配列が不規則な部分もある。

2トレンチ西側部分からは、2間×4間東西棟SB1、2間×4間東西棟SB2、2間×4間南北棟SB3を検出した。なお、SB1は柱穴掘形も80cmと大きく深度も平均80cmと深い。中央部分で方形板組み井戸SE1と、建物SB5の南端部分の配列を検出した。

3トレンチ東側部分では、2間×3間南北棟SB8、西側部分では2間×3間の東西棟SB12、2間×1間以上の東西棟と思われるSB13を検出した。

4トレンチでは、中央部分で2間×2間総柱建物SB6、2間×3間以上の南北棟SB14、2間×3間南北棟SB7、1間×4間南北棟SB9を検出した。西側では溝1条と土壌2基を検出した。

建物方位は全体に約5°から最大20°西向に振っており、(SB1・SB2・SB3・SB4・SB5)(SB10・SB11)(SB7・SB9・SB12・SB13)(SB6・SB8)の建物群は、各々方位が近い。方位の振れから時期差を示すものであると思われるが、成立面は同一面であり、また遺構からの出土遺物も少なく、詳しくはわからない。また、建物SB4北側柱穴列とSB1南側柱穴列の距離は約30m(約100尺)で、建物SB4北側柱穴列とSB2北側柱穴列は約15m(約50尺)である。同じくSB12北側柱穴列とSB7南側柱穴列の距離も約30m(約100尺)

表1 建物一覧表

遺構番号	梁間間数	桁行間数	桁行長さ	梁間長さ	棟方向	建物方位	備考
SB1	2間	4間	7尺	7尺	東西棟	N 15° W	
SB2	2間	4間	8尺	8尺	東西棟	N 13° W	
SB3	2間	4間	6尺	6尺	南北棟	N 12° W	
SB4	2間	4間	7尺	7尺	東西棟	N 15° W	東西庇
SB5	3間	9間	7尺	6尺	南北棟	N 12° W	
SB6	2間	2間	6尺	6尺		N 5° W	総柱建物
SB7	2間	3間	5尺	6尺	南北棟	N 17° W	
SB8	2間	3間	7尺	7尺	南北棟	N 7° W	
SB9	1間	4間	6尺		南北棟	N 16° W	
SB10	2間	3間	6尺	6尺	南北棟	N 17° W	総柱建物
SB11	2間	3間	7尺	6尺	東西棟	N 20° W	
SB12	2間	3間	7尺	6尺	東西棟	N 14° W	
SB13	2間	1間以上	6尺	6尺	東西棟	N 17° W	総柱建物
SB14	2間	3間以上	5尺	5尺	南北棟	N 18° W	

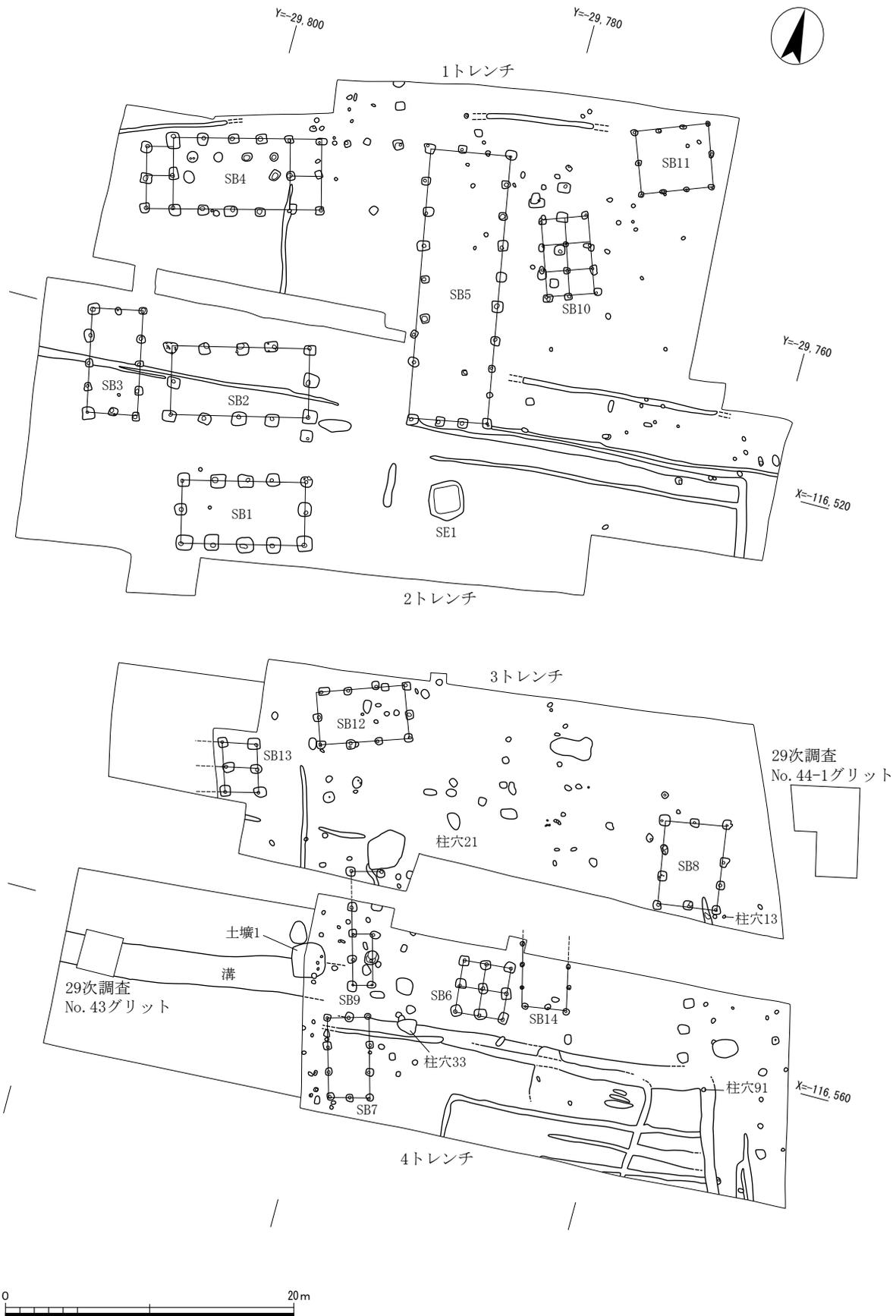


図90 遺構平面図 (1:400)

である。S B 8 北側柱穴列と S B 6 南側柱穴列の距離も約 15 m (約 50 尺) であり、また井戸はそれらの建物で囲むように配備されていることから、これらの建物の配置に規則性がうかがわれる。また井戸は 270 cm の深度で縦板組みを確認した。調査での安全を考慮して完掘はさけ、砂を入れ養生後、埋め戻した。井戸からは平安時代の遺物が多数出土している。

遺物 出土した遺物は、整理箱で 17 箱で大半が土器類である。内容は、奈良時代の土師器 (図 91 - 7)、須恵器 (1 ~ 6)、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器 (白磁)、瓦、中世の瓦器、施釉陶器、焼締陶器などである。

小結 今回の調査で検出した奈良時代の建物群は、集落遺跡を解明するうえで貴重な資料といえる。また、調査地は古山陰道の上里に近く、母底里、駅家里の隣接地^註であるが、今回の調査では条里に関する遺構は明確には検出されなかった。今回の集落遺跡が古山陰道の駅家などに関係する可能性もあり、今後の周辺の調査成果と合わせて考察したい。

(永田宗秀)

註 村井康彦編『京都・大枝の歴史と文化』(株) 西洋環境開発 1991

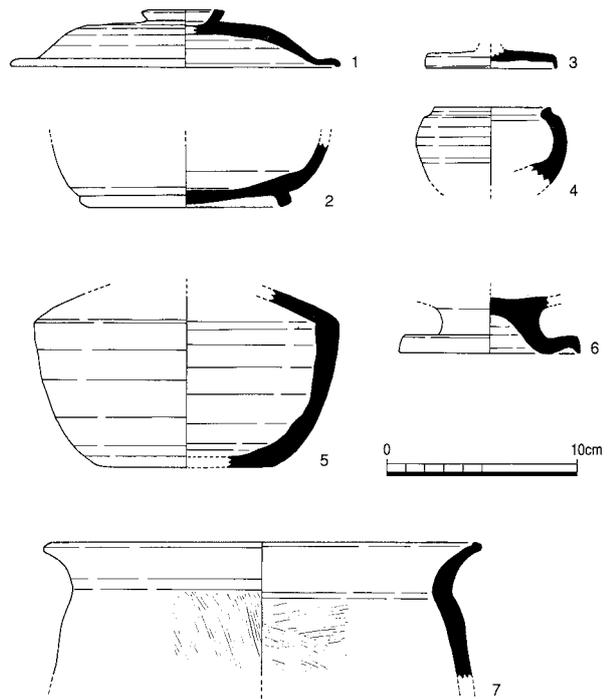


図 91 出土土器実測図 (3 トレンチ 1: 重機掘削中 2: 柱穴 21 3: 柱穴 21 3: 柱穴 13 4 トレンチ 4: 柱穴 91 5: 溝 6: 土壇 7: 柱穴 33) (1:4)



図 92 3 トレンチ出土須恵器蓋

第2章 試掘・立会調査

I 平成7年度の試掘・立会調査概要

平成7年度の原因者負担による試掘・立会調査の委託契約件数は、試掘調査が9件、立会調査が14件、計23件である。他に、発掘調査と合わせて実施した試掘・立会調査が3件ある。これらには、試掘・立会結果を含め第1章で扱ったものや、『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』で報告済みのも、継続調査のため次年度の調査概要で報告予定のものがある。また、遺構・遺物の希薄なものは、試掘・立会調査一覧表（表6）の記載にとどめた。

その他、文化庁国庫補助事業である京都市内一円の立会調査（表6-24）が507件あるが、これは、平成7年4月から12月実施分は『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度で、平成8年1月から3月実施分は平成8年度で報告されている。

平安宮・京跡 左京三条四坊（1）の立会調査では、平安時代前期の富小路が検出され、室町時代前半期の遺構群の分布状況を確認した。右京三条一坊1（2）の試掘調査では、朱雀大路の西側溝や宅地を画する溝などを検出している。右京三条一坊2（3）の試掘調査では、園池の東岸の洲浜を検出することができた。右京四条四坊（4）の試掘調査、右京六条四坊（5）の試掘調査では、湿地の堆積土を確認している。

その他の遺跡 中臣遺跡の東部、山科川西岸の東斜面の段丘上は、調査が少なかったが、中臣遺跡（6）の立会調査を行い、古墳時代後期から飛鳥時代の堅穴住居や溝、土壙などが検出された。この調査によって、この地域にも良好な遺構が残存していることが判明した。平安時代前期の宮所用瓦を焼成した上ノ庄田瓦窯跡（7）の試掘調査では、4基もしくは5基の窯を確認している。上ノ庄田瓦窯跡は、窯および工房が良好な状態でセットで残存しており、京都市内ではこのような例はない。史跡名勝嵐山（8）の立会調査では、檀林寺の寺域北限を示すと考えられる堀や平安時代前期の小石室をもつ墓を検出している。（永田信一）

II 平安宮・京跡

1 平安京左京三条四坊 (図版1・44)

経過 京都市建設局による御池通第二地下駐車場建設工事に伴う調査である。この地下駐車場は、御幸町通と間町通間で、御池通の車道全幅に建設される。工事は一昨年度の平成5年度に、1期工事として御池通の南半部から開始されている。発掘調査も、1次調査として立会調査と覆工板下調査を主体としたものを工事と並行して実施した。北半部の2期工事が今年度からとなり、南半部とほぼ同様の方法で、工事と並行して遺跡調査を実施した。工事に先行した

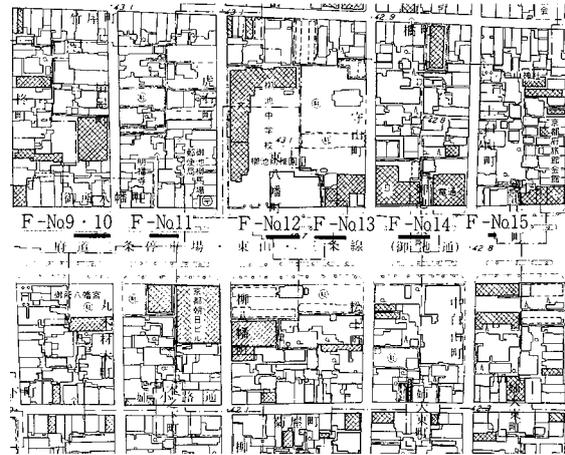


図93 調査位置図 (1:5,000)

発掘調査は十分に可能であったが、関係者の熱意の欠如が大きな障害となり、今回も事前の発掘調査という本来の形にはできなかった。

覆工板下での調査は、西側の高倉通との交差点付近から、東側の御幸町通交差点までの区間で、東西トレンチ状の計7箇所調査区を計画段階で設定した。調査区にはF記号を付して、南半部調査から連続するかたちで、西からF-No. 9とし、東端の麩屋町より東側の調査区がF-No. 15となる。工事の進捗や埋設管による既破壊部分との関連などから、F-No. 9とF-No. 10調査区は合わせたかたちとし、東端のF-No. 15は範囲を狭くして調査を実施している。覆工板下での調査は、断面調査を主とし、遺構面は層位別遺物採取時に検出した時点で、必要に応じて記録した。断面調査は、工事掘削部分において、調査区分だけ清掃し、分層と層位の記録を先行、層・遺構については上から順に層番号をつけた。それらの作業後に、上部から番号順に、水平方向に厚さ50cmほど掘り進めて遺物採取を行っている。下層の自然堆積層に関しても、同様の掘下げを行った上で調査を終了している。なお、遺構内の堆積土にも連続した層番号を付しているため、遺物採取時に区分している。

立会調査は、抗打ち工事（事前の筋掘り試掘が行われる）などの初期工事が連絡不足で実施されたこと、埋設管による既破壊部分が広がったことなどがあり、問題を残す結果に終わっている。

調査対象地は、平安京においては三条坊門小路のすぐ南側に位置し、西から左京三条四坊六町・十一町・十四町の北辺部に推定される。各町間には西から高倉小路、万里小路、富小路が南北方向に走る。平安時代の各南北小路とその関連遺構、三条坊門小路南際沿い宅地内の様相を把握すること、平安時代以降の町の変遷を明らかにすることが調査の主要課題であった。

遺構・遺物 弥生時代後期から古墳時代の土器類が、少量ずつではあるが各調査地から出土している。ほとんどが平安時代以降の層・遺構への混入品としての出土である。F-No. 11、No. 14

調査区では、自然堆積層（地山）からも出土しているが、これらも原位置をはなれた流れ堆積の遺物であり、遺構はどの調査区でも検出できなかった。御池通中央部での地下鉄東西線関係の調査や、南半部での1次調査では、堅穴住居や溝などの遺構を検出している。また、北側の柳池中学校内の既調査では、落込から多数の土器類などが出土している。このため今回の調査地においても遺構の検出が予想されたが、結果は上記のとおりであった。これは、各調査区の狭小さに原因があると考えられる。7世紀代の遺物は現在の整理段階では確認できていない。

平安時代前半期の遺構は、F-No. 14 調査区を除くと残存状況は良いとはいえない。しかし、各調査区において混入品ではあるが、この時期の遺物は多く出土しており、この地域が建都後の早い時期から宅地としての土地利用が始まっていたことを示している。

F-No. 14 調査区では、平安時代前期の遺構を含む富小路が比較的良好な状態で検出できた。路面および西側溝は、条坊復原モデルの推定ラインとほぼ重なる。残存路面幅は東西約6mである。小礫敷の路面は、11世紀代頃に形成されたとみられるものが最も古い時期のものだが、その直下に路面幅で認められる層34は、地山上面の凹凸を平坦にする目的も持つ路面の基礎土層とみられる。層34からは、9世紀前半（平安京I期新）に比定できる土器類などが出土している。西側溝とみている溝状遺構の最下層より1層上の土層（層30）からは、9世紀後半代の平安京II期古～中の遺物が出土している。これらから富小路は、9世紀前半段階には確実に形成されていたが、最初期のものかは現状では判断が難しい。平安京の街路の築造は、場所によって時間差のあることが近年の調査で明らかとなりつつあるが、それらの問題の好資料となろう。路面は平安時代中期後半の11世紀代に再構築されており、同期間中に何度か補修されたとみられ、近接した時期の路面が少なくとも3枚ほど認められる部分がある。平安時代後期から中世の路面などは残存していなかったが、中世末期から近世初頭に比定できる可能性のある小石敷路面を層22の下層で検出している。長い期間にわたる遺構が残存していなかったとはいえ、この時期の路面が検出されたことからみて、近世初頭までは富小路は道路機能が維持されていたものとみられる。しかし、近世初頭の内には、この路面に整地土層とみられる土層がかぶり、道路は完全に廃絶されたものと理解される。この廃絶は、いわゆる天正地割りと称される都市改造と関連したものである可能性もあるが、今後の整理によって結論を出したい。

平安時代後半期の11世紀代になると、F-No. 9・10、No. 12～No. 14の各調査区では、遺構・遺物ともに検出数が増加する。F-No. 11、No. 15 調査区では遺構数は増加が認められないが、混

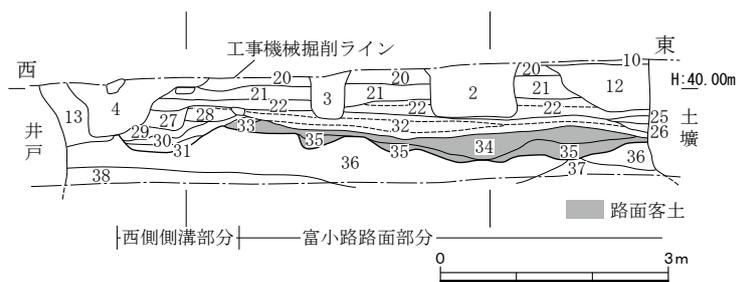


図94 F-No. 14富小路部分断面図 (1:100)

入品を含めると出土遺物量は前半期に比べて増加傾向を示している。地下鉄東西線関係や南半部の調査でも確認している、この地域の、この時期における土地利用の変化を追認する状況にあると考えてよいだろう。

鎌倉時代から室町時代前半期においては、全体としては遺構、遺物ともに平安時代後半期に比べると若干減少傾向を示しているが、F-No.9・10 調査区では、室町時代前半期に比定できる遺構と遺物を数多く検出している。またF-No.15 調査区でも室町時代前半期の遺構、遺物が、他地点と比べると多い。F-No.9・10 調査区は、平安京の町割りでは左京三条四坊六町内に位置する。三条坊門小路をはさむ北側の同七町には足利直義邸が推定されており、その北側の同八町は足利尊氏邸とされている。東隣の万里小路東側の同十一町には室町幕府の二代将軍義詮邸が、その南側同十二町には三代将軍義満邸がそれぞれ推定されている。また、同六町内に今も存続している御所八幡宮は、尊氏邸の鎮守社とする説もある。このように、当地域は、歴史的には室町幕府の初期の歴代将軍を中心に足利一族の要人達が大邸宅を構えた地域として知られている。邸宅内がどのような様相を呈していたかは推測の域を出ないが、発掘調査資料でみる限りでは、同期に比定できる遺構、遺物の分布は、全域で均質ではなく、拠点的な出土傾向を示している。F-No.9・10、No.15 調査区での検出例も同様相と理解できる。このような遺構、遺物の検出状況は、鎌倉時代における空閑地の拡大傾向と、その延長線上に成立する室町時代前半期における当地域の土地利用のあり方を反映したものと考えている。室町時代後半期にはこれらの調査区では遺構、遺物とも減少が明確となるが、F-No.11～No.14 調査区では遺構が確認できるようになる。密度が急に高くなる状況ではないが、近世に向かって増加傾向を示すものと理解できる。

中世におけるこのような変化の後、地域全体で遺構が再び稠密な状況を呈するのは近世に入った江戸時代初頭頃からである。各調査地ともに遺構数の増加に伴うように、多様な国産陶磁器を中心にした遺物の出土量も急増する。量を伴うこの大きな様相変化は、既調査の各調査区でも明確に表れており、この時期は当地域全体を巻き込んだ形でみられる遺跡の一大画期といえるだろう。今回の調査でも工事と並行した調査となったため、江戸時代中期以降の堆積層や遺構は、工事機械掘削によって削除されており、調査成果は限定的なものとなっている。

小結 御池通第二地下駐車場建設工事に伴う遺跡調査は、第2次となる今回の北半部の調査をもって終了となる。今回の2次調査においても工事と競合した覆工板下での調査が中心的なものとなってしまった。限定的な条件下での調査とはいえ、平安時代前期の富小路関係の遺構や室町時代前半期の遺構群の分布状況を確認できたなど個々の成果とともに、調査対象地のほぼ全域における遺構の遺存状況を把握することができたことは、調査を実施したことによって得られた成果であり、肯定的に評価すべきであると考えている。しかし調査実施条件の劣悪さを考えれば、同種の工事に伴う遺跡調査ではあっても、覆工板下での調査をメインに据えた遺跡調査は行うべきではないだろう。覆工板下での調査はあくまで補助的なものである。対象地域が道路上であっても、対象地の全域において、遺跡の保存をも考慮できる工事前段階での発掘調査を基本とすべきである。

(小森俊寛・上村憲章)

2 平安京右京三条一坊1 (図版1・45)

経過 調査地は、京都市中京区西ノ京梅尾町で、高速鉄道東西線建設工事（二条駅工区）に伴い、3箇所に地下鉄出入口の建設が計画された。この地は平安京右京三条一坊二町に該当し、平安京諸官衙の内の「穀倉院」が置かれ、東側は朱雀大路となっている。工事計画を契機に、遺構・遺物の有無、残存状況などを確認するための試掘調査を実施することになった。

調査対象地は、「二町」の北半部分と朱雀大路西側溝および路面の推定位置で、3箇所にトレンチを設定し、3回に分けて調査を実施した。調査の結果、二町の北二・三門境の推定位置で溝を検出した。また、朱雀大路西側溝の推定位置付近で溝を検出した。

遺構・遺物 1区は、朱雀大路西側溝と路面が推定される地点に設定した。基本層序は上層から現代盛土層、近世の耕作土層、灰色砂礫層の地山層となり、この地山層を切り込んで土壌、溝などの遺構が成立している。調査区西半で、幅1.2m、深さ0.1mの南北方向の溝（SD58）を検出した。埋土からは11世紀の土器類と骨片が出土し、溝底部からは10世紀の土器類が出土している。さらに、SD58から東へ2.5mの位置で、幅1.0m、深さ0.1mの南北方向の溝（S

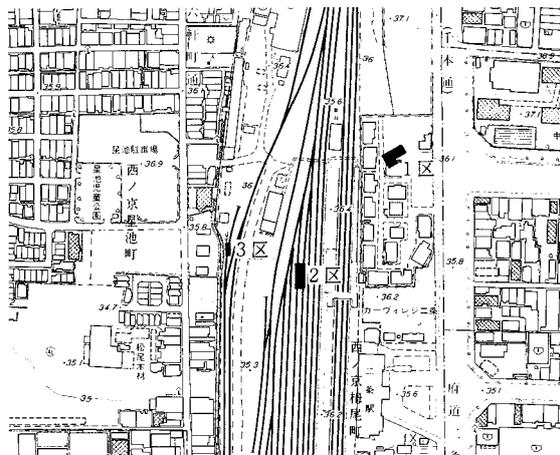


図95 調査位置図 (1:5,000)

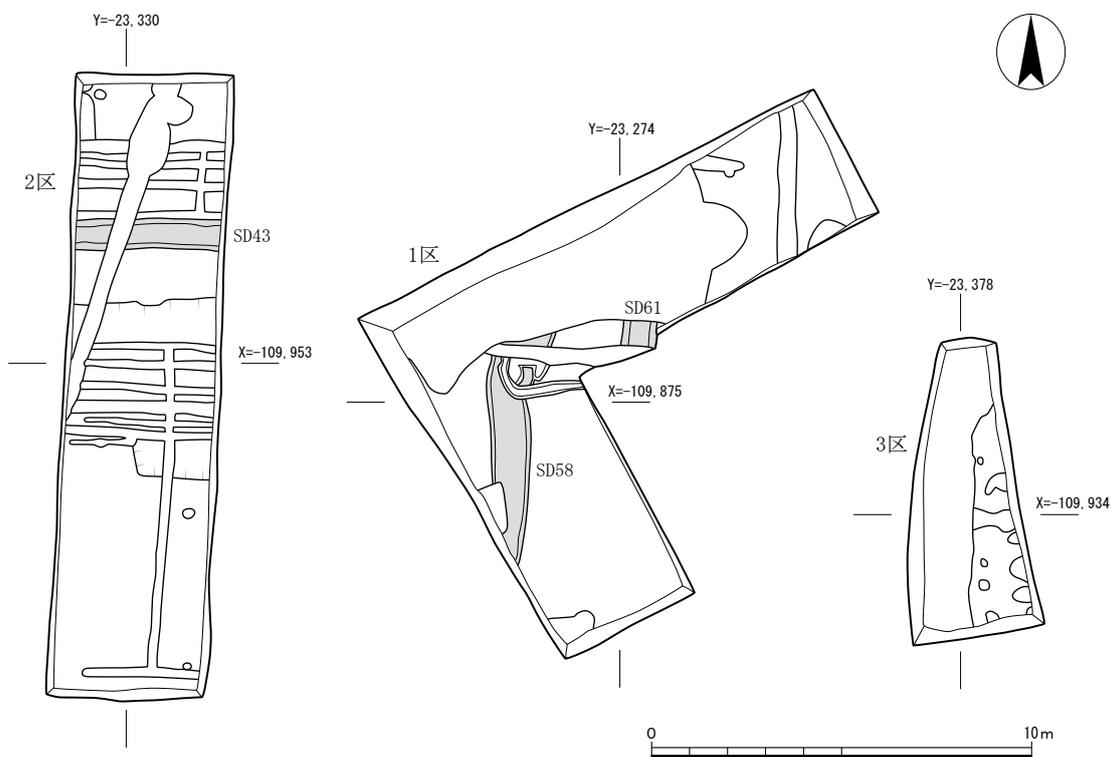


図96 遺構平面図 (1:200)

D 61) を検出した。埋土は灰色細砂で、10世紀の土器類が出土している。各遺構の上部は後世に削平されており、路面は検出できなかった。

2区は、二町の中央北に設定した。基本層序は上層から現代盛土層、中世から近世の耕作土層、灰色泥砂層の地山面となる。調査区北半で、中世の耕作に伴うとみられる幅0.2m前後の小規模な溝を多数検出した。北部には、鎌倉時代の整地土層が薄く堆積している。さらに、二町の北二・三門境界の推定位置では、幅0.9m、深さ0.1mの東西方向の溝(SD 43)を検出した。埋土からは9世紀の土器類が出土している。

3区は、二町の北西部に設定した。基本層序は上層から現代盛土層、中世から近世の耕作土層、黄灰色シルト層の地山面となる。耕作土層の下で室町時代のピットを数基検出した。

遺物は整理箱に18箱出土し、その半数以上は瓦類である。瓦類の大半は1・2区の整地土層からのもので、丸瓦・平瓦が大部分を占めるが、軒瓦・鬼瓦片なども出土した。この鬼瓦(図97)は、朱雀大路西側溝の推定位置で出土しており、平安宮豊楽殿跡で出土したものと同範品^{註1}である。古墳時代の遺物は、平安時代後期から鎌倉時代の整地土層に混入して少量出土した。当地は壬生遺跡の北東部にあたり、周辺の調査でも当該期の遺物が出土している。

小結 今回の調査地は、その大部分が右京三条一坊二町に位置し、「穀倉院」とされる地区で東部は朱雀大路が比定された。

SD 58・61は、ともに溝底部が深さ0.1m残っているにすぎないが、10～11世紀の朱雀大路西側溝とみられる。SD 61は、10世紀に埋没しており、SD 58は、11世紀以降まで機能を保っている。朱雀大路西側溝は姉小路の南北で検出されているが、流路幅・位置の変動が認められており、今回のSD 58・61両溝は同一の流路の可能性^{註2}がある。押小路通で検出されている東側溝との心々間距離^{註3}は、SD 58が74.8m(25丈余り)、SD 61は71.5m(24丈弱)となり、『延



図97 1区鎌倉時代整地層出土鬼瓦

喜式』で路面幅とされる23丈4尺に近い数値となる。また、SD 58から出土した骨は、動物の種類や部位は明らかではないが、東側溝では馬骨（顎、歯）が出土した例^{註4}があり、同様の可能性がある。この時期の朱雀大路西側溝の状況を復原する上で注目される。

穀倉院内における調査では、平成5年度調査^{註5}の八町地区内において、平安時代中期の大型の掘形をもつ大規模な建物が検出されている。また、同年の七町地区調査^{註6}では、平安時代中期から後期の雑舎群や井戸などが検出され、穀倉院内の様相が明らかになりつつある。今回の二町地区の調査で検出したSD 43は、二町の北二・三門を区画する位置にあたり、9世紀に穀倉院の敷地内にも四行八門に準じた地割りが存在した可能性がもたれる。しかし、この溝は11世紀初頭には廃絶し、新たな土地区画がなされたものとみられる。なお、二町の北西部では平安時代の遺構は検出できなかったが、調査区の東側はこの地山層の残りが良いため、遺構の遺存状態は良いものとみられる。

今回実施した試掘調査の結果に周辺地の調査結果を踏まえて、「二町」北半部の平安時代の遺構の状況をみると、遺構の上部はかなり削平されているが、平安時代から鎌倉時代の遺構は遺存しているとみられる。

（小檜山一良）

註1 鈴木久男「平安宮豊楽院（1）」『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989

註2 本 弥八郎「平安京右京三条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995

註3 小森俊寛・上村憲章・長戸満男・原山充志「平安京左京三条一～四坊」
『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

註4 丸川義広「平安京左京三条一坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983

註5 伊藤 潔「平安京右京三条一坊4」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996

註6 平田 泰「平安京右京三条一坊3」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996

3 平安京右京三条一坊2 (図版1・46)

経過 二条駅地区土地区画整理事業に伴い、二条駅西通が開設されることになり、試掘調査を実施した。

調査地は平安京右京三条一坊六町にあたり、『拾芥抄』西京図によれば平安時代前期、右大臣藤原良相の西三条第に比定される地である。

遺構 平安時代の遺構は、東西幅50m以上にわたって、洲浜を伴う園池と考えられる後期の池状遺構(SG1A)と、その下層で前期から中期の池状遺構(SG1B)を検出した。

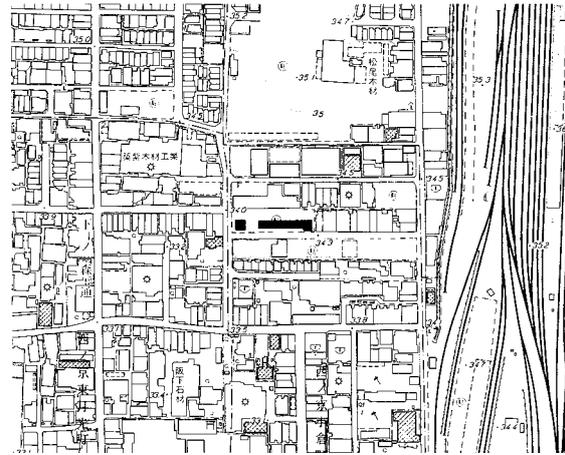


図98 調査位置図(1:5,000)

SG1Aの東岸は幅16mにわたって5～15cmの石を多量に敷き洲浜を形成している。石を貼り付けるために青灰色粘土を敷き、石をつき固めて固定している。洲浜の傾斜は極めて緩やか(比高差30cm)である。池の西岸は検出されず、洲浜を形成する石も認められなかった。池の深さは最深部で50cmほどである。

SG1Bは、SG1Aの下層で検出した。SG1Aと同様に東岸に洲浜を有する園池である。洲浜は、10～20cmの石を地山(青灰色粘土)につき固めた状態で幅1.5mほど検出した。洲浜の傾斜は急(比高差65cm)である。池の深さは最深部で90cmを測る。

遺物 遺物は整理箱で24箱出土したが、近・中世の遺物は極めて少なく、大半が平安時代の池状遺構SG1AおよびSG1Bから出土した土器類・瓦類である。

SG1Aの埋土からは、11～12世紀の土師器皿のほか、山茶碗などが少量出土しているにすぎず、木製品類は出土していない。

SG1Bの埋土は上・下2層に分層できるが、上層からはほとんど遺物は出土していない。下層からは10世紀代の黒色土器小壺の完形品をはじめとして土師器、須恵器、緑釉陶器などが一定量出土した。また、木簡類は出土していないが、墨で草木を描いた曲物蓋の断片や、下駄・箸・籠などの木製品が出土した。

小結 調査地は、平安京右京三条一坊六町で町割りの西半中央付近にあたる。平安時代前期の9世紀後半、この町には右大臣藤原良相の第宅である西三条第があったとされている。この邸宅は、桜の名木が咲き乱れ、「百花亭」とも呼ばれていた。西三条第は良相の娘の多賀幾子(文徳女御)、多美子(清和女御)の里第であった。貞観九年(867)、藤原良相の死後、当邸の伝領・消息は不明である。

また、嘉保二年(1095)、散位従四位下大江公仲の配流の際の財産処分状^註によると、右京三条一坊六町に宅地を持っており、三間四面の建物1棟が建っていたと記されている。

今回の試掘調査では、調査面積は狭かったが平安時代前期から後期の邸宅に伴うと考えられる

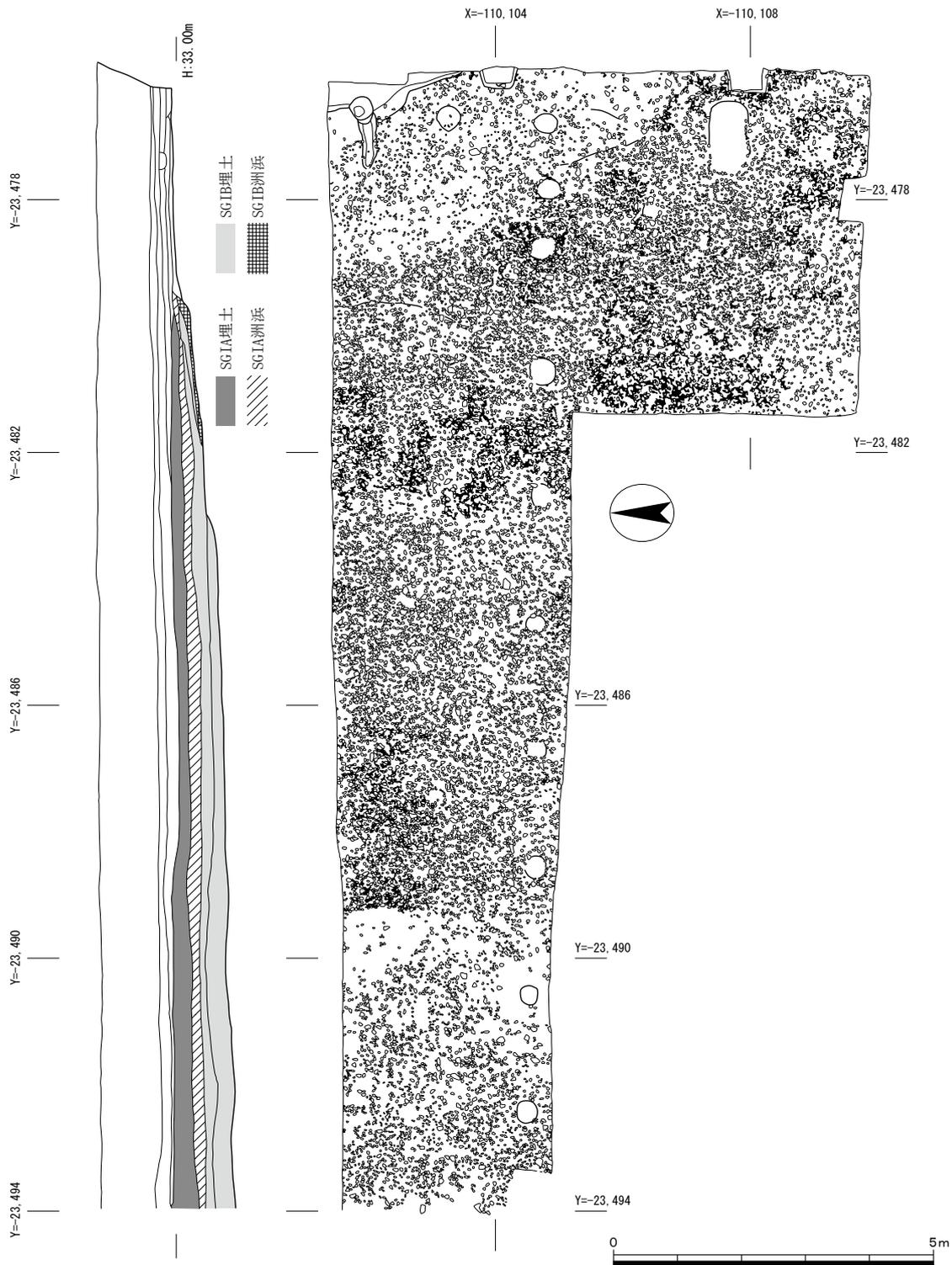


図99 遺構実測図 (1:100)

園池を確認することができた。当初の園池SG 1 Bは洲浜部分も狭く、洲浜の傾斜も急であったが、平安時代後期になって洲浜部分を広く、また傾斜も緩やかに改修されたことが判明した。

今回の調査では園池の東岸汀線までしか確認できなかったが、園池の東側には、邸宅の建物が想定される。今後の調査に期待が持たれる。(伊藤 潔)

註 『平安遺文』第1338号

4 平安京右京四条四坊（図版1）

経過 1995年2月に行った試掘調査に引き続き、右京区山ノ内池尻町で葛野大路の拡幅に伴う試掘調査を行った。平安京右京四条四坊十三町、同十四町の東辺部分、および錦小路の推定地にあたり、『京都の歴史』第1・2巻別添地図（京都市史編さん所 1970）では「小泉」と記されている地域の周辺に該当する。近隣の調査では広範囲な湿地状堆積が認められており、先回の試掘調査では室町時代後半代の西側へ落ちる濠状の遺構の堆積が認められた。

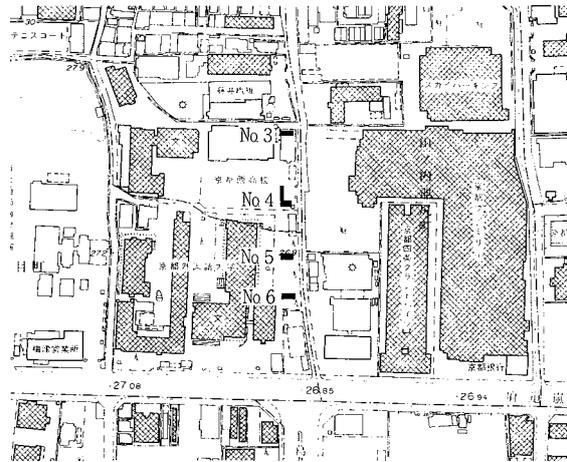


図100 調査位置図（1:5,000）

遺構 調査地は表土下2.5～2.9mで砂礫層に達する。北側で高く、南側で低い地勢を反映しているが、微妙な起伏は認められる。これらの砂礫層からは遺物は検出していない。この砂礫層の上には調査対象地南半部では黄褐色系のシルト層群、さらにその上に黒色系のシルト層群が堆積する。この黒色系のシルト層群の上面は表土下1.25mほどで、シルト層群の全体の厚さは1.3～1.5mを測る。No.6トレンチの黒色系シルト層からは9世紀後半代の遺物が出土した。調査対象地南半部で黒色系のシルト層が堆積するのはこの時期を含む前後であろうと思われる。調査対象地北半部では黄褐色系のシルト層は認められず、砂礫層の上には分厚い黒色系のシルト層が直接堆積する。しかし、このシルト層の上半部分は洪水に伴うとみられる砂礫・シルト層の入り混じった堆積により削られている。これらは自然流路とみられ、古墳時代の須恵器杯身、同末期の須恵器が出土した。この上に室町時代末期頃と思われる耕作土層が堆積し、以後順に江戸時代以降の耕作土層が堆積する。調査対象地南半部では、江戸時代以降の耕作土層がシルト層群の上に堆積する。南半部は耕作地として開発されるのが少し遅れるものと思われる。

遺物 古墳時代よりさかのぼると確定できる遺物は出土していない。全体的に出土量も少なく江戸時代以降のものを除いて破片も小さいが、No.6トレンチ黒色系シルト層より出土した9世紀後半代の遺物群は破片も他に比べて大きく残存状況は良い。また、室町後半代の遺物も土壌などから少量ではあるが比較的まとまって出土している。平安時代後半から中世前半、江戸時代前半の遺物はほとんどみられなかった。

小結 錦小路推定位置に設置したNo.4トレンチでは、先回の試掘調査と同様に道路に関連する遺構は確認されなかった。洪水と思われる痕跡が古墳時代からあり、最終的に埋まってしまうのが中世末期と考えられる。平安京造営以前から湿潤な地域であり、都市として利用するためには大がかりな開発を要する地域であったと理解できる。先回の試掘調査で確認された濠状の堆積は、現在道路となっている部分と重なっている可能性があり、西肩は今回設定した調査区よりも東に位置するものと推定される。

(上村憲章)

5 平安京右京六条四坊 (図版1)

経過 京都市立葛野小学校の校舎などの改築工事計画に先立ち、埋蔵文化財の有無について確認を行うために試掘調査を実施した。

調査区は、平安京右京六条四坊十六町にあたり、西京極大路の東築地に隣接する。今回それに関連する遺構の確認が期待された。

南校舎とプールの上に2×5mのトレンチを2箇所設定した。

遺構・遺物 基本層序は、小学校建設時の盛土層、旧耕作土層、床土層、中世遺物包含層4層、地山となる。中世遺物包含層は、いずれも灰色粘土層で湿地状の堆積を示す。平安時代から中世にかけての土器を包含する。出土する遺物は少量で、いずれも細片で磨滅している。土師器の口縁端部の形状から、鎌倉時代から室町時代のものとみられる。

小結 今回の試掘調査では、平安京の西京極大路に関連する遺構やその他の遺構は検出されなかった。4層に分かれる中世包含層はいずれも湿地状の堆積である。包含層には小石が多く含まれる層もあり、水田の床である可能性もある。積極的な根拠はないが、この地が単なる湿地ではなく、中世には水田など耕作地であった可能性も考えられる。



図102 2トレンチ全景 (北西から)

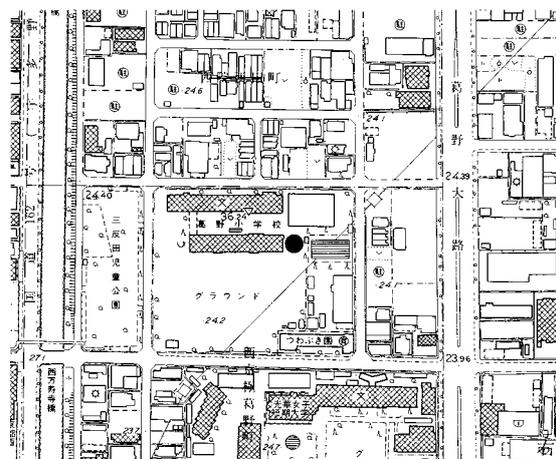


図101 調査位置図 (1:5,000)

地山層では、平安時代およびそれ以前の遺構、遺物は確認されなかった。1トレンチは、西京極大路東築地推定ラインより東へ3mの地点に設定されが、その発見が期待された西京極大路に関連する遺構は検出されなかった。

平安京の条坊の施工がこの地まで及んでいたかどうかは、今回の調査では結論を出すことはできず、今後の周辺の調査に期待したい。
(南 孝雄)

Ⅲ その他の遺跡

6 中臣遺跡（図版3-3）

経過 本調査は、山科区勸修寺第二市営住宅団地内における下水道管新設工事に伴う立会調査である。対象地は中臣遺跡の東部、山科川西岸の東斜面段丘上にあたる。当地東側では既往調査において、古墳時代の集落を中心として縄文時代晩期から平安時代の遺構・遺物が多数検出されている。

本管工事は団地内の道路ほぼ全域にわたり、掘削深度は1.5～3.5 mで、総延長は520 mに及んだ。調査は工事業者の掘削に立ち会って、掘削溝の壁面の土層観察と出土遺物の採取という形で進めた。なお、これに伴って行われた上水道管の敷設替え工事についても同様に立会調査を行った。

比較的多く調査がなされている中臣遺跡にあって、当地はほとんど調査の及んでいない地域の一つであり、今後の調査に対する遺構の分布調査的な意味合いをも含めた調査となった。

遺構 調査地は西から東への傾斜地であり、調査範囲内での東西の比高差は約3 mある。団地内の東端の南北道路東側の宅地は現道路面よりもさらに1 m以上低く、段丘崖の一つが調査地の東端に存在している。

土層は最も良好に遺存している西部域で、現行道路面からアスファルト・碎石（10～15 cm）、盛土層（20 cm）、耕作土層（40 cm）、遺物包含層（30 cm）、以下地山となる。東部域では土層残存が良好でなく、耕作土層以下の土層が削られ地山となっていることが多い。地山は基本的に黄褐色砂泥層あるいは粘土層の上層と砂礫層の下層からなる。

主として、古墳時代後期から飛鳥時代と鎌倉時代以降の遺構を検出した。また、土層が良好に遺存している箇所では、飛鳥時代以前と考えられる遺物包含層（黒褐色から暗褐色砂泥）を確認している。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺構には、竪穴住居・土壇・溝・柱穴・落込などがある。これらの遺構は、基本的に遺物包含層の上面より切り込んでいるとみられる。竪穴住居と考えられる遺構は調査地北西部で6棟（S B 42・47・48・62・64・65）検出した。各住居の規模は確認できなかったが、土層の堆積状況や竈と考えられる焼土を検出したことから、竪穴住居と判断した。土層は調査地の東から南部に多く検出した。また柱穴は中央付近から西と南の地域で検出しており、中央では南北に3間分の柱穴列（P 29～32）を検出した。溝はいずれも東西方向である。また、S Xとしたもののうち、西部で検出したS X 11は南北1.2 m、検出面からの深さ0.2 mのU字

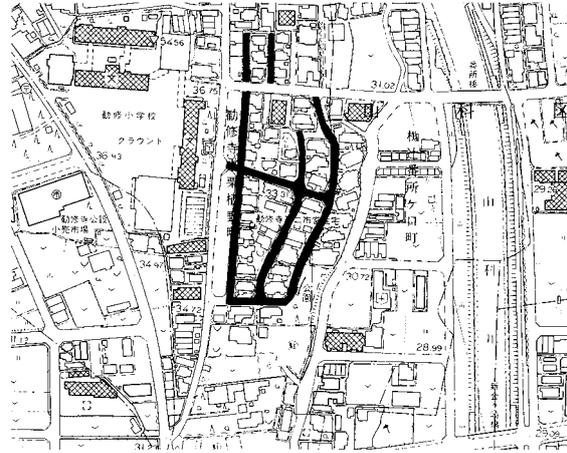


図 103 調査位置図（1:5,000）

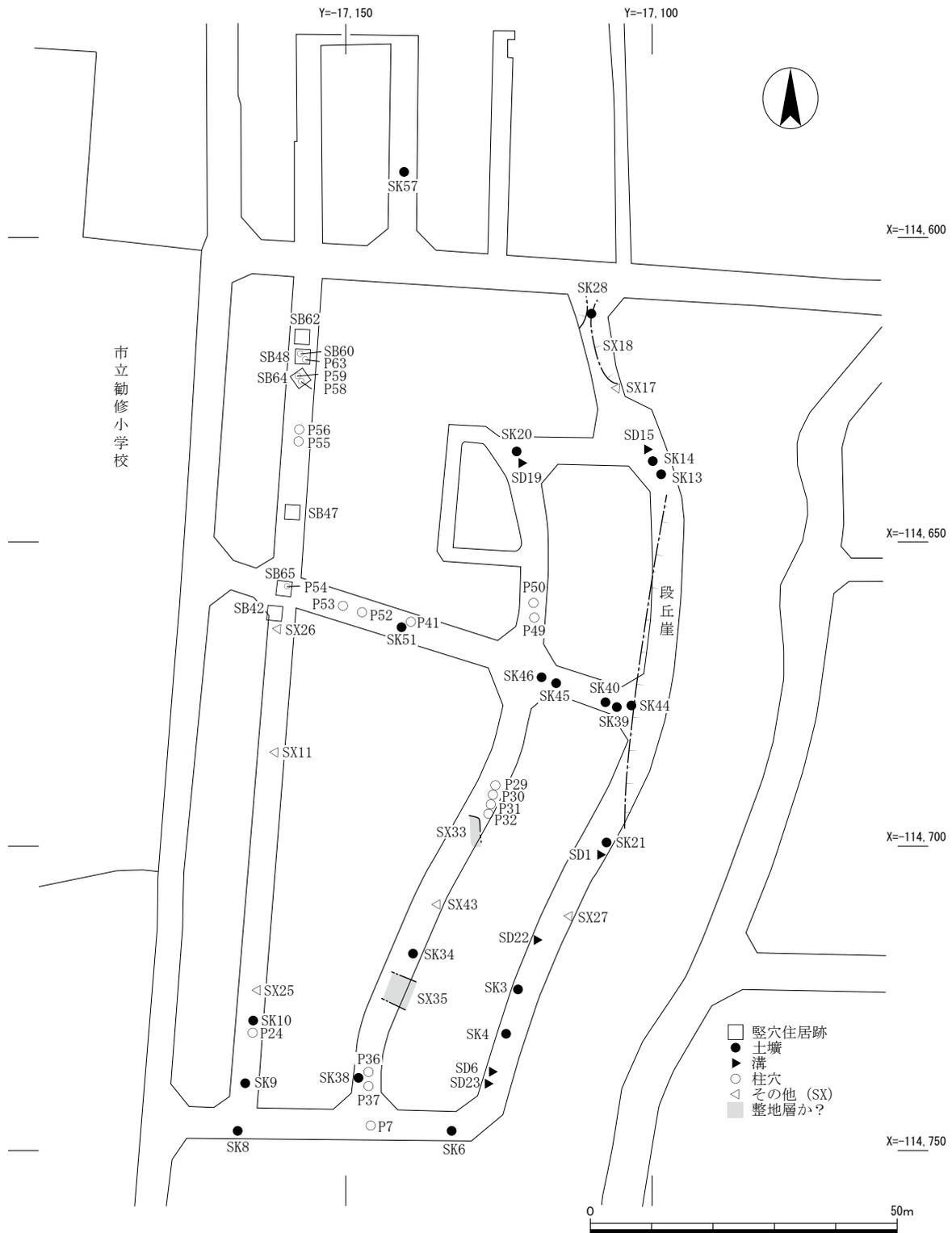


図104 遺構分布模式図 (1:1000)

状の断面を確認した。遺物は後述するが、ほぼ完形の須恵器などが一括して出土しており、土壇墓と考えられる。S X 18は東への大きな落込であり、弧を描くように南北10m分を確認した。また、工事に立ち会えず遺構の状態は明らかにし得ないが、S X 27からは須恵器・土師器が一括出土している。

鎌倉時代から室町時代の遺構は、いずれも耕作に伴うと考えられる東西方向の溝状遺構である。

遺物 遺物は各遺構や遺物包含層、耕作土などから、整理箱に5箱分が出土した。これらの大半は古墳時代後期から飛鳥時代の土師器・須恵器（図105）であった。S X 11からは須恵器杯身・杯蓋が各2個体（3～6）のほか、須恵器壺・甕などが出土した。甕は図示できなかったが、大型品で口縁部外面に数段の波状文を施す。S X 18からは須恵器杯身と壺（7・13）が出土した。壺（13）は外面頸部以下に横方向のカキメを施し、のちにヨコナデする。また、底部は丸く叩き出したのちに、ヘラケズリによって整形し、さらにロクロ回転による強いカキメを施している。S B 65からは土師器杯と須恵器甕（1・14）が出土した。1は橙色の精良な胎土で内面には放射状の暗文が施される。S X 27からは土師器碗・甕と須恵器杯身・杯蓋・長頸壺（2・8～10・12・15）などが出土した。2の土師器碗は橙色の精良な胎土で、外面をヘラケズリし、内面には横方向の暗文が施されている。（11）はS X 35から出土した須恵器杯身である。

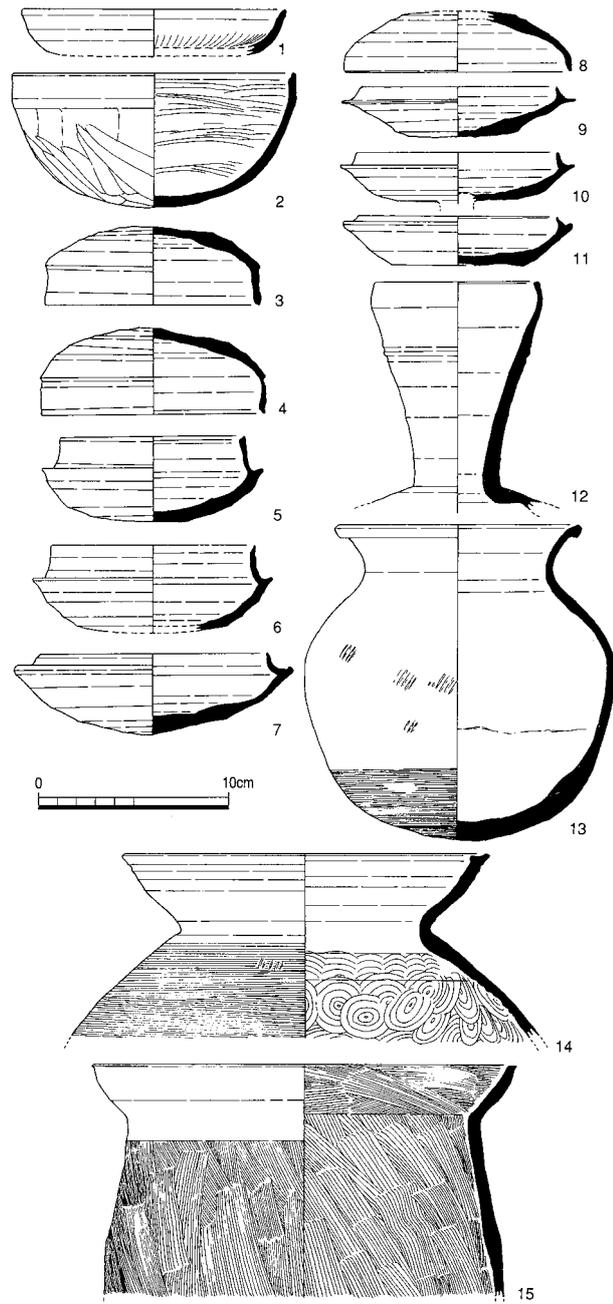


図105 出土土器実測図実測図

(1・2・15: 土師器 3～14: 須恵器) (1:4)

小結 本調査では、遺跡の中でもこれまであまり調査の及ばなかった地域で、良好に遺構が遺存することが明らかとなった。本調査は道路部分の調査に限られたが、宅地部分はいずれも道路より高く、さらに良好に遺構が遺存している可能性が高い。今後、周辺調査には十分期待できるものと思われる。

(高橋 潔)

7 上ノ庄田瓦窯跡 (図版2-1・47)

経過 今回の試掘調査は、上ノ庄田瓦窯跡を中心とした西賀茂上庄田町一帯の区画整理が計画されたのに際して行われたものである。この瓦窯跡は、昭和15年に木村捷三郎氏などによって平窯の一部が調査され、平安時代前期の平安宮所用瓦の瓦窯であることが明らかとなっていた。窯は、賀茂川によって形成された段丘を利用して造られており、上面が平坦な舌状台地の先端に位置する。調査は瓦窯の数と瓦工場の位置の確認を目的として行った。調査区は合計9箇所設定し、調査順に1～9トレンチとした。



図106 調査位置図 (1:5,000)

遺構 1トレンチ この調査区では遺構、遺物は確認されなかった。しかし、隣接する2トレンチでは、後述するように遺構、遺物が確認されており、ベースとなる土層も同じ黄褐色土層であることから、周辺に遺構が存在することが予想される。

2トレンチ ピット、土壌などが検出され、若干の瓦、須恵器も出土した。この土壌の中央には南北方向に丸瓦2つが土管状につないだ状態で検出されている。

3トレンチ 調査区内では瓦窯5基が確認された。赤く焼けた焼土が一定の範囲で広がる単位を1基の窯と考えた。すべて平窯である。窯の方向は、ほぼ東西方向に軸をとり、調査区東側

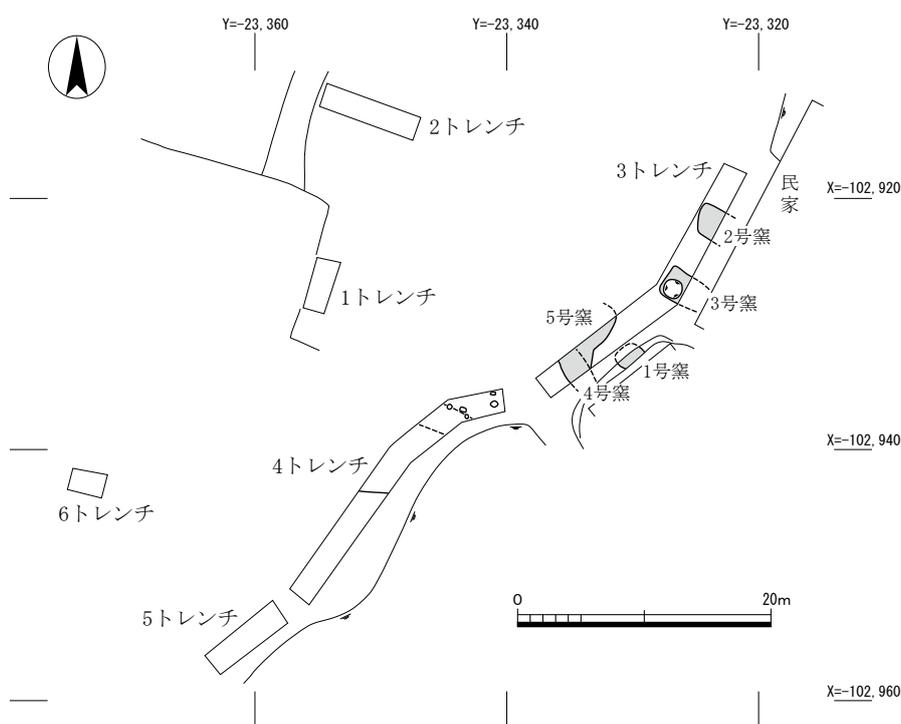


図107 1～6トレンチ配置図 (1:600)

の斜面に焚き口を造ったと考えられる。昭和15年調査の窯を1号窯とし、北から順に2～5号窯と呼称する。2号窯は、焼成室の南半分を近代の野壺によって破壊されているが、これによって焼成室の残存高が約1mであることがわかる。5号窯のみは南北方向に主軸をとり、形状や立地がほかと異なり窯でない可能性もある。

4トレンチ 遺構はほとんど検出されなかった。ここでの土層は、調査区の北側が1～3トレンチ同様に黄褐色土層であるが、南側は10～40cm大の礫の層となる。遺構の存在は認められない。

5・6トレンチ 地山は4トレンチと同じ礫層である。遺構は確認されていない。

7～9トレンチ 低い位置にある南側の水田に設定されたトレンチである。ここでの地山は、灰褐色の泥土層であった。鴨川の氾濫のためか遺構・遺物は検出されなかった。

遺物 遺物は検出中に取り上げたもののみで、2号窯周辺からの瓦が大半である。軒丸瓦は複弁八葉蓮華文軒丸瓦と単弁蓮華文小型瓦である。軒平瓦は2種あるが、文様はほぼ同じで細部において異なるのみである。小型の軒丸瓦、軒平瓦は昭和15年出土のものに同範がある。これらの瓦は2次焼成を受けて赤く変色しているものもあるが、2号窯の窯体に使用されていたものかどうかは不明である。

小結 以上述べてきたことをまとめておきたい。

① 上ノ庄田瓦窯跡は調査区西方から延びてくる舌状台地先端の斜面を利用して造られており、焚き口をこの斜面東側に設けている。この斜面は、中沢家住宅建築の際に一部削られているものの、大きくは造営当時と変わっていないものと考えられる。

② 瓦窯は5基確認された。5号窯は窯でない可能性もあり、この場合、窯は4基となる。

③ 瓦工房は、地形および2トレンチの成果からすると窯の西側の台地上に存在するものと考えられる。

平安時代前期の官窯である上ノ庄田瓦窯跡は、窯および工房を含めて良好な状態で残っていることが今回の調査で判明した。このような瓦窯と工房がセットとして良好な状態で残っている遺跡は京都市内ではほかに例がなく、工事に先立って発掘調査が必要と思われる。

(南 孝雄・前田義明)

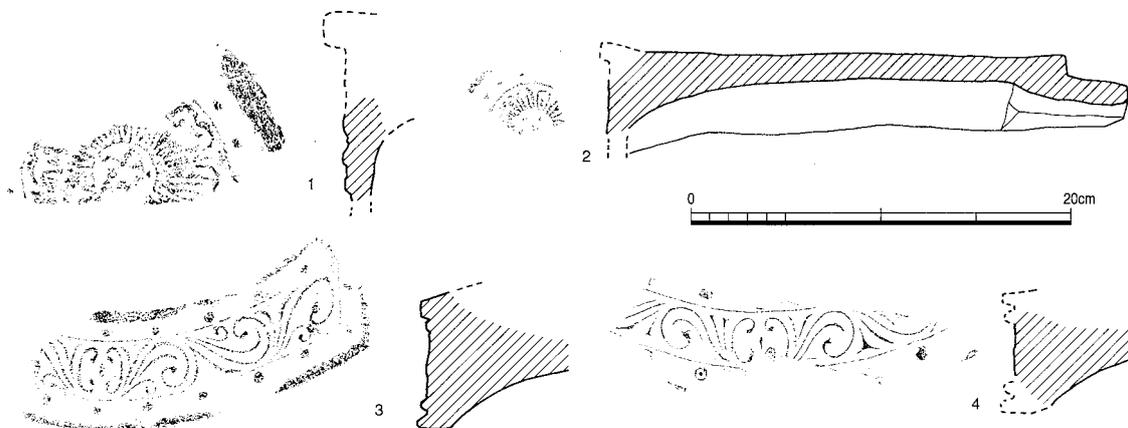


図108 出土軒瓦実測図(1:4)

8 史跡名勝嵐山（図版2-2）

経過 西部第二排水区西部（第二）系統支線整備（その3）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は京都市右京区嵯峨小倉山小倉町地内ほかの道路で、当該地一帯は史跡名勝嵐山である。当地周辺では平安時代の瓦類をはじめとする遺物の採取が知られており、調査は遺構の残存および分布の状況を確認することに主眼を置いて実施した。一部、天龍寺北側の

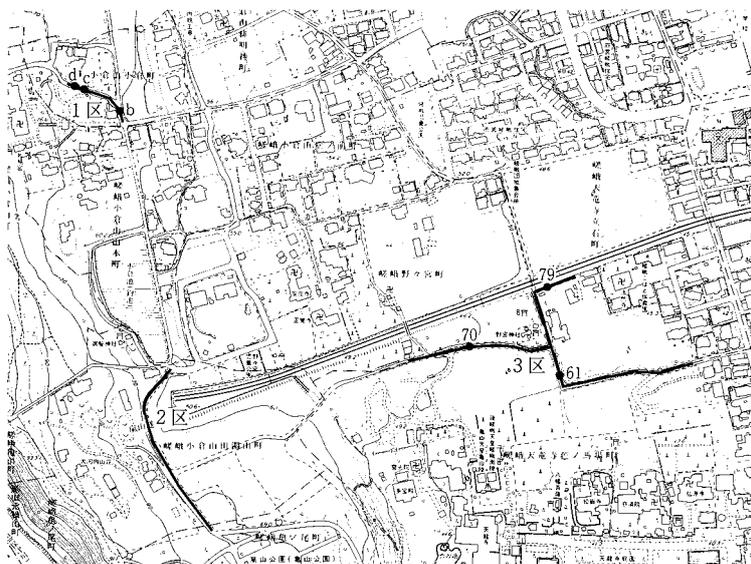


図109 調査位置図（1:7,500）

区域の工事が夜間に実施されることになった。この区域は平安時代前期に創建された檀林寺の推定地とされているところであり、檀林寺跡の遺構確認などを目的とした夜間の調査も実施した。

調査区は、工事の関係上から3区に分割した。調査の結果、1区で墓の可能性のある土壌を3基、3区では平安時代前期の溝などを検出した。

遺構・遺物 1区は、常寂光寺の表門から北側を西に向かう道である。基本層位は、現代盛土層下に近世の盛土層および整地土層、そして黄色系砂泥の地山層となる。土壌などの遺構は、この地山層を切り込んで成立する。ここでは3基の土壌を検出した。うち2基は土壌内に小石室を築く構造である。c地点土壌82は、幅1.2mの土壌内に自然石を3段以上積み重ねて小石室を構築しており、石室内からは平安時代前期の緑釉陶器が出土した。d地点土壌83は、幅1.1mの土壌内に自然石が据えられ、土師器小片を含む。ほかには土壌内に江戸時代の播鉢を利用した遺構がある。b地点土壌81は、幅0.6mの土壌の底部に平瓦を敷き、その上に播鉢を据えて中に焼塩壺を納めている。播鉢は内面が磨滅しており使用痕を残す。埋土には少量の炭化物を含んでいる。

2区は小倉山東斜面の大河内山荘東に位置している。この基本層位は、現代盛土層下は黄褐色系の岩盤などの地山層となる。亀山公園の北で近世の土壌を検出した。この付近は遺構の密度が希薄である。

3区は天龍寺北側に位置する。この基本層位は、現代盛土層下に中世の路面や整地土層が位置し、以下は黄色系粘土層および黄褐色系砂礫層の地山層となる。主に、粘土の地山層を切り込んで平安時代や中世の土壌や溝などの遺構が成立する。調査区の中央部と西部で、大規模な溝を2条検出した。ともに溝内の堆積状態からは水の流れた形跡はみられない。61地点東西方向の溝61は、検出面で幅3.1m以上、深さ0.95mで、平安時代前期の土器類や瓦を含む。70地点

南北方向の溝 70 は、検出面で幅 2.8 m 以上、深さ 1.1 m で、平安時代後期の遺物を多く含む。79 地点土壌 79 は、断面南壁で幅 1.4 m、深さ 0.45 m の規模で検出した。また、南から続く粘土の地山層が野々宮神社の南と東地点で砂礫の堆積層に変わることを確認した。

出土した遺物の多くは瓦類で、布目痕を残すものや甗の出土が多い。平安時代前期の遺物は土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦などがあり、土壌や溝から出土した。鎌倉時代から室町時代の遺物は、輸入陶磁器・硯・甗をはじめとする瓦類などが土壌、整地土層から出土している。

小結 常寂光寺北の土壌 82・83 は、小石室をもつ構造や形態、規模などから、平安時代前期の墓と考えられる。この墓の北東約 100 m の位置には、嵯峨天皇皇女の有智子内親王墓が所在する。当地付近は平安時代前期に墓域として利用されていた可能性があり、葬送の地「あだし野」の起源が、この時期にさかのぼる可能性がある。また、土壌 81 には使用痕をもつ播鉢が利用されており、中世以降には東本願寺前古墓群などにみられるように、日用雑器を蔵骨器として転用する例が多くあり、この土壌も形態や規模などを考慮すると墓と考えられる。小倉山北東麓で検出されている墳墓^{註2}に係する遺構の分布の広がりから、常寂光寺の南の谷までを化野の墓域とみなすことができよう。

天龍寺北に位置する東西方向の溝 61 は、平安時代前期の当地における区画を限る空濠とみられる。この溝は東で北に振る傾きをもち、西傾した条里地割りと合致する。付近は平安時代前期に創建された檀林寺の推定地域であり、この溝は地山層の状態などを考慮すれば檀林寺の寺域北限を示す可能性をもっている。また、平安時代後期の溝 70 は、檀林寺廃絶後における土地区画を示す堀とみられる。

鎌倉時代から室町時代の遺構には、柱穴・土壌・路面などがある。これらの遺構は、天龍寺創建以前の当地の状況を描いた『山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図^{註4}』に記される西禅寺、浄金剛院、六僧坊などの位置にあたとみられる。遺物には、輸入陶磁器や硯、甗をはじめとする瓦類などが多くあり、遺物の内容からみても寺院などとの関連が強かうかがわれる。

(小檜山一良)

- 註1 木村捷三郎氏、服部政義氏によるものがある。『木村捷三郎収集瓦図録』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 小檜山一良ほか『京都嵯峨野の遺跡』
京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 註2 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』 1974・75年
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980
- 註3 小檜山一良「史跡名勝嵐山」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
- 註4 天龍寺所蔵。東京大学資料編纂所編『日本荘園絵図聚影二』近畿一 東京大学出版会 1992

第3章 資料整理

1 遺跡測量

本年度における遺跡測量作業は、26 調査現場 55 件の調査基準点測量や地形測量における図根点作成作業および3 調査現場 8 件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。また、外部からの依頼を受けて7 調査現場 8 件の基準点測量や地形測量における図根点作成作業を行っている。調査基準点測量の内訳は発掘調査 54 件、試掘・立会調査 9 件である。

遺構平面図の実測が手書きであれトータルステーションや写真測量を利用するにしても、最終的な実測図は作成され蓄積される。この図面類を災害や人災からどのように守り、保存していくかが重要な検討課題となってきた。トータルステーションや写真測量によるデジタル化されたものは、簡単にコピーし複製を造れるが紙の上に図面となったものは複製を作成するにも相当な金額が必要となるし、永久に保存することは不可能である。デジタルデータ化が必要とされる理由に資料保存の問題が大きくかかわってくるのもうなずける現状にある。紙の図面をデジタル化していく方法が安価で確立されることを早急に望むものである。 (辻 純一)

2 コンピュータ

はじめに

遺跡の発掘調査は一般に、地表近くの新しい時代から古い時代へと掘り進めていく。調査の完了した地層は順次取り除かれ、その地層に刻まれた人間活動の痕跡は破壊されて元の状態に戻すことはできない。そこで、様々な記録を作成するが、その記録方法の一つに写真（銀塩写真）が利用されている。これは画像情報は文字情報に比べて非常に多くの情報を含んでおり、記録方法として有効であるためである。

発掘調査の記録としての写真は、冒頭に記した理由から再撮影が不可能で恒久的に保存されることが要求される。しかし現実には、カビや傷、さらに退色・劣化から記録（フィルム）を守ることは不可能である。

さらに、こうして蓄積された写真も枚数が増えてくるにつれて、従来の整理の方法では管理・活用が困難になってきている。こうした現状を打開する有効な方法の一つに、写真画像のデジタル化が考えられる。当研究所では、平成7年度より、写真画像のデジタル化を開始した。本年度、Photo-CDに入力した枚数は2,500枚である。以下にその概略を述べる。

デジタル画像の特長

デジタル画像には以下のようなメリットが考えられる。

①保存性が良い

デジタル化すれば資料の経年変化がないので、半永久的保存が可能

②複製による資料の劣化がない

最初のデータ精度が永久に維持可能

③多量のデータを機械で一括処理できる

一括管理がしやすい

④資料の利用が容易

デジタル化することによって、検索や画像処理やネットワークを使つての転送が可能になる

⑤収納や運搬が容易である

分散して保管することが容易にできるので、災害に対して危険を分散できる

デジタル化の対象

当研究所で使われている主なフィルムは、35 mm、ブローニー、4 × 5 in があるが、今回のデジタル化は主に4 × 5 in のカラーポジフィルムを対象に行うこととした。

その理由としては以下の点があげられる。

①カラーポジフィルムなので退色が早い

②印刷用に使う可能性が高い

③大判フィルムなので情報量が豊富

デジタル化の方法

極めて豊富な情報量をもつ銀塩写真をデジタル化する際、その品質は高度な要求にこたえる「デジタル原版」としての精度をもつことが要求される。また、同時に、大量にデジタル化する必要もあるので、「生産性が高くコストも低い」ことも要求される。現時点でそれらの要求を満たしている方法として、コダック社の Pro Photo-CD によるデジタル化があり、今回の目的に最も適していると考えられる。

また、Pro Photo-CD によりデジタル化された写真は、安価な Photo-CD Player と家庭用のテレビで手軽に再生できるので、講演会や研究発表等のプレゼンテーションや、教育教材の制作なども考えられる。

この方法はすでに、奈良国立文化財研究所、(財)大阪市文化財協会、(財)埼玉県埋蔵文化財事業団、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターをはじめとする先進関係機関でも採用されており、「画像データの標準化」という面において、当研究所も、Pro Photo-CD を銀塩写真のデジタル化の標準手段として採用した。

Photo-CD の概要

Photo-CD は、当初一般家庭で写真をテレビ画面上で再現するためにコダック社とフィリップ

ス社が共同で開発した新しい写真システムであり、銀塩写真の高画質とデジタル画像処理システムの簡便さを融合させたものである。一口でいえばフィルム上の画像をデジタル化してコンパクトディスクに記録し、Photo-CD Player やコンピュータを用いてカラーディスプレイで鑑賞するものである。

Photo-CD は以下のような特長をもつ。

- ①高分解能、高画質
- ②用途に応じた画像選択
- ③入出力コストと保存コストの低価格化
- ④世界中で広く使われている国際標準規格である
- ⑤全国どこでも手軽にサービスが受けられる

Photo-CD で採用されている Image Pac と呼ばれている画像データフォーマットは階層構造になっており、低解像度から超高解像までの画像が同時に保存できる。そのためデータが一元管理できるとともに、用途に応じて必要な画像を使い分けることができる。

さらに、業務用に使われる Pro Photo-CD は以下のような拡張機能がある。

- ①大判フィルムのサポート
- ②著作権保護の対策

デジタル化された情報は簡単に安価に、しかも情報の劣化無しに複製が可能である。これはデジタル処理の大きな利点であるが、安易な複製を許し著作権の侵害を招きやすいことは著作権者にとっては大きな問題であり、DAT等の音楽媒体の場合も議論がなされてきた。写真の場合も同様で、安易な複製を避け著作権者の利益を守るために、Pro Photo-CD では複製を造ろうとした場合、複製防止機能と著作権所有の表示が可能になっている。

Photo-CD の保存性

さてこのような Photo-CD であるが、その保存性は記録媒体に依存している。Pro Photo-CD に使用されている記録媒体は「追記型 CD-ROM」と呼ばれるもので、通常出回っている音楽用の CD とは異なる。Pro Photo-CD に使われている材質は、保存性の良い安定した材質を使用しており、銀塩写真の保存性と同等以上の保存性は確保されている。また、Pro Photo-CD はデジタルデータであるから、アナログデータのように複製を繰り返すと情報が劣化するということはない。従って一定期間ごとに複製を繰り返すならば、完全な状態で半永久的に情報を保存することが可能である。

Photo-CD と印刷

現在、製版印刷分野においては Pro Photo-CD の品質評価が積極的に行われており、16Base の画像でも、A4 サイズ程度の印刷原稿としては充分利用可能な品質であるとされている。また、64Base の画像を使えば、超高精細印刷も可能である。

Pro Photo-CDの品質の高さとデジタル化のコストの低さを考えれば、今後、現行の製版のかなりの部分で、Pro Photo-CD（デジタルデータ）を入稿媒体として利用できるようになると考えられる。

また、様々な理由により印刷原稿に直接Pro Photo-CDが使えない場合も、印刷業者にオリジナルの写真原板を渡すのではなく、Pro Photo-CDからフィルムに複製したものを印刷原稿として渡せば、写真原板を損傷・紛失などの危険にさらすことなく保護できる。

なお、これらに関する先進的研究は、(財)大阪市文化財協会の高井健司氏より、1995年3月3日に開催された「第2回 文化財・博物館情報システム研究会」において報告されている。

デジタル化計画

1995年3月、当研究所の4×5inのカラーポジフィルムの保有枚数は、約27,000枚であり、年間約1,500枚ずつ増加している。入力対象は、27,000枚のうち同一カット、不要カットを除いた約10,000枚程度である。これを5年間ですべて入力するとすると、年間の入力枚数は2,000枚、月間入力枚数は170枚弱となる。

なお、入力にあたっては、入力時に

- ①原板チェック
- ②フィルムクリーニング
- ③ハイゼックスの交換
- ④登録番号の再点検
- ⑤被写体情報の記入・入力

を併せて行う必要がある。

また、原板チェックの項目としては、

- | | |
|--------|----------------------|
| ①傷 | 乳剤面、ベース面それぞれについての有・無 |
| ②折れ | 爪折れ等の有・無 |
| ③指紋 | 有・無 |
| ④汚れ | 有・無 |
| ⑤退色 | 経験的判断による軽度・重度 |
| ⑥カビの発生 | 有・無 |

を行う。

また、登録番号の再点検の際に、いままでの原板にあった手書きの記号をバーコードなどの機械可読なものに変更して、業務の効率化をはかることも同時に行うこととした。(宮原健吾)

3 保存処理

出土木製品の受け入れ状況

本年度の木製品の受け入れ状況は、大型・小型合計8現場である。内訳は、88 HK-RM、89 HK-RP、90 HK-PM、91 HK-BH3、91 HK-ED、92 RH-MH、94 HK-WI2、95 BB-KS62で、合計整理箱に約180箱ある。これらの遺物は、洗浄の後パックし収納している。

木製品保存処理

本年度は、前年より保存処理継続中の木製品の取り上げと、新規に保存処理を開始したものがある。含浸処理済の現場名は、表2に大小まとめて記した。

表2 平成7年度処理済木製品出土現場一覧表

大型木製品		小型木製品	
85 NG-PV	89 HK-FS2	80 MK-SW5	88 TB-TB130
87 HK-FL	89 HK-FU	81 HK-CK	88 NG-AO
87 HK-OA2	89 RT-MH	82 FD-MR2	88 BB-HL79
87 NG-PV		83 MK-KB	88 BB-HL82
88 HK-CF6		84 HK-BC	89 TB-TB134
88 HK-FH		86 HK-HK4	89 TB-TB135
88 HK-FN		86 BB-HR169	90 HK-FW
88 HK-OE1		87 HK-RL1	90 NG-MI
88 HK-RM		87 HK-YF	91 HK-ED
88 HK-VE		87 TB-TB124	91 HK-HK5
88 FD-AH2		87 NG-PV	

本年度の木製品処理について、特記すべきことがある。穴開きパックによる保存処理工程の中で、含浸後一部の遺物に円形状の黒みを帯びた斑点が発見された。これは、膨大な遺物を効率よく保存処理するために、処理槽に遺物を密に平置き収納したため、重量圧がかかり変化したものと考えられる。よって、今後は重量圧がかからないように余裕をもち作業をしなければいけない。ほかに、作成した資料をリアルタイムでパソコンに入力し、資料管理の効率化をはかっている。

金属製品の保存処理

安祥寺下寺跡（95 RT-FS3）出土の銭貨と、中臣遺跡（95 RT-NK74）出土の刀子のクリーニングを行った。

土層転写（遺構断面はぎ取り）

北白川廃寺（95 KS-TO）の発掘調査で土層転写を行った。

修羅の保存処理

鹿苑寺（金閣寺）では、1989年に実施した発掘調査において、修羅が2基出土した。修羅は縦に2基並べたような状態で、池の中から出土した。金閣寺の前身、北山殿の庭石運搬などに使われた修羅とみられ、当時の土木工事のようすを知る上でも貴重なものである。

2基の修羅はウレタン樹脂で密閉した後、金閣寺境内で仮保管し、定期的に保存状態を確認していたが、近年仮保存の限度でもあり、保存技術の向上に伴い、関係者の協議の結果、今回本格的な保存処理を実施する運びとなった。平成7年12月初旬に、金閣寺境内から当研究所鳥羽事務所の敷地内に搬入し、ウレタン樹脂を取り外し、敷地内に設けた仮設プール2基に移動し水漬けにした。

水漬けにしたのは、修羅のアクを抜き、計測と写真撮影を行うためである。この作業は最低4箇月を予想している。その後、当研究所下鳥羽収蔵庫の付属施設において、新設するPEG（ポリエチレン・グリコール）含浸槽に移し、5年から7年間かけて保存処理を行う予定である。

なお、処理に万全を期すため、今後、奈良国立文化財研究所や（財）元興寺文化財研究所の学識研究者および関係者などからなる、修羅保存処理検討委員会を発足させ、意見を参考としながら保存処理に万全を期することになっている。

（卜田健司）

4 復原彩色

復原遺物の彩色

本年度の復原彩色業務として行った遺物復原は合計 283 点で、内訳は下表のとおりである。国庫補助概報の平安京左京三条四坊出土の遺物復原では、そのほとんどが以前に数多く復原したものと重複するため、今回は単色で彩色処理し、本体と復原部分が明らかになる程度にとどめた。

表3 平成7年度の復原彩色件数一覧表

内容	調査記号	点数	内容	調査記号	点数
国庫補助概報	95 BB-HL 243	18	嵯峨野報告書	91 UZ-SW 7	12
調査概要	92 HK-GN 1	34	展示貸出	92 UZ-SW 14	19
	92 HK-GN 2	18		87 HK-YF	7
	93 HK-YC 3	67		89 HK-FU	45
	93 RT-FR 2	9		91 RH-CH 2	11
	93 UZ-SW 3	1		93 MK-HO 28	2
	94 HK-Z J	10		94 KS-A I	8
	94 NG-AO 3	16		(補修彩色)	78 FD-NG他

復原図の作成

上記の遺物復原のほか、京都市水垂埋立処分地拡張工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査成果展示会の資料として作成したパンフレット「長岡京と水垂遺跡のようす」(編集・発行 当研究所)に復原図2点を描いた。この図の建物配置は、遺構の実測図から起こしたもので、溝・柱穴・井戸・柵列などの配置は、できる限り正確に再現している。また、建物の仕様および風俗や動植物に関してはほかの資料を参考にした。

(図110)の宅地は大路の交差点に位置しており、1町の32分の3の面積を占めている。建物は庇の付いたものが3棟と、その周りに3棟分の柱穴が検出されている。敷地には複数の井戸があり、その一つは方形で縦板組みであった。それに比べて、(図111)の宅地は大路に面しているものの、面積は狭く建物の規模も小さい。敷地には素掘りの井戸が2基あるのみで、質素な生活ぶりがうかがえる。この2つの宅地は六条大路を挟んで北と南で発見されたが、同時期に約200m南の川から墨描人面土器などの祭祀遺物が多量に出土していることから、何らかの祭祀が行われたのであろうと考えられる。これらの情報を一枚のイメージ画として作成したのがこの2点である。

作図手順は、はじめに実測図から建物の平面図を描く。次に柱穴の上に柱を立てた建物の骨組みを想定して透視図を造る。この時の視点の位置によって鳥瞰図となったり、人の目の高さから見た図、路面から見上げた図などに描き分けることができる。今回は建物と敷地のスケールを描くために、やや上空から見降ろした図にした。溝や柵列、土壇も同様に立体に置き換えて配置し、それらに用いられた資材を設定して肉付けをする。こうして土地利用のようすを描く。

次に人物や動植物を配置する。ここでは画面上の季節を決めて動きのある生活風景の画面を造るためにこれらが必要となる。遠近感を考えて人物と建物とが同一平面上にあって動きが自然に

見えるように配慮した。

全体の構図が決まると着色にとりかかる。ここでは原画に水溶性色鉛筆を使用しているが、印刷した時点でかなり彩度が落ちることがわかった。今後、より発色の良い画材を採用すると同時に、印刷時の色指定を厳密に行う必要を感じた。

復原図を描くには、絵としての体裁を保ちながらも遺構復原としての正確さと細部の描き込みを必要とするため、建築をはじめとする多方面からのビジュアルな資料と情報が不可欠である。遺構の想定復原図はあくまでもイメージの世界ではあるが、数多くの素材としての情報を集め選択することで少しでも正確な図を描くよう努めたい。
(出水みゆき)

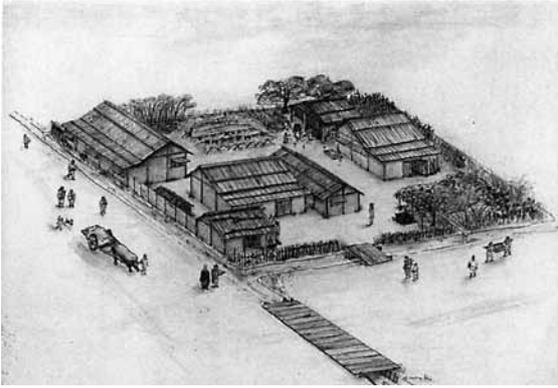


図 110 大路の北側宅地のようす



図 111 大路の南側宅地のようす

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

(1) 平成7年度「文化財講演会」の開催

日 時 平成7年11月18日(土) 午後2時～4時
会 場 京都会館会議場 (参加者 約350名)
講 演 「平安京と四神相応一ト占と風水一」 京都産業大学教授 井上満郎
主 催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所
後 援 京都新聞社・KBS京都・NHK京都放送局

(2) 京都市遺跡巡り「平安宮跡見学会」の開催

日 時 平成7年11月26日(日) 午後0時30分～4時 (参加者 160名)
内 容 京都アスニーにおいて「平安宮跡」についての講演(第8研修室)並びに1階ロビーに展示した平安宮跡出土遺物および「豊楽殿復原模型」の展示説明を行った後、参加者を8班に分け、造酒司跡、豊楽殿跡、朝堂院跡、中務省跡、内裏跡(承明門、内郭回廊)、大極殿跡および発掘調査現場(上京区智恵光院通下立売上)の見学、説明を行った。

(3) 「'95 発掘調査成果写真展」の開催

期 間 平成8年2月20日～3月3日 (12日間)
会 場 京都市考古資料館 (入場者 836名)
主 催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所
後 援 京都新聞社・KBS京都・NHK京都放送局

(4) JICA 研修員文化財修復整備技術コース専門講座の実施

ア 期 間 平成7年5月8日～12日、5月29日～6月23日
イ 受 託 先 財団法人日本国際協力センター
ウ 研修員数 3名(国籍:カンボジア、パキスタン、ペルー各1名)
エ 研修内容 復原、写真、コンピュータ、保存処理の実習など

(5) 説明会等の開催

ア 平成7年9月2日「北白川廃寺塔跡」現地説明会 (参加者 約150名)
イ 平成7年9月9日「日ノ岡堤谷須恵器窯跡」現地説明会 (参加者 約450名)
ウ 平成7年10月17日「法金剛院境内」報道機関発表
エ 平成7年11月3・4日「水垂調査成果展示会」(参加者 約250名)
オ 平成7年12月2日「平安京左京北辺三坊(新町小学校)」現地説明会(参加者 約300名)
カ 平成7年12月7日「平安京跡(西本願寺境内)」報道機関発表

(※12月9日に一般公開を実施、参加者 約300名)

キ 平成7年12月20日「鹿苑寺(金閣寺)境内出土修羅の保存処理」報道機関発表

ク 平成8年1月19日「平安京跡(朱雀第四小学校)」報道機関発表

(※1月22日に一般公開を実施、参加者 約30名)

ケ 平成8年1月30日「京都駅改築工事に伴う平安京跡発掘調査経過等」報道機関発表

(6)「リーフレット京都」(No.75～No.86)の発行

- ・No.75 1200 平安京7 「平安京左京」
- ・No.76 生活・文化7 「平安京の井戸ー木枠で井戸を造るー」
- ・No.77 1200 平安京8 「平安京右京」
- ・No.78 生活・文化8 「^{ちゅうぎ}壽木とトイレ遺構」
- ・No.79 1200 平安京9 「鳥羽離宮跡」
- ・No.80 考古アラカルト13 「下鴨の王塚」
- ・No.81 1200 平安京10 「四円寺」
- ・No.82 発掘ニュース17 「北白川の無文銀錢」
- ・No.83 1200 平安京11 「六勝寺」
- ・No.84 発掘ニュース18 「発掘成果をふりかえって 1995」
- ・No.85 1200 平安京12 「平安宮をあるく」
- ・No.86 仏教寺院4 「銀閣寺の発掘調査」

(7)奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘技術者専門研修への派遣

ア 平成8年1月31日～2月7日 (6日間)

「保存科学応用課程」 資料課 ト田健司

(8)研究会等への派遣

ア 平成7年4月～平成8年3月(毎月開催) 於:向日市(京都府埋文調査研究センター)

「長岡京連絡協議会」 調査第4係長 長宗繁一
 調査課主任 木下保明
 調査課主任 上村和直
 調査課 吉崎伸

イ 平成7年6月5日 於:東京都(国立教育会館)

「文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究」
 資料課長 永田信一

ウ 平成7年7月7・8日 於:奈良市(奈良国立文化財研究所)

「埋蔵文化財写真技術研究会」 資料課 村井伸也
 資料課 幸明綾子

エ 平成7年8月10・11日 於:高知市(高知会館ほか)

「全国埋文協議会平成7年度研修会」 調査課長 鈴木久男

調査課 南 孝 雄

調査課 上 田 栄 治

- オ 平成7年8月31日・9月1日 於：東京都（三田共用会議所）
「文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究」
資料課長 永 田 信 一
- カ 平成7年9月2・3日 於：大山崎町（ふるさとセンター）
「京都府埋蔵文化財研究会第3回大会」 調査課 山 本 雅 和
- キ 平成7年10月6日 於：大阪市（市立中央青年センター）
「第1回全国埋文協議会近畿ブロック埋文研修会」 専務理事 山 田 宏 晃
資料課長 永 田 信 一
資料課 ト 田 健 司
- ク 平成7年11月1日 於：奈良市（奈良国立文化財研究所）
「古代都城の儀礼空間と構造変遷研究集会」 調査課主任 堀 内 明 博
- ケ 平成7年11月17・18日 於：米子市（米子ワシントンホテルほか）
「古代日本海（東海）交流シンポジウム」 調査課 網 伸 也
- コ 平成7年11月23日 於：橿原市（奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部）
「発掘された古代・中世のトイレ遺構検討会」 調査課 出 口 勲
- サ 平成8年1月20・21日 於：奈良市（奈良国立文化財研究所）
「古代都城の儀礼空間と構造変遷研究集会」 調査課主任 堀 内 明 博
- シ 平成8年2月13・14日 於：東京都（三田共用会議所）
「文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の充実に関する調査研究」
資料第2係長代理 辻 純 一

2 京都市考古資料館状況報告

(1) 速報展示等の実施

ア 平成7年5月～8月

中臣遺跡および安祥寺下寺跡（山科駅前）の発掘調査により出土した縄文時代晩期の土器棺墓を展示

イ 平成7年8月～10月

J R京都駅構内で出土した鎌倉時代の銅銭の鋳型を展示

ウ 平成7年11月～平成8年1月

山科区日ノ岡堤谷窯跡で発見された7世紀前半のコンパス文須恵器片ほか多数を展示

エ 平成8年2月～3月

新町小学校内（上京区中立売通室町西入三丁目）で出土した白磁四耳壺を展示。鎌倉時

代の完形品である。

オ「情報コーナー」、「速報コーナー」の整備

全国の博物館ニュース、現地説明会の資料、考古学関係の図書などを閲覧できるように「情報コーナー」を整備し、併せて速報コーナーの掲示個所を新たに設けた。

(2) 第16回京都市考古資料館小・中学生夏期教室の開催

期 間 平成7年8月1日～4日

ア 小学生夏期教室 8月1・2日

第1日（児童のみ 参加者46名）

9:30～11:30 資料館見学、瓦の拓本の学習

第2日（親子 参加者46組）

9:30～11:30 古墳見学（御堂ヶ池1号墳、甲塚古墳の見学および遺跡・遺物の年代の決め方、古墳の保存などについて学習）

イ 中学生夏期教室 8月3・4日

第1日（参加者27名）

9:30～11:30 資料館見学、瓦の拓本の学習

第2日（参加者30名）

9:30～12:00 新町小学校内の発掘現場での体験学習

ウ 夏期教室拓本展並びにスナップ写真展の開催

期 間 平成7年8月15日～9月3日

会 場 考古資料館1階

(3) 文化財講座の開催

文化財講座は、京都市域で実施されている発掘調査の成果を市民に速やかに知らせるとともに市民の埋蔵文化財保護意識を高めるため、昭和61年度から実施している。平成7年度の連続講座では、寺院調査の概要（後編）として「遺跡から見た平安時代以降の寺院」をテーマとして実施した。平成7年度の実施状況は次のとおりである。

ア 第81回 平成7年4月22日

「平成6年度京都市域の調査成果」 調査課長 鈴木久男

「平安時代以降の寺院調査の概要」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座1

主席学芸員 峰 巍

(受講者 85名)

イ 第82回 平成7年5月27日

「平安京左京四条一坊（朱雀第一小学校内）の調査」 調査課 南 孝雄

「山岳寺院の調査」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座2

京都市埋蔵文化財調査センター主任 梶川敏夫

(受講者 93名)

- ウ 第83回 平成7年6月24日
「平安宮内裏内郭回廊跡の調査」 調査課 山本雅和
「仁和寺の調査」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座3
調査課主任 百瀬正恒
(受講者 98名)
- エ 第84回 平成7年7月22日
「平安京右京五条四坊(西京極遺跡)の調査」 調査課 伊藤 潔
嵯峨野の寺院跡」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座4
調査課主任 平田 泰
(受講者 87名)
- オ 第85回 平成7年9月30日
現地講座「平安京左京北辺三坊(新町小学校内)の調査」 学芸員 南出俊彦
(受講者 103名)
- カ 第86回 平成7年10月28日
「中臣遺跡の発掘調査」 調査課 内田好昭
「東福寺の調査」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座5
京都市埋蔵文化財調査センター 長谷川 行孝
(受講者 95名)
- キ 第87回 平成8年1月27日
「平安京右京八条二坊(七条小学校内)の調査」 調査課 近藤知子
「栢杜遺跡の調査」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座6
調査課主任 前田義明
(受講者 74名)
- ク 第88回 平成8年2月24日
「小倉町別当町遺跡(北白川小学校内)の調査」 調査課 長戸満男
「山科本願寺跡の調査」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座7
調査課主任 吉村正親
(受講者 102名)
- ケ 第89回 平成8年3月23日
「平安京左京八条三坊(JR京都駅構内)の調査」 調査課 網 伸也
特別講座「西園寺から鹿苑寺へ」－遺跡から見た平安時代以降の寺院－講座8
研究所長 川上 貢
(受講者 103名)

(4) その他普及啓発

1階「情報コーナー」において、「リーフレット京都」の配布をはじめ、パソコン、レーザーディスクおよびビデオによる展示資料・遺跡などの紹介を行うほか、次の参考資料を整備し、利用に

供している。

- ア 考古学・日本歴史関係図書
- イ 府下および近県の博物館施設などのパンフレット、講演会資料
- ウ 発掘調査・現地説明会の資料
- エ 発掘調査関連掲載の新聞記事

(5) 考古資料の貸し出し

- ア 継続貸し出し分 29件 746点
- イ 新規貸し出し分 19件 446点

(6) 博物館学芸員実習生の受け入れ

京都芸術短期大学	7名	大阪市立大学	41名
立命館大学	3名	佛教大学通信教育部	129名
京都橘女子大学	5名	皇学館大学	21名
京都精華大学	4名		

(7) 京都市考古資料館入館者状況

表4 平成7年度月別入館者一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	26	1,150	191	113	150	1,604	61.7
5	26	1,245	189	144	589	2,167	83.3
6	26	1,181	154	130	57	1,522	58.5
7	26	1,327	226	107	0	1,660	63.8
8	27	1,422	327	278	99	2,126	78.7
9	26	1,331	225	152	0	1,708	65.7
10	26	1,339	211	171	0	1,721	66.2
11	26	1,281	191	167	0	1,639	63.0
12	23	1,010	132	0	0	1,142	49.7
1	24	1,069	139	74	0	1,282	53.4
2	25	1,189	170	102	0	1,461	58.4
3	27	1,389	164	102	49	1,704	63.1
計	308日	14,933人	2,319人	1,540人	944人	19,736人	64.1人

(参考 平成6年度入館者数 開館日307日 20,602人／1日平均67.1人)

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	山田 富男	京都市文化市民局長
専務理事	山田 宏晃	京都市文化市民局文化部参事
理事	上田 正昭	京都大学名誉教授・大阪女子大学学長
	川上 貢	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	菅沼 光年	京都市文化市民局文化部長
	杉山 信三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	田辺 昭三	京都造形芸術大学教授
	角田 文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	並川 和雄	京都市埋蔵文化財調査センター所長
	西川 幸治	京都大学名誉教授・滋賀県立大学教授
	新田 稔	京都市文化市民局文化部文化財保護課長
監事	能勢 邦廣	京都市会計室長
	堀 道夫	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事

(2) 職員名簿

	氏名	職名
	川上 貢	研究所長（理事）
	杉山 信三	嘱託（理事）3.31退職
	田辺 昭三	嘱託（理事）
総務部 総務課	新室 邦明	総務部長（京都市出向）
	青木 春夫	総務課長 "
	村木 節也	庶務係長代理
	金島 恵一	事業係長代理
	菅田 悦子	主任
	上村 京子	"
	本田 憲三	"
	夏原美智代	事務職員
	佐藤 正典	"
	上田 栄治	調査補佐員（兼職）

	氏名	職名
調査部 調査課	鈴木 久男	調査課長
	本 弥八郎	調査第1係長
	平方 幸雄	調査第2係長
	菅田 薫	調査第3係長
	長宗 繁一	調査第4係長
	磯部 勝	調査第5係長
	吉村 正親	主任
	平田 泰	"
	木下 保明	"
	鈴木 廣司	"
	堀内 明博	"
	百瀬 正恒	"
	久世 康博	"

	氏名	職名		氏名	職名	
調査部 調査課	加納 敬二	主任	調査部 調査課	堀内 寛昭	調査補佐員	
	平尾 政幸	〃		大立目 一	〃	
	辻 裕司	〃		川村 雅章	〃	
	上村 和直	〃		西大條 哲	〃	
	前田 義明	〃		布川 豊治	〃	
	丸川 義広	〃		宮下 則子	〃	
	吉崎 伸	研究職員		吉本 健吾	〃	
	網 伸也	〃		端 美和子	〃	
	内田 好昭	〃		藤村 雅美	〃	
	高 正龍	〃		北川 和子	〃	
	高橋 潔	〃		北原 四男	〃	
	山本 雅和	〃		小谷 裕	〃	
	南 孝雄	〃		尾藤 德行	〃	
	小森 俊寛	〃		大立目道代	〃	
	長戸 満男	〃		調査部 資料課	永田 信一	資料課長
	上村 憲章	〃			中村 敦	資料第1係長代理
	近藤 知子	〃			辻 純一	資料第2係長代理
	小松 武彦	〃			原山 充志	研究職員
	桜井みどり	〃	出水みゆき		〃	
	清藤 玲子	〃	児玉 光世		〃	
	伊藤 潔	〃	岡 ひろみ		〃	
	津々池惣一	〃	田中利津子		〃	
	小檜山一良	〃	ト田 健司		〃	
	近藤 章子	〃	宮原 健吾		〃	
	永田 宗秀	〃	角村 幹雄	〃		
	東 洋一	〃	村井 伸也	〃		
真喜志悦子	調査補佐員	村上 勉	〃			
能芝 勉	〃	多田 清治	〃			
能芝 妙子	〃	モンペティ恭代	〃			
法邑 真理子	〃	幸明 綾子	調査補佐員			
鎌田 秦知	〃	大槻 明義	〃			
小倉万里子	〃	中村 享子	〃			
竜子 正彦	〃	岡田 文男	非常勤嘱託員			
出口 勲	〃	考古資料館	塩崎 英雄	館長 3.31退職		
藤村 敏之	〃		峰 巍	主席学芸員		
山口 真	〃		南出 俊彦	学芸員		
太田 吉男	〃					

(村木 節也)

表5 発掘調査一覧表

	契約記号・遺跡名・略記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	H 7-051. H 8-006 豊楽殿跡 95 HK - I X 001	中京区聚楽廻中町他地内 (山陰線南側道)	96.01.09 ～ 96.02.29 96.04.08 ～ 96.05.01	217 m ²	京都市	小松 伊藤	平成8年度で 報告予定
平安京	1 H 7-041. H 8-012 内酒殿・釜所・侍従所跡 95 HK - Z N 001	上京区日暮通下立売上る分 銅町 556	95.10.30 ～ 96.05.31	1,060 m ²	京都市住宅供給 公社	辻裕 丸川	
	2 H 7-026 左京北辺三坊 95 HK - S C	上京区中立売通新町西入三 丁目 457 (新町小学校)	95.06.23 ～ 96.01.12	1,550 m ²	京都市	鈴木廣 山本	
	* H 6-055. H 7-013 左京七条二坊・本願寺跡 94 HK - W I 002	下京区柿本町地内 (西本願 寺)	95.01.05 ～ 95.06.02	1,321 m ²	宗教法人浄土真 宗本願寺派	近藤知 上村知	平成6年度で 報告済み
	3 H 7-036 左京七条二坊 95 HK - W I 003	下京区堀川通花屋町下る本 願寺門前町 (西本願寺)	95.09.04 ～ 96.02.12	602 m ²	宗教法人浄土真 宗本願寺派	近藤知	
	4 H 6-028. H 7-014 左京八条二坊 95 HK - E H	下京区東油小路町地内	95.05.16 ～ 95.10.05	500 m ²	京都府労働部雇 用保険課日本障 害者雇用促進協 会	百瀬	
	* H 7-043. H 7-063. H 8-013 左京八条三坊 95 HK - E I 001	下京区東洞院通七条下る東 塩小路町地内	96.01.08 ～ 96.06.12	800 m ²	郵政省近畿郵政 局	上村知	平成8年度で 報告予定
	5 H 7-044 右京二条二坊 95 HK - I W	中京区西ノ京笠殿町 164 (朱雀第四小学校)	95.08.28 ～ 96.03.01	900 m ²	京都市	網、東	
	6 H 7-005(2) 朱雀大路跡 95 HK - HK 007	下京区中堂寺坊城町地内	95.12.04 ～ 95.12.29	133 m ²	住宅・都市整備 公団	平尾	
	7 H 7-005(1) 右京六条一坊 95 HK - X F 011	下京区中堂寺栗田町地内	95.04.10 ～ 95.12.01	3,320 m ²	住宅・都市整備 公団	平尾	
	8 H 6-050. H 7-019 六勝寺跡・岡崎遺跡 95 K S - Z R 003	左京区岡崎最勝寺町地内 (二条通)	95.03.21 ～ 95.07.19	78 m ² 150 m	京都市	堀内明 平方	発掘・立会
H 6-068. H 7-021 六勝寺跡・岡崎遺跡 95 K S - Z Z	左京区岡崎最勝寺町地内 (冷泉通)	95.07.21 ～ 95.10.06	100 m ² 440 m	京都市	堀内明	発掘・立会	
H 7-050 六勝寺跡・岡崎遺跡 95 K S - Z Z 002	左京区岡崎最勝寺町地内 (冷泉通)	96.01.12 ～ 96.02.21	722 m ²	京都市	堀内明		
鳥羽離宮	9 H 7-027 鳥羽離宮跡 95 T B - T B 140	伏見区竹田浄菩提院町 78 - 2	95.11.06 ～ 95.12.08	111 m ²	京都市	桜井 清藤	国庫補助
中臣	10 H 7-006 中臣遺跡 95 R T - N K 074	山科区栗栖野打越町他地内 (中臣住宅)	95.06.12 ～ 96.02.29	7,288 m ²	京都市	内田 高橋	
遺跡	11 H 7-046 中臣遺跡 95 R T - N K 075	山科区栗栖野打越町 17 (勤修老人デイサービスセ ンター)	96.01.25 ～ 96.03.07	362 m ²	京都市	内田	

	契約記号・遺跡名・略記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考	
長岡京	12	H 7-003 左京六条三坊・水垂遺跡 95 NG - MI 006	伏見区淀水垂町	95.04.01 ～ 95.11.30	9,507 m ²	京都市	木下 加納 吉崎	
	13	H 7-047 植物園北遺跡 95 RH - KA 006	左京区松ヶ崎井出ヶ海道町 地内	95.10.16 ～ 95.12.05	154 m ²	京都市交通局	久世	
その他の遺跡	*	H 6-060. H 7-002 北野遺跡 94 RH - KD 001	北区平野宮本町 19-6 (衣 笠小学校)	95.01.05 ～ 95.05.02	830 m ²	京都市	平田	平成6年度で 報告済み
	14	H 7-016 北白川廃寺 95 KS - TO	左京区北白川東瀬ノ内町 50 - 1	95.05.10 ～ 95.09.20	414 m ²	京都市	吉村	国庫補助
	15	H 6-067(2). H 7-020(2) 京都大学構内遺跡 94 KS - BA 006	左京区北白川追分町他地内 (今出川通)	95.05.25 ～ 95.06.14	150 m ²	京都市	長戸	発掘試掘 BA 005 立会
	16	H 7-007 法金剛院境内 95 HK - IV	右京区花園内畑町他地内	95.05.08 ～ 95.11.04	719 m ²	京都市	平田 小松	
	17	H 7-042 上ノ段町遺跡 95 UZ - PB 003	右京区嵯峨野開町 1-1 (蜂ヶ 岡中学校)	95.09.08 ～ 95.12.07	459 m ²	京都市	長戸	H 7-032 試掘
	18	H 7-052 史跡大覚寺御所跡・名勝大沢 池附名古屋滝跡 95 UZ - AA	右京区嵯峨大沢町 4	95.12.13 ～ 96.02.20	79 m ²	宗教法人大覚寺	南	
	19	H 7-029 日ノ岡堤谷須恵器窯跡 95 RT - AB	山科区御陵黒岩、封ジ山町 地内	95.07.17 ～ 95.09.29	160 m ²	㈱テイ. エム. テイ. コーポ レーション	丸川 内田	
	20	H 7-004 安祥寺下寺跡 94 RT - FS 003	山科区安朱棧敷町他地内	95.04.10 ～ 95.06.24	330 m ²	京都市	高 津々池	
	21	H 7-024 安祥寺下寺跡 95 RT - FS 004	山科区安朱棧敷町他地内 (山科駅駐輪場)	95.06.29 ～ 95.08.08	124 m ²	京都市	高 津々池	
	22	H 7-049 (2) 南春日町遺跡 95 MK - HO 030	西京区大原野南春日町他地 内	96.03.31 ～ 96.05.31	2,500 m ²	京都市	永田宗	HO 029 試掘

表6 試掘・立会調査一覧表

	契約記号・遺跡名・略記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	1 H 7-059. H 8-0 08 平安宮跡 95 HK - UW 011	上京区裏門通～中立売通出水通他地内	96.01.29 ～96.03.19	立会 1,084 m	京都市水道局	吉本川村	
	2 H 7-015 左京北辺～二条三坊 95 HK - UW 001	上京区烏丸通西側、中立売通～丸太町通地内	95.04.10 ～95.06.19	立会 1,903 m	京都市水道局	童子尾藤	
平安京	3 H 7-030 左京三条三坊・四条二坊 95 HK - UW 007	中京区蛸薬師通、堀川通～新町通他	95.08.01 ～95.09.21	立会 800 m	京都市水道局	川村吉本	
	4 H 7-040 左京三条四坊 95 HK - AK 002	中京区御池通高倉通～御幸町通、御所八幡町他地内(御池通第二地下駐)	95.10.02 ～95.12.18	立会 76 m ² 98 m	京都市	上村憲	2章II
	* H 7-043 (2) 左京八条三坊 95 HK - E I 002	下京区東洞院通七条下る東塩小路町地内	96.02.02	試掘 9 m ²	近畿郵政局	上村和	平成8年度で報告予定
	5 H 7-018 右京三条一坊 95 HK - U J 007	中京区西ノ京梅尾町地内	95.05.10 ～95.06.21	試掘 170 m ²	京都市交通局	小檜山	2章II - 2
	6 H 7-009 右京三条一坊 95 HK - U I 009	中京区西ノ京梅尾町地内	95.10.16 ～95.11.02 95.11.21 ～95.12.11	試掘 247 m ²	京都市	伊藤	発掘に移行平成9年度
	7 H 7-008 右京三条一坊 95 HK - U I 008	中京区西ノ京星池町地内	95.07.31 ～95.09.30	試掘 231 m ²	京都市	伊藤	2章II - 3
	8 H 7-010 右京四条四坊 95 HK - I R 005	右京区山ノ内苗町地内	95.05.29 ～95.06.15	試掘 148 m ²	京都市	上村憲	2章II - 4
9 H 7-033 右京六条四坊 95 HK - A H 001	右京区西京極葛野町2(葛野小学校)	95.07.07 ～95.07.13	試掘 12 m ²	京都市	南	2章II - 5	
白河街区	10 H 7-011 六勝寺跡 95 K S - G G 002	左京区岡崎最勝寺町～西天王町地先他	95.05.01 ～95.07.19	立会 770 m ² 400 m	大阪ガス㈱	堀内明	1章III - 8
中臣遺跡	11 H 6-062. H 7-023 中臣遺跡 94 R T - S W 011	山科区勸修寺東栗栖野町他12町	95.02.06 ～95.05.26	立会 520 m	京都市下水道局	高橋内田平方	2章III - 6
その他の遺跡	12 H 7-037 上ノ庄田瓦窯跡 95 R H - A D	北区西賀茂上庄田町地内	95.09.02 ～95.09.20 95.10.23 ～95.11.02	試掘 270 m ²	京都市西賀茂第三土地区画整理組合	南前田	2章III - 7
	13 H 7-031 植物園北遺跡 95 R H - K A 005	北区松ヶ崎六ノ坪町他地内	95.07.10 ～95.07.27	試掘 96 m ²	京都市交通局	久世	発掘へ移行1章VII - 13
	14 H 7-048 北白川廃寺・上終町遺跡 95 K S - U W 008	左京区北白川伊織町～北白川上終町他	95.11.06 ～95.12.05	立会 966 m	京都市水道局	吉本川村	
	15 H 7-058. H 8-007 北白川廃寺 95 K S - U W 010	左京区北白川山田町～北白川別当町地内	96.01.23 ～96.03.11	立会 480 m	京都市水道局	童子尾藤	

	契約記号・遺跡名・略記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考	
その他の遺跡	*	H 5-053. H 7-012 北白川廃寺・北白川瓦窯跡・小倉町別当町遺跡 93 K S - UW 012	左京区白川通東側、茶山通～東今出川通他地内	94. 02. 14 ～ 95. 04. 06	立会 1,710 m ² 2,921 m	京都市水道局	竜子尾藤	平成6年度で報告済み
	16	H 6-067(1). H 7-020(1) 京都大学構内遺跡 94 K S - B A 005	左京区北白川追分町他地内(今出川通)	95. 03. 29 ～ 95. 06. 22	立会 110 m	京都市	竜子尾藤	発掘に移行1章VII - 15
	17	H 7-053. H 8-009 仁和寺院家跡・常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群 95 U Z - UW 009	右京区下立売通、太秦宮ノ前町～太秦和泉式部町他地内	96. 01. 09 ～ 96. 04. 03	立会 1,265 m	京都市水道局	吉本川村	
	18	H 7-032 上ノ段町遺跡 95 U Z - A H 001	右京区嵯峨野開町 1-1(蜂ヶ岡中学校)	95. 07. 03 ～ 95. 07. 11	試掘 30 m ²	京都市	前田	発掘へ移行1章VII - 17
	19	H 7-028 史跡名勝嵐山 95 U Z - S W 006	右京区嵯峨小倉山小倉町・田淵山町・天竜寺芒ノ馬場町・野々宮町・立石町	95. 06. 20 ～ 96. 01. 17	立会 600 m	京都市下水道局	川村吉本 小檜山	2章III - 8
	20	H 7-025 史跡名勝嵐山 95 U Z - S W 005	右京区嵯峨、西京区嵐山	95. 06. 12 ～ 95. 08. 02	立会 155 m	京都市下水道局	川村吉本	
	21	H 7-049(1) 南春日町遺跡 95 M K - H O 029	西京区大原野南春日町・灰方町	96. 01. 05 ～ 96. 03. 31	試掘立会 1,050 m ²	京都市	永田宗	発掘へ移行1章VII - 22
	*	H 7-062. H 8-010 法性寺跡 95 R T - UW 012	東山区本町十五丁目地内	96. 03. 21 ～ 96. 09. 06	立会 1,689 m	京都市水道局	竜子尾藤	平成8年度で報告予定
	22	H 7-045 山科本願寺跡 95 R T - A H 001	山科区西野大手先町 20(山階小学校)	95. 10. 18 ～ 95. 10. 23	試掘 52 m ²	京都市	平方津々池	
	23	H 6-061. H 7-022 伏見城跡 94 F D - UW 013	伏見区京町通国道 24 号線～下板橋通他地内	95. 03. 23 ～ 95. 10. 25	試掘 2,102 m ²	京都市水道局	竜子尾藤	
24	H 7-001 京都市内遺跡 95 B B -	京都市内一円	95. 04. 01 ～ 96. 03. 31	立会	京都市	本竜子尾藤	国庫補助	

表7 その他契約一覧表

No.	契約記号	内容	遺跡名・所在地	委託者	担当者	備考
1	H7-017	測量	植物園北遺跡左京区下鴨北芝町	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	辻純、宮原	
2	H7-034	測量	羽東師神社境内伏見区羽東師志水町	京都史跡調査会	辻純、宮原	
3	H7-035	測量	黄金塚2号墳伏見区桃山町遠山	黄金塚2号墳発掘調査団	辻純、宮原	
4	H7-038	測量	平安京右京一条三坊 右京区西ノ京南大炊御門町7	関西文化財調査会	辻純、宮原	
5	H7-039	研修	文化財修復整備 JICA	(財)日本国際協力センター	永田信	
6	H7-054	遺物整理	烏羽離宮跡 95 T B - T B 140 (H 7-027) 伏見区竹田浄菩提院町 78-2	京都市	桜井、清藤	国庫補助
7	H7-055	遺物整理	北白川廃寺 95 K S - T O (H 7-016) 左京区北白川東瀬ノ内町 50-1	京都市	吉村	国庫補助
8	H7-056	測量	平安京跡 中京区六角通烏丸西入六角堂	(財)古代学協会	辻純、宮原	
9	H7-057	測量	平安京跡 (東本願寺境内) 下京区烏丸通七条上る常葉町 754	関西文化財調査会	辻純、宮原	
10	H7-060	修羅保存 処理	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 北区金閣寺町 1	宗教法人鹿苑寺	卜田	
11	H7-061	報告書作 成	京都市内遺跡京都市内一円	京都市	本、吉村	